岩波文庫
33-805-3

アウグスティヌス

神の国

（一）

服部英次郎訳

岩波書店

Aurelius Augustinus

DE CIVITATE DEI

目次

はしがき……五
第一巻……一三
第二巻……一〇一
第三巻……一七九
第四巻……二六五
第五巻……三四九
解説……四三七

はしがき

この訳書は、つぎにかかげる『トイブナ書店版、ギリシア・ローマ著作家文庫』に依るものである。

S. Aureli Augustini Episcopi De Civitate Dei Libri XXII ex recensione B. Dombart, quartum recognovit A. Kalb. Vol. I, Lib. I–XIII, Vol. II Lib. XIV–XXII. Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMXXVIII, MCMXXIX.

各巻の各章の見出しは、読者の参考のために訳者がつけたものである。

本書は、全五分冊からなり、第一分冊は原著第一―第五巻を、第二分冊は第六―第十巻を、第三分冊は第十一―第十四巻を、第四分冊は第十五―第十八巻を、第五分冊は第十九―第二十二巻をおさめ、解説は第一分冊目に、索引、文献目録などは第五分冊目の巻末につける。

神の国（一）

とかくするうちに、ローマはアラリック王のひきいるゴート族の侵入と大きな災害の衝撃によって破壊されたが、このローマの破壊を、わたしたちがふつう異教徒とよぶ、多くの虚偽の神々の崇拝者たちは、キリスト教のせいにしようとして、いつもよりもはげしくきつく真実の神をののしりはじめた。そのためにわたしたちは、「神の家」に対する熱意に燃えたって(一)、異教徒たちの瀆神や誤謬を反駁するために『神の国について』の書を書こうと決心した。この仕事にわたしは数年かかったのであるが、他の多くの、のばすことのできない、まずそれの解決にかからねばならぬ仕事が邪魔をしたからである。しかし、この「神の国」についての大著はついに全二十二巻をもって完結した。そのはじめの五巻は、繁栄を得るためには、異教徒が崇拝するのがつねであった多神の崇拝が必要であると考え、それが禁止されたために、このような禍悪がおこりみちあふれると主張するような仕方で、人間の幸福を考える人びとを反駁する。そして次の五巻は、これらの禍悪は人間にとって、過去にもなかったものでもなく、また将来にもないものでもけっしてなく、あるいは大きく、あるいは小さく、ときところとひとによって、さまざまなかたちであらわれるということは認めながら、しかも、かれらのために犠牲をささげられる多神の崇拝は、死後の生のために有用であると主張する人びとを相手にする。したがってこれら十巻をもって、キリスト教の反対する上述の二つの虚妄の説は反駁されるわけである。

しかし、わたしたちはただ他人の説を反駁しただけで、自分の説を主張しなかったと非難するものがないように、十二巻からなる本書の第二部はそれをとりあげるのであるが、もっとも必要なばあいには、さきの十巻においてもわたしたちの説であるものを主張し、また、あとの十二巻においても反対の説を論駁することにしよう。それゆえ、あとの十二巻のうち、はじめの四巻は二つの国——一つは神の国、もう一つはこの世の国——の起源を、つぎの四巻はそれらの国の信仰または発展を、第三の——最後の——四巻はそれらに定められた終局を含んでいる。このように二十二巻全体は、両方の国について語られたのであるが、しかし、その表題はよい方からとって、『神の国について』とよばれることとなった。その第十巻において、アブラハムの犠牲にさいして、天からおこった炎がさかれた犠牲のあいだを走ったということを奇跡として述べるべきではなかった。(二) これはアブラハムが夢にみたのであるからである。また、第十七巻において、サムエルについて「アアロンの息子たちの一人ではなかった」といわれているのは、(三) それよりもむしろ、「司祭の息子ではなかった」といわれるべきであった。じっさい、司祭の息子が、なくなった司祭のあとを継ぐということの方が正しい風習にかなっていたのである。アアロンの息子の一人としてサムエルの父はみいだされるけれども、それはアアロンがサムエルを生んだという意味においてではなく、かの国民のすべてのものが、イスラエルの息子といわれるような意味においてである。この書は、「もっとも光栄ある神の国を」という句をもってはじまっている。(四)

(一) 「詩篇」六九の九、「ヨハネによる福音書」二の一七。

（二）本書第十巻第八章参照。
（三）本書第十七巻第五章参照。
（四）この章句は、『再論』第二巻第六九章、四二六年―七年による。

第一巻

序 言

本書執筆の意図とその要旨

もっとも光栄ある神の国を、もっとも親愛なるマルケリヌスよ、[一] わたしは、ここに計画してわたしのきみに対する約束を果そうとするこの書物によって、その国の建設者よりもかれら自身の神々を優ったものと考える敵に対して、擁護することにとりかかったのであるが、それはじつに困難な大仕事である。それが信仰によって生きながら、[二] 不敬なものの間を巡礼するこの時間の経過においてであろうとも、あるいはまた、それがいまは「正義が審判にかわる」[三] まで忍耐をもって期待し、[四] いつか終極の勝利と完全な平和が得られるとき、その卓越性によって獲得するであろうかの永遠の住処においてであろうともかわりはない。しかし神は、わたしたちを扶助してくださる。[五] というのは、わたしは、謙虚の徳がどれほど偉大なものであるかをおごりたかぶるものに納得させるために、どれほど多くの努力を必要とするかを心得ているが、こ

の謙虚の徳こそ、人間の驕慢によって奪われたのではなく、神の恩寵によって与えられた崇高性があらゆる地上の時間的な変動性によって動揺する偉大さを超越するようにさせるのである。じっさい、わたしがこれから述べようと思うこの国の王と建設者である神は、かれの民のための書において、神の法の判決を明らかに示して、こういわれるのである。――「神はたかぶるものをふせぎ、へりくだるものに恩恵を与えられる(六)」と。しかしながら、これはただ神のみのなされるところであるのに、おごりたかぶる心の増長した精神もまた、それをまねて、その賛美のうちに、

従い服するものを容赦し、おごりたかぶるものをうちひしぐ(七)

と語られることを好むのである。それゆえ、地上の国についても支配することを求めて、諸国民に奉仕されながら、かえってその支配欲の支配するところとなるのであるが、これからとりかかる本書の計画がそれを語ることを要求し、またそうすることができるかぎり、なにごとをも語らずにはすましてはならないのである。

(一) マルケリヌスはアウグスティヌスの親密な弟子。カトリック教会とドナトゥス派とのあいだの論争を解決するためにカルタゴで開かれた会議の主宰者として、ローマ皇帝ホノリウスによって派遣されていた。かれは、キリスト教に関心をもっていたアフリカの地方総督ウォルシアヌスの回心のために心をくだいていたが、ウォルシアヌスは、キリスト教がローマ帝国の威信をそこなったという意見を抱いていたのである。そこで、マルケリヌスは、師であるアウグスティヌスに助けを求めたのであった。これがアウグスティヌスに『神の国』を執筆させる動機となった。

(二) 「ハバクク書」二の四。
(三) 「詩篇」九三の一五。
(四) 「ローマ人への手紙」八の二五。
(五) 「詩篇」六一の九。
(六) 「箴言」三の三四、「ヤコブの手紙」四の六、「ペテロの第一の手紙」五の五。
(七) ウェルギリウス『アエネイス』六の八五三。

第一章

キリストの名に敵するものも、ローマ略奪のさい、キリストのゆえに野蛮人にゆるされたのである

すなわち、この(地の国)からして、神の国が擁護されねばならぬ敵たちがおこるのであるが、しかしかれらのうちの多くのものは、不敬の過ちを正されて神の国にまったくふさわしい市民となっている。他方多くのものは、これ(神の国)に対して激しい憎しみの炎を燃えたたせ、その贖い主のまったく明白な恩恵に感謝しない。すなわち、その忘恩は、かれらは敵の剣を逃れて、この国の聖所のうちに、かれらがいまおごりたかぶる生命をまっとうしなかったなら、その国を罵る口もきけなかったであろうのに、それをも忘れているほどである。なおまた、かのキリストの名に敵するところのローマ人も、野蛮人がキリストのゆえに容赦したものではない

か。殉教者たちの遺跡と使徒たちの聖堂とがこのことの証拠を示しているのであって、それらの場所は、かのローマの略奪のさいに、そこに逃れてくるものを、キリスト者をも異教徒をも迎えいれたのである。ここまで残酷な敵は猛威をふるっていたが、そこでは殺害者の狂暴は抑えられて、あわれみぶかい敵は、さきに聖所の外でも容赦したものたちを、そこに引き入れたのであって、それは、同じようなあわれみを持たない敵がそれらのひとたちに襲いかからないためであった。しかし、これらの敵でさえも、他所では猛々しく、敵のつねとして猛威をふるいながら、かの聖所に来たのちは、他所では戦時の習いによって許されていたこともここでは禁じられて、ひと殺しの残忍はまったく抑制され、捕虜を得ようとする欲望は破砕された。このようにして多くのものは難を免れたのであるが、かれらはこんにち、キリストの御代を非難し、かの国がこうむった禍いをキリストに帰しながら、キリストに対する尊敬のゆえにかれらにほどこされ、そのおかげでかれらが生きながらえている恩恵を、わがキリストに帰せずに、かれら自身の幸運に帰している。しかし、いささかでも分別があるなら、むしろかれらは、敵からこうむった艱難辛苦をかの神の摂理に帰すべきであろう。神の摂理は、人間の堕落した習俗を戦争によって矯正し、絶滅するのであるが、しかしまた、死すべき人間の正しい賞賛すべき生活をも、同じような苦難によって鍛練し、このように試練したのち、あるいはよりよきかなたに移し、あるいはまた他の目的のために、なおこの地に引きとめておくのがつねである。しかし、キリストの名のゆえに、キリストの名にさからい、永遠の暗黒をもって罰せられようとするのであるが、その名のもとにかれらはかつて、このうつろいゆく世の光を受けけんがため

に逃れたのである。

第二章

征服者が被征服者の神々のゆえに、被征服者を赦したというような戦争はいまだかつてその例がない

ローマ建国以前にも、またその勃興と征覇以後にも、じつに多くの戦争の行われたことが記録されている。それらを読んで、ある国が他国人によって占領され、それを占領した敵が、自分らの神々の殿堂に避難しているのを見出した被占領民たちを容赦したというような例があるなら、それを挙げてみるがよい。あるいはまた、ある野蛮人の将軍が城市に侵入して、あれこれの神殿に避難してきているものを剣にかけてはならないという命令を出した例があるならそれを挙げてみるがよい。アエネアスはプリアムスが祭壇の中で、

みずから清めた火を己れの血で汚す[1]

のを見なかったであろうか。またディオメデス[2]とウリクセス[3]とは

城砦の上なる衛兵を斬り殺し聖像を拉しさり、血なまぐさい手をもって女神の処女頷紐にふれることをあえてした[4]

のではなかろうか。しかし、そのつぎに、そのとき以後、ギリシア人の希望は

水泡に帰して、しだいに消えて行く(五)とあるのは真実でない。じじつ、その後ギリシア人は征服し、その後トロヤを兵火をもって破壊し、その後祭壇に逃れるプリアムス(六)を殺害したのである。なおまた、トロヤは、ミネルウァ(七)をなくしたからなくなったのではない。じっさい、ミネルウァは、なくなるために、まず、さきになにをなくしたのであるか。それは、ミネルウァ自身の衛兵たちでもあったろうか。まったくそうなのであって、じじつ、衛兵がかたづけられてから、ミネルウァは拉し去られることができたのである。というのは、人間が神の像によって守られていたのではなく、神の像が人間によって守られていたからである。そうであるから、自分の衛兵さえも守ることのできなかった女神は、どうして祖国と国民とを守るものとして崇拝されることができるであろうか。

(一) ウェルギリウス『アエネイス』二の五〇一。

(二) ディオメデスは、カリュドン王オイネウスの子テュデウスとアドラストスの娘デイピュレスとの子。ホメロスの『イリアス』のなかでは、アキレウスにつぐ英雄である。トロヤ物語では、かれはアルゴスの兵を八十隻の船に乗せて出陣、智将オデュッセウス(ローマ名ウリクセス)と行動をともにし、トロヤ陣営に夜討ちをかけるなど、多くのトロヤ方の将を討っている。

(三) ウリクセス(ギリシア名オデュッセウス)は、イオニア海の小島イタケの王ラエルテスとアンティクレイア(アウトリュコスの娘)との子。『イリアス』のなかでは、かれは賢明で勇ましい将として描かれている。トロヤでのギリシア軍の苦戦中、大木馬の建造を思いつき、工匠エペイオスに命じてこれを造らせ、そのなかに勇者を入れ、トロヤを落した。

(四) ウェルギリウス『アエネイス』二の一六六―七〇。

（五）同上。
（六）プリアムスは、トロヤの王ラオメドンとスカマンドロス河神の娘ストリュモとの子。『イリアス』のなかでは、高齢で温厚な老王として描かれ、実戦には加わらず、祖国の滅亡と息子たちの死を見守っている絶望的な人である。
（七）ミネルウァはギリシア名アテナと呼ばれる神界最大の女神。最高神ユピテル（ギリシア名ゼウス）とメティス（思慮）の子。国家の守護神となった。また、技術と音楽の女神でもあり、さらに、つねに武装した若い威厳のある処女として考えられた戦の女神でもあった。

第三章

ローマ人が、トロヤを守ることのできなかった神々によって助けられると信じたのは、なんと無思慮なことだろう

みよ、このような神々にローマ人は、その都の保護を委ねて喜んでいたのである。おお、あまりにもあわれむべき過誤ではないか。わたしたちが、かれらのまつる神々についてそのようなことを語るとき、かれらはわたしたちに腹をたてるのに、かれらの信用する作家たちには、腹をたてるどころか、かれらの語るところのことを学ぶために、月謝を払い、それについて教える人びとを、なおその上に、公けの給与と栄誉とを受けるのにもっともふさわしいものと考えた。たしかに、ウェルギリウスには――小さい子供もその作品を読むのであるが、それはい

うまでもなく、この偉大な詩人、すべての詩人のうちもっとも有名でもっとも優れた詩人が、かれらのかよわい心に吸いこまれるとき、容易に忘却に消し去られることがなく、ホラティウス(一)の言葉をかりていうと、つくられて間もない酒壺が一度

しみこむと、いつまでも
その香気を失わない(二)

とあるためであるが、――このほかならぬウェルギリウスには、トロヤ人に敵意を抱くユノ(三)は、風の王アエオルス(四)をトロヤ人に敵するように挑発するためにこう語るものとえがかれている。

――

われに敵意をいだく一族、テュレニアの海を渡って、
イタリアにイリウムとその征服された神々とをもたらす(五)

それゆえ、かの征服された神々にローマを、それが征服されることがないようにゆだねることは、思慮あるもののなすべきことであったろうか。しかしそれらは、ユノが怒り狂える女性として語ったのであって、みずから口にすることを知らなかったのである(というものがあるかもしれない)。しかし、アエネアス自身は、あのようにしばしば、敬虔なものとよばれるアエネアスは、どういっているか。かれはつぎのように語っているではないか。――

砦のうちなるフォエブスの司祭、オトリュスの子パントゥス(六)は、
その手に祭器と征服された神々と小さい孫とを
みずからひきずりながら、狂気のように戸口にむかって走りゆく(七)

アエネアスが、つぎのようにいわれるとき、かれは征服されたとよぶことを躊躇しない神々がかれにゆだねられたのであって、かれがその神々にゆだねられたのではないということを語っているのではなかろうか。――

　トロヤはあなたに神器とその神々とを委ねる(八)

それゆえ、もしもウェルギリウスがそのような神々に征服され、そして征服されながら、しかもなんとかして逃れ出るために人間に委ねられたというのであるなら、このような守護者にローマをまかせたら賢明であったろう。そしてローマは、そのような守護者をなくさなかったら、攻略されずにすんだであろうと考えることはなんという狂気の沙汰であろう。それどころか、征服された神々を保護者や守護者のように崇拝することは、よき支配者(ヌミナ)をではなく、悪しき負債者(ノミナ)(九)を相手にすることにほかならないではないか。じっさい、もしもそれらの神々がさきに滅びなかったなら、ローマはそのような災厄にあわなかったであろうと信じないで、もしもローマができるかぎりそれらを守らなかったなら、神々はとっくに滅びたであろうと信じる方がどれほど賢明であろう。というのは、だれでもよく考えてみるとつぎのことに気付くのである。すなわち、征服された守護者のもとにあったときには、けっして征服されずに、保護者であった神々を失ったから滅びたのであるというのは、なんというむなしい考えであろう。じっさい、かれが滅びた唯一の原因は、滅びようとする神々を保護者としようとしたことではなかったか。それゆえ、征服された神々について以上のようなことを記し、歌ったとき、詩人たちは好んで虚偽を語ったのではなく、誠実な人間として、真理の強いるままに語ったのである。しかしそ

のようなことは、あらためて入念にくわしく論ずるほうが適当である。それでいまは、それらの恩知らずの人びとについて述べようと思ったことを、できるだけ簡単に記しておこう。すなわち、それらの人びとは、その邪悪な行状のゆえに当然こうむるべき災厄をキリストに帰して、神を汚すのであるが、しかしかれらがそのように邪悪なものでありながら、キリストのゆえにゆるされたことについては考慮に価すると考えない。そして生きながらえるために、その御名を語ったその同じ口舌をつかって、瀆神の邪悪のために正気を失い、御名を害するのである。じっさい、キリストにささげられた聖所においては、かれらは、そこに安全と保護を得るために、おそれて口舌を慎んだのであるが、しかし、キリストのゆえに、敵の加害を免れるやいなや、敵意に満ちた呪言をもって、キリストにたちむかったのである。

(一) ホラティウスは前六五年から前八年。ローマの詩人。南イタリアで解放奴隷の子に生れ、ローマとアテナイに学び、一時ブルトゥスの軍に投じたが、敗戦後詩作に耽る。代表作に『書簡体詩』、『諷刺詩集』、また皇帝アウグストゥスの体制に順応して書かれた『頌歌集』など。

(二) ホラティウス『書簡体詩』一の二の六九。

(三) 女神ユノはギリシアの女神ヘラと同一視される。ヘラはゼウス(ローマの神界の主神ユピテル)の正妻で、結婚生活の守護神とされた。ローマ最大の女神とされ、ユピテル、ミネルウァとともにカピトリウム丘上で祭られていた。

(四) アエオルスは風の支配者。トロヤの戦いで敗れたアエネアスは流浪の生活を続けるが、シチリアを出てイタリアのラティウムをめざして船出したとき、自分の町カルタゴを支配するユノは、アエネアスがカルタゴの禍いとなることを知り、風の王アエオルスに命じて山に閉じ込めていたあらゆる風を

解き放つのである(ウェルギリウス『アエネイス』一の三八参照)。

(五) 同上、一の六七。

(六) パントゥスは、ホメロスの『イリアス』のなかで、オトリュスの子でアポロンの神官である。ウェルギリウスの『アエネイス』では、かれはトロヤ陥落のさいに殺されたことになっている。

(七) ウェルギリウス『アエネイス』二の三一九。

(八) 同上、二の二九三。

(九) numina(ヌミナ)は「神性」を意味し、nomina(ノミナ)は「負債」を意味する。これは、アウグスティヌス特有のごろ合わせで、征服された神々にローマの将来を託した愚かさを皮肉っている。

第四章

トロヤにあったユノの聖所がなんびとをもギリシア人の攻略から救わなかったのに、使徒たちの聖堂は、そこに避難したすべてのものを野蛮人から守った

ローマの母なるトロヤ自身も、上に述べたように、その神々にささげられた聖所において、トロヤの市民を、同じ神々を崇拝するギリシア人の兵火から守ることができなかった。いな、それだけではなく、

> ユノの聖所には選ばれた守衛、すなわち、フォエニクスとたけだけしいウリクセスと

が

略奪品を見張っていた。ここに諸方から集められたのは、
燃える神殿からひっさらってきたトロヤの財宝、神々の食卓、
堅牢な黄金の混酒器、ぶんどった衣類。
こどもらとおののく女房どもとは、長い列をなして、
その周囲をとりまく(一)

といわれている。このように偉大な女神の聖所がとくに選ばれたのは、捕虜となったものがそこから引き出されることを禁じるためではなく、捕虜となったものをそこに監禁しておくことが望ましいと考えられたからである。さて、普通の神の、あるいは同じ仲間のうちのどれかといったような神の聖所ではなく、主神ユピテル(二)自身の妹と妻であり、すべての神々の女王であるものの聖所を、わたしたちの使徒らの記念堂と比べて見よ。かしこには、燃える神々の殿堂から奪ってきた分捕品が運ばれていたが、それは被征服者に与えるためのものではなく、征服者に分つためのものであった。しかしここには、他所に見出されても、聖所に属するものは、敬々しくもっともおごそかに奉還された。かしこでは自由は失われたが、ここでは守られた。かしこでは、捕虜は監禁されたが、ここでは、それは禁じられた。かしこでは、人びとは、かれらを支配する敵の所有に帰すべきものとして引き立てられていたが、ここでは、あわれみぶかい敵によって、解放されるべきものとして導かれていた。要するに、かのユノの神殿は、きゃしゃなギリシア人たちがその貪欲と傲慢のために選んだのであったが、このキリストの聖堂は無情な野蛮人でさえも、その慈悲と人情のために選んだのである。もっとも、ギリシア人で

さえも、勝利を得たとき、かれらがトロヤ人とともに崇拝する神々の殿堂は容赦して、そこに逃れ来た敗北のトロヤ人を剣にかけることをあえてしなかったのであるが、ウェルギリウスは詩人としてそのようなことを創作したのかもしれない。いや、ウェルギリウスは、都市を攻略する敵をありのままに画いてみせたのである。

（一）ウェルギリウス『アエネイス』二の七六一。

（二）ユピテルはギリシア神界のゼウスと同一視される。神々のなかで、最高位の神である。天空の神として、さらに雨、雪、嵐などの気象現象の神として、古くより崇拝されていた。かれは、神々の王として世界を支配し、人間界の国家社会の秩序にも目を光らせる。妹のヘラ（女神ユノ）と結婚したが、それ以外にも女神たちを妻とし、多くの神々を生んだとされる。女神ユノとミネルウァとともに、ローマのカピトリウムの丘の神殿に祭られていた。

第五章

敵が征服した諸都市を攻略するさいの一般的な習わし——カトの説

このような習わしについては、カト（一）もまた、誠実をもって聞える歴史家サルスティウス（二）が記しているように、「元老院において陰謀者たちについてなした意見の発表のうちに述べることを怠ってはいない。——少女や少年は拉し去られ、幼児は親のふところから引きはなされ、主婦は征服者の意のままにされ、神殿と家屋は略奪され、殺人と火災がおこり、要するに、いた

るところ、武器と死体と流血と愁嘆とに充ちた」[三]。もしも、カトがここに神殿を挙げていないなら、敵はいつも神々の住処を容赦するものとも考えられるであろう。そしてそのような災厄を、外来の敵からではなく、もっとも高貴な元老院議員とローマ市民であるカティリナとその徒党から受けることを、ローマの神殿はおそれていたのであるが、しかし、それらのものはもちろん、悪党が祖国に弓を射くものであったのである。

(一) このカトは、大カトの曾孫にあたり、小カトと呼ばれる政治家マルクス・プロキウス・カトのことである。かれは、カエサルとポンペイウスとの戦いにおいて、ポンペイウスを支持したが、ポンペイウスの死後も、北アフリカを拠点としてカエサルに抵抗した。しかし、タプススにおいて前四六年に敗北、ウティカでストア哲学の教えにしたがって運命を甘受し、従容として自殺した。ただし、アウグスティヌスによって引用されている戦争の恐怖にかんするサルスティウスのこの箇所は、じつはカトではなくカエサルにかんするものであって、アウグスティヌスの記憶に食い違いがあったのであろう。

(二) サルスティウスは前八六年から前三四年頃。ローマの歴史家政治家。カエサルにくみしてアフリカを統治したが、カエサルが暗殺されてのち引退して著述に専念。『カティリナの陰謀』、『ユグルタ戦記』などを著わす。

(三) サルスティウス『カティリナの陰謀』五一。

第六章

ローマ人でさえも、都市を占領したさい、その神殿に避難したものを容赦したことはない

それではなにゆえ、たがいに戦争して、いずこにおいてもその神々の聖所に逃れた被征服者を容赦しなかった多くの種族のことを、わたしたちの議論は一々取りあげねばならぬのであろうか。ローマ自身について見よう。それをときにたたえるために、

　従い服するものを容赦し、おごりたかぶるものを打ちひしぎ(一)

こうむった不義の復讐をするよりも、むしろ、それを寛恕しようと欲した(二)といわれるローマ自身のことを思いおこして、もう一度調べてみよう。そしてローマ人がその領土を拡めるために、あのように多くの、またあのように大きな都市を攻略し占領して破壊したとき、どの神殿を、そこに避難してきたものが救われるように、いつも最悪から免れさせたであろうかを読みたいものと思う。それとも、ローマ人はそのようなことをしたのに、かれらのした事件を記す歴史家たちがそれを述べずにいたのであろうか。しかし、そうであるなら、なによりもほめたたえようとすることを求める人びとは、かれら自身が敬虔のもっとも明らかなしるしと考えられるものを述べずにおいたのであろうか。豪奢(ごうしゃ)をきわめていたシラクサエを占領した、ローマの名の誉れであるマルクス・マルケルスは、まずその都市のまさに滅びようとするのを嘆き、その血を流すよりもさきに自分の涙を流したといわれている(三)。かれはまた、敵においても傷つけてはならない貞節を守るように気をつけた。すなわち、征服者としてかれは、市内に侵入するよう

に命ずるまえに、命令を出して、なんびとも自由民の身体に害を加えてはならないと警告した(四)のである。そしてそれにもかかわらず、その都市は戦乱の習いによって荒らされたのであり、そしてどこにも、そのように貞節で寛仁な将軍によって、どこそこの神殿に避難したものには危害を加えてはならないという命令が出されたことを聞かない。このことはたしかに、かれが涙を流したことも、また貞節をけっして侵してはならないという命令のことも語らずにはすまされなかったのであるから、どうしても省略されたものではなかろう。すなわち、秘書がかれに、このようにしたファビウス(五)は神像を略奪しなかったと賞賛されている。(六)タレントゥム市を攻略うに多く分捕ってきた神像をどう処分させようとするのかと遠廻しにたずねたとき、かれはそのつつしみ深さをなお戯談(じょうだん)で包みかくした。というのは、かれはどのような種類のものかと問い、そして、ただ大きなものがたくさんあるだけでなく、武装したものもあると答えられたとき、「怒っている神々はタレントゥム人にまかせておこう」といったのである。(七)それゆえ、前者の涙も後者の笑いも、また前者の貞潔な慈悲も後者のふざけたつつしみも、ローマの歴史家たちによって述べずにはおかれなかったのであるから、もしもある人びとを、かれらの神々のあるものの名誉のために、容赦して、ある神殿で殺害したり捕虜にしたりすることを禁じたことがあったなら、どのような場合にそれは省略されたであろうか。

(一)　ウェルギリウス『アエネイス』六の八五三。
(二)　サルスティウス『カティリナの陰謀』九。
(三)　リウィウス『歴史』二五の二四。シチリアのシラクサエがローマ軍に占領されたのは、前二一二年

であった。それは二つの出来事で飾られた。一つは、偉大なギリシアの数学者であり軍事技術の考案者でもあったアルキメデス(前二八七年―前二一二年)がローマ兵によって殺されたことであり、いま一つは、ローマの将軍マルクス・マルケルス(前二七〇年―前二〇八年)の流した涙であった。

(四) 同上、二五の二五。

(五) ファビウス・マクシムスは生年不詳、前二〇三年歿。独裁官、執政官などに選ばれ、カルタゴのハンニバル軍と戦った。南イタリアのタレントゥムの町の奪回は前二〇九年。リウィウス『歴史』二七の一五―六、および、プルタルコス『英雄伝――ファビウス・マクシムス』二一―二に描かれている。

(六) リウィウス『歴史』二七の一五―六。

(七) 同上、二七の一五。

第七章

ローマの攻略にさいしての残虐な行為は戦争の習慣からおこるものであり、寛仁な行為はキリストの御名によるものである

それゆえ、あの最近のローマの災厄にさいして行われた攻略、殺害、略奪、放火、拷問などはすべて、戦争の習慣によってなされたのである。これに反して、新しい仕方でなされたことは、まったく、まれにみることであるが、無情な野蛮人がきわめて温和な態度を示したことである。すなわち、容赦された人民を収容するために、じつに広大な殿堂が選ばれて、とくに指

定されたのであるが、そこではなんびとも殺されることはなく、そこからはなんびとも拉し去られることはなく、そこへは多くのものが救われるためにあわれみ深い敵によって引き立てられ、そこからはなんびとも捕虜とされるために残酷な敵によってさえも引き去られることはなかったのである。このことは、キリストの御名に、キリストの御代に帰せられるべきであるが、それがわからないものは盲目であり、それがわかっていながら賞めたたえないものは忘恩であり、またそれを賞めたたえるものに逆らうものは不健全である。いやしくも思慮あるものなら、それを野蛮人のたけだけしさに帰するようなことはけっしてあってはならない。もっとも獰猛で血に飢えた精神をおそれさせ、抑制し、驚くべき仕方でやわらげたのは、あの大昔に、預言者を通じてつぎのようにいわれたところのものである。――「わたしは杖をもってかれらのとがを罰し、むちをもってかれらの不義を罰する。しかしわたしはわがいつくしみをかれらからとりさることなく、わがまことにそむくことはない(一)」。

(一)「詩篇」八九の三三。

第八章

善き人びとにも悪しき人びとにもひとしくおこるのがつねである幸と不幸とについて

「それではなにゆえ、そのような神の慈悲は、不敬で恩知らずのものにおよぶのであるか」と問うものがあろう。それはなにゆえかというと、わたしが考えるところによると、それは日日、「その日を悪しきものの上にも善きものの上にも上らせ、雨を正しきものの上にも正しからぬものの上にも降らせる」[一]ものが与えられるからではなかろうか。というのは、悪しきもののうちのあるものは、そのようなことを反省し、悔い改めて不敬から改心するが、他のものは、使徒(パウロ)がいうように、「その頑固で悔い改めぬ心をもって、神の仁慈と寛容のゆたかなのを軽んじ、自分の身に神の怒りをつんで、その正しい審判のあらわれる怒りの日におよび、そして神は各々の仕業にしたがって報いられる」[二]のであるが、しかしそれにもかかわらず、神のむちうちが善きものに忍耐を教えるように、神の忍耐は悪しきものを悔い改めにみちびくのであり、また、神のきびしさが悪しきものを罰するために叱責するように、神の慈悲は善きものを養護するために抱擁するのである。じっさい、来世のために、正しいものには善を用意して、正しくないものがそれを共有できないようにし、また、不敬なものには悪を用意して、善きものがそれによって悩まされることのないようにするのが神の摂理にかなっていた。しかし、この世の善と悪とは、正しいものにも不敬なものにも共通のものとされたのであるが、それは、善が悪しきものもまた所有するのが認められるとき、善はあまりにもはげしく求められることはなく、また、悪によって善きものもまた悩まされるとき、悪は見苦しい仕方で避けられることがないからである。

さて、幸運とよばれるものにしても、また不運とよばれるものにしても、それをどう用いるかには大きな相違がある。というのは、善きものは消滅的な善によって得意になることも、また消滅的な悪によってうちひしがれることもないが、悪しきものはこの世の幸福によって腐敗するのであるから、その一種類の不幸によって罰せられるのである。しかし、それにもかかわらず、神はしばしば、その消滅的なものの配分についても、そのはたらきをかなりあきらかに示されるのである。すなわち、もしもいま、すべての罪があきらかな罰によってこらしめられるなら、なにものも最後の審判に保留されるものはないと考えられる。また、もしもいま、いかなる罪も神によってあきらかな仕方で罰せられないなら、神の摂理というようなものはないと信じられるであろう。幸運とよばれるものについても同様であって、もしも神がそれを求めるあるものにその寛仁をあきらかに示して、与えられないなら、それは神のかかわりのないことわたしたちはいうであろう。また、もしも神がそれを求めるすべてのものに与えられるなら、ただそのような報賞のためにのみ、神に仕えねばならぬとわたしたちは考えるであろうが、そのような奉仕はわたしたちを敬虔にせずに、むしろ欲深く貪欲にするだけであろう。こういうふうであるから、善きものも悪しきものもみなひとしく苦しめられるけれども、両者のこうむるものが区別されないからといって両者自身が区別されないわけではない。というのは、苦しみは似ていてもなおそれを苦しむひとは似ていないのであり、同じものに悩まされても、徳と不徳とはけっして同一ではないのである。すなわち、同じ火にかけても、黄金は光を発し、籾殻（もみがら）は煙を出すように、また同じ連枷（からざお）で打っても、麦稈（むぎわら）はくだかれ、穀粒は精白されるように、

なおまた、油と油糟とは同じ力の圧搾機でしぼり出されるからといって混合することがないように、同じ苦しめ悩ます力も、善きものを試練し、浄化し、濾過するが、しかし悪しきものを攻略し、絶滅するのである。それゆえ、同じ苦悩を受けながら、悪しきものは神を呪い、その御名を瀆す（けが）が、善きものは神に祈り、その御名をほめたたえる。

（一）「マタイによる福音書」五の四五。
（二）「ローマ人への手紙」二の四―六。

第九章

善き人たちも悪しき人たちも等しくこうむる懲らしめについて

したがって、かの大荒廃のさいにキリスト者がこうむったところのもので、そういうことをいっそう深い信仰をもって考えてみる人びとにとって、その向上に役立たないようなことがあったろうか。

まず第一に、神がそのゆえに怒って、あのように恐ろしい災厄をもって世界をみたした罪そのものを謙虚に考えてみる人びとは、極悪破廉恥不敬をはたらくことはけっしてないけれども、しかしそれにもかかわらず、その報いとしてこの世の禍悪をこうむらねばならぬわけはないと考えるほど、過誤をまったく免れているとは思わないのである。すなわち、つぎのようなこと

は別としても――人はみな、どれほど立派な生活をしても、時として、肉の欲に負けるのであって、たとい極悪非道な行為や恥ずべき破廉恥の深淵や忌わしい不敬をはたらくには至らなくとも、それにもかかわらず、何等かの罪を、まれに、あるいは、小さなだけにしばしばおかすようになるのであるが――こういうことは別としても、そのおそるべき傲慢と放縦と貪欲と呪うべき不義と不敬とのゆえに、神が脅迫して預言したように、地をうちくだく人びとに、対処すべきように、対処する人が容易に見出されるであろうか。このような人びとと生きるべきように、ともに生きるものがあるだろうか。すなわち、たいていのばあい、教え諭し、勧告し、またときとして叱責し矯正せねばならぬ人びとを、不都合にも見て見ぬふりをするのであって、それというのは、その労をおしむからであり、あるいはそれらの人びとの体面をきずつけることをおそれるからであり、あるいはかれらの敵意をさけるからである。それというのも、わたしたちの欲望がなおもそれを獲得することを求め、あるいはわたしたちの弱さがそれを失うことをおそれるこの世のものに関して、それらの人びとがわたしたちを妨げ害することがあってはならぬからである。そういうわけで、善き人びとは悪しき人びとの生活を喜ばず、したがって、この世の生ののちに悪しき人びとに設けられる永劫の罰に、かれらとともにおちることはないけれども、しかしそれにもかかわらず、上に述べたようなわけで、かれらの永劫に罰せられるべき罰を容赦し、そしてかれらをおそれて、軽い恕すべきものとはいえ、罪をおかすことになるので、永劫に罰せられることはあるまいが、当然の報いとして、かれらとともに懲らしめられ、また当然の報いとして、神によってかれらとともに苦しめられるとき、この世を苦い

ものと感ずるのである。それというのは、この世の甘美を愛して、それらの罪びとに対して苦いものであることを欲しなかったからである。

すなわち、悪しき行為をする人びとを叱り懲らしめねばならぬのに容赦する人はみな、いっそう適当な時期を求めるためか、あるいは悪しき人びとがそのためになおさら悪しきものにならないように、かれらのことを思うためか、あるいは悪しき人びとが善き敬虔な生活へ教え導かれねばならぬ他の弱い人びとを妨げ、矯正し、信仰から引き離すゆえに容赦するのであるとすると、それは欲からすることではなくて、愛の思いやりであるように思われる。

しかし、悪しき人びとはちがった生き方をして、かれらの行為を忌み嫌うところの人びとが、しかもなお、許し諭して止めさせ、あるいは叱責せねばならぬ他人の罪を容赦することはとがめられるべきである。かれらが容赦するのは、悪しき人びとの機嫌を損じて、善き人びともまた、それを利用して少しも差し支えなく、また罪にもならないものにおいて、悪しき人びとがかれらを妨げることを用心するからであるが、しかしこのように異国人として居住するとき、天上の祖国に希望をかけると公言する人びとにふさわしい程度をこえて、それらのものを求めるのである。すなわち、ただ、結婚生活をおくって、子女を持ち、あるいは持とうとし、家や家族を所有する比較的弱い人びと(こういう人びとに、使徒は教会で語って、どのように妻は夫とともに、夫は妻とともに、子は親とともに、親は子とともに、僕は主人とともに、主人は僕とともに生きるべきかを教え諭している[二])のみが多くの消滅的なもの、多くの地に属するものを、喜んで手に入れ、惜しんで手離し、それらのもののゆえに、そのはなはだしく汚れ、極

悪非道きわまる生活を見て、みずから不快を感ずるような人びとの機嫌を損ずることをはばかるのではなく、なおそのうえに、もっと高い生活の段階を占めて、婚姻の束縛にわずらわされず、貧しい食物と衣服を甘んじて用いる人びともまた、多くのばあい、自分の名声と安全のために、悪しき人びととの奸計と攻撃をおそれて、かれらを非難することをさしひかえる。そして、悪しき人びとからどんな威嚇や不当なことをこうむろうと、それに負けて、かれらのものに似て善からぬことをするようにはならないけれども、しかし、それにもかかわらず、かれらとともになさないところの行為を、たいていは叱責することによって、おそらく矯正できるばあいもあるであろうのに、叱責することを欲しない。それというのは、矯正することのできないばあい、自分の名声が失われ安全が危くなることを心配するからであり、しかもそれは、自分の名声と安全が人びとを教え諭すという有益な仕事に必要であることを認める考慮によるのではなく、それよりもむしろ、へつらいの言葉と人間の審判[二]を喜び、世人の判断と肉体の苛責や破滅を大いにおそれる心の弱さによる。すなわち、いわば欲望のくさりにつながれているためであって、愛の義務を果たすためではない。

それゆえ、上に述べたところのことは、神が堕落した習俗をこの世の罰の苦しみによってもまた、懲らしめようとなさるとき、悪しき人びととともに善き人びともまた、懲らしめられるけっしてささやかでない理由のようにわたしには思われる。かれらがいっしょに懲らしめられるのは、かれらがいっしょに悪しき生活をおくるからではなくして、いっしょにこの世の生活を、同じようにではないが、しかしいっしょに愛するからである。この世の生活を、善き人び

その意志をいっそう善き方へ変えるかどうかはいつも不確かであるからである。

しかしながら、そうしたことについては、預言者〔エゼキエル〕を通じて、「かれはその罪のゆえにほろぼされるであろうが、われはかれの血を看視者たちの手から求めよう」といわれている人びとは、他の人びととまったく同じ程度の責任ではなく、それよりもはるかに重大な責任をもっている。すなわち、看視者たち、すなわち、人民の首長たちが教会におかれているのは、罪をとがめることを容赦しないためである。しかし、だからといって、首長の地位にいないものであっても、この世の生活の必然のために交わりを結ぶ人びととのうちに、多くのいさめるべきもの、とがめるべきものを認めながら、それを見過すところの人も、この種のとがをまったく免れているわけではない。このような人は、この世においてそれらを用いることはあながち不当ではないが、しかし、不相応にそれらを喜ぶもののために、悪しき人びとの機嫌を損ずることを避けるのである。さらに、善き人びとは、ちょうどヨブのごとくに、この世の悪しきものによって苦しめられる別の理由をもっている。すなわちそれは、信仰のどれほどの力によって報いを求めることなく神を愛しているか、人間の心がためされ、知られるようになるためである。

（一）「コロサイ人への手紙」三の一八―二五、「エペソ人への手紙」五の二二、および六の九。

(二)「コリント人への第一の手紙」四の三。
(三)「エゼキエル書」三三の六。

第十章

聖徒たちは、消滅的な事物を失っても、なにものも失うことはない

このようなことを正しく考え、よく調べた上、忠信で敬虔な人びとの身にふりかかった悪のうち、善に転化されないようなものがあるかどうかを注意してみるがよい。もっとも、かの使徒パウロは、「神を愛するもののためには、すべてのことがいっしょにはたらいて益となるのをわたしたちは知っている」(一)といっているのが、空言であると考えねばならぬなら別である。かれらは、もっていたすべてのものを失った。信仰をも失ったであろうか。敬虔をも失ったであろうか。神の御前に貴重な内的人間の善を失ったであろうか(二)。それらはキリスト者の富なのであって、それらをゆたかにもっている使徒パウロはいっている、——「しかし、足ることを知って敬虔を守るものは、大きな利益を得るのである。わたしたちはなにものもたずさえてこの世に来なかったが、しかしまた、なにものもたずさえてこの世を去ることができないからである。さて、わたしたちは、衣食があれば、それをもって満足する。じっさい、富者になろうと欲するものは、誘惑と陥穽(かんせい)とに、また、人びとを滅亡と沈淪とに溺れさせる愚かで有害なさ

まざまの欲望におちいるのである。思うに、金銭を愛することこそあらゆる悪事の根本であるが、ある人びとはそれを慕うて、信仰から迷い出、さまざまの痛みをもってその身を刺し通したのである[三]」。

それゆえ、かの荒略のさいに、地上の富を失った人びとは、もしもそれらの富を、あの外は貧しく内は豊かな使徒パウロから聞いたようにもつなら、すなわち、この世を用いないかのように用いるなら[四]、われわれは、過酷な試練を受けたけれども、けっして打ち負かされることのなかった人(ヨブ)の言葉を発することができるであろう、——「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主の御名はほむべきかな[五]」。善い僕のごとく、ヨブは大いなる財宝、すなわち自分の主人の意志をもっていたのである。かれはそれに従って霊において富んでいた。そして、死によってまたたくまに失ってしまうであろうこれらのものを、この世の生において失うことを悲しまなかったのであった。

しかし、弱い者たちは、キリストよりもこの世の財貨のほうを選び取ることはなかったにしても、いくらかの欲望をもってそれに執着していたのであって、かれらは、それを失うことによって自分たちがどの程度まで誤った愛着によって罪を犯していたかということに気付いたのであった。というのも、上に引用された使徒の言葉どおり、かれらは諸々の痛みに自分自身をゆだねるかぎりで、それに相応した痛みを覚えたのだからである。かれらは、あまりに長いあいだ言葉の訓育を軽んじていたので、経験の訓育が付け加えられねばならなかった。たしかに、使徒が「富むことを願い求める者は、誘惑に陥る[六]」というとき、かれは、財宝を非難している

というよりは、むしろ富における貪欲を非難しているのであって、それというのは、かれは別の箇所においてつぎのようにいっているからである、——「この世の富んでいる者たちに命ぜよ。高慢にならず、不確かな富に望みをおかず、むしろ、わたしたちに、すべてのものを豊かに備えて楽しませてくださる生ける神に望みをおくように。そして、善い行いをし、善いわざに富み、よろこんで施し、分かち与え、真の生命を得るために未来に備えてよい土台を築きあげるように(七)」。

このような仕方で自分の富を用いた者は、わずかな損失にたいしてそれを上まわる大きな慰めをもって償われたのである。かれらは、臆病にも前もって貯えることにより容易に失った財貨から招く悲しみよりも、他者に与えることによりいっそう安全に保持した財産から、大きな喜びを得たのである。たしかに、つぎのような主の忠告を受け入れた人びとがいたのであった、——「あなたがたは、自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に宝を貯えてはならない。むしろ、自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また盗人らが押し入って盗み出すこともない天に宝を貯えよ。あなたの宝のあるところには、あなたの心もあるからである(八)」。これらの人びとは、不幸にあって、もっとも真実なる教師であり、もっとも信頼される無敵の財宝の保護者を、軽んずることなく心に留めることによって、いかに正しく賢明におこなったかということを証明したのである。なぜなら、もしも自分たちの財宝を、敵の近づきえない場所に保つ多くの者が喜んだのなら、ましてや、神の戒めをまもって敵がまったく近づくことのできない場所に自分たちの財宝を移した者は、いっそう確実に、

そしていっそう不安なく喜ぶことができたであろう。

それゆえに、わたしたちの友人であるノラ[九]の司教パウリヌス[一〇]は、かつてひじょうに富裕であったのであるが、みずから意志して貧しくなったのであった。けれども、かれは神聖さにおいてはいっそう富む者となったのである。蛮人たちがノラの町を略奪して囚われの身となったとき、わたしたちがのちに聞いたとおり、かれは、「主よ、わたしを金や銀のゆえに苦しめないでください。あなたは、わたしの全財産がどこにあるかをご存知でおられる」と、心のうちに祈ったのであった。かれは、この悲惨なことがいつかはこの世におこるであろうとあらかじめ告げていたかた[一一]が教えた場所へ自分の全財産を運び、保存し、蓄積していたからである。したがって、財宝を、どこに、そしてどのように貯えるべきであるかということを警告した主に従ってことをおこなった者はみな、蛮族の侵入にさいして、この世的な富をも失うことがなかったのであるが、他方、不従順であったことを悔やんだ者は、かかることがらについて何をなすべきであるかということをあらかじめ洞察していなかったとしても、のちになって経験によって学んだのである。

しかし、もちろん、ある善良なキリスト者たちも、かれらの財宝を敵に引き渡すように責め苛まれた。しかし、かれらは、それによってかれらが善良であるところの財宝は、それを引き渡すことも失うこともできなかった。もっとも、もしもかれらが不義の富を引き渡すよりもむしろ責め苛まれることを望んだのなら[一二]、かれらは善良ではなかったわけである。というのは、金銭のためにそれほどまでの苦しみを受けた者は、キリストのためにどれほどまで耐え忍ばな

ければならぬかを教え諭されねばならなかったからである。かれらは、そのかた(キリスト)ゆえに耐えしのぶところのすべての人びとに、金銀ではなく永遠の浄福という財宝を与えてくださるかたを愛するよう学ばなければならなかった。じっさい、金や銀のために耐えしのぶことは——虚偽の陳述によってそれを隠すにせよ、あるいは真実を語ることによってそれを引き渡すにせよ——嘆かわしい不幸である。というのも、だれも拷問に会ってキリストを告白することによってキリストを失うことはなかったからであり、キリストを拒否することによってでなければ自分たちの金を救うことはなかったからである。それゆえ、不滅の善を愛することを教えた責め苦のほうが、おそらく、有益な果実もなく偽りの愛によってその所有者にたんなる苦痛だけしか与えなかったかの財宝よりも、いっそう大いなる価値をもつものであったであろう。

しかし、何も持っていなかったがゆえに何ものをも引き渡すことはできなかったが、人に信じられなかったがゆえに苦しめられたある人びとがあった。おそらく、かれらは財宝を持つことを熱望していたのであり、そして敬虔でもなく、みずから意志して貧しくあろうとはしなかったのである。このような人びとにたいしては、かれらがかかる責め苦を受けるに値するのは富ゆえではなく、貪欲ゆえであるということを気付かせるべきであった。また、もしもある人が、より善き生にたいする愛から、いかなる金や銀も貯えなかったにもかかわらず、(財宝を隠しているのではないかと)誤解されて責め苦を受け——わたし自身はそのようなことがあったことは知らないのであるが——、拷問のもとで聖なる貧しさを告白したなら、かれは確かにキリストを告白したのである。かれの言葉が敵によって信じられなかったとはいえ、敵は、そ

のような聖なる貧しさの告白者であるかれを、天の報賞を獲得することなくして責め苦しめることはできなかったであろう。

多くのキリスト教徒たちもまた、長く続いた飢饉で苦しんだのではなかったか、と人びとはいう。ここでも、ふたたび真の信仰者は、敬虔な忍耐によって、そのことをできるだけよく活用したのであった。というのも、飢えで滅びた者は、肉体の病によってもつようなこの世の悪から救い出されたのであり、また、滅びなかった者は、それまで以上につましく生き、持続的に断食するという教訓を学んだのだからである。

(一)「ローマ人への手紙」八の二八。
(二)「内的人間の善」という言葉は、それ自体としては聖書の用語ではないが、「内なる人」という言葉はパウロの独特の用語の一つとして見いだされる(「ローマ人への手紙」七の二二、「エペソ人への手紙」三の一六)。
(三)「テモテへの第一の手紙」六の六―一〇。
(四)「コリント人への第一の手紙」七の三一。
(五)「ヨブ記」一の二一。
(六)「テモテへの第一の手紙」六の九。
(七)同上、六の一七―九。
(八)「マタイによる福音書」六の一九―二一。
(九)ノラはカンパニアの一都市であって、ローマ市の略奪後、アラリックの軍勢は南部イタリア地方を荒廃させたのであった。

（一〇）パウリヌスはアウグスティヌスの友人で四三一年に歿。アラリックに荒らされたカンパニア地方の貧者たちに、自分の所有物を与えた。四一〇年にノラの司教となったといわれる。
（一一）「マタイによる福音書」二四の六―三五参照。
（一二）「ルカによる福音書」一六の九参照。

第十一章

この世の長い生、あるいは短い生について

じっさい、多くのキリスト者たちもまた、殺されたのであった。そして、かれらの多くが無残な仕方で死に至らしめられたのであった。もしもこのことが悲しまれるのなら、死がこの世に生れたすべての者に共通の定めであるということを思い出さなければならない。おそかれはやかれ、いつか死なない者はないということをわたしは知っている。さらに、この世の生の終りは、短く生きる者にも長く生きる者にも同じようにおこるのである。というのも、もはや等しく存在しない二つのものについては、一方がより善く、他方がより悪いとか、一方がより長く、他方がより短いとかいうことはないからである。ひとたび死んだ者が再び同じ死へと強いられることはないのなら、どのような種類の死によってそのような生が終えられたのかということが重要事となるであろうか。すべて死すべき者は、この世の生の毎日の不慮のできごとの

もとでは、ある意味で、無数の死によって脅かされているのであって、そのいずれがその人の運命となるかは不確定であるかぎり、それらの一つを蒙って死に至ることがより善いことであるか、それとも、あらゆる恐怖に脅かされながらも生き長らえることがより善いことであるか、とわたしはたずねたいのである。

わたしは、いちど死ぬことによって、それ以後はもはやいかなる恐怖のうちにもなくなるということよりも、このように多くの死の恐怖のもとにあっても生き長らえることのほうを、どれほど多くの人がすばやく選択するかということを知らないわけではない。しかし、弱い肉の感覚が臆病にも避けることと、十分に研ぎすまされた精神の理性が確信するということとは別のことである。死は、善き生がそれに先行するところの悪であると見なしてはならないのであって、それというのも、死のあとに続いておこることのみが死を悪となすのだからである。したがって、必ず死なねばならぬ者が、どのように死がおこるのかということを思い煩う必要はないのであって、死んでからどこへ行かされるのかということこそが問われるのである。それゆえ、キリスト者は、犬が来てでき物をなめつくす信仰深い貧しい者の死のほうが、紫の衣や細布を着た不信心な金持の死よりもはるかに善い(一)ということを知っているから、善く生きた死者にこれらの恐ろしい死が何をもたらすであろうか。

(一)「ルカによる福音書」一六の一九。

第十二章

人間の遺体は、キリスト者たちに葬ることを禁ぜられたが、それはかれらにとってなんの害もなかった

とはいうものの、じっさいは、あのひどい殺害のさいに、遺体は葬られることさえできなかったのである。しかし、そのようなことをも、敬虔な信仰はすこしもおそれはしない。というのは、その頭髪の一すじもなくなりはしない(一)といわれる身体の復活は、むさぼりくらうけだものによっても妨げられないという預言をかたく信ずるからである。もしも、敵が殺されたものらの遺体に加えようとしたことがなにか将来の生をそこなうようなことがあるなら、真理であられる神は「身体を殺しても、魂を殺すことのできないものどもをおそれるな(二)」とはいわれないであろう。もっとも、だれか不合理にも、身体を殺す迫害者たちは、死の前は、かれらが身体を殺しはしないかとおそれるにはおよばないけれども、しかし、死後は、殺された身体の埋葬を禁じはしないかとおそれるべきだと主張するようなものがあるなら、話は別である。もしもそのようであって、かれらが遺体に加える害がそのように大きいものであるなら、「身体を殺しても、そのあとでなにものもできないもの(三)」とキリストがいわれていることは虚偽であるわけである。しかし、真理であられる神がいわれることが虚偽であるというようなことは、けっしてあってはならない。というのは、その聖句は、殺すものどもは、その殺す身体にはなお感

覚があるから、それを殺すときにはなにかをなし得るけれども、しかし殺したのちは、殺された身体にはもう感覚がないからなにもなし得ないということを意味しているのである。そういうわけで、キリスト者たちの多くの遺体は地に葬られなかったけれども、しかしそのうちのだれも、天と、その創造されたものをどこから復活させるかを知っておられる神がそのいたるところに現存される地とから、なにびとによっても引きはなされはしなかった。なるほど、「詩篇」にも、「かれらはあなたのしもべのしかばねを空の鳥に与えてえさとし、あなたの聖徒の肉を地のけものに与え、その血をエルサレムのまわりに水のように流し、それを葬るひとがなかった(四)」といわれているが、しかし、それは、そのようなことをした人びとの残酷を誇張しようとしたのであって、そのような目にあった人びとの不幸をおおげさにいおうとしたのではない。というのは、このようなことは人間の目には残酷でおそろしいことのようにみえても、「主の聖徒の死はその目には尊い(五)」のであるからである。したがって、そのようなすべてのこと、すなわち葬祭の心づかいや、埋葬の仕方や葬送のはなやかさは、死者を助けるというよりはむしろ、生き残った人びとを慰めるものである。もしも高い金をかけた埋葬が不敬なものになにか役立つとするなら、みすぼらしい埋葬をしたり、あるいはまったく埋葬しないことは敬虔なものに害となるでもあろう。かの紫衣をまとう富者のために、かれの多くのしもべは、人間の目には華麗にみえる葬儀をいとなんだが、しかし主の御前にはそれよりもずっとりっぱにみえるものを、天使の奉仕は、あの腫物のできた貧者に与えた。あの紫衣をまとうた富者のために、かれの多くのしもべがいとなんだ葬儀は、人間の目にはこの上なくりっぱなものであったが、

しかし、あの腫物のできた貧者が天使たちの奉仕によって与えられたものは、神の御前にはそれよりもずっとりっぱなものであった。天使たちは、その貧者を大理石の墓にうつしたのではなくて、アブラハムの懐にゆだねたのである。

わたしたちが、その攻撃に対して神の国を擁護しようと筆をとった人びとは、このようなことを嘲笑する。しかし、かれらのうちにさえも、埋葬に心をつかうことを軽蔑する哲学者たちがいる。そして、全軍残らず、地上の祖国のためにたおれ、死後どこに葬られるか、またどんなけもののえじきとなるかを、まったく意に介しなかったことがしばしばあるので、詩人たちはこのことについて、「地下に埋められないものは天空に葬られる」(六)といって、ほめているのも当然である。

まして、人びとは、葬られない遺体について、キリスト者たちを侮辱してよいであろうか。キリスト者たちは、肉そのものとすべての肢体との回復が、ただ、地からだけではなく、死体が分解して、そこへなくなってしまった、他の諸元素のもっともかくれたところから、一瞬のうちに、成就され完成されることが約束されているのである。(七)

(一)「ルカによる福音書」一二の一八。
(二)「マタイによる福音書」一〇の二八。
(三)「ルカによる福音書」一二の四。
(四)「詩篇」七八の二―三。
(五)同上、一一五の一五。

(六)　ルカヌス『ファルサリア』七の八一九。
(七)　「コリント人への第一の手紙」一五の五二参照。

第十三章

聖徒の死体を葬る理由

しかし、だからといって、死者の遺体は軽んじられ打ち捨てられてはならないのであるが、聖霊があらゆる善行のいわば機関と道具として、聖なる仕方で用いられた正しくて忠信な人びとの遺体はとくにそうである。じっさい、父親の衣服や指環やその他この種類のものは、父親に対する愛情が大きければ大きいほど、子孫にとってますます大事であるなら、わたしたちがどんな衣服よりもずっと身近かにぴったりとつけている身体そのものは、けっして軽くみてはならないのである。というのは、身体は外部からつけ加えられた装飾や補足のためのものではなく、人間の本性自体に属するものであるからである。そういうわけで、むかしの義人たちの葬祭はうやうやしく行われ、その葬列は粛々(しゅくしゅく)と進められ、その埋葬は丁重になされたのであって、かれらはこの世にあったとき、みずからその遺体を葬ったり、あるいはまた移したりすることについて、息子たちに指示を与えている。(一)そしてトビトは死者を葬って神の御意にかなったと、天使の証言によって推奨されている。(二)主自身もまた、三日目に復活されようとして、か

れの体に高価な香油を、しかも主を葬るために注いだ信心深い女の善行を賞賛し、また賞賛されるべきこととして推奨している。(三) そして福音書は、主の遺体を十字架からおろして、大切に敬々しく布でまき葬ることに気をつけた人びとを賞賛して語っている。(四) しかしながら、これらの典拠は、死体に感覚があるということを暗示するものではなく、死者の遺体もまた復活の信仰をかためるから、神の摂理にかかわり、神はそのような敬虔のつとめをも喜ばれるということを意味するものである。それらの典拠においてはまた、人間の魂のなくなった肢体に対してなされた誠意のあるつとめでさえも神によって忘れられないとするなら、わたしたちが感覚のある生ける人びとになす施与に対する報酬がどれほど大きいものであるかという有益な教訓が得られるのである。なおそのほかにも、聖なる父祖たちが、かれら自身の遺体を葬ったり移したりすることについて、預言者の精神をもって語ったと解せられることを欲した箇所があるが、(五) しかし、上に述べたことでもう十分であるから、ここにくわしく論ずる必要はない。それはとにかく、食物や身につける衣服のような、生きてゆくために必要なものは、欠けているとひじょうな苦痛を与えるけれども、良き人びとにあっては、そのどこまでも耐え忍ぶ気力をうちくだき、その心から敬虔の念を根こそぎにしてしまうことなく、かえってそれを鍛えて強めるとするなら、まして、葬祭の心遣いや死者の遺体の埋葬のためになされるのがならわしであるものが、なされなくとも、すでに敬虔なものらのかくれた住処に休息しているものを不幸にすることはけっしてない。そういうわけであるから、あのローマやその他の都市が荒略されたとき、キリスト者たちの遺体はそのような配慮をうけなかったが、それは、そのような配慮をするこ

とができなかった生存者のとがでもなく、またそのようなものを感ずることができなかった死者の罰でもない。

(一)「創世記」四七の二九、五〇の二四。
(二)「トビト書」一二の一三。
(三)「マタイによる福音書」二六の六―一三。
(四)「ヨハネによる福音書」一九の三八―四二。
(五)「創世記」四九の二九―三二参照。

第十四章

聖徒たちは、捕虜の身となっても、神の慰めを欠いてはいなかった

しかし、多くのキリスト者は捕虜として引き連れられたのではないかというものがある。このことは、かれらが自分の神をみいださないどこかへ捕虜として引き去られたのであるなら、たしかにこの上もなくあわれむべきことである。しかし、このような災厄に対しても、聖書には大きな慰めが与えられている。すなわち、三人の若者が捕えられ、ダニエルが捕えられ、他の預言者たちが捕えられたが(一)、慰めてくださる神はかれらに欠けてはいなかった。それと同じように、怪獣の腹のなかにあった預言者(二)をも見捨てられなかったもの(神)は、たとい野蛮な種

族であっても、やはり人間の種族の支配下にある自分の忠信なものを見捨てられはしなかった。このようなことを、わたしたちがいま相手としている人びとは、信ぜずに、むしろ嘲笑しようとするけれども、しかし、かれらは自分らの書にみえる――もっとも有名な七絃琴ひきでもあったメチュムナのアリオンが船から投げ出されたとき、いるかの背中に乗せてもらって、陸にまで運ばれたという――話(三)を信じている。もっとも、わたしたちが、(怪獣の腹から救われたと)語り伝える預言者ヨナについての話のほうがもっと信ぜられない。そのほうがもっと信ぜられないのは、そのほうがもっと驚異に価するからであり、そのほうがもっと驚異に価するのは、そのほうがもっと強い力を証示しているからである。

(一)「ダニエル書」一の六、第三章参照。
(二)「ヨナ書」二の一―二参照。
(三) ヘロドトス『歴史』一の二三―四、オウィディウス『歴詩』二の一一三、アウルス・ゲリウス『アッティカの夜』一六の一九。

第十五章

レグルスについて――信仰のためにはみずから進んでまでも捕虜の身となることを耐え忍ばねばならぬという模範が示されているがしかしそのことも神々を崇拝するレグルスには役立たなかった

しかし、われわれを非難する人びとは、みずから進んでまでも、捕虜の身となることを耐えしのぶというもっともすぐれた模範をすでにかれら自身のもっともすぐれた有名な人びとのうちにもっている。すなわち、ローマ人民の将軍、マルクス・アティリウス・レグルスは、カルタゴ人のもとに捕虜となった。ところが、カルタゴ人は、ローマ人の捕虜をとめておくよりも、むしろローマ人から味方の捕虜をかえしてもらいたいと思ったので、この捕虜の交換を実現させようとして、とくに、このレグルスを、自分の方からの使者をつけてローマに送ったが、出発に先立って、もしもかれらの捕虜の交換という希望を達成することができないならカルタゴに帰ってくると誓約させた。レグルスはでかけて、元老院で、捕虜を交換することはローマの国家のためにはならぬと考えたから、それとは反対の説を主張した。このように主張したのちにも、ローマ人によって敵のもとに帰ることを強いられはしなかったが、しかしかれは誓約をしていたのであるから、レグルスはみずから進んで果した。ところが、カルタゴ人たちは、かれを手のこんだ恐ろしい拷問によって殺した。すなわち、かれは狭い木箱の中に閉じ込められたが、そこにはもっとも鋭い釘が四方八方に打ちつけられていて、どちらにもたれかかろうとしても、恐ろしく痛い目にあったので、止むなく立ち続けねばならず、ついに眠られないためにかえって死んでしまったのである。(二)

じっさい、人びとがこのような不幸にも屈しない剛勇を賞賛するのも当然である。しかし、レグルスが誓いを立てた神々は、その崇拝が禁ぜられたために、現在みるような災害が人類に加えられたのだと人びとが考えるような神々なのである。それゆえ、それらの神々は——それ

らが崇拝されるのは、この世の生が幸福にされることを希ってであるが——真実の誓いをするものにこのように恐ろしい罰を加えることを欲し、あるいは許したとするなら誓いを破ったものには、怒ってどんなにひどいことをしたであろうか。しかし、そう考えるよりはむしろ、わたしの推論を次のような二重の結論に導いてはならぬであろうか。すなわち、レグルスは、神を崇拝したからこそ、その立てた誓いのゆえにローマにとどまることなく、またそこからどこか他のところにでかけるようなこともせずに、かれを待っているもっとも兇悪な敵のところに帰ることをすこしも躊躇しなかったにちがいない。もしもそうすることがこの世の生のためになると考えていたとするなら、かれはあのように恐ろしい最期をとげねばならなかったのであるから、かれがまちがっていたことは疑いをいれない。じっさい、レグルスは、神々はこの世の幸福に関して、その崇拝者たちになにも役立たないということを、自分の例によって示したのであるが、そのことは、かれが神々の崇拝に献身しながら、しかも打ち負かされたうえに捕虜として引き立てられ、また、神々を通じて誓った以外のことを為すことを欲しなかったために、前代未聞の、あまりにも恐ろしい種類の罰によって、苦しめられ殺されたことによっても明らかである。さて、他方神々の崇拝が、いわばその報酬として幸福を与えるのは来世においてであるなら、どうして人びとはキリストの世を誹謗するのであるか。そしてあのような災害がローマにふりかかったのは、ローマがその神々を崇拝することをやめたからであるというのか。神々をもっとも大切に崇拝していても、あのレグルスがそうであったように、不幸になるかもしれないのである。もっとも、正気を失って、おどろくべきほど盲目に、まったく明白

な真理にさからって、神々を崇拝するとき、国家全体が不幸になることはないけれども、一個人は不幸になることがあるとあえて主張するものがあるなら話は別であろうが、しかし、そのような主張は、集団というものが個人から成り立っているのに、かれらの信ずる神々の力は多数者を守ることはできるが、個人を守ることはできないということに外ならない。

しかし、もしも人びとがレグルスはあの捕虜の身になって、あのように身体の拷問にあいながらも、なお精神の特性によって幸福であることができたというなら、人びとはただ個人だけではなく、国家もまた幸福であることができるような真の特性を求めなければならない。じっさい、国家はその心が一致した集団に外ならないから、国家が幸福であるもとのものは、とりもなおさず、個人が幸福であるもとのものなのである。そういうわけだから、わたしはさしあたって、レグルスがどんな特性をもっていたかを述べようとは思わない。かれが示したもっとも高貴な模範によって、人びとは、身体や、外から人間につけ加えられた善のために、神々を崇拝すべきではない――じっさい、レグルスはかれが誓いを立てた神々を裏切るよりも、むしろそれらすべてのものをなくすることを欲したのである――ということを認めねばならぬのであるからもう十分である。しかしながら、レグルスのような市民を持つことを誇りながら、しかもかれに似たような国家を持つことを恐れる人びとを、わたしたちはどうあつかったらよいのだろうか。もしもそのような国家を持つことを恐れないなら、人びとは、レグルスの身におこったと同じような災害が、かれに劣らず大切に神々を崇拝する国家にもおこったであろうということを認めて、このキリストの世を誹謗しないほうがよい。しかしながら、わたしたちの

議論のきっかけとなったのは、捕虜として連れていかれたキリスト者たちのことであるから、かれらのことについて、わたしたちのもっとも健全な信仰を厚顔無恥にも揶揄する人びとは、このことをよく考えてその口を慎むがよい。というのは、神々のもっとも忠実な崇拝者であるレグルスが、神々にたてた誓いを守って、その祖国を失いながら、他に安住の地をみいださず、敵のもとに捕虜となり、前代未聞の残酷な刑罰によって、ながい間死ぬほど苦しんだあげくついに殺されたということが、人びとの崇拝する神々の不名誉でなかったのなら、まして天上の祖国を真の信仰をもって期待して、自分の住処でありながら、しかも自分は異国にあるものだということを心得ているその聖徒たちの捕虜の身のゆえに、キリスト教の名は誹謗されてはならないからである。

（一） キケロ『ピソ排撃論』一九参照。

第十六章

神に身を捧げた処女たちが捕虜のあいだにこうむった恥辱は、意志の同意がないかぎり精神の特性を汚したであろうか

人びとはキリスト者たちの捕虜を誇張して、上に述べたことのほかに、他国既婚の婦人や未婚の処女にだけでなく、神々に身を捧げた処女たちのあるものにも加えられた恥辱をあげて、

キリスト者たちにまったく重大な罪を負わせることができると考える。しかしながら、このことについて厄介な問題となるのは信仰でもなく、敬虔でもなく、また貞潔とよばれる徳自体ではなくて、廉恥心と道理との両者を傷つけないように、わたしたちの議論を進めてゆくことである。そしてそれを進めるさいに、わたしたちは、外部の人びとに答弁を与えることよりもわたしたちの仲間のものに慰めを与えることに心掛けようと思う。そういうわけであるから、まず第一に確実な原理としてうちたててかからねばならぬことは、正しく生きる根本のものとしての徳は、精神に座を占めて、そこから身体の諸部分に命令するのであり、そして身体は聖なる意志使用によって聖となるのであるが、この意志が確固不動で変らないのであるから、他人が身体によって、あるいは身体にどんなことをしようとも、それはみずから罪を犯さずに避けることのできないものであるかぎり、それをこうむるものの罪責ではないということである。しかしながら、ただ苦痛をおこす行為だけではなく、色欲をおこすような行為もまた、他人の身体に加えることができるのであるから、そのような行為がなされたとき、それは、けっして移り変らない心のかたく守る廉恥心を振るいおとすことはないが、しかし廉恥心を奮いおこすのである。その廉恥心というのは、おそらく肉の快楽なしにはなされなかったような行為が、被害者の心の意志をも伴ってなされたと信ぜられはしないかというはじらいである。

第十七章

刑罰や不名誉をおそれての自殺について

したがって、このような種類の恥辱をこうむらないために、自害した婦人たちを、いやしくも人情をもつものであるかぎり、赦そうとしないものがあるだろうか。また、みずから罪を犯すことによって、他人から恥ずべき行為をなされることを免れることになりはしないかと思って、自害することを思いとどまった婦人たちをも、このことを罪として非難するものはだれでも、みずから無思慮の罪を犯すことを要心しないものであろう。というのは、たとい有害なものであっても、人間を個人の権能によって殺す――かれを殺す許しはどんな法律によっても認められていないのに――ことが正しくないなら、自害するものもまた明らかに殺人者なのであって、かれが自害せねばならぬと考えた理由が無実のものであればあるほど、かれが自害するとき、かれは罪が重くなるのである。すなわち、もしもわたしたちがユダの行為を呪うてまちがいないなら、そしてかれが首をくくったとき(二)、かれはその犯した罪をつぐなったのではなく、むしろあの裏切りのおそろしい罪が増し加ったのだ――というのは、神の慈悲を受けることを絶望して、ひどく悔いたあまり、正しく悔いる余地を残さなかったら――と、真理自体がかれを審判するなら、そのような刑罰によって、罰すべきものを自分のうちに持たない人は、なおさら自害することを思い止まるべきではなかろうか。じっさい、ユダは自害したとき、重罪を

犯した人を殺したのであるが、しかしそれにもかかわらず、かれはキリストの死に対してだけではなく、なおその上に、自分自身の死に対しても責任を負うてこの世を去ったのである。というのは、かれ自身の罪のゆえに自害したのであるが、しかしそれはまた、別の罪を犯すことであったからである。ところで、なにも悪事をなさなかったところの人は、自分の身に害を加えねばならぬわけがあるであろうか。他人から害をこうむることを恐れて、自分自身を殺すことによって罪のない人を殺し、そして他人が自分の身に罪を犯すことのないように、みずから自分の身に罪を犯さねばならぬ理由があるであろうか。

（一）「マタイによる福音書」二七の五。

第十八章

精神が同意なしに、自由のきかぬ身体にうける、他人の暴力と情欲について

とはいうものの、たとい他人の情欲であってもそれによって汚されはしないかという懸念がある。それが他人の情欲であるなら、汚されはしないであろう。しかし、それによって汚されるなら、それは他人の情欲ではないであろう。しかしながら、純潔は精神の特性であって、剛勇をともなっている――そしてそれによって、悪に同意せずに、どんな悪をも耐えしのぼうと決心する――が、しかし、どんな高潔で慎み深いものであっても、自分の身体にされることに

自由にならないのであって、ただ、精神によって承認するか拒否するかしかできないのであるから、だれが、その健全な精神を失わないかぎり、その捕えられて自由のきかない肉体によって自分のものでない情欲がほしいままにみたされることがあっても、自分は純潔を失うと考えるであろうか。じっさい、もしも純潔がこのような仕方でなくなるものであるなら、純潔は精神の徳性ではなく、また、それによってよく生きられる善に属するものでもなく、力や美や健康や、その他この種類のものである身体の善に数えられるであろうが、これらの善は、減じることがあっても善良で正しい生活をすこしも減ずることはない。ところで、もしも純潔がこのような種類のあるものであるなら、純潔のためになにを失うまいとして、身体の危険を犯してまでも苦労するのであるか。しかし、もし純潔が精神の徳であるなら、身体の自由がきかなくともそれは失われないであろう。いや、それだけではなく、聖なる貞節の善が肉欲の不浄に属さないとき、身体そのものも聖化されるのである。そしてそれゆえ、それがどこまでも確固不動の意志をもって、肉欲の不浄に属さないとき、身体そのものからも神聖性はなくなることはない。というのは、身体を神聖に用いようとする意志が存続して、それが身体にあるかぎり、そうする能力も存続するからである。

じっさい、身体が神聖であるのは、その諸部分が完全にそろっているからでもなく、またどんな接触によっても汚されないからでもない。その諸部分はさまざまな不意の出来事のために、暴力を加えられ、また傷つけられることさえもある。また、意志はときとして、健康に役立たせようと、見る目をそむかせるような処置を身体に加えることもある。産婆がある処女の処女

性を手で検べようとして、悪意によってか、無知によってか、偶然によってか検査しているあいだにそれを傷つけたとしよう。そのばあい、その肢体の完全性は失われたとしても、その女性から身体そのものの神聖性のあるものがなくなってしまったと考えるような愚かな人はいまいとわたしは考える。そういうわけであるから、精神の決意がかわらないかぎり、それによって身体も聖化されるねうちがあったのであるが、身体そのものも、その神聖性を他人の情欲の暴力によって奪いさられることはなく、自分自身の貞潔の堅持によって守られるのである。しかしながら、もしも腐敗した精神をもったある婦人が、神に立てた誓いを破って、誘惑者のところへ身を汚されるためにでかけるとするなら、そこへでかけるかの女は、身体がそれによって神聖にされていた精神の神聖性が犯されてなくなっているのであるから、身体についてさえも神聖であると、わたしたちはいえるであろうか。このようなまちがったことをいってはならぬのであって、わたしたちはこのことによってむしろ、精神の神聖性がなくなるとき、たとい身体が無事であっても身体の神聖性もまたなくなると同じように、精神の神聖性がなくならないかぎりたとい身体の自由がきかなくても身体の神聖性はなくならないということを悟らなければならない。そういうわけであるから、自分自身同意せずに、暴力によって手ごめにされ他人の罪のとりことなった婦人は、自分の意志で死んで罰せねばならぬような罪をもっていないのである。まして、そのような目にあうまえには、もっていないのである。というのは、その恥ずべき罪自体が他人の犯すものでありながら、まだ犯されるかどうか確実でないのに、確実に人殺しとみられる罪を犯すようなことがあってはならないからである。

第十九章

その身に加えられた恥辱のゆえに自害したルクレティアについて

このような明白な推論によって、わたしたちは、身体が手ごめになっても、貞潔の決意が悪へのどんな同意によっても、けっして動かされないとき、その恥ずべき行いの罪は、むりやりに手ごめにしたものが負うべきであって、手ごめにしようとするものに、いやいやながらむりやりに従わせられたものが負うべきでないと主張するのであるが、このような明白な推論に対して、わたしたちがいま論敵として、捕虜にあって自由を失ったキリスト者の婦女の、ただ精神だけではなく、身体もまた神聖であると弁護しようとする人びとは、はたして異論を唱えることをあえてするだろうか。それらの人びとは、あの古いローマの高貴な女性、ルクレティアを、その純潔を大いに賛美して、称揚している。タルクィニウス王の息子がルクレティアの身体を、その自由をむりやりに奪って、情欲をみたす対象としたとき、かの女は、この悪虐非道きわまる若者の許すことのできぬ罪を、いずれも名門の出身で剛勇をもって聞えていたその夫のコルラティヌスと近親のブルトゥスとに告げ、そして二人に復讐の誓いをたてさせた。それから、自分の身に加えられた恥辱を気に病み、耐えがたく思ってついに自害した。わたしたちはどういったらよいのだろうか。かの女は姦婦だと判定すべきであろうか。それとも貞女だと判定すべきであろうか。だれがこのような問題の解答に頭を悩まさねばならぬと考えるであろ

うか。ある弁舌家がこのことについて、じつに巧妙にまた真実をうがって、「いうもふしぎなことだが、二人がいたのに、姦淫したのはただ一人だけだ」と語っている。じつにみごとで真実をうがった言葉である。というのは、この弁舌家は、二つの身体の結合のうちに、一方のこの上なく邪悪な欲望と他方のこの上なく貞潔な意志を認めて、肢体の交わりによってなされたことではなく、精神の相違によってなされたことに注意して、「二人がいたのに、姦淫したのはただ一人だけだ」と語っているからである。

しかし、姦淫の罪を犯さなかったルクレティアの方がひどい罰にあうというのはどうしてであるか。すなわち、姦淫したものは、父とともに国から追われただけであるのに、被害者のほうは極刑をもって殺されたのである。ルクレティアが、その意志に反して手ごめにされたことが不貞でないなら、かの女が貞潔であるのに罰せられたことは正義ではない。ローマの法律と裁判官たちよ、わたしはあなたがたに訴える。というのは、わたしたちは、重大な罪を犯したものがあったとき、その犯人さえをも、判決を下さずに殺すことを、あなたが許さなかったことを知っている。それゆえ、もしもだれかこのような罪をあなたがたの法廷に告訴するものがあるなら、そしてただ、有罪の判決を下されていないだけではなく、貞潔で無罪の婦人が殺されたということが証明されるなら、あなたがたはそのようなことをしたものをそれ相当に厳しく罰しないであろうか。ところが、そのようなことをあのルクレティアがしたのである。あのように賞賛されているルクレティアが、無罪で貞潔で暴力を耐え忍んだルクレティアをなおそのうえに殺したのである。さあ、判決をしてください。もしもあなたがたが、罰することので

きる当人が居合わせないために罰することができないのなら、無罪で貞潔な女を殺したものをあのように賛美して称揚するのであるか。たしかに、あなたがたは、下界の裁判官のところで、あなたがたの詩人たちがいつも詩に歌っている裁判官のところであろうとも、どんな論拠によってもかの女を弁護することはできないにちがいない。というのは、かの女は、

「罪もないのに、みずから進んで死を選び、白日の光をきらって、生命を投げすてた(一)」

人びとの間におかれ、そして上方に立ち帰ろうとするとき、

「天命はそれを禁じ、いやな大水の
無慈悲な沼が閉じこめる(二)」

からである。それとも、ルクレティアは、自分は無実ではなく罪を犯したと考えて自害したのであるから、それらの人びとの間にいないのだろうか。じっさい、もしもかの女が、(これはただかの女だけしか知ることのできないことであったが)若者に——暴力をもって襲いかかってはきたが——自分の情欲にも誘われて同意し、そして自責の念に耐えず、死をもって償わねばならぬと考えたほど嘆き悲しんだのならどうであるか。しかし、たといそうであったとしても、もしもかの女が、虚偽の神々のもとで有効な悔悟をすることができたなら、かの女は自害すべきではなかったのである。しかし、それにもかかわらず、事実はそうであって、「二人がいたのに、姦淫したのはただ一人だけだ」といわれていることが虚偽であって、それよりもむしろ、二人がともに——一人はおおっぴらに暴行によって、他の一人はひそかな同意によって——姦淫の罪を犯したのであるなら、かの女は、罪なくして自害したのではなく、したがって、かの

女の博学な弁護者によって、かの女は、下界において、「罪もないのにみずから進んで死を選んだ」人びととの間にはいないといわれることができるわけである。しかしながら、このルクレティアの一件は、まったく、ディレンマにおちいるのであって、殺人のほうが軽くされると姦淫のほうが重くされ、また姦淫のほうが免ぜられると殺人のほうが問われるのであって、「姦淫したのになぜ賞め賛えるのか。貞潔ならなぜ自害したのか」と問われるときには、まったく逃れる道がないのである。

しかしそれにもかかわらず、この婦人のあのようにりっぱな模範について考えてみるのに、捕虜の身にあって自由を失っていたキリスト者の婦人たちを、神聖性のなにであるかを弁えずに侮辱する人々を反駁するためには、かの女を賞めた有名な言葉のうちに、「二人がいたのに姦淫したのはただ一人だけだ」といわれているので、もうわたしたちには十分である。というのは、ルクレティアは、どんな姦淫の同意によっても、その身を汚すような女でないと人びとに信ぜられていたのである。それゆえ、ルクレティアは、姦淫者を最後まで拒みとおしたのであるから、自分は姦淫者でないのに自害したのであるが、それは純潔を重んじたのではなく、恥をおそれたのである。というのは、それに共謀したわけではないが、かの女は、他人の汚らわしい罪が自分の身におかされることを恥じたのであり、そしていかにもローマの婦人らしく、賞賛をひじょうに求めて、かの女が生きていたとき、暴力によってこうむったところのことを、もしも生き長らえているなら、自発的にこうむったのだと考えられはしないかとおそれたからである。そういうわけで、かの女は、自分の良心を示してみせることのできなかった人びとの

目に、その身に加えた刑罰を心の証拠として示さねばならぬと考えたのであった。じっさい、他人がかの女になした汚らわしい行為を辛抱強く耐え忍ぶとするなら、かの女自身がその行為の共謀だと信ぜられることには赤面したにちがいない。キリスト者の婦人たちは、ルクレティアのしたようなことはしなかったのであって、かの女と同じような目にあいながら、生き長らえて、他人の罪の復讐を自分の身にするようなことはしなかったが、それは、敵がすでに情欲をおこすことによってかの女らに恥辱を加えていたのであって、もしも、かの女らが恥じいることによって自分の身に人殺しの罪を犯すなら、他人の罪になおまた自分の罪を加えることになるであろうが、それをおそれたからである。じっさい、かの女らは、貞潔の栄光を、良心の証拠を内心にもっている。かの女はまた、それを自分の神の御前にもっていて、それ以上のものを必要としない。というのは、かの女が人間の猜疑の害をまちがった仕方で避けようとして、神の法の権威からそれるようなことがないためには、かの女がなすべき正しい行為はそのほかにないからである。

(一) ウェルギリウス『アエネイス』六の四三四—五。
(二) 同上、六の四三八—九。

第二十章

どういうばあいであろうと、キリスト者が自殺の権利を認められているような典拠

は見出されない

じっさい、正経典のどこを読んでみても、たとい不死性を得るためであろうと、あるいはなにか禍悪を避けたり免れたりするためであろうと、わたしたちが自分自身を殺すことが神によって命ぜられたり許されたりしているのがみつからないということは、けっして理由のないことではない。すなわち、律法が「あなたは殺してはならない（一）」と述べているばあい、それはわたしたちもそうすることを禁ぜられていると解せねばならないのであるが、その主なわけは、律法が虚偽の証言を禁ずるばあい、「あなたは隣人に対して虚偽の証言をしてはならない（二）」といっているように、「隣人に対して」とつけ加えていないからである。もっとも、それだからといって、ある人が自分自身に対して虚偽の証言をするばあいのようなことがあっても、この偽証の罪を免れていると考えてはならない。なぜなら、隣人を愛するものは、自分自身から隣人の愛の規則を得るからであって、じじつ、聖書には、「あなたは自分自身のようにあなたの隣人を愛しなさい（三）」と書かれているのである。ところで、自分自身について虚偽の証言をするものは、隣人に対してそうするものに劣らず偽証の責めを免れないとするなら、――もっとも、虚偽の証言が禁ぜられているあの誡命においては、ただ隣人に対してそうすることだけが禁ぜられているのであるから、事態を正しく理解しない人びとには、人が自分自身に対して虚偽の証人としてたつことは禁ぜられていないようにみえるかもしれないが、――まして、「あなたは殺してはならない」と記されている誡命においては、そのほかになにもつけ加えられていな

いので、だれもたしかにその誡命を受けるもの自身は、除外されていないと考えるのであるから、人は自分自身を殺すことを許されていないと考えなければならない。このことからして、この誡命を野獣や家畜にまでおよぼそうとして、そのゆえに、それらのもののどれをも殺すことは許されないと主張しようとする人びとがある。しかし、そうであるなら、なぜ草木やそのほか地に根をはって栄養を得ているすべてのものにまでおよぼさないのであるか。というのは、このような種類のものも、感覚はもっていないが、生きているといわれ、したがって死ぬことも可能であり、またそれゆえに、暴力を加えられるなら、殺されることも可能であるからである。そういうわけで、使徒(パウロ)も、「あなたのまくものは死ななければ生かされない」(四)といっているのであり、また「詩篇」にも「神はひょうをもってかれらのぶどうの木を枯らされた」(五)と記されているのである。だからといって、そのゆえに、わたしたちは、「殺してはならない」という誡命をきくとき、草を引き抜くことは誡命に反するといって、まったく狂気の沙汰にも、マニ教徒の迷妄にしたがうであろうか。(六)それゆえ、そのようなたわごとは問題外として、わたしたちは、殺してはならないという誡命を読むとき、この誡命は、植物は感覚を持たないから、植物についていわれているとは考えないし、また、飛んだり、泳いだり、歩いたり、這ったりする理性のない動物は、それらのものがわたしたちと共有することを許されなかった理性によってわたしたちの仲間になっていない(したがって、創造主のもっとも正しい定めによって、それらのものを生かすことも殺すこともわたしたちの必要しだいである)から、その誡命はそれらの理性のない動物についていわれていると考えないから、「殺してはならない」

という誡命は、人間についていわれているのであり、したがって、他人をも自分自身をも殺してはならないという意味に解するほかはない。というのは、自分自身を殺すものも、人を殺すのであるからである。

(一)「出エジプト記」二〇の一三。
(二) 同上、二〇の一六。
(三)「マタイによる福音書」二二の三九。
(四)「コリント人への第一の手紙」一五の三六。
(五)「詩篇」七七の四七。
(六) マニ教の菜食主義においては、植物界と動物界のあいだに明確な区分がない。したがって、動物を殺すことが悪であれば、植物を殺すことも悪である。アウグスティヌスは、マニ教の菜食主義者の習慣と、かれらの木や草の苦痛と死にかんする説に触れているのである(アウグスティヌス『マニ教徒の習慣について』二、一七、五四、『告白』三の一〇の一八参照)。

第二十一章

殺人の罪を免除されるような、人間の殺害について

もっとも、「人を殺してはならない」という誡命は、それを命ずるのとおなじ神の権威によって、ある例外が設けられている。しかし、神が一般的な律法をつくって、あるいは、特定の人

に特定の時に命令をだして、殺せと命ずるところの人びとを除いて、しかし、そのようなばあいには、殺せと命ぜられるからといって、剣がそれを使う人の道具とならねばならぬように、殺せと命ずるものにつくさねばならぬ人自身が殺すのではない。したがってまた、神の命令によって戦争をしたり、あるいは公けの権力を代表して、神の律法すなわち、もっとも公正な命令の理由にしたがって、極悪な罪を犯したものらを死をもって罰した人びとの行為は、「殺してはならない」といわれている誡命にけっして反したものではない。そしてアブラハムもまた、自分の息子を殺そうとしたのは、邪心からではなく、神の命令にしたがってであった(一)から、ただ残酷の罪をとがめられないだけではなく、敬虔の名をもってほめられたのである。そしてエフタは、戦いに勝って帰ってくるとき、最初にでくわすものを神に犠牲としてささげようと誓っていたので、父にでくわした自分の娘を殺した(二)のであるが、そのことがはたして神の命令によるものであるかどうかは疑問に思われているが、それは疑問に思われるのも当然である。またサムソンは、家をたおして敵といっしょに自分を殺したが(三)、その罪を免れるのは、かれを通じて奇跡を行っていた霊がひそかにそのことを命じたからである。それゆえ、律法が一般に、あるいは正義の泉である神が特別に殺人を命ずる人びとを除いて、自分自身であろうとほかのだれであろうと人を殺すところのものはみな、殺人の罪を負うているのである。

（一）「創世記」第二二章参照。
（二）「士師記」一一の三〇―九。
（三）同上、一六の二五―三〇。

第二十二章

自殺は度量の大きいことの証拠であろうか

さて、自分の身にこのような罪を犯したものはみな、その度量の大きいことのゆえに、驚嘆にあたいするかもしれないが、しかしその判断の健全なことのゆえに賞賛されるべきではない。もっとも、ものの道理をよく考えてみると、ある人が、どんな苦難であろうと、また自分の関与しない罪を耐え忍ぶことができずに自分の身を殺したばあい、それを度量が大きいということさえも正しくないであろう。じっさい、自分の身体の苦しい隷属やあるいは大衆の愚かな意見を耐え忍ぶことができないのは、むしろ精神の虚弱と認められるのである。そして苦難にみちた生をのがれずに耐え忍び、人間の判断を、とくに多くのばあい、誤謬の暗黒に包まれた大衆の判断を、良心の光明と純潔とに比べてさげすむことのできるのは、より偉大な精神といってよいのである。そういうわけであるから、人が自分の身に死を加えるとき、それは度量の大きな行為と考えられるべきであるなら、かのテオブロトゥス[一]こそもっとも度量の大きなものであろう。かれは、伝説によると、魂の不死性について論じているプラトンの書を読んだのち、城壁からまっさかさまに飛びおり、こうしてこの世から、かれがそれよりもまさっていると信じたあの世に直行したといわれている。テオブロトゥスは災厄や、耐え忍ぶことのできない罪

に、それが真実であろうと虚偽であろうと、苦しめられて自害したのではなく、ただ度量が大きかったゆえにことさらに死を選び、この生の甘美な絆(きずな)を断ち切ったのである。しかしながら、このような行為が正しい行為というよりもむしろ度量の大きい行為であるということについては、かれがその書を読んだプラトン自身が証人となることができた。すなわち、プラトンは、魂の不死性を洞察したと同じ知見をもって、そのような行為はけっしてなされるべきではないと、いな、禁ぜられるべきであると判定しなかったなら、まずみずから進んでそれをなし、あるいは他人にそうすることを命じさえもしたにちがいないからである。

そうはいうものの、敵の手中におちいらないために自害したものも少くない。しかしいま問題なのは、それがなされたかということではなく、それがなされるべきであったかということである。たしかに、実例よりもなお健全な理性のほうが重んぜられるべきであって、それに合致するような実例もあるが、しかしそれは、敬虔においてすぐれたものであるだけますます模倣するのにふさわしいような実例だけである。ユダヤの父祖たちも、預言者たちも、使徒たちも自害するというようなことはしなかった。というのは、わたしたちの主キリスト自身もまた、弟子たちが迫害をこうむるなら町から町へ逃げよとすすめた(三)とき、迫害者の手にかかったりしないように自害して果てることをすすめることもできたわけである。ところが、キリストはそのような仕方でこの世を去ることをかれの弟子たちに命じたりはしなかった。かれらがこの世を去るとき、永遠の住処を設けようと約束しておられた。そうであったから、神を知らない異教徒たちがどんな実例をもちだそうとも、唯一の真の神を崇拝する人びとにそれが許されてい

ないことは明らかである。

(一) キケロは、アウグスティヌスがテオブロトゥスという哲学者について語っているのと同じような話をしている。しかし、それはクレオムブロトゥスという名の哲学者についてである。アウグスティヌスの記憶の誤りであろう(キケロ『トゥスクルム論議』一の三四参照)。

(二)「マタイによる福音書」一〇の二三。

第二十三章

カイサルの勝利に耐えられずに自害したカトの例はどうであるか

しかしながら、異教徒たちでさえも、それについてわれわれの意見をもう十分述べたルクレティアのほかには、その権威をもととして命令できるようなものは、ウティカで自殺したカト(一)以外にはなかなか見出せない。といってもかれが自殺した唯一のものであったからではなく、かれが学問のあるりっぱな人と考えられていたので、かれがした行為は、正しかったと、あるいは今にしても正しいことだとさえ考えられているからである。かれのそのような行為については、とくにどういうことをいったらよいであろうか。かれの友人でかれに劣らず学問のあった人びとは、かれよりも思慮深くそのような行為をいさめていたのであって、それは強健な精神のなす業というよりも、むしろ柔弱な精神のなす業だと判定して、それによって恥辱を用心

する名誉を重んじる心よりも、苦難に耐えない虚弱が示されているといっているが、わたしたちもまた、そういうべきではなかろうか。カト自身もその最愛の息子についてそのように判定しているのである。すなわち、もしもカイサルの勝利のもとに生きながらえることが恥辱であるなら、なぜ父はその子に、すべての望みをカイサルの慈悲にかけよと命じてその子をこの恥辱に陥れたのであるか。なぜ息子にも自分とともに死ぬことを強いなかったのであるか。すなわち、命令に反して戦った息子を勝利を得るために殺して、トルクァトゥス(二)が賞賛されたなら、なぜカトは戦いに敗れて自分自身を容赦しなかったのに、敗れた息子をなぜ容赦したのであるか(三)。それとも不面目にも征服者に服属することよりも戦勝者となることのほうが恥辱であったのであろうか。それゆえ、カトは、カイサルの勝利のもとに生きながらえることをけっして恥辱と考えたのではない。もしもそう考えたなら、かれは父として剣をふるって、息子をこの恥辱から救ったであろう。それゆえ、わたしたちはつぎのようにいうべきではなかろうか。すなわち、カトは、自分の息子を愛していたあまり、かれがカイサルによって救われることを望みまた欲したに劣らず、自分もまたカイサルによって赦されることのないように、カイサル自身がいったと伝えられるところによると、カイサル自身の栄誉をねたんだ——もっとおだやかにいうと、カイサルによって赦されるのを恥じたというべきであろうか。

（一）カトの死については、本巻第五章の注(一)を参照。なお、プルタルコス『英雄伝——小カト』六五—七〇参照。

（二）マンリウス・トルクァトゥスはラティウムとの戦いのときの執政官で、かれの勇敢な息子が、自分

の命に反して、トゥスクルムの軍人と単独決闘をしたかどで、息子を殺したとされる(前三四〇年)。

(三) ディオ・カッシウス『ローマ史』四三の一〇。

第二十四章

レグルスがカトよりもまさっていたその特性においても、キリスト者のほうがずっとすぐれていた

わたしたちの論駁の相手である人びとは、自分自身を滅ぼしてあらゆる苛責をまぬがれようとはせずに、あのようにおそろしい禍悪を自分の身に耐え忍ぼうとした聖徒ヨブを、あるいはまた、わたしたちの聖書――最高の権威をもってもっとも崇高でもっとも信ずるに価する――によると、自分の身を滅ぼそうとはせずに、捕虜の身となって敵の圧制を耐え忍ぼうとしたといわれている他の聖徒たちを、わたしたちがカトよりも重んずることに同意しない。しかしながら、かれら自身の書にみえるものについても、わたしたちは、あの人を、すなわちマルクス・レグルスをこのマルクス・カトよりも選ぼうと思う。というのは、カトは、かつてカイサルを打ち破ったことがなく、カイサルに打ち破られたとき、かれに服属することを不名誉と考え、この服属の憂き目をみることのないように自殺の道を選んだ。ところが、レグルスのほうは、すでにカルタゴ軍を打ち破っていたので、ローマの将軍として、ローマ帝国に、同胞市民にと

って嘆かれるべき勝利をではなく、敵からさえほめられるべき勝利をもたらしていたが、しかし、のちに打ち破られたときに、死ぬことによって、敵からのがれようとはせずに、仕えることによってかれらを耐え忍ぼうとしたのであった。したがって、レグルスは、カルタゴ人の圧制をうけても忍耐を失うことなく、また、ローマ人を愛しても誠実を守り、その打ち破られた身体を敵にまかせ、またその不敗の精神を同胞市民にゆだねたのであった。かれが自殺しようとしなかったのもその生を愛したからではない。このことの証拠として、かれは、かねての約束と誓言を守るために、かれがかつて戦場において武器をもって傷つけたよりもなおひどく元老院において言辞をもって切りつけた敵のところへなんの躊躇もなく帰っていったという事実がある。それゆえ、かれがそのように、この生を軽んじながら、しかも自害するよりも狂暴な敵からどんな刑罰をうけても最後まで生きようと欲したなら、レグルスは、人が自害するばあい、それは極悪な罪であると考えたということは疑いをいれない。そのすぐれた徳性をもってあらわれ、人びとの賞賛にあたいするすべて同胞市民のうちでも、ローマ人はレグルスほどすぐれたものを示すことはできないのであるが、かれは、幸運に恵まれても堕落することなく――あのようなかがやかしい勝利を収めながら、貧窮に甘んじていたから――また不運にあってもくじけることがなかった――あのようなおそろしい破滅にむかってひるむことなく、たち帰った――のである。さて、これらのもっとも勇敢でもっとも有名であった人びと、地上の祖国の防衛者で、虚偽の神々の崇拝者であった人びと、しかし神々の虚偽の崇拝者ではなくて、もっとも誠実な誓約者でさえもあった人びとは、戦争の慣習と法によって、征服した敵を殺すことが

できたにもかかわらず、かれら自身は、敵によって征服されたときに、自分自身を殺そうとはしなかったとするなら、そして死を少しも恐れないのに、自害して果てるよりも、征服者の支配を耐え忍ぼうとしたとするなら、ましてキリスト者は、真実の神を崇拝し、天上の国にあこがれるものとして、このようなおそろしい罪を慎むであろう。キリスト者は、神の摂理によって、試練されるために、あるいは改善されるために、しばらくのあいだ敵に服属させられることがあっても、かれらのためにあのようにへりくだられた最高者によって、あのいやしい状態に見捨てられることはなく、またとくに、どんな軍隊の権威への忠誠によっても、あるいは、そのような軍隊の命令によっても、征服された敵でさえも殺す義務はないと考えられるからである。それゆえ、罪をおかしたからといって、あるいは罪をおかすかもしれないからといって敵をさえも殺すことをあえてしないとするなら、敵が自分自身の身に罪をおかしたからといって、あるいは敵が自分の身に罪をおかすことをおそれて、人が自分自身を殺すということほど、はなはだしい迷妄の忍びよってくることがあるだろうか。

第二十五章

罪を避けるのに罪をもってしてはならない

とはいうものの、敵の条約のとりことなるとき、身体は、もっとも魅惑的な快感によって、

精神を誘って罪に同意させることのないように用心し、警戒する必要がある。それゆえ、人が自殺しなければならぬのは、もはや他人の罪をこうむらないためではなく、まだ犯していない自分の罪を避けるためであると人びとはいう。しかし、他人の情欲によって刺戟された自分の肉の欲望に同意するということは、身体とその欲望のとりことはならずに神とその知恵に服するところの精神はけっしてしないであろう。しかしそれはとにかく、真理が明らかに示しているように、自分の身に危害を加えて人殺しをすることもまた忌むべき行為であり呪うべき罪であるとするなら、「のちに罪を犯すようなことがあるといけないから、いま罪をおかしておこう。のちに姦淫の罪におちいるといけないから、いま人殺しをしておこう」などと愚かにもいうものがあるであろうか。もしも不義が圧倒的に支配して、どちらを選ぶにしても無罪でなく有罪であるとするなら、現在の確実な人殺しよりもむしろ未来の不確実な姦淫を選ぶほうがまだしもましなのではなかろうか。救いのためになる悔い改めの余地がないような罪をおかすよりも、悔い改めることによっていやされるような恥ずべき行いをするほうがまだしもましなのではなかろうか。わたしが上のようなことをいったのは、他人の情欲のとりことなるなら、それによっておこされた自分の情欲に同意するようなことになりはしないかとおそれて、他人の罪を避けるためではなく、自分の罪を避けるために自分の身に暴力を加えて死なねばならぬと考える男女のためを思ってである。しかしながら、自分の神に信頼し、神に望みをかけて、その援助にたよるキリスト者の心に、そのような心がどのような肉の快楽であろうと、それに敗けてけがらわしい行いに同意をあたえるというようなことはけっしてない、けっしてな

いとわたしは断言する。しかしながら、死すべき肢体のうちになお住まっているあの情欲による不服従がわたしたちの意志の法を無視して、いわばそれ自身の法によって動かされるかぎり、そのような動きは眠っているものの身体において罪責がないとするなら、ましてそのような動きに対して同意しない身体に罪責はないわけである。

第二十六章

なしてはならぬことが聖徒たちによってなされたということが知られるとき、それはどういう理由でなされたと信じたらよいのか

しかしながら、ある聖女たちは、迫害のさいに、その貞潔をおかそうとするものらを避けるために、かの女らをおし流して溺死させる川に身を投げ、こうして死んでしまったが、かの女らの殉教はカトリック教会においてもっとも深く尊敬され、その墓をおとずれるものももっとも多いのではないかと人びとはいう。わたしはこのような聖女たちについて軽率に判断をくだそうとは思わない。すなわち、聖女たちの遺名をそのように尊重することを、神的権威が信頼にあたいする論拠をもって教会にすすめたかどうかは知らないのであって、あるいはそのようなこともあったであろう。じっさい、かの聖女たちが、このようなことを人間によって欺かれてではなく、神によって命ぜられてしたとするなら、すなわち、まちがってしたのではなく命

るということはゆるされないのである。さて、神が命令し、そして神が命令するということをはっきり示しているとき、それに服従することを罪としてとがめるものがあるであろうか。その敬虔の恭順を非難するものがあるであろうか。しかしながら、自分の息子を神にささげようと決心したものはだれでも、アブラハムもまた、そうして賞賛された[二]からといって、その行為が重大な罪をまぬがれていると考えてはならない。すなわち、兵士たちがある権威に服従して——どういう権威であろうと、とにかく法にしたがって服従しているかぎり——人を殺すとき、兵士はかれの国のどんな法律によっても殺人の罪をとわれることがない——いや、そうしないなら命令を怠り軽んじたという罪を問われるのであるが、しかし、自分の発意と権威によってそうしたなら、人の血を流したという罪が生じたであろうからである。それゆえ、命ぜられないでしたなら罰せられるのとおなじ理由のゆえに、命ぜられてもしなかったなら罰せられるわけである。もしも将軍が命令するばあいにさえも、そのようであるとするなら、まして創造主が命令するばあいにはどうであろう。それゆえ、自殺してはならないときかされている人も、その命令を軽んじてはならないものが命ずるばあいには自殺しなければならない。ただ必要なのは、この神の命令が不確実なものによって動かされてはいないかどうかを知ることである。わたしたちが、他人の心に話しかけることができるのは、耳を通じてであって、かくれたものにまで判断をくだそうとは思わない。「人のうちに行われていることは、その人のうちにある霊のほかに知るものはない[三]」のである。わたしたちは、これを述べ、これを主張し、あらゆる仕方で

これを証明しようと思うのであるが、なんびとも、永遠の苦悩におちいることのないように、一時の苦悩をまぬがれようと思ってみずからすすんで自分の生命を断ってはならない。なんびとも、そうすることによって、みずからもっとも重い罪を負いはじめることのないように、他人の罪によって汚されなかったとき、他人の罪のゆえに自分の生命を断ってはならない。なんびとも、悔い改めることによって救われることができるように、そのためにこの生はなおさら必要なのであるが、自分の生命を断ってはならない。なんびとも、死後に期待されるいっそうよい生活をいわば望んで自殺してはならないのであるが、それはその期待される死後のいっそうよい生活は、自殺の罪責を負うものを引き取りはしないからである。

(一)　サムソンについては、第一巻第二十一章において触れられた。アウグスティヌスは、サムソンの自滅には、神のひそかな霊感があったということを示唆しようとしている。

(二)　「創世記」二二の一五—九。

(三)　「コリント人への第一の手紙」二の一一。

第二十七章

罪をさけるためにみずからすすんで死を求めるべきであるか

なおそのほかに、それについてはすでに上にも述べかけたのであるが、人が自分を殺すこと

が身のためになると考えられる一つの理由がある。すなわち、快楽に魅せられたり、あるいは苦痛にさいなまれたりして罪におちいらないようにするという理由である。もしもわたしたちがこの理由を認めるようなことがあるなら、その理由はおし進められて、人びとは、聖なる再生の水浴によって洗われてすべての罪の許しをうけるとすぐに自殺することをすすめられねばならぬということになるであろう。というのは、過去のすべての罪が消し去られたときこそ、将来のすべての罪をおかさないように用心すべきときであるからである。もしも、罪をおかさないように用心することが自発的な死によって正しくなされるとするなら、なぜとくにそのときになされないのであるか。なぜ人はみな、洗礼をうけたのち自分を殺さないのであるか。なぜ罪から自由になった頭をまたもやこの世の危険のなかに包みこむのであるか。自分を殺すことによって、すべての危険を避けることはまったく容易にできるのではないか。また、「危険を好むものは、危険におちいる」(二)と記されているではないか。そうだとするなら、この生を捨てることが許されているのに、なぜそこにとどまって、このように多くの、このようにはなはだしい危険を好み、あるいは好まなくてもそれに会おうとするのか。それとも、その心がまったく愚かにもねじまげられ、真理の考察から遠くはなれ去ってしまって、人は、ただ一人の征服者の支配の捕虜となって罪におちいることのないように自害しなければならないが、たえず誘惑に、しかもただ一人の支配者のもとにこうむることがおそれられる誘惑だけではなく、それ無しにはこの生からのがれられないような誘惑にみちているこの世を耐え忍ぶために生きながらえねばならぬと考えるのであろうか。そのように考えるものはない。それゆえ、わたしたち

が洗礼をうけたものに話しかけ激励して、処女の純潔や、独身の節欲や、あるいは夫婦生活の貞節を守らせようとつとめる勧説に時を費やすどんな必要があるだろうか。わたしたちは、そうするよりももっとよい、罪をおかすあらゆる危険のない簡便な方法をもっている。わたしたちは、だれでも罪を許されるとすぐに、死をひっつかんで自分の身に加えねばならぬと説得することができ、そしてそのものを主のもとへいっそう健全で純粋なまま送ることができるのである。しかし、そのような方法をとって、それを説得せねばならぬと考えるものがあるなら、その人は愚かなのではなくて、正気を失っているとわたしはいいたい。どんな顔をして、「あなたは自殺しなさい。野蛮な習俗をした恥知らずの主人のもとに生きながらえ得て、あなたの小さな罰にいっそう大きな罪をつけ加えることのないように」と他人にいうのであるか。「あなたのすべての罪が許されたのであるから、あなたは自殺しなさい。あのように多くの不浄な快楽によって、魅惑的なあのように多くの許すことのできない残忍によって正気を失っている、またあのように多くの誤謬と恐怖をもって敵対している世界に生きながらえ得て、さきにおかしたような、あるいはもっとよくない罪をふたたびおかすことのないように」ということが極悪なことであるとするなら、上にいったようなことはいえないのではなかろうか。のちにいったようなことを口にすることが許されないのであるから、自殺することは明らかに許されないにちがいない。すなわち、もしも自発的に死ぬ正しい理由があり得るとするなら、それがもっとも正しい理由であるにちがいないが、しかしそれも正しい理由であるのでないから、自殺する理由はまったくないわけである。

(一)「集会の書」三の二六。

第二十八章

敵の情欲が貞潔なキリスト者の身体に罪をおかすことを許されたのはどのような神の判断によってであるか

そういうわけであるから、おお忠信なキリスト者たちよ、あなたがたの貞潔が敵のもてあそぶところとなっても、あなたがたの生を嫌悪してはならない。あなたがたは、あなたがたの身に罪をおかすことを許された敵の罪に同意しなかったという確信をもっているかぎり、偉大な真実のなぐさめをもつわけである。しかしあなたがたは、なにゆえ敵は罪をおかすことを許されたかを疑問に思うかも知れないが、それは、この世界を創造し導かれるものの摂理は深く、「その審判は計りがたく、その道はたずねがたい[一]」からである。しかし、それにもかかわらず、あなたがたの魂にむかって誠実に問いただしてみなさい。あなたがたは、かの純潔と節欲、あるいは貞潔の徳のゆえに、はなはだしく増大して、人間の賞賛を喜ぶあまり、ある人びとをねたみはしなかったかと。わたしはそれを知らないのであるから、とがめはしない。また、あなたがたの心がこの問いに答えるところのことを聞くわけにはいかない。しかしそれにもかかわらず、あなたがたの魂が正しくその問いにあるようなものであったと答えるなら、あなたがたが、

それによって人びとを喜ばそうと望むところのものをなくしてしまって、人びとに見せることのできないものをとどめていることは驚くにはあたらない。あなたがたが罪をおかすものらに同意しなかったなら、それは、神の恩寵がむなしくならないように神の扶助がそれに加ったからであるが、人間の栄誉が愛されることのないように人間の恥辱がそれに加えられたのである。いずれについても、心弱きものよ、あなたがたは慰められる。すなわち、一方では是とせられ、他方では懲らしめられ、また、一方では義とせられ、他方では矯められるのである。しかし、それらのものの心は、上のように問いただされて、その処女性や独居生活や婚姻生活の貞節などの善のゆえに、たかぶったことはなく、低きにつき[二]、神の賜物をおののきをもって喜び[三]、またどれに対しても同じような神聖さと貞潔をうらやんだことはなく、賞賛を受けるべき徳がまれであればあるほどますます多く与えられるのがつねである。人間の賞賛を軽んじて、かれら自身が少数であるがゆえに人目につくことよりも、かれらの仲間がますます多くなることを願ったと答えるであろうが、しかし、そのようなものもまた、そのようなものでありながら、そのあるものが野蛮人の色欲の犠牲になったとき、それが許されたことに苦情をいってはならない。また、だれも罰せられずにおかされない罪を許したからといって、神がそのようなことを看過されると信じてはならない。たとえば、邪悪な欲望の重大な罪は、神のかくれた現在の審判によっては見逃されるが、しかし、それは神の明らかな最後の審判のために保留されるのである。しかし、それらのものはまた、その心が、かの貞潔の徳のゆえに思いあがらなかったことをよく自覚していながら、しかも敵の暴力をその身にこうむったのではあるがあるかくれた

弱さをもっていたのであって、それは、もしもかれらが、あの攻略のさいにこのような屈辱をこうむらなかったら傲慢と尊大とに増長したかもしれない。それゆえ、悪意によってその心性がかえられることのないように拉しさられたもの(四)があったと同じように、幸福がその謙虚をかえることのないようにこれらの婦女からあるものが暴力によって奪い去られたのである。それゆえ、自分の肉体を、なん人の汚らわしい手によっても触れられなかったといって誇っていたところのものも、あるいはまた、もしも敵の暴力に触れられなかったならおそらく誇ったであろうものも、貞潔はなくされずに、謙虚が加えられたのである。一方では、すでにおこっている傲慢が防止され、他方では、まさにおころうとする傲慢が予防されたのである。

しかしそれにもかかわらず、なお看過してはならないことは、このような目にあった婦人のうちには、貞潔の徳は身体の徳に数えられるべきであって、その身体が他人の色欲によって汚されないかぎり存続すると考えるものがあるかもしれないことである。すなわち、その身体も精神も聖であるのは、まったく神の助力による意志の力によるのであり、また貞潔は意志に反して奪い去られるような徳であると考えないものがあるが、そのような誤謬はおそらくかれらにみられないようになっているであろう。すなわち、かれらがどのように良心的に神に仕えたかを反省するとき、またかれらが神について、神がそのようにかれに仕え、かれを呼び求めるものをけっして見捨てるようなことはないと不動の確信をもって考えるとき、またかれらがどれほど貞潔の徳を喜ぶかを疑うことができないと考えるとき、かれらは、神がそのようなことが聖徒たちにおこることを、もしもそのようにして神が聖徒たちに与え、そして聖徒たちにお

いて愛される純潔が失われることがあるならけっして許されなかったであろうという結論になるのをみるのである。

(一)「ローマ人への手紙」一一の三三。
(二) 同上、一二の一六。
(三)「詩篇」二の一一。
(四)「知恵の書」四の一一。

第二十九章

キリストの僕たちは、キリストがかれらを敵の狂暴から救わなかったという非難に対してどのように答えるべきであるか

したがって、最高の、そして真実の神に属しているすべての僕（しもべ）は、みずからの慰めをもっているのであって、それはけっして欺瞞的なものでなく、また不確かで不安定な事物の望みにもとづくことのない慰めである。かれもまた、この世の生をもつのであるが、しかしかれは、その生においては永遠の生の予備課程として教えられるのであって、そこでは、かれは、この世の財貨をあたかも巡礼者であるかのごとくに用いて、その虜（とりこ）とはならないのである。そして、かれは、この世の生において災禍によって試され、浄化されるのである。しかし、キリストの

僕の誠実さを嘲笑し、かれがこの世の災禍に見舞われたときに「かれにむかって、おまえの神はどこにいるのか」[一]という人びとがいる。そのような人びとに対しては、かれらが同じような災禍を受けなければならないとき、「あなたがたの神々はどこにいるのか」というがよい。かれらは、神々を敬い、その神々の崇拝に熱心にはげむことによってその災禍を避けようと欲しているのだからである。

じっさい、キリストの僕はつぎのように答えるであろう――わたしの神はあらゆるところに現在したもう。神は全体としておられ、どこにも閉じ込められないかたである。神は秘かに近づいてこられ、動くことなく去られる。神がわたしに不幸をもたらされるときはいつも、わたしの徳を試みられるのであるか、それともわたしの罪を罰せられるのであるかである。神は、敬虔に耐え忍ばれたこの世の悪にたいしては永遠の報酬をもって報われる。しかし、あなたがたの神々についてはは語りがいがあり、わたしの神――それはすべての神々にまさって畏れられるべき神である。というのも、異教徒の神々はすべてダエモンであるが、主は天をつくられたがゆえに[二]――については語りもしないというあなたがたは、いったい何者なのであるか。

(一)「詩篇」四二の三、七八の一〇。
(二) 同上、九五の四、五。

第三十章

キリストの御代について不平をいう者が、贅沢な放蕩にふけることを欲するのは、
いかに恥ずべきことであるか

もしも、かつてあなたがたの司祭長であったかの有名なスキピオ・ナシカがいまも生きていたなら――ポエニ戦争の恐怖のさなかに、元老院は一致して、この人物を、フリジアの女神キュベレの聖殿をこちらへもってくるにさいして、それを迎えるに適した最良の市民として選んだのであったが(一)――、あなたがたはおそらくかれの顔をあえて見る勇気もないであろうが、かれはあなたがたの恥知らずを抑制するであろう。あなたがたは、不幸にあってキリストの御代を非難するのであるが、それは、あなたがたが安全な放縦の生活を享受し、あらゆる厄介なことがらの重荷から逃れて、まったく堕落した道徳によって流されていくことを欲するということ以外のいかなる理由であるか。

というのも、あなたがたは、これらの財貨を正しく用いるために、すなわち、つつましく、節度と敬虔な心をもって用いるために平和とあらゆる種類の富をもつことを欲せず、狂気じみた浪費によって無限に多様な楽しみを求めるためにそれを欲し、そしてそのことによって、自分たちの敵の狂暴さよりもいっそうひどい道徳の堕落を呼び出すのだからである。

かれ(スキピオ)は誤ってはいなかった。かれがいかに正しく語ったかということを出来事の経過が証明したのであった。というのは、カルタゴが滅亡してローマ帝国の大きな恐怖が消えたのであるが、ただちに、幸福なものから災いが生じたのだからである。まず(帝国内の)和合

が、狂暴で血なまぐさい争いによって引き裂かれた。次いで、有害な諸原因が連鎖して作用することによって内乱が生じた。それは、殺戮を生じ、流血を見せた。そして、追放と略奪への非人間的な熱狂が荒れ狂っておこった。そのため、敵からの害だけを恐れてはいたが公正な生活をおくっていたローマ人は、いまや、その公正な生活を失い、自分と同じ市民からの大きな残酷さを蒙ることになったのであった。他の一般的な人間的悪徳とともに、全ローマ人のもとに巣くっていた支配への欲望が、少数の特別に力ある者たちの手中に帰してからのちは、他の者たちは、打ちのめされて力衰え、奴隷のくびきのもとに圧しつぶされたのであった。

（一）　スキピオ・ナシカ（前二三六年―前一八四年）はローマの将軍。前二〇二年、カルタゴを屈服させローマを勝利に導き、カルタゴ側の将軍ハンニバルを破ったことにより、「大アフリカヌス」の称を得て、ローマ人から神がかり的な尊敬をうけた。第二ポエニ戦争中、ハンニバルの戦略によってローマ軍が苦境にあったとき、ローマを救うために、ローマの政府は、ギリシアの女神キュベレに頼ろうとして、その女神像を小アジアのフリジアからローマへ移すことにした。そのときの元老院は、スキピオを「最良の市民」として選び、オスティア港での女神像の出迎えにあたるよう決めたのであった（前二〇二年）。けっきょく、ローマはカルタゴを屈服させたのであるが、カルタゴを完全に破壊してしまうかどうかについてはローマ側で意見が分かれた。スキピオは、カルタゴの破壊に反対し、ローマ人にとって、恐れの原因を取り除いてしまうことは、かえってローマの道徳的頽廃を招くものであると主張したのである。

第三十一章

どのような悪徳の段階を経て、ローマ人の間に支配欲はましていったのであるか

すなわち、かの支配欲は、はなはだしくおごりたかぶるものの心において、つぎつぎに栄誉ある地位にのぼって、ついに王権に到達するまで、いつ休まるであろうか。しかし、つぎつぎに栄誉ある地位にのぼることは、野心が強くなければ不可能である。また野心は、貪欲と放縦とによって腐敗した民族においてのみ強いのである。しかし、ローマ民族が貪欲で放縦になったのは、繁栄によってであり、その繁栄こそ、あのナシカがローマの敵のうちもっとも大きく、強力で富裕な国を滅ぼすことを拒んだとき、そのすぐれた先見の明をもって警戒せねばならぬと考えたところのものである。すなわち、かれは、情欲が恐怖によって抑制され、情欲が抑制されて放縦にはしらず、放縦が抑制されて貪欲が増長せず、これらの悪徳がすべて閉じこめられて、国家にとって有用な徳が増し栄え、その徳にふさわしい自由が永続するようにしたのである。なおまた、このような考慮ともっとも先見の明のある祖国愛とからして、この同じローマの大司祭長は、当時の元老院によって(このことは繰り返して語らねばならない)まったく意見の相違なく、最適任者として選ばれたのであるが、元老院が劇場の観衆席をつくろうと企てたとき、この計画と欲望とを思いとどまらせ、そしてもっとも重みのある演説をもって、ギリシアの放縦の風をローマの男性的な習俗のうちに忍びこませてはならない、また、異国の風に

屈してローマの特性をぐらつかせ、柔弱にさせることに同意してはならないと説いた。かれの言に動かされて、元老院も遠い将来のことを慮(おもんぱか)ってローマ市民が劇場に芝居をみるときだけ持ちこんで使いはじめていた腰掛けをもその後は禁ずるようになったのである。もしも、かれが神々であると信じていたものの権威に逆らうことをあえてしたなら、どのように熱心にローマの都から演劇そのものを追放しようとしたことであろう。かれは、それらのものが有害なダエモンであることを知らなかったし、また知っていたとしても、かれとしてはそれらのものを軽蔑するよりはむしろ、なだめるべきものであると考えていたのである。というのは、信仰によって心を清めて、天にあるもの、あるいは天を越えてあるものをとらえさせ、謙虚な敬虔の念をもって、人間の性情を変え、傲慢なダエモンの支配から解放する、あの天から来る教説はまだ異邦人に宣明されていなかったのであるから。

第三十二章

演劇の流行について

しかしながら、そのようなことを知らないものは、また、知らないようなふりをするものは、つぎのことを知るがよい。そしてあのような支配者から解放されたものに不平をいうものは、つぎのことに注意するがよい。あの汚らわしい見世物、ばかばかしい遊楽、すなわち演芸は、

人間の悪徳によってではなく、あなたがたの神々の命令によってローマにおいて行われるようになったのである。あなたがたは、そのような神々を崇拝するよりも、かのスキピオに神の栄誉を与えるほうがまだ恕すべきであったろう。というのは、それらの神々はその司祭長よりもまさっていなかったのであるから、しかし、あのようにながらく誤謬の濁酒に酔いしれた精神にもなお健全なことを考えることを許すならよく注意してみるがよい。神々は、身体の疫病を予防するために演劇を神々に奉納することを命じたのであるが、司祭長は、精神の疫病を予防するために劇場そのものの建設を禁じたのである。もしも、あなたがたがある精神の閃きによって、精神を身体よりもまさっていると考えるなら、そのいずれを崇拝すべきか選んでみるがよい。というのは、あの身体の疫病がなくなったということも、好戦的でそれまでただ競技にだけ慣れていた民衆に演劇の心地よい狂気が忍びこんだからではなく、忌むべき霊が狡猾にも、かの身体の疫病がもうその終るべきときに近づいてやがて無くなることを予見して、その機会に、それらの霊がもっとも喜ぶがゆえに、ずっと危険な疫病を、こんどは身体にではなく、習俗のうちにもたらそうと考えたからである。そして、この新しい疫病はあのあわれむべき人びとの心をあのような暗黒をもって暗くし、あのような醜状をもって汚したので、これはわたしたちの子孫がきいてもおそらく信じないであろうが、ごく最近も、ローマ市が攻略されたのち、そこからカルタゴに逃れて来たかの疫病のとりことなった人びとは、日々、劇場であい争って役者のために熱狂するのである。

第三十三章

ローマ人の悪徳は祖国の破滅によっても矯正されなかった

おお、乱心の心よ、このようなはなはだしい過誤は、というよりもむしろ狂暴は、どうしたことだろうか。わたしたちの聞くところによると、あなたがたのような破滅は、東方の諸民族も嘆き、もっとも遠い地方の強大な諸国も公けの恨事として悲しみ嘆いているのに、あなたがたは劇場をおとずれ、劇場にながれこみ、劇場にあふれているのはどうしたことだろうか。あのスキピオは、劇場の建設を禁じたとき、繁栄が容易にあなたたちを腐敗させ堕落させることを悟ったとき、あなたがたが敵に対する恐怖をまぬがれて安全になることを欲しなかったとき、このような精神の頽廃と疾病を、このような廉潔と純真との喪失をあなたがたのためにおそれたのである。というのは、スキピオは、その城壁は厳然と立っていても、習俗が頽廃しておれば国家は幸福であるとは考えなかったのである。しかし、あなたがたにおいては、不敬なダエモンの誘惑したことのほうが先見の明のある人間の配慮したことよりも有力であった。そういうわけで、あなたがたは、そのなすところの悪をあなたがた自身に帰することを欲せず、これに反して、あなたがたのこうむる悪をキリストの御代に帰するのである。というのは、繁栄によって悪化し、苦難によって矯正されなかったあなたがたは、安全のうちに祖国の平和を求めるのではなく、あなたがたの放縦な生活の罰せられないことを求めるのであるからである。か

のスキピオは、あなたがたが放縦な生活に耽溺してしまわないように、あなたがたが敵の恐怖によってせめられることを望んだが、あなたがたは、敵によって打ちひしがれても、その放縦な生活を抑制せず、災厄の有益な教訓を無にしてもっともあわれむべきものとなりながら、いつまでももっとも悪しきものなのである。

第三十四章

ローマの陥落をも和らげられた神の寛仁について

しかしそれにもかかわらず、あなたがたが生きながらえているのは、あなたがたが悔いて改められるように、あなたがたを容赦して勧告された神のおかげである。恩知らずのあなたたちにも、あるいは神の僕という名のもとに、あるいは神の殉教者たちの聖所において敵の手を逃れることができるようにされた神のおかげである。ロムルスとレムスとは、そこへ避難したものはだれでも、あらゆる加害をまぬがれることができるような避難所を設けたといわれるが、(一)かれらは建設しようとする都市の人口を増加させようと考えたのである。これはキリストの名のためになる注目すべき先例となった。都市の破壊者たちは、さきにその建設者たちが定めておいたものを定めたのである。しかし、その破壊者(二)たちが、敵の多数を救うためにおこなったことを、建設者たちが自分の市民の数を増やすためにおこなったということに何か偉大なもの

があるのであろうか。

（一）　アウグスティヌスは、「避難所」という言葉によって、キリストによってもたらされた人間の「救い」を象徴させる（本書第二巻第二十九章、第五巻第十七章参照）。

（二）　ローマの破壊者ゴート族をさす。

第三十五章

不信仰な者のうちに隠されている教会の子供たち、および、教会のうちにいる偽りのキリスト者たちについて

これらの答が、そしてまた、別の答が——それがより十分でより適切なものであるなら——、あがなわれたキリストの僕（しもべ）と、キリストを王とする旅する者の国によって、敵対する者に与えられるであろう。しかし、この国は、敵対者のうちにも未来の民が隠されているということを心に留めなければならない。そうすれば、この国は、そのような者たちが（いつの日か）信仰を告白する者となるときまでその敵意を耐え忍ぶことも、けっして実りのないものと見なすことはないであろう。いうなら、神の国は、それが地上を旅するものであるかぎり、秘跡を共通とすることによって結び付いているのではあるが、未来の聖徒の永遠の（至福の）運命にあずかることのない者たちを、みずからのもとに持っているわけである。それらのある者は、わたした

ちの目には隠されており、またある者は、公然と知られている。かれらは神のしるし(秘跡)を身にまといながら、敵とともに神に対して不平をつぶやくことをはばからず、ある日は敵とともに劇場の席をみたし、ある日はわたしたちとともに教会をみたしているのである。
しかし、もっとも明らかに敵対する者のうちに、その者自身には知られないのではあるが、わたしたちの友となるべく予定されている者がいるとすれば、わたしたちは、それらのある者を矯正することについて絶望してはならないのである。じっさい、最後の裁きによって分けられるまでは、二つの国は錯綜し合い、たがいに混じり合っているからである。わたしは、神の助けを得て、二つの国の起源と進行、そして定められたその結末について語らねばならないとおもうのであるが、それは、神の国の栄誉のために解き明かそうとするものであって、この神の国は、それに相対置される他方の国と比較されることにより、いっそう輝かしい光を放つことであろう。

第三十六章

以下の論議について取り上げられるべき論題

しかし、わたしたちは、ローマ国家の災害をわたしたちの宗教に帰して、それによってローマの神々に犠牲を供することが禁ぜられるからであるというものに対してなお反駁せねばなら

ぬことがある。というのは、ローマの神々に犠牲を供することが禁ぜられる以前に、ローマ国や、その支配に属する地方が耐え忍ばなければならなかった禍悪を、それらがおこったかぎり、あるいは十分であると考えるかぎり、述べなければならないのである。それらの禍悪も、もしもすでにそのときわたしたちの宗教の光がかれらに輝き、そしていまと同じようにかれらが瀆神的な祭事を行うことを禁じていたなら、かれらはわたしたちの責めに帰したであろうことは疑いない。それからつぎに、真の神は、すべての王国はその権力によるのであるが、どのようなローマの習俗を、またどのような理由からして、その支配権を増すために扶助されたのであるか、またローマ人が神々と考えるものが、どのようにかれらを援助せずに、むしろ反対に、欺瞞と虚偽とによってかれらを害したかを示さなければならない。そして最後に、もっとも明らかな証拠によって論駁され承服させられながら、神々を崇拝せねばならぬのは現世の利益のためではなく、死後の生活のためであると主張する人びとに対して語らなければならない。これは、わたしが思い誤っていないなら、他のものよりもずっと骨の折れる問題であり、根本的に論議するにふさわしいものであって、その論議においては哲学者たちをも相手にしなければならないが、しかし、それはどの哲学者でもよいというわけではなく、かれらの間でもっとも声望が高く、またわたしたちと多くの点において、すなわち、魂の不死性について、真の神による世界の創造について、その創造による世界を導く神の摂理について、意見の一致している哲学者なのである。しかしながら、そのような哲学者たちも、わたしたちと意見を異にする点においては反駁されなければならないのであるから、わたしたちはこの義務の遂行に欠けると

ころがあってはならない。そして、神の分かち与えられたかぎりの力をもって、不敬な異論を反駁したのち、真の神と真の敬虔とそこにのみ真実に永遠な浄福が約束される神の崇拝について積極的に主張するところがなければならない。それゆえ、これをもって第一巻を終り、つぎに、巻を改めて問題を一つ一つ取り上げていくことにしよう。

第二巻

第一章

議論の必要性に付せられるべき限界について

もしも人間のうちに習慣的に見られる感覚の弱さが明白な真理の根拠にあえて抵抗しようとはせず、神の援助のうちに、敬虔な信仰によって健康を回復するまで、その虚弱さを、あたかも医薬にゆだねるがごとくに健全な教えにゆだねるなら、正しく判断し、その意味を言葉で表現できる人は、むなしい臆見の誤謬を駁するために多くの言論を用いる必要もないであろう。

しかし、愚かな魂の病は重く、そして悪意があるので、ある人が他の人に証明することができるほど十分にその根拠が示されたのちでさえ、その非理性的な衝動が——明白なものを識別することを妨げているはなはだしい盲目のゆえであるか、それとも、識別されうるものを受けとることを阻んでいる頑固な強情さのゆえであるか——あたかも理性と真理そのものであるかのごとくに抵抗しているのである。それゆえ、わたしたちは、すでに明確であるところのこと

を、見る人の目にではなく、ある意味で、それにたいして目を閉じる人によってさえ感ぜられるものとして手に触れることができるかのごとき仕方で示すように、十分に語る必要性が生ずるのである。しかし、それにもかかわらず、答える人にむかってすべて回答すべきであると思うなら、議論のどのような終局があるであろうか。また、話のどのような際限があるであろうか。

それというのも、人が語るところのことを理解できない人、あるいは、頑固に抵抗することに固執して、たといそれらのことを理解しても服従しない人は、「高慢な言葉を吐く」[一]と記されているようにつねに答えるからであって、(それに答えようとすることは)救いがたく無益なものである。かれらがわたしたちの述べることにたいして何らかの仕方で反駁するあいだ、その頑固な表情をもってわたしたちのいうことを考えまいとする数だけわたしたちがかれらの反論を論駁しようとでもするなら、それはいかに果しがなく、また労苦にみち、むなしいことであるかということを、あなたは知るであろう。したがって、わたしは、愛する子マルケリヌス[二]よ、あなた自身によっても、また他の人びとによっても――その人びとにとって、わたしのこの書がキリストの愛において有益であり、かつ自由に役立ってくれることを欲するのであるが――読まれたところに何か反駁する声を聞いたときにつねにくり返して答を要求するような批評者であってほしくはないのである。そうでなければ、使徒(パウロ)が、「かの女たちは、つねに学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない」[三]と語っているあの女に似た者となってしまうであろう。

(一)「詩篇」九三の四。
(二) マルケリヌスについては、本書第一巻序言の注(一)参照。
(三)「テモテへの第二の手紙」三の七。

第二章

第一巻の内容の回顧

さきの巻において、天の助けを得て、この書の全体にとりかかろうとする理由となったところの神の国について語りはじめたのであるが、わたしは、まずはじめに、つぎの人びとに、すなわち、この世を荒廃した戦争、とくに、最近の蛮族たちによるローマの都市の劫略を、ダエモンに不敬ないけにえを捧げることを禁じたキリスト者の信仰のせいにした人びとにむかって、答えなければならなかったのであった。わたしは、かえって、蛮族たちが(キリストの)御名のゆえに戦争の慣例や習慣に反して、逃れてくる人びとに広い聖なる場所を開放したということ、また、キリストの真正な僕だけでなく恐怖ゆえにそのように(キリストの僕のように)装った者もひじょうに尊敬されて、そのために、戦争の決まりにしたがえば、かれらに当然加えられたであろうことも、すべて不法と見なされたということは、まさにキリストに帰せられるべきことがらであるということを示したのであった。

つぎに、このようなことから、つぎのような問いが提出されたのであった。すなわち、なにゆえ悪しき者や忘恩の徒が、かかる恩恵にあずかりえたのであるか、そして、なにゆえ敵対心をもってなされた戦争の不幸が、敬虔な者にも不敬虔な者にも等しくふりかかってきたのであるかという問いである。このような問いは、いっそう広い領域にわたるものであって、それというのも、日常的な生にあって、神の賜物と人間の不幸とが悪しき者と善き者とのあいだに区別なく、しばしば人びとの上に加えられてくるのを見て、多くの人が動揺するからであって、わたしは、着手されたこの仕事の必要に応じて、この問題に答えるべく立ち入ったのであった。しかし、とくにわたしは、羞恥心が敵によって苦痛をうけた——貞潔さは汚されないで残ったけれど——信心深く貞節な婦人たちを慰めようとしたのであって、かの女たちは、そのことに後悔すべき理由をもっておらず、その生を悔いることのないためであった。

ついで、わたしは、あの災禍をこうむったキリスト者たちを、とりわけ、貞潔で信仰深くあるにもかかわらず、そのつつましやかな貞潔が損われたところの婦人たちを、厚顔無恥な行為により苦しめる者たちに短く語ったのであった。かれらこそは、あのローマ人たち——多くの卓越した行為によって賞賛され、歴史家の記録によって称揚されている——からは隔たり、退化した不敬の後裔であって、その栄光にたいしてははなはだしく敵対する者たちなのである。かれらは、先人たちの労苦によって創られ、強大にされたローマを、それが倒壊したときよりも、そびえ立っているあいだに、いっそう醜いものとしたのであって、（この都市が倒壊したときは）ただ石材と角材が崩れ去ったのであるが、かれらの卑しむべき生活にあっては、すべてのも

のが崩れ去り、その情欲に燃える心は、都の家々の屋根をなめつくして燃えた火よりもはげしいものとなったので、たんに城壁の防塁や飾り物が打ち砕かれただけでなく、道徳の防塁や飾り物も打ち砕かれたのであった。

以上のことを述べて、わたしは第一巻を終えたのである。したがって、わたしは続いて、この国が、その始めよりこうむってきた災禍について――それが、この国自身のもとでおこったものであれ、この国に従属する領土においておこったものであれ――語ろうと思うのである。もしもその当時に、むなしく虚偽なる神々に対して福音の教えが証言によって明らかに知らされていたとしても、かれらは、これらすべての災禍を、キリスト教信仰のせいにしたことであろう。

第三章

キリスト教信仰が明らかとなるより前に、どのような災禍が、神々の礼拝とともにローマ人をおそったのかということを見るため、歴史を顧るべきである

しかし、このようなことを、わたしは無学な人たちにむかって語っているのだということを考えてほしいのである。かれらは、その無知から、「雨が降らない。それはキリスト教のせいだ」などという一般に流布された言い伝えを生み出しているほどである。じっさい、かれらの

うちには、自由な学科を身につけ歴史を愛する者たちもあって、(わたしが述べるような)ことを承知しているのであるが、しかし、その者たちは、わたしたちに敵対する無学な大衆にたいして穏かでない混乱をもたらせるために、自己の知識を隠して無知を装い、一定の場所と時期に人類がこうむらねばならない災禍が、自分たちの神々に逆らって広く伝えられあまねく知れわたっているキリストの御名のせいであるということを、大衆のもとに信じさせようと骨折っているのである。

それゆえ、かれらはわたしたちとともに思い出してみるがよいであろう。——キリストが肉のうちに来られる以前に、そして、かれらがいたずらに妬んでいるところのあの栄光により、その御名が諸民族のあいだに知られるようになる以前に、どのような災禍によってローマの繁栄が幾度も、さまざまなしかたで砕かれたことかということを。そしてその崇拝者たちが、このような不幸をこうむらないためには神々が崇められるべきであると思うのなら——もしもかれらができるのなら——神々を弁護してみるがよいであろう。それらの不幸のうちのあるものが、いま、かれらの上にふりかかってくるなら、かれらはそのことをわたしたちのせいにするであろう。キリストの御名が公けに知らされたことがかれらの感情を害し、そして、(神々への)犠牲を妨げることになったのであるが、しかしそれ以前に、これらの神々は、わたしが語ろうとしている災禍をその崇拝者たちがこうむることを許容したのは何ゆえなのであるか。

第四章

神々の崇拝者は、その神々から健全な道徳の掟をけっして受けとることがなく、また、その祭祀においては、さまざまな不純な行為がなされた

なによりもまず、わたしたちは、かれらの神々が、なにゆえはなはだしく悪しき道徳から、かれらを護ろうとしなかったのであるかということを問わなければならない。じっさい、真の神が、その神を崇めない者たちをかえりみなかったのは当然のことであろう。しかし、かれらの神々は——これら忘恩の徒は、これらの神々にたいする崇拝が妨げられていることをつぶやいているのであるが——自分を崇拝する者を、善き生へと導くために掟をもって助けなかったのは、なにゆえであるか。これらの者たちが、(神々の)祭祀のために配慮したと同じように、神々もまた、その崇拝者たちのために配慮するのが当然ではないであろうか。しかし、すべての人は、その人の意志によって悪しき者であると答えられるのである。だれがこのことを否定するであろうか。にもかかわらず、崇拝者たちにたいして、善き生へ導く掟を、隠すことなく明らかに告げ知らせることは、保護者としての神々が当然なすべきことがらであった。すなわち、預言者を派遣することによって(人びとに)呼びかけ、罪を犯す者を咎め、悪事をなす者には、罰が課せられることを公けに知らせてかれらに迫り、また、義しく生きる者たちにはその報いを約束するということは、神々の(当然)なすべきことがらなのである。

かつて、なにかこのようなことが、かれらの神々の聖所において、あからさまに、そして、はっきりと耳に聞きとれる声で知らされたことがあるであろうか。わたしたちも若かったとき、神性を汚すような見世物や余興を見に行ったことであった。(一) わたしたちは、熱狂する人たちを見、合唱を聞き、男神たちや女神たち、そして処女神カェレスティス(二)および神々の母ベレキュンティア(三)にむかって演ぜられるまったく恥ずべき娯楽によって、楽しませられたことであった。とくに、ベレキュンティアが(清めの)入浴を祭る日(四)には、その寝椅子の前で、浅ましい役者たちによって淫らな歌が大っぴらに歌われたのであるが、それは、聞く耳にどれほど不潔なものであったろうか――わたしがいっているのは神々の母のことではなく、だれか元老院議員の母親、あるいは礼儀をわきまえた男たちの母親のことなのである。いや、それどころか、あの役者たちの母親でさえ、聞くにふさわしくないものであった。それというのも、(すべての人間には)品性の邪悪さによって根絶されることのできないところの両親にたいするある種の(生得的な)内気さがそなわっているからなのである。

したがって、役者たち自身が、自宅で自分の母親の面前で、あの不道徳で破廉恥な言葉と演技の下稽古をするときには、恥ずかしい気持のするものであったことであろう。けれども、かれらは、それらのことを神々の母と男女の沢山の群衆の目と耳の前で公然となすのである。かれらは、好奇心の誘惑によってあちこちから押しかけてきても、すくなくとも羞恥心を傷つけられて(そこから)たち去っていかねばならなかったことであろう。

これが神聖であるとするなら、冒瀆とはなんであるか。これが(清めの)入浴であるとするな

ら、汚れとはなんであるか。そして、このことは「皿」(五)と呼ばれているのである。すなわち饗宴のようなものなのであって、それによって、いわば汚れた悪霊たちが、自分の好みの料理を食するのである。じっさい、どのような霊がこのような淫らなことを喜ぶのかということに気付かぬ者があるであろうか。それに気付かぬ者は、概して、神々の名によって(人々を)欺く汚れた霊が存在するということを知らない者であるか、そうでなければ、真の神よりもむしろそのようなもの(悪霊)を慈悲深い保護者であると見なしている者であるか、あるいは敵として恐れる者であるかであろう。

(一) アウグスティヌス『告白』三の二参照。
(二) 処女神カェレスティスは、アフリカ――とくにカルタゴ――において礼拝された異教神である(テルトゥリアヌス『護教論』二四参照)。アウグスティヌスは本巻第二十六章においてもこの神について触れている。
(三) 神々の母ベレキュンティアは、フリジアの女神キュベレの別名である。
(四) キュベレの像がローマに持ち込まれたのは(本書第一巻第三十章(注)一参照)、四月十三日の前日であって、その日が祭日として毎年、ローマからほど遠くないティベル河支流のアルモン河の流れにおいて洗われたものとおもわれる(リウィウス『歴史』二九の一一)。
(五) ferculaというラテン語を、アウグスティヌスは二とおりの意味にかけている。一つは、神々の像を運ぶための「運び台」であり、他は、料理を盛るための「皿」である。

第五章

神々の母のためにその崇拝者たちが、行った卑猥な祭礼について

もっとも恥ずべき慣習の悪徳に反対するどころか、むしろそれを好んで楽しもうとする人びとではなく、あの元老院によって、もっとも有徳なひととして選ばれ、ほかならぬあのダエモンの像をその手に受けて、ローマにもたらしたナシカ・スキピオそのひとを、わたしは、この問題についての審判者としたい。そうすれば、かれはわたしたちに、その母が神の栄誉を認められるほど、国家に大きな功績があったことを望むかどうかを語ってくれるであろう。よく知られているように、ギリシア人もローマ人も、また他の民族も、かれらに与えた恩恵が大きかったと考えた可死的な人間のあるものに、そのような栄誉を与えて、不死的なものとなし、神神の列に加えたと信じていた。もちろん、スキピオは、そのような大きな幸福が、そうすることができれば自分の母に与えられることを望むであろう。しかし、さらに立ち入って、その母に与えられる栄誉のうちに、あのような汚れた祭礼が加えられることを欲するかと問うなら、どうであろうか。かれは、自分の母が女神として生きて、そのような汚れたことに喜んで耳をかすよりも、むしろ感覚がなく死んでよこたわっているのを欲すると明言しないだろうか。その市民の剛勇をもってきこえるローマの都に、劇場を建設することを禁じたような精神をそなえた、ローマ人民の元老院議員が、一婦人としても、その言葉を聞くに耐えないような祭礼を

もって、女神でありながら、なだめられるような仕方で、かれの母があがめられることを欲するとは、けっして考えられない。また、スキピオは、婦人のほむべきつつしみぶかさが、かの女が神となることによって、まったく正反対のものとなってしまったので、かの女が人間のうちに生きているうちに、それらがだれに罵りの言葉として放たれようとも、かの女が耳をふさいで立ち去らないなら、身内のものも夫も子も、かの女のために顔を赤らめるような賛辞によってその崇拝者たちが、かの女を呼びとめるというようなことは信じないであろう。

そういうわけで、どんな極悪な人間でさえも、自分の母とすることを恥じるような、この神神の母は、ローマ人の心をとりことしようとして、もっともすぐれたひとを探し求めたのであるが、しかし、それは、助言と援助によって、善ならしめようとしたのではなく、虚言によって欺こうとしたのであって、かの女は、聖書に「みだらな女はひとの尊い命を求める」(一)といわれているところの女に似ている。すなわち、かの女は、かのすぐれた資質の精神が、この神的な証言によって思い上って、自分をほんとうに、もっともすぐれたものと考え、真の敬虔と信仰を求めなくなるようにしようと考えたのであるが、それがなければ、どんなにすぐれた天賦の才能も奢りのために空しくなって消え失せるのである。それゆえ、かの女神のもっともすぐれたひとを求めたのは、まったく悪だくみをもってであるといわなければならない。もっともすぐれたひとなら、自分らの饗宴にさえも催されることを嫌悪するようなことを、かの女神は自分の祭礼のさいに要求するのである。

(一)「箴言」六の二六。

第六章

異教徒の神々は、かつて正しく生きる教えを定めたことがなかった

このような考えからして、かの異教徒の神々は、かれらを崇拝する諸国と諸国民の生活や習俗を心にとめずに、あの身の毛のよだつほど恐ろしく、忌むべき悪をもって――しかも、田畑や葡萄（ぶどう）の木のものではなく、家屋敷や財宝のものではなく、それからまた、精神によって支配される身体のものでもなく、精神自体の、すなわち肉体の支配者にほかならぬ魂の悪をもって――かれらの生活や習俗を乱し、みずからこの上なく悪くなるがままにして、みずから恐ろしい禁止の手を下すことはない。もしもそれらの神々が、禁止していたのであるなら、それを見せてもらいたい。それを証明してもらいたい。といっても、ごく少数のものの耳へ吹き込まれ、密儀宗教といったようなものによって伝えられ、それによって正しく貞潔に生きることが学ばれるような、なんだかよく分からぬささやきをわたしたちに自慢してもらいたくはない。わたしたちに見せて、あるいは話してもらいたいのは、かつてそのような集会にささげられながら、役者の卑猥な言葉や仕草によって、演劇が行われたことがなく、また、あらゆる種類の汚らわしいことがおおっぴらに許されて、追放の祭り（いかにも追放の祭りであるが、しかしそれはつつしみと行儀との追放である）が行われることなく、神々が貪欲を抑え、野心をくじき、放縦をひきしめることについて、どんなことを命令するかを人民が聞き、ペルシウス[一]がつぎのよう

に語って、しきりに学ぶことを勧めていることを不幸な人びとが学ぶような場所である。――「不幸な人びとよ。もののよって起る原因を知るがよい。わたしたちはなんであるか。どんな生活を送るために、わたしたちは生れたのであるか。出発の順番はどうであるか。どうして、また、どこから、目標をまわるべきであるか。どれだけ金銭を持ってよいか。なにを望んでさしつかえないか。新鋳の貨幣はしまっておいてひとの役にたつか。国と身内のものにどれほどふるまうべきであるか。神はあなたがどんなものであるかを命じたか。また、あなたがたは、社会においてどんな地位におかれたか(二)」どんな場所でこのようなことを教える神々の誡命が読まれ、かれらを崇拝する人民によってしばしば聞かれるのがつねであったか――わたしたちは、キリスト教のひろまるところは、この目的のために教会が建てられていることを示すことができるのであるが――を、話してもらいたい。

(一)　ペルシウスは三四年から六二年。ローマの風刺詩人。
(二)　ペルシウス『風刺詩』三の六六―七二。

第七章

哲学者たちの思弁も神的権威なしには無効であって、悪に傾くものはみな、人間の論ずることよりも、神々のなすことに従う

それとも、異教徒たちは、哲学者たちの学派や議論を想起させようとするのであるか。まず、第一に、それらは、ローマのものではなくてギリシアのものである。また、ギリシアもローマの属領となってから、もうローマのものであるとしても、神々の誡命ではなく、人間の考え出したものであって、それらの人間は、もっとも鋭い知力を恵まれたものとして、事物の本性のうちになにがかくれているか、習俗のうちなにを求め、なにを避けるべきか、また、推理の法則そのものに関して、なにが確実な推論によって導き出されるか、また、なにが整合的でないか、いや、矛盾しているかを、理性の力によってなんとかきわめようとした。

そして、かれらのうちのあるものは、神の援助を受けたかぎり、偉大な発見をしながら、しかも人間としての制限のために妨げられて、過誤に陥ったが、それはまったく、かれらの傲慢がまことに当然のことながら、神の推理によって抑えられたからであって、神の摂理は、敬虔の道が謙虚から出発してもっとも高いものに上って行くことを、かれらの没落の例によっても示そうとされたのである。そのことについては、真の主なる、神の御意に従ってのちにくわしく探究し、論議する機会があるであろう。(二)

それはとにかく、もしも哲学者たちがよき生活を送り、浄福の生を得るのに十分であるようなものを発見したとするなら、むしろ、そのような哲学者たちに神の栄誉を認める方がどんなに正しいことだろう。プラトンをまつる神殿において、プラトンの書を読む方が、ダエモンをまつる神殿において、キュベレに仕えるガルス[二]たちが去勢され、宦官が聖職につき、狂信者たちが不具にされ、そのほかあらゆる残忍な、あるいは汚らわしい、あるいは汚らわしくて残忍な、あるいは残忍で汚らわしい事柄がそのような神々の祭事に行われるよりもどんなに立派ですぐれていることだろう。若者を正義によって教化するためには、神々の律法を公けに奉読する方が、先祖の法律や慣習をいたずらに賞賛するよりも、どんなに適切であったろう。じっさい、そのような神々の崇拝者たちは、ペルシウスのうたっているように「焼けつくような毒にそまった情欲[三]」にかりたてるやいなや、プラトンが教えたり、あるいはカトが考えたりしたことよりもユピテルのしたことに目をとめるのである。このようにして、テレンティウス[四]によると、不品行な青年が壁にえがかれたある絵を見るのであるが、

「そこにえがかれていたのは、ユピテルがかつて黄金の雨をダナエのひざに降らしたという伝えられる状景である」

そして青年は、このような偉大な権威から自分の汚らわしい行為の弁護を得て来て、そのような行為をしながら、自分は神をまねているのだと広言するのである。

「しかし、かれがまねているというのは、どんな神だろうか」

と青年はいう。

「それは、高い雷鳴をもって天空の殿堂をふるわせる神である。わたしは若小な人間でありながら、それをしてはならぬであろうか。いや、わたしはそれを、しかも思う存分した(五)」

と青年はいっている。

(一) 本書第八巻より第十二巻までにおいて論ぜられる。

(二) ガルスは女神キュベレの祭司たちのこと。ガラティアのガルス河の名からこのように呼ばれた。というのは、かれらが飲んだその川の水が、かれらに酔狂の興奮をもたらせたからであった(オウィディウス『歴詩』四の三六一―六)。

(三) ペルシウス『風刺詩』三の三六、三七。

(四) テレンティウスは前一九五年から前一五九年。ローマの喜劇詩人。

(五) テレンティウス『宦官』三の五、三六、三七、四二、四三。

第八章

演劇において、神々は、その恥ずべき行いを見せられながら、怒らずにかえってなだめられる

とはいうものの、そのような淫らなことは、神々の祭りによってではなく、詩人たちのつくり話によって伝えられたものだと反対するものがあるかもしれない。わたしも、かの密儀の方

がこの演劇よりもなお汚らわしいと主張しようとは思わない。わたしが主張するのはこうである。すなわち、それを否定する人びとは、歴史によって論破されるのであるが、詩人たちのつくりごとを主としているあの演劇は、ローマ人がその盲目的な恭順の念から、かれらの神々の祭礼に加えたものではなく、神々自身が自分らのためにおごそかに演じられ、その栄誉のために捧げられるように、きびしく命じ、いわば強制して演じられるようにしたものであって、このことはすでに第一巻において簡単に触れておいた通りである。(二)すなわち、疫病がはげしくなったとき演劇は大司祭たちの権威によってローマではじめて行われるようになったのであった。そういうわけであったから、この世に生きていくのに、人間の考えによって公布された法律に定められているところのことによりも、神の権威によって創始された演劇でいつも演じられているところのことに、従わねばならぬと考えないものがあろうか。もしも詩人たちがユピテルを姦淫者としてえがいたのが虚偽であったなら、貞潔な神々はそのような不法なことが、人間のつくりごとによって演じられたことを――演じられなかったことではなく――怒って、こらしめたはずである。ところで、このようなものは、演劇のうちではまだしも耐えられるもの、すなわち、喜劇や悲劇である。それらは詩人たちの舞台で上演されるべき脚本であって、内容は恥ずかしいところが多いが、しかし、すくなくとも、言葉は、他の多くの見世物のように卑猥なところがすこしもないようにつくられている。そしてそれらは、いわゆる自由人にふさわしい立派な科目にさえも加えられ、それを読み学ぶことを少年たちは大人たちによって強いられているのである。

（一）本書第一巻第三十二章参照。

第九章

ギリシア人は、神々の裁断に従って、詩人の表現の自由を無制限に認めようとしたが、むかしのローマ人は、それを制限することについてどう考えたか

さて、この問題について、むかしのローマ人がどう考えたかは、キケロがその国家について論じた書において証言しているが、そのなかでスキピオが対談者として、「喜劇はもしもその時代の生活慣習が許さなかったなら、その恥ずべき演技を観衆の気にいるようにすることはできなかったろう」といっている。(一) じっさい、それよりもなおむかしのギリシア人もまた、かれらのまちがった考え方をいわば忠実に守ったのであって、かれらのあいだでは、喜劇は、そのあてこすろうと思うことを、だれについてであろうと、名指しであてこすることを、法律によってさえ認められていた。したがって、上にあげた『国家論』のなかで、スキピオ・アフリカヌスがいっているように、「喜劇があてこすらなかったものがあるか、というよりも喜劇がなやまさなかったものがあるか、容赦したものがあるか。それが、不誠実な煽動か、反逆的な政治家クレオン、クレオフォン、ヒュペルボルス(二)をやっつけたことは事実である」。アフリカヌスのいうように、「この種の市民は、詩人によって摘発されるよりも、むしろ監察官によって摘

発される方がふさわしいのであるが、それはがまんすることにしよう。しかし、あのペリクレスを、もっとも偉大な権威をもって、すでに多年のあいだ、内治においても外戦においても、その国家を支配していた政治家を、詩句をもって傷付け、その詩句を舞台で演ずるということは」アフリカヌスによると、「わがローマのプラウトゥス[三]や、ナェウィウス[四]がププリウス・スキピオとグナェウス・スキピオをそしったり、あるいは、カェキリウス[五]がマルクス・カト[六]を中傷したりしようとするのと同じようにふさわしくないことであったろう」。また、それからのちにいっているように「ギリシアのばあいとは反対に、ローマの十二表法は、ごく少数の罪だけしか死に当るものと定めていなかったのに、もしも、他人の名誉を傷付け、あるいは侮辱するような詩や歌をつくるものがあるなら、それはまさに死に当る罪だと考えていた。これはじつにりっぱな規則であった。というのは、わたしたちは自分の生活を当局者の裁定と適法な審理にゆだねるべきであって、詩人たちの才智にゆだねるべきではなく、またわたしたちに対する誹謗は裁判において弁護できることが法によって定められていないかぎり、受けるべきではない」。以上は、キケロの『国家論』第四巻からとったもので、わたしは逐語的に引用せねばならぬと考えたのであるが、しかし、いっそうわかりやすくするために、省略したり、すこし手を加えたところもある。じっさい、この引用は、わたしができれば説明しようと思っていることに大きな関係をもっている。なおキケロはその他のことを述べたのち、この箇所の最後に、むかしのローマ人は、どんな人物であろうと、現存しているものが舞台の上で賞賛されたり、非難されたりすることを好まなかったことを明らかにしている。ところが、ギリシア人の方は、

わたしが上にもいったとおり、ローマ人よりもつつしみを知らぬものであったが、その立場をいっそう忠実に守って、そのようなことを認めようとした。というのは、かれらは、ただ人間のものだけではなく、神々自身のものでさえも、その名誉を傷付けるようなことが劇において演じられるようなことは、神々を喜ばし、その気に入る——そしてそれらのことが、詩人によってつくられたものであろうと、神々自身の真実の恥ずべき行為が語り伝えられて、劇場においてその崇拝者たちによって演じられ、そしてたとえ、まねるねうちがあると考えられなくとも、笑われるねうちがあると考えられたらよい——ということを心得ていたからである。じっさい、神々がその名声を大事にすることを欲していなかったときに、国家の指導者や市民の名誉を大事にするということは、はなはだしい驕慢の沙汰であった。

(一)　キケロ『国家論』四の一〇の三三。
(二)　クレオン、クレオフォン、ヒュペルボルスはアテネの煽動政治家。アリストファネスの劇で攻撃の対象とされた。
(三)　プラウトゥスは前二五四年頃から前一八四年。ローマの喜劇作家。
(四)　ナェウィウスは前二七〇年頃から前二〇一年頃。ローマの詩人・劇作家。
(五)　カェキリウスは生年不詳、前一六八年歿。ローマの喜劇詩人。
(六)　このカトは、コンソリウス・マルクス・カト(大カト)のことである。大カトは前二三四年から前一四九年。ローマの執政官監察官などをつとめた(プルタルコス『英雄伝——大カト』参照)。

第十章

どんな悪だくみをもってもダエモンは、虚偽のものであろうと真実のものであろうと、自分の罪を語られることを欲するのであるか

すなわち、神々に対する弁護として、上のような神々に帰せられていることがらは、真実のものではなく、虚偽のものであるといわれるが、そのこと自体は宗教の敬虔を考えてみるとき、なおいっそう極悪である。しかし、ダエモンの悪意を考えてみるとき、それほど欺くことにたくみで抜目のないものがあろうか。すなわち、国家の立派で有能な指導者に醜聞が帰せられるとき、それは、真実からかけはなれていて、当人の生活にかかわりのないものであるほどますます不名誉なものではなかろうか。したがって、上に述べたようなじつにひどく、またじっさいにいちじるしい不法なことが神に加えられるとき、いったいどんな刑罰をもってしたら十分であろうか。ところが、人びとが神としてあがめる悪しき霊は、自分が犯さなかった恥ずべき行為をも自分の身について語られるのを欲するのであるが、しかしそれは、悪しき霊がこのような評判を綱（つな）として、それに人間の精神をからませ、予定された刑罰にわが身とともにひきずっていこうとするのである。それらの恥ずべき行為は、人間がじっさいに行ったものであって、人間の過ちを喜ぶもの、すなわち、悪しき生がそのような過ちを犯す人間が神としてあがめられることを喜び、そのような人間にかわって自分があがめられようと、無数の有害で欺瞞的な

術策によってわりこむこともあれば、あるいはまた、それらの行為がどんな人間によっても現実に犯されたものでないにもかかわらず、もっとも欺瞞的な霊は、それらの行為が神々についてつくりごととされることを喜んで承認し、そして極悪非道な行為を認めるのに十分な権威が、いわば天上からこの地上に引きおろされたかのようにみせかけようとすることもある。そういうわけで、ギリシア人は、そのような神々の僕であると考えていたから、そのように多くのはなはだしい恥辱が舞台の上で神々に加えられているのに、自分らが詩人たちによって容赦されねばならぬとはけっして考えなかったのであるが、それは、かれらがそのようにしてまでも、そのあがめる神々の同類になろうとしたからか、それとも、神々よりも品行がよいという評判を求め、そして自分を神々よりも立派なものと考えることによって、神々を怒らしはしないかとおそれたからか、そのいずれかである。

第十一章

ギリシア人のあいだでは、役者は国家の役人に選ばれたが、それは神々をなだめるものが不当にも人間によって軽蔑されることがないようにするためであった

このような首尾一貫した考え方を示すものとして、ギリシア人は、上に述べたような作品を舞台で演じる役者を、国家からけっしてささやかでない栄誉を受けるべきものであると考えて

いた。じっさい、これもまた、上にあげた『国家論』において語られていることであるが、(一)もっとも雄弁であったアテナイ人アエスキネスは、青年時代悲劇役者をつとめたのち、政治界に入り、アリストデムスは、かれもまた悲劇役者であったが、平時と戦時との重要な事件についての使節として、フィリップスのもとにアテナイ人によって派遣されたのであった。というのは、それらの芸術や演劇が神々によってさえも受け入れられるのをみながら、しかもそれらを演じる役者を、不名誉な仕事をする地位におとし、その仲間に数えることは矛盾しているように思われたからである。ギリシア人がこういうふうに考えたことは恥ずべきことであったが、しかし、かれらの神々にとってはまったくふさわしいことであった。すなわち、ギリシア人はかれらの市民的生活が、詩人や役者の口によって罵られるのをあえて防ごうとしなかったが、かれらは、神々の生活が外ならぬそれらの神々が欲し、喜ぶがゆえに、詩人や役者の口によってからかわれることを認めていた。そして、かれらがその信服する神々にとって喜ばしいものと認めていたところのことを舞台で演ずる役者は、国家においてけっして軽蔑すべきではなく、もっとも尊敬せねばならぬと考えたのである。じっさい、かれらが、神々の喜ぶような犠牲を、その手を通じてささげていたゆえに司祭を尊敬しながら、上にいったような神々を喜ばし、あるいはあがめるものを、その仕草によって――それを求め、もしも怠れば怒る神々のために――催すことを司祭の注意によって、学び知っていた役者を非難すべきものと考えるどんな理由を見出すことができるであろうか。とくに、このようなことがらに、もっともよく通じているとほめられているラベオ(二)は、善き神々と悪しき神々をその礼拝の仕方の相違によっても区別

して、悪しき神々が血なまぐさい犠牲や、かなしげな祈願によってなだめられるのに対して、善き神々は楽しく愉快なお祭りによって、たとえば、ラベオのあげる例によると、芝居や饗宴やお供えによってなだめられるといっている。こういうことがいったいどういう意味をもっているかは、後に、神の助けを得てもっとくわしく論じることにしよう。さしあたって、当面の問題に関係のあることとして、あらゆる祭礼があらゆる神々のために、あらゆる神々が善であるかのように(というのは、神々が悪であるということはふさわしくないことである。じっさい、それらの神々は、不浄な霊であるから、すべて悪なのである)無差別にとり行われるにせよ、あるいはラベオが考えたように、どの神のためにはどの祭礼がというふうに区別してとり行われるにせよ、ギリシア人は両者を、すなわち、その手によって犠牲を供する祭りをも、また芝居を演じる役者をも尊敬すべきものと考えているのは、まったく正当であって、ギリシア人はそうすることによって、善き神々だけではなく、すべての神々が演劇をよろこぶばあい、すべての神々に対して不都合をはたらくことのないように、また、これはなおさらふさわしくないことであるが、かれらが善き神々であると考えるもののみが、演劇を好むばあい、それらの神々に対して不都合をはたらくという罪を問われることを免れようとするのである。

(一) キケロ『国家論』四の一一の三五。

(二) ラベオという名は、ローマ史のなかに数人出てくるが、ここでは、アンティスティウス・ラベオを指しているとみられる。ラベオは前五四年から後一七年、ローマの法律家であった。

第十二章

ローマ人は、詩人たちに、神々を攻撃する自由を認めながら、人間に対しては認めないことによって、その崇拝する神々よりも自分をまさったものと考えた

ところがローマ人は、上にあげた『国家論』のなかでスキピオが誇っているように、かれらの生活と名声を詩人たちの非難と侮辱にゆだねることを欲せず、そのような詩をつくることをあえてするものがあるなら、それはまさに死に当る罪であると考えた。このように定めたことは、ローマ人自身に対しては、なるほど立派なことであったが、しかし、かれらの神々に対しては傲慢で不敬なことであった。すなわち、ローマ人は、神々が詩人たちの非難と悪口によって侮辱されることをただ耐えしのぶだけではなく、それを喜ぶことを承知していて、神々よりもむしろ自分らの方がそのような侮辱をこうむることを不当だと考え、法律によってまでも、それから自分を守ろうとしながら、そのようなことを神々の厳かな祭りのうちにさえ加えたのである。それでは、スキピオよ、あなたは、ローマの詩人があなたがたのどの神々をも容赦しなかったということを知っていながら、このように、ローマ人のうちのだれにも非難を加える自由を、ローマの詩人たちに認めなかったということをほんとうに賞賛するのであるか。それでは、あなたがたのクリア(一)の名声はカピトリウム(二)のそれよりも、いや、ローマ一都市の名声は天全体のそれよりも重んじなければならぬと考えるのか。詩人たちは、あなたの同胞市民に毒

舌をふるうことを法律によってさえも禁じられながら、あなたの信じる神々にあのようにはなはだしい悪口を放つことを、元老院議員によっても、監察官によっても、高官によっても、司祭によっても禁じられずに平気でしているではないか。たしかに、プラウトゥスや、ナェウィウスがプブリウス・スキピオとグナエウス・スキピオを誹謗したり、あるいはカェキリウス(三)がマルクス・カトを誹謗したりしながら、それはよからぬことであったが、あなたがたの詩人テレンティウス(四)がもっとも善良で偉大なユピテルの恥ずべき行為によって、青年たちの放埒（ほうらつ）を刺戟したなら、それは当然のことであった。

(一) クリアとは、元老院集会所のこと。
(二) カピトリウムは、ローマのユピテル神殿の建っている丘のこと。
(三) プラウトゥス、ナェウィウス、カェキリウスについては、本巻第九章(注)三、四、五参照。
(四) テレンティウスについては、本巻第七章(注)四参照。

第十三章

ローマ人は、恥ずべき演劇によってあがめられることを求めるかれらの神々が、神神としての栄誉を与えられるに価しないということを悟るべきであった

しかしながら、スキピオは、いまも生きているなら、おそらくこう答えるであろう。——ど

うしてわたしたちは、神々自身が祭事として定めたところのものを、罪を免れないものとすることができるであろうか。神々自身が、そのようなことの演じられ、語られ、とり行われる演劇をローマの習俗にうつしいれ、そして神々の名誉のためにささげられ、催されることを命じたのであるからと。――それではなにゆえ、そのことによって、それらの神々が真の神々ではなく、また、ローマの国家から神々としての栄誉を与えられるにまったく価しないということが理解されないのであるか。じっさい、それらの神々は、ローマ人を非難するために演劇を行うことを要求するなら、まったく崇拝に価しないものであり、また、まったく崇拝してはならぬものであろうが、わたしたちを欺こうとする欲望から、その与えられる名誉の一つとして、自分の罪が演じられることをしきりに求めたところのものが、どうして崇拝に価すると考えられるであろうか。どうして嫌悪すべきものであることが理解されないのであろうか。なおまた、ローマ人は、有害な迷信のとりことなって、かれらの知っていたとおり、恥ずべき演劇が自分のためにささげることを欲するような神々を崇拝していたけれども、しかし、それにもかかわらず、自分の威厳として恥を忘れずに、そのような恥ずべき筋のものを演じる役者を、ギリシア人のように尊敬するようなことはけっしてなく、キケロの作品において、例のスキピオがいっているように(二)、「ローマ人は喜劇をも、また演劇一般をも非難すべきものと考えていたので、そういう階級の人間はただ一般市民の名誉を与えられないばかりでなく、なおその上に、監察官の摘発によって、氏族から除かれることに定めていた(三)」。たしかにそれは、すぐれた、ローマ人の名誉の一つに数えられるべき思慮であるが、しかしわたしは、それがもっと徹底して、

首尾一貫していたらよかったと思う。すなわち、まったく当然のこととして、ローマ市民のうち、みずから進んで役者となったものはだれでも、ただ名誉ある地位につくことができなかっただけではなく、なおその上に、監察官の摘発によって、自分自身の氏族にとどまることも許されなかった。じつに国家の名を大切にする、まことにローマ的な精神である。しかし、わたしは、つぎのような疑問に答えてもらいたいと思う。——どんな一貫した理由によって演劇をする人間が、あらゆる名誉を与えられずにいながら、演劇が神々に対して与えられる名誉のうちに加えられているのであるか。ローマ人の特性は、長いあいだ、演劇というようなものを知らなかったのであって、(三)もしも演劇が人間の快楽をみたすために求められたとするなら、それはただ、人間の習俗の欠陥によって忍び込んだのであろう。ところがそのようなものを自分のために催すことを要求したのは神々自身であった。そうであるなら、その演技によって神々があがめられる役者はどうして排斥されるのであるか。また、そのような恥ずべき演劇をやらせるところのものをあがめながら、どうして厚顔にもそれを演ずる役者を摘発するのであるか。ギリシア人とローマ人とは、主張し合ってその結着をつけるがよい。ギリシア人は、演劇を要求する神々をあがめるのであるから、それを演じるところの人びとを尊敬するのは正しいことだと考える。ところが、ローマ人は、それを演じる人びとによって、平民の氏族が——まして元老院議員が——その名を恥ずかしめられることを許さない。この討論において、問題の要点はつぎのような推論によってまとめられる。すなわち、ギリシア人は、大前提として、もしもそのような神々が崇拝されるべきであるなら、そのような人びともまた尊敬されるべきである

という。それに対して、ローマ人は、小前提として、そのような人びとはけっして尊敬されるべきでないという。そしてキリスト者は、結論として、それゆえ、そのような神々はけっして崇拝されるべきでないというのである。

(一) キケロ『国家論』四の一〇の三二。

(二) ローマにおいて、役者は市民と見なされなかった。かれらは氏族の一員として登録されなかったのである。もしもローマ市民が演劇の舞台に立ったばあい、アウグスティヌスが述べているように、監察官によって氏族の名簿から削除された(リウィウス『歴史』七の二)。

(三) リウィウスの計算によれば、演劇は、前三六四年まではローマに導入されていなかったようである(同上)。

第十四章

プラトンは、かれが考えた理想国においては、詩人たちにどんな地位をも認めず、演劇によってあがめられようとした神々よりもまさっていた

つぎに、こういうことを考えてみなければならない。すなわち、このような戯曲を書いた詩人たち自身は、十二表法によって、市民の名声を傷つけることを禁じられているのに、あのように神々に対して不名誉な罵詈雑言(ばりぞうごん)をあびせかけながら、どういうわけで、役者たちのように卑しむべきものと考えられないのであるか。また、どのような理由によって、詩人の仮作やも

っとも不名誉な神々の仕業を演じるものが恥ずかしめられながら、それらのものの作者が尊敬されることが正しいのであるか。わたしたちは、むしろ、国家がどのようなものであるべきかを理性的に考えて、詩人をいわば真理の敵として、都市から追放せねばならぬと考えたギリシア人プラトンに軍配をあげねばならぬのではなかろうか。（一）かれはじっさい、神々に加えられた侮辱に耐えることができず、また市民の心が詩人の仮作によって汚され、傷められることを欲しなかったのである。さて、ただの人間でありながら、市民を欺くことのないように、詩人たちを都市から追放するプラトンと、神々でありながら、自身の名誉のために、演劇を求めてやまない神々とを比べてみよ。プラトンは、そのようなものを書くことさえも――その説によっては説得することはできなかったが――軽薄でわがままなギリシア人に差し控えさせたのに、ローマの神々は、そのようなものが演じられることさえをも、重厚でつつしみ深いローマ人に命令して強要した。なおその上に、神々は、それらのものが演じられることを求めただけではなく、自分らのために献上され、奉納され、おごそかにとり行われることを求めた。いったい、どちらに、国家は神としての名誉を認めるのが正しいのであるか。そのような汚らわしい忌むべきことを禁じるプラトンであろうか、それとも、プラトンの説いた真理に耳を傾けなかった人びとを、このように欺いて喜ぶダエモンにであるか。

ラベオ（二）は、このプラトンをヘルクレスや、ロムルスのように、半神のうちに数えられるべきものであると考えた。ところで、かれは、半神を英雄よりもまさっているものとしているが、しかし両者とも神的なもののうちに数えている。しかしそれにもかかわらず、かれ（ラベオ）が

ちはギリシアの神々について、あのようなことを敢えて作りあげたのであるから、その神々自身よりもまさったものと考えられねばならぬことを、わたしは疑わない。ところで、ローマの法律は、プラトンの説に近いのであって、プラトンがあらゆる詩的仮作を非とするのに対して、ローマの法律は、詩人たちに、すくなくとも、人びとを誹謗する理由を認めない。また、プラトンが詩人たちに、都市に住むことを許さないのに対して、ローマ人はすくなくとも、詩的仮作を演ずる役者に、市民の仲間となることを認めず、もしも演劇を求めてやまない神々を恐れ憚かることがないなら、おそらく役者をまったく追放してしまうであろう。

したがって、ローマ人は、かれらの神々から、善き習俗を定め、あるいは悪しき習俗を正す法を授けられることはできず、また、それを期待することもできないのであって、ローマ人は、その法によって、かれらの神々を克服し、告発しているわけである。すなわち、かれらの神々が自分の名誉のために、演劇を要求するのに対して、ローマ人は演劇にたずさわるものをあらゆる名誉ある地位につけなくし、また、神々がその不名誉となるものが詩的仮作によって自分たちのために、演じられることを命令するのに対して、ローマ人は、詩人が恥知らずにも、人びとの不名誉となるようなものを書くことのないようにしているのである。さて、あの半神なるプラトンは、ただ、そのような神々の邪欲に従わなかっただけではなく、ローマ人がそのすぐれた天分をもってなしとげるべきことを示した。すなわち、プラトンは、詩人たちが――その思うままに虚偽を語るものであろうと、あるいは、あわれな人間に、あたかも神々の行いであるかのように、もっとも悪い例を示して見せるものであろうと――その考えた理想国家に生き

ることを許さなかった。もちろん、わたしたちキリスト者は、プラトンを神とも半神ともよばない。また、最高神の聖なる天使とも、真理を語る預言者とも、使徒とも、どんな殉教者とも、どんなキリストの教えを奉ずるひとともなぞらえはしない。わたしたちが、このように考える理由は、神の援助を得て、しかるべき機会に説明されるであろう。わたしたちが、このように考えるにもかかわらず、かれら自身が半神であったと主張するのであるから、わたしたちはプラトンを、ロムルスやヘルクレスよりもまさったものと考えなくとも(プラトンが兄弟を殺したとか、ある恥ずべき罪を犯したとか語ったり、作りごとをいったりしている歴史家や詩人はないが)すくなくとも、プリアプスや、[三]キュノケファルスや、[四]あるいはまたフェブリス[五]よりもまさったものと考えるのである(それらの神々のうち、あるものはローマ人が外国から受け入れたものであり、他のものは、固有のものとしてまつったのである)。そうであるなら、どうしてそのような神々が、そのようにはなはだしい、精神と習俗との悪を、善き命令と法律によってそれがまさにおころうとするときには防止し、あるいは植えつけられたときには根絶しようと考えるであろうか。そのような神々は、そうしないだけではなく、なおその上に、恥ずべき行いの種をまいて、それをはびこらそうと考え、自分自身の真実の、あるいはつくりごとの恥ずべき行いを、舞台の上で演じさせることによって人びとにしらせ、こうしていわば、神的な権威によって、元来、この上なく邪悪な人間の邪欲を燃えたたせようとするのであって、キケロが詩人たちについて論じて語った警告――「かれら(すなわち詩人たち)に、いわば偉大で賢明な教師である民衆の賛成の声が与えられるとき、かれらはどんな暗黒をうち拡げることだろ

うか。どんな恐怖を導き入れることだろうか、またどんな欲望を燃えたたせることだろうか」(六)——も、むなしいのである。

(一) プラトン『国家』三の三九八a、八の五六八b他参照。
(二) ラベオについては、本巻第十一章(注)二参照。
(三) プリアプスは肥沃の神である。とくに果樹園やぶどう園をつかさどるとされる。
(四) キュノケファルスはエジプトからローマへ導入された犬の頭をもつ神であった。
(五) フェブリスはローマの熱病の女神であって、帝国全域でまつられていた。ローマだけでも三つの神殿をもつ。
(六) キケロ『国家論』四の九の三〇。

第十五章

ローマ人がある神々を、神々だと定めたのは、理性的な根拠からではなく、こびへつらう心からであった

ところで、そのさい、たとえ虚偽の神々であっても、それらのものを選ぶどんな根拠があるのだろうか。根拠からよりもむしろ、こびへつらう心からではなかろうか。じっさい、人びとが半神だというプラトンは、あのように論議をつくして、とくに警戒せねばならぬ精神の疾患によって人間の習俗が腐敗しないように努力したのに、かれらはそのプラトンがささやかな神

殿を建てられるにふさわしいとも考えなかったにもかかわらず、かれら自身の先祖のロムルスは、かれらのいわば、秘教的な教えの示すところによると、神よりもむしろ半神であるのに、そのロムルスを多くの神々よりもまさったものと考えているのである。すなわち、人びともロムルスのために特別の司祭をおいていたのであるが、この種類の司祭はその三角僧帽が示すように、ローマの祭事においてひじょうに高い地位を占めていて、ただ、三神に三司祭[一]のみを、ユピテルにはディアリスの司祭を、マルスにはマルティアリスの司祭を、ロムルスにはクィンリヌスの司祭をおいていたのである。クィンリヌスの司祭とよばれるのは、ロムルスは、市民の好意によっていわば、天に迎えいれられ、その後、クィンリヌスとよばれたからである。[二] したがって、その名誉によって、ロムルスは、ユピテルの兄弟であるネプトゥヌスとプルトンよりも、またかれらの父であるサトゥルヌスよりもまさったものと考えられた。すなわち、その偉大さのゆえに、ユピテルに与えられていた司祭の職がロムルスにも与えられ、またかれの父としてのマルスにも、おそらくかれゆえに、与えられたのであろう。

(一) リウィウス『歴史』一の二〇。

(二) ロムルスがクィンリヌスと呼ばれて神格化されたことについては、オウィディウス『歴詩』二の四七五—八〇を参照。

第十六章

もしも、神々が正義を心にかけていたのなら、ローマ人は、外国人から法律を借りてくるよりも、むしろ、生活の規則を神々から受けるべきであった

もしもローマ人が、かれら自身の神々から生活の規則を受けることができたなら、かれらは、ローマ建国より数年ののちに、アテナイ人からソロンの法律を借りてくることはなかったであろう。(一) しかしながらローマ人は、それらの法律を受けとったままに保存せずに、それらを改善し改正しようと努力した。もっとも、リュクルグス(二)はラケダエモン人にアポロンの権威によって法律を制定したと称したが、ローマ人は賢明にもそれを信じようとせず、したがって、そこから法律をもってくることもなかった。ロムルスについで王位にのぼったヌマ・ポンピリウス(三)は、国家の統治のためにはけっして十分でないある法律をつくったといわれるが、かれはまた、法律によって多くの祭事を定めた。しかしそれにもかかわらず、それらの法律を神々から得たのだとは伝えられていない。そういうわけで、精神の禍悪、生活の禍悪、習俗の悪はまことにはなはだしいものがあるので、そのために、城壁はしっかりしていても、国家は滅びると、ローマ人のうち、もっとも学識のある人びとが断言しているのであるが、それらの禍悪が自分の崇拝者たちの身におこらないように、ローマ人の神々はすこしも気をつけず、いやむしろ、上に述べたように、それらの禍悪が増し加わることのみを念じたのである。

(一) 前四五四年、ローマの使者がアテナイに派遣された(リウィウス『歴史』三の三一、三三)。それは十二表法の前兆となった。

(二) リュクルグスは伝説的なスパルタの立法者である。前九世紀から八世紀頃に出て、国家の基本法を制定した。

(三) ヌマ・ポンピリウスはローマ第二代の王。伝承によれば、在位は前七一五年から前六七三年まで。かれは、各民族がローマにもち込んだ神々の序列を決め、祭司職を設け、職業によって市民を区分したとされる。

第十七章

サビナ婦人の強奪や、その他、ローマの国家に、その黄金時代にさえも、さかんにおこなわれた不法な行為について

したがって、守護神たちによってローマ人に法が与えられなかったことの理由を、わたしたちは、つぎのようなサルスティウスの言葉から見いだすことができるのではなかろうか。すなわち、「かれらのもとでは、正義も道徳も、自然の力によるほどには法の力によることはなかった(一)」のである。そこでわたしは、サビナ婦人たちを強奪したのは、(二)この(自然の力による)正義と道徳ゆえであったとおもうのである。じっさい、両親からなんの同意も得ることなく、他人の娘たちを、だれでもそれをしようとおもえばなしえた男たちによって奪い去るため、欺瞞的な見世物でおびき出す(三)ということ以上に、なにがより正義であり、より善であるというので

あろうか。もしも、(婦人たちの引渡しを)要求する者をサビナ人たちが拒否することをもって不正であるというのなら、引渡しをうけなかった婦人たちを男たちが強奪するということは、どれほどの大きな不正であったことであろうか。むしろ、結婚を求められたにもかかわらず、その娘たちを同郷人や隣国人に与えることを拒絶した人びとと戦うことのほうが、(力ずくで)奪われた娘を返還してくれるように要求した人びとと戦うことよりも、より正しいことではなかったろうか。そうしてこそ戦いが宣告されえたであろう。そのとき、マルスは、結婚を拒絶されたことの不当を軍の力をもって報復するために戦う自分の息子(ロムルス)を支援したことであろう。[四] こうして、自分がのぞんでいた婦人たちを得ることができたであろう。そして、おそらくは、戦いに定められた一種の権利によって、勝者は、不当にも自分を拒絶した婦人たちを連れ去ることができたのであろう。しかしながら、平和のどのような法によっても、(ロムルスは)自分を拒絶した婦人たちを連れ去ることなどできなかったはずである。また、正当にも激憤した親たちとの不正な戦いをおこなうことなどできなかったはずである。じっさい、競技の見世物が、この奸計を記念するために維持されたにもかかわらず、(ローマの)都と国家のなかで悪行のこの先例は好ましからざるものとしてうけいれられなかったことは有益であり幸運であった。(むしろ)ローマ人は、あの不正な行為をおこなってのち、自分たちのためにロムルスを神格化することによって、婦人たちを強奪した行為をなんらかの法や習慣によって模倣すべきこととして許容すること以上に、いっそう大きな誤りを犯したのであった。

さらに、つぎのことも、いま述べたような「正義と道徳」にもとづくものであろう。タルク

ィニウス王が、その息子たちとともに――その息子たちの一人がルクレティアを暴力によって汚し強奪したのであるが――追放されてのち、執政官ユニウス・ブルトゥスは、同僚であり潔白な男であったルクレティアの夫ルキウス・タルクィニウス・コルラティヌスを、かれがタルクィニウスという名をもち、また、その血を引いている者であるという理由から、強要して官職を辞させ、ローマ市から追放してしまったということである。この不正な事件は、人びとの賛意を得て――すくなくとも黙認されて――おこなわれたのであるが、しかし、そのコルラティヌスとブルトゥス自身を執政官の職につけたのは、(ほかならぬ)この人びとなのであった。(五)

マルクス・カミルス(六)のばあいも、このような「正義と道徳」から説明されるであろう。かれは、当時のひじょうに卓越した人物であった。ローマ人にとってもっとも手ごわい敵であったウェイの都市との十年間にわたる戦いののち――その戦いにおいては、ローマの軍はしばしば悪戦を強いられ、はなはだしい損害をこうむり、ローマ自身がすでに安全を危ぶみ、おののいていたときであったが――、かれは、そのもっとも富裕な都市を容易に征服し、奪取したのであった。ところが、かれの勇気を嫉む者の嫉妬心と護民官たちの高慢とが、かれを違法行為のかどで告訴したのであった。かれは、自分が救ったこの都市のあまりの忘恩ぶりと自分の有罪宣告が確実であることを知って自発的に亡命したのであるが、(この都市、すなわちローマは)さらに、かれを欠席裁判にかけて、銅貨一万アースの罰金をかれに課したのである。しかし、このことがあってまもなく、かれはふたたびこの忘恩の都市を救うことになった。このたびはガリア人からであった。

かの国(ローマ帝国)を騒乱のなかに捲き込んでいた恥ずべき、そして不正な行為の数々を枚挙するのも煩わしいことであろう。支配者たちは民衆を服従せしめようとしてやっきとなり、また、民衆はかれらに服従することを拒んでいたのであって、それは、いずれの側の代弁者も、なにが公正であり善であるかということを考えるよりも、自分たちの勝利を熱望することに精力を費していたときなのであった。

(一) サルスティウス『カティリナの陰謀』九。
(二) リウィウス『歴史』一の九。
(三) ロムルスは、コンスアリア(イタリアの古くからの神コンススからその名をとった)と称する祭典を導入した。そのほんとうのねらいは、サビナ人の娘たちをローマに魅きつけることであったとされる(同上)。
(四) 伝説によれば、ローマの創建者ロムルスは、軍神マルスの子とされる。
(五) リウィウス『歴史』一の六〇。
(六) マルクス・カミルスはローマの将軍であるが、前四〇六年から前三九六年までのウェイを攻めて陥落させた。カミルスについては、リウィウス『歴史』五の一九、およびプルタルコス『英雄伝――カミルス』参照。

第十八章

恐怖によって緊張していた時代と安全によって弛緩していた時代とのローマの習俗についてサルスティウスの『史書』があきらかにしていること

それゆえ、わたしはひとまず語ることをやめて、サルスティウス自身を証人としてよぼうと思うが、かれはわたしたちの論議の出発点となったローマ人の賛美のうちでこういっている。――「正義と道徳とは、かれらにあっては、法律によってではなく自然に行われていた[一]」といっているのは、諸王を追放したのち、ローマが短い期間に信じられないほど増大した時代をほめたことばであるが、しかし、そのサルスティウスは、かれの『史書』の第一巻に[二]、しかもそのはじめに、当時でさえも、政権が諸王から執政官に移ったとき、短い期間ののち、ローマには、権力者たちの不正や、またそれによる平民の貴族からの離反や、その他のあつれきがおこったと告白している。すなわち、サルスティウスは、ローマ人が第二次のカルタゴ戦争と最後のカルタゴ戦争との間、もっともよい習俗と、この上ない親和との生活を送ったと述べ、そしてこの有徳の生活の原因は、正義に対する愛ではなく、カルタゴが存立していたかぎり、危かしい平和に対する恐怖であった(そのゆえに、かのナシカもまた、不義を抑制して恐怖によって悪徳が防止されるように、その最善の習俗を維持するために、カルタゴを滅ぼすことに反対したのである)といったのち、すぐにつけ加えて次のようにいっている。すなわち、「しかし、不和

や、貪欲や野心やその他盛時においておこるのがつねである悪徳は、カルタゴの滅亡後とくに増し加わった」[三]といっているが、それによってわたしたちは、それらの悪徳がそれ以前にもおこって増し加わっていたことがわかるのである。そのゆえに、かれはさきにいった理由につけ加えて、「すなわち、権力者の不義やそのためにおこった平民と貴族との分離やその他の対立はすでに最初からローマに見られたのであって、ただ諸王が追放されたのち、タルクィニウスによる恐怖とエトルリアとのはげしい戦争がおさまるまでの短い期間だけ、公正で穏健な政治が行われていたのだ」といっている。その短い期間においてさえも、王が追放された――すなわち駆逐された――のちしばらく公正で穏健な政治が行われた原因が恐怖であるとサルスティウスがいったのはどういうわけであるかがわかる。というのは、タルクィニウス王が王位とローマから追放されたのち、エトルリア人と結んでローマ人にしかけていた戦争の恐怖があったからである。それゆえ、サルスティウスがそれから、つけ加えていっていることに注意してみよう。「その後、貴族は平民を奴隷のように支配して苦しめ、その生命と身体とをさながら王のようにとりあつかい、平民をその保有地から追っ払い、他のものを除外して、自分らだけが政権を握っていた。このような残酷な処置や、重い利子に苦しめられて、平民は、たえまのない戦争のために租税と軍務とを同時に耐え忍ばねばならなかったので、武装して聖山（モンスサケル）とアウェンティヌス[四]の丘に拠ったのであるが、そのとき護民官や、その他の権利を獲得した。両方の不和と闘争とは、第二次カルタゴ戦争によって終った。その時代から、すなわち、王が追放されたのちの短い期間に、歴史家が政治と道徳とは、「かれらにあっては法律によるまでもなく、自

然によって行われていた」といっているローマ人がどの状態であったかがわかるのである。

さて、ローマの国家がもっとも善美をきわめた時代からその状態であることがわかるなら、そのつぎの時代について、わたしたちはなにを語り、あるいは何を考えねばならぬと思うのであるか。つぎの時代になると、同じ歴史家のことばをかりていえば、「国家はしだいにかわって善美をきわめた時代から、もっとも悪く恥ずべきものとなった」(五)のであるが、それはかれがさきに述べたように、カルタゴの滅亡後であった。この時代をサルスティウスが、どのような仕方で簡単に回想して述べているかは、かれの歴史の書のうちにうかがわれるのであるが、かれは繁栄の世におこったどのような悪弊によって内戦がおこったかをあきらかにしている。すなわち、かれによれば、「その時代から、祖先の良習は以前のように徐々にではなく、さながら急流のように転落して、若者は贅沢(ぜいたく)と貪欲とによってまったく堕落したので、自分の家産を守ることも他人にその分を守らせることもできない息子がいたといわれたのももっともであった」(六)。それからまた、サルスティウスは、スュラ(七)の悪虐やそのほか国家のおそろしいことを語り、他の作家たちもこの点一致していたが、ただ弁説の点では大いに異なっていた。しかし、わたしの思うのに、読者は、また注意してみるものならだれでも、ローマはわれわれの最高の王の降臨前にどのような最悪の習俗の泥沼におちいっていたかがわかるのである。じっさい、これらのことがおこなわれたのは、ただキリストが肉となってあらわれ、その教えを説きはじめる以前であったばかりでなく、かれが処女から生れる以前でもあった。それゆえ、人びとは、さきにはまだ耐えられるものであったが、カルタゴの滅亡後は耐えがたく恐ろしいものと

なったその時代のそれほど多くの、そしてそれほどはなはだしい禍悪を、かれらの神々に——それらの神々こそ、そこからそのような悪習が繁生してきた考え方を、人間の精神に狡猾な悪意をもってうえつけたのだが——あえて帰しようとせずに、なにゆえ現在の禍悪をキリストに帰するのであるか。キリストは、そのもっとも救いに役立つ教説によって、虚偽と欺瞞との神神の崇拝を禁じるとともに、かの人間の有害で醜悪な欲望を神の権威をもって嫌悪し、罪に定めながら、これらの禍悪によって、病み衰え、くずおれつつある世界から、到るところにおいて、かれらの身内に属するものを徐々に引きはなされるのであるが、こうして、永遠の——空虚な喝采によってではなく、真理の判断によってもっとも光栄のある——国をたてられるのである。

(一)　サルスティウス『カティリナの陰謀』九。
(二)　サルスティウスは五巻の『史書』を書いたが、いまは断片しか残っていない。
(三)　サルスティウス『史書』一の一一。
(四)　ローマをかこむ七つの丘の一つ。
(五)　サルスティウス『カティリナの陰謀』五。
(六)　サルスティウス『史書』一の一六。
(七)　スュラは前一三八年から前七八年。ローマ共和政末期の閥族派政治家。

第十九章

キリストが神々の礼拝を廃止する以前のローマ国家の腐敗について

これがローマ国家の(わたしがはじめていうのではなく、わたしたちがこのようなことを月謝を払って教わったローマの作家たちがずっと以前に、キリストの降臨以前にいっているが)「徐々にかわって、善美をきわめたものから醜悪をきわめたものとなった(二)」状態である。これがまた、キリストの降臨以前、カルタゴの滅亡以後に、「祖父の良習は、以前のように徐々にではなく、さながら急流のように転落して、若者は贅沢と貪欲とによってまったく堕落した」状態である。人びとは、かれらの神々がローマ人に与えた贅沢と貪欲を禁じる命令をわたしたちに読んできかせてくれるがよい。それらの神々が、ただ貞潔と謙遜とについて沈黙を守るのみであって、その虚偽の神性によって破滅的な権威を与えた恥ずべき行為や、不名誉な仕業(しわざ)をローマ人から要求しないでいてほしい。人びとは預言者の書や、聖福音書や、使徒行伝や、手紙にみられるわたしたちの、じつに多くの貪欲と贅沢とを禁じる命令を読んでみるがよい。それらの命令は、いたるところにおいて、そのために寄り集った人びとに与えられた、じつにすぐれ、じつに神的なものであって、哲学者たちの論争からのように大声で話されるのではなく、神託と神の雲からのようにとどろきひびくのである。しかし、それにもかかわらず、かれらは贅沢と貪欲とによって、また残酷と汚らわしい習俗とによって、すでにキリストの降臨前に、

ローマの国家が最悪でもっとも恥ずべき状態になっていたことを、かれらの神々に帰せずに、かれらがちかごろ、その傲慢と放恣のためにこうむったすべての苦難をキリスト教に帰してはげしく非難するのである。もしも、このキリスト教の正しく有徳な習俗についての命令を、「地の王も、すべての民も、地の諸侯も、すべての裁判官も、若い男も、若い女も、老いたものも、幼いものも」[二] それをなし得るあらゆる年齢のものが、男であろうと女であろうと問わず、また洗礼者ヨハネが話しかけるすべてのものが、取税人であろうと、兵卒であろうと、[三] 同時にきいて心にとめるなら、国家はその現在の生の幸福をもって地上を飾るだけではなく、そこにおいて、もっとも浄福に支配するために、永遠の生の頂上にのぼるであろう。ところが、あるものはそれに耳を傾け、また他のものはそれを軽蔑し、大多数のものは徳の有益な冷酷さよりも悪徳の有害な魅惑を好むのであるから、キリストの僕であるものは、王であろうと、諸侯であろうと、裁判官であろうと、兵士であろうと、地方民であろうと、富者であろうと、貧者であろうと、自由民であろうと、奴隷であろうと、また男であろうと、女であろうと、必要なばあいには、もっとも邪悪で恥ずべき国家をも耐えしのび、またこの忍耐によって、あの天使たちのもっとも神聖で崇厳な宮廷と、そこにおいては神の意志が法律である天上の国家とに、このうえなく名誉な地位を得ることを命じられるのである。

(一) サルスティウス『カティリナの陰謀』五。
(二) 「詩篇」一四八の一一、一二。
(三) 「ルカによる福音書」三の一二—一四。

第二十章

キリスト教の時代を非難するものらは、どんな幸福をよろこび、どんな習俗に生きようと欲するのか

しかし、これらの神々をそのように礼拝し信心するところの人びとは、それらの神々を模倣して、重罪と醜行とをおかすことを喜びさえするのであるが、国家が醜悪をきわめていようと、まったく意に介しない。かれらはこういうのである。「国家が存立していさえすれば、物資があり余るほど豊富で栄えていさえすれば、戦勝によって名声があがりさえすれば、それからなおいっそう幸福なことに、平和で安全でありさえするなら、もうそれで十分であって、その上になにがわたしたちにかかわりがあろうか。いや、むしろわたしたちにかかわりがあるのは、各人がたえずその財産を増して、日々浪費にたえ、それによってまた、強者がみな弱者を自分に従属させることができるかということである。貧者は満腹できるように、またその保護によって怠惰な平穏をたのしめるように、強者の意に従うべきであり、他方、富者は貧者を被保護者として使用し、自分の驕慢に奉仕させなければならない。民衆は、かれらの利益をはかる人びとにではなく、快楽を存分に与えてくれる人びとに拍手しなければならない。辛いことが命じられたり、不浄なことが禁止されてはならない。王は、臣下がどれほど善良であるかではなく、どれほど従順であるかに注意すべきである。属領は王に、習俗の指導者としてではなく、

快楽をみたしてくれる強力な君主として奉仕すべきであり、そして王を衷心から尊敬すべきではなく、ただ、卑しく奴隷的におそれるべきである。法律は、ひとがどのような害を他人の葡萄樹に加えるかに注意すべきであって、各人がその生命にどんな害を加えるかには注意すべきではない。裁判官の前に引き出されるべきものは、ただ他人の所有と家庭と生命とに危害を加え、あるいは、いやがるものに迷惑をかけたものだけであるべきである。そうでないかぎり、各人は、その所有をもって、その身内のものとともに、あるいはそれを欲するすべてのものとともに、思うままに行ってさしつかえない。それを買おうと欲するすべてのものに、とくに妾を囲うことのできないもののために公娼は豊富でなければならない。広大と壮麗とをきわめた邸宅が建てられ、豪奢な饗宴がさかんに催され、そこでそれを欲し、それをなし得るものはだれでも、昼も夜も、遊び、飲み、吐き、消耗することができなければならない。騒々しい舞踏の音楽がいたるところに鳴りひびき、劇場は淫猥な歓楽の声とあらゆる種類の狂暴と破廉恥をきわめた快楽の喧噪でわきたたねばならない。このような幸福を喜ばないものは、公敵とみなされるべきであり、それを改め、あるいはなくそうとするものがあるなら、自由な民衆は発言を禁止し、その地位から追放し、生けるものの数から抹殺するがよい。民衆にこれらのものが獲得できるようにしてやり、それを獲得したのちは守ってやるところのものこそ、真実の神々と考えられるべきである。そのような神々は、その欲するとおりに礼拝されるべきであり、その欲するような遊戯を、その崇拝者とともに、あるいは崇拝者から得られるかぎり、要求するがよい。ただ、そのような幸福が敵や疫病や、なんらかの災害のために脅かされないようにし

なければならない」。正気のものでこのような国家を、わたしはローマ帝国にとはいわないが、サルダナパルス(一)の宮廷に比べるものがあろうか。この王は、むかしまったく快楽に耽溺していたので、その墓に、死んでからもっているのは、生きているあいだに欲望にかられて飲食したものだけだという意味のことばを刻ませたのであった。もしもさきの人びとが、みずから遊楽に耽溺するとともに、他人がするばあいにも厳格な態度をもってのぞまないとするなら、むかしのローマ人がロムルスにしたよりも、もっと喜んでこの王に神殿と神官を奉納することだろう。

(一) サルダナパルスとは、アッシリア王国の王たちのなかで、最後の、そしてもっとも贅沢な王であった。キケロは、この王が墓に刻ませたといわれる碑文を引用している(キケロ『トゥスクルム論議』五の三五)。

第二十一章

キケロはローマの国家についてどのような意見であったか

しかし、ローマの国家は、醜悪をきわめていたといった歴史家のことばが軽蔑されて、人びとがどのような醜悪な習俗の汚れや、恥辱によってローマの国家がみたされていたかに注意せず、ただそれが存立していさえすればよいと考えるなら、それらの人びとは、サルスティウス

の語っているように、ローマの国家は醜悪をきわめていたのではなく、キケロの論じているように、すでに当時ローマの国家はまったく滅んでいて、もはや存立していなかったことを聞知しなければならない。すなわち、キケロは、カルタゴを滅ぼしたかのスキピオを対話篇のうちに登場させて、国家について論じさせているが、当時、ローマの国家は、サルスティウスの述べている腐敗によって、もうまさに滅びようとするのが予感されるのであった。じっさい、その論議が行われたときには、(一)サルスティウスが重大な反乱のもととなったと述べているグラックス兄弟の一人は殺されていたのであった。(二)かれの死については、書物のうちで述べているのである。さて、スキピオは第二巻の終りに、(三)琴や笛やそれからまた歌や、人間の声においても、いろいろ異なった音からなるある調和が保たれねばならぬのであって、その調和がかわったりやぶれたりすると、教養あるひとの耳はそれに耐えられないのであるが、しかし、その調和は、じつにさまざまな声の調節によって、うまく和合一致するように、最高と最下と中間とに位する階級から成りながら、音と同様、国家もまた、理性によって調節されて、もっとも異なったものとの一致によって、調和を見出すのであり、そして歌のばあいに、音楽家が調和とよぶものは、国家のばあいには親和であるが、この親和は国家を通じて安全のもっとも緊密で最善の紐帯であって、正義なしではけっして存在し得ないものである。このように語ってから、スキピオはいくらか立ち入って、詳細に、どれほど正義は国家に役立つものか、また、正義がなくなればどれほど国家に害になるかを説明したとき、その論議に加っていた一人であるフィルス(四)はそれをうけついで、国家は不正なしには治められないことは一般にいわれているのであるか

ら、この問題をもっと詳細に論じ、正義についてくわしく語ることを要求した。スキピオもまた、この問題に論及し、解明しなければならぬと賛成したが、これまでかれが国家について語ったと思うところのものも、ただ、国家が不正なしに治められないという説が虚偽であることだけではなく、国家が最高の正義なしには治められないということがもっとも真実であることが確認されないかぎり、議論を進めるのになんの役にも立たないと答えるのであった。この問題の説明は翌日にもちこされて、第三巻にみられるように、はげしい論争が展開された。フィルスは、国家は不正なくしては治められないと主張する者の立場を支持した。もちろん、かれ自身がこのような意見をもっているとおもわれることのないようとくに注意をしながらではあったが。かれは、正義に対して不正を真剣に主張し、正義は無益なものであるが、不正は国家に益するものであったということを、もっともらしい論拠と例証によって明らかにしようと努める。次いで、一同の求めに応じて、ラエリウスが、正義の要求は正当なことであるとする主張を引き受けた。かれは、できるかぎりの力をこめて、国家にとって不正以上の敵はないこと、そして、いかなる国家も正義が支配しなければ統治されず、また存立しないと主張したのであった。(五)

この問題が十分に吟味されてのち、スキピオは、中断された話をふたたび本筋へともどして、国家についての自分の短い定義づけを推薦したのであった。(六)すなわち、国家とは「人民のもの」であるというのである。しかし、かれは、この「人民」について、「なんらかの集合体ではなく、法の同意、および利害を共通することにより結合せられた集団」(七)と規定する。次いで

かれは、討論に従事するばあいに、(概念を)明確に規定することが有益であるということを明らかにし、そして、かれ自身があげた概念にもとづいて、「国家」、すなわち、「人民のもの」は、それが一人の統治者によるばあいであっても、あるいは、ある少数の支配階級に属する者、またはすべての人民によるばあいであっても、いずれも正義によって統治されているときにのみ存在すると結論する。

しかしながら、一人の統治者が不正であるばあい、すなわち、ギリシア人がいうところの僣主であるばあい、あるいは、ある支配階級が不正であるばあい(その結合はたんなる派閥である)、あるいはまた、人民自身が不正であるばあい(それに当たる名称を見いだすことはできず、したがって、これをも僣主と呼ぶほかないであろう)、そのばあいには、前日の討論において述べられたように、その国家はたんに欠点のあるものではなく、あの定義によって正当に示されたように国家であることを止めるであろう。というのも、一人の僣主が派閥的に国家を牛耳るときには、人民のものは失われるからである。そして、人民自身が不正であるときには、もはや人民もまた人民ではなくなってしまうであろう。なぜなら、「人民」の定義であったところの「法の同意、および利害を共通することにより結合せられた集団」ではなくなるからである。

それゆえ、ローマ国家が、サルスティウスの描いたようなものであったとき、それは、たんにサルスティウスが述べたような「もっとも悪しく、もっとも汚れた」ものなどではなく、もはや国家といえるものではまったくないのであって、(このことは)当時のもっともすぐれた代

のである。

トゥリウス自身、かれの書の第五巻のはじめの箇所で、スキピオやその他の人物の言葉によらず自分自身の言葉によって、最初に詩人エンニウスの(八)

ローマ国家は、古い道徳と古い人びとに依存している

という詩句の一節を引用し、(九)それに続けてつぎのように語っている。――「この詩句は、簡潔で真実が込められているので、わたしには一種の神の声のように思えるのだ。じっさい、人びとは国家の道徳をもつことなくして、そして、道徳はこれらの人びとがそれを導くことなくして、国家を建設し、かくも長期にわたって(国家を)保持し、かくも広大な領域に、そして正しく支配することは不可能であったであろうからだ。したがって、わたしたちの時代の前には、父祖から受け継いだ慣習は、わたしたちの先頭に立つ(卓越した)人びとに委託され、また、その卓越した人びとは、古い慣習と制度を維持したのだった。ところがそれに反して、当代には、なるほどすぐれてはいるけれども老齢によってすでに色あせてしまった絵のような国家を受け取ったのだ。そして、原色を新たによみがえらせることを怠ったばかりでなく、せめてその形態や外観だけでも保持しようとすることもなかったのだ。

かの詩人が、ローマ国家の基盤と呼んだあの古い道徳のなにが残っているというのか。それは忘れ去られ、失われてしまったので、もはや尊ばれないだけでなく、無視されてしまっているということをわたしたちは知っている。さらに、わたしたちは、人びとについてなにをいう

べきであろうか。じっさい、道徳は(偉大な)人びとが欠乏することによって滅びてしまった。このようなはなはだしい不幸について、わたしたちは申し開きをせねばならないだけでなく、あたかも死刑を課せられる被告のように答弁せねばなるまい。ローマという名称ばかりを保持しているが、すでに久しく国家そのものを失ってしまっているということは、わたしたち自身の悪徳のしからしむるところであって、なんらかの偶発的な出来事によるものではない」。

以上が、キケロが、『国家論』の討論者として登場するアフリカヌス(スキピオ)が死んでからかなりの時間を経て、みずから告白したところであった(一〇)。それは、キリストの到来の以前であった。もしもこのようなことが、キリスト教が拡められ、勢力を得たのちに考えられ語られたのであれば、その負い目をキリスト教徒に課せしめようと考えない者はなかったかもしれない。しかしながら、キリストの受肉のはるか以前に、なにゆえかれらの神々は、まさにキケロが失われてしまったと嘆いているあの国家を破滅と喪失から救おうとしなかったのであるか。

賛辞を述べる者は、古(いにし)えの人びとや古えの道徳のあの時代においてさえどのようであったかを見るがよい。真の正義が栄えていたのか、それとも、もしかしてその時でさえも、キケロが何気なく洩らしたように、生きた道徳よりも色づけされた道徳が栄えていたのではなかったか。しかしわたしは、神の許しを得て、この問題を別の箇所で考察することにしようとおもうのである。そこ(ここ)において、わたしは、キケロがスキピオの口をとおして国家とはなんであり人民とはなんであるかということについて簡潔に定義したところのものにしたがって(また、かれ自身およびその討論に参加した人たちによって述べられた幾多の証言にしたがって)、真の正義

が存在しなかったがゆえにローマはけっして国家ではなかったということを明らかにするであろう。

しかしながら、国家についてのより適切な他の定義にしたがって、わたしは、（ローマには）それなりの一種の国家が存在したこと、そしてそれは、当代のローマ人によるよりも古えのローマ人によってより善く治められていたことを認めよう。けれども、真の正義は、あの国家——それが人民のものであることをわたしたちは否定することができないゆえに、それを国家と呼ぶことを欲するなら——、すなわち、キリストが創設者であり統治者であるところの国家においてのみ存在するのである。他のところで別な意味にひろく用いられることになったこの（国家という）名称が、わたしたちが通常使い慣れている用語の意味からは縁遠いものであるとしても、わたしたちは、すくなくともこの「国」にこそ真の正義が存在するというであろう。聖書がその「国」について語っているのである、——「もろもろの光栄あることが、あなたについて語られる、おお、神の国よ」[一二]と。

（一） キケロの『国家論』の対話がおこなわれたのは、前一二九年という想定となっている。

（二） ティベリウス・グラックスは、グラックス兄弟の兄のほうである。かれは、ローマ共和政末期の民衆派の政治家であるが、護民官として大土地所有の制限、および余分の土地を貧民に分配することなど改革案を民会に提出した。のち、元老院議員により襲撃をうけ、前一三三年殺害された。

（三） キケロ『国家論』二の四二。

（四） フィルスおよびその次に登場するラエリウスは『国家論』の対話の相手で、両人ともスキピオの文

芸仲間に属していた。
（五）キケロ『国家論』二の四二。
（六）同上、一の二五。
（七）Populum autem non omnem coetum multitudinis, sed coetum iuris consensu et utilitatis communione sociatum esse determinat（同上）。
（八）エンニウスは、前二三九年から前一六九年。ローマの詩人。ホメロスの詩形をラテン詩に移入し、「ローマ詩の父」と呼ばれた。
（九）キケロ『国家論』五の一。
（一〇）スキピオ・アフリカヌス（小スキピオ）が死んだのは前一二九年。キケロが『国家論』に着手したのは前五四年とされる。
（一一）本書第十九巻第二十一章。
（一二）「詩篇」八六の三。

第二十二章

ローマ人の神々は、悪習によって国家が滅亡していくことをけっして気にかけなかった

しかし、当面の問題に立ち帰ってみるのに、人びとがどれほどローマの国家はむかし賞賛す

べきものであったと、あるいは現在あるといおうとも、かれらのもっとも学識のすぐれた作家たちによれば、ローマの国家は、キリストの降臨よりもずっと前に、醜悪をきわめていた。じっさい、もはや存在せずに、最悪の習俗によってまったく滅んでいたのである。それゆえ、その保護者である神々は、ローマの国家が滅びないように、それを崇拝する国民のために、とくに生活と習俗とについて命令を与えるべきであった。それらの神々は、ローマの国民によって、そのように多くの神殿と、そのように多くの神官と、さまざまな種類の犠牲と、そのように多種多様の祭事と、そのように多くの祭礼と、そのように多くのまたさかんな遊戯とをもってまつられていたのである。ところが、それらのダエモンは、自分の仕事をするものに専らであって、どのような仕方で国民が生活していようと気にかけなかった。いや、国民が神々の名誉のために、上に述べたようなすべてのことを、おそれかしこんでなすかぎり、国民が邪悪な生活を送るように気をつかっていた。もしも、それらの神々が命令していたのなら、それらの神々によって、ローマの国家に与えられた——グラックス兄弟が、反乱によってすべてのものを混乱におとしいれるために無視し、マリウスとキンナとカルボとが(一)、もっとも正しくない理由によってはじめられ、残酷な仕方で行われ、もっと残酷な仕方で終えられた内戦にまでもうったえるために、犯し、また最後に、スュラ自身が、その生活と性行と行動とは、サルスティウスや、その他の歴史家が述べているように、なんびとも戦慄を禁じ得ないのであるが、破った——命令をもち出し、目に見せ読みあげるがよい。ローマの国家がすでに当時滅びていたということを否定するものがあろうか。

それとも人びとは、このような市民の習俗について、神々を弁護するために、いつものように、あのウェルギリウスの説をあえて持ち出すのであろうか。

「そのおかげで、この帝国が持ちこたえてきた神々は、みなそこからはなれて、祭壇も神殿も見捨てた」(二)

まず第一に、もしもそうであるなら、かれらの祖先がすでにずっと前に、その習俗によってあのように多くの小さな神々をはえのようにローマ市の祭壇から追放したのであるから、かれらはキリスト教にむかって、かれらの神々は、それに心証を害してかれらを見捨てたのだと苦情を申し立てる理由はない。しかし、古来の習俗が腐敗するよりずっと前に、ローマがガリア人によって占領され、放火されたとき(三)、これらの神々の群はどこにいたのであるか、ローマにいながら眠っていたのであろうか。じっさい、そのとき、ローマ全体が敵の手に帰して、ただカピトリウムの丘だけが残っていたのであるが、この丘もまた、神々が眠っていたとしてもせめて鵞鳥だけでも目を覚していなかったなら占領されていたであろう。そのために人びとは鵞鳥のために祭りをするようになって、ローマは、鳥や獣類をまつるエジプト人の迷信に陥りかけてきたのであった(四)。しかし、このような、敵やその他の災害から起る、外敵で、精神よりも身体にかかわる禍悪については、わたしはいましばらく論じないことにしよう。わたしはさしあたって、習俗の頽廃について論じるのであるが、習俗は最初、少しずつその色が悪くなり、つぎに急流のようにまっさかさまに流れ落ちて、たとえ、家屋や城壁はしっかりしていても、国家に非常な荒廃が起ったので異教徒の有力な作家たちは、そのときすでに国家はなくなってい

たと主張することを躊躇しないほどである。しかし、ローマが神々のよき生活と正義についての命令を軽視したのなら、ローマが滅びるように、「神々がみな聖所と神殿とを見捨て去った」ことは、正当であった。しかし、わたしは聞きたいのであるが、それらの神々は、それを崇拝する国民が悪しき生活をおくっているのに、よき生活を教えずに、それとともに住むことを欲しないとは、いったいどういう神々なのであろうか。

(一) マリウスは前一五七年から前八六年。ローマの将軍、民衆派の指導者。キンナとカルボは、内戦時マリウスの副官であった。

(二) ウェルギリウス『アエネイス』二の三五一―二。

(三) ローマがガリア人によって襲撃されたのは前三九〇年。

(四) 鵞鳥は、精巧な担架でカピトリウムの丘へ行列を組んで運ばれた。この行列は、ローマがガリア人の手から救われたことを記念しておこなわれた(プルタルコス『ローマ人の幸運について』一二、リウィウス『歴史』五の四七)。

第二十三章

この世の有為転変はダエモンの愛顧や反感によらず、真の神の判定による

神々がなおそのうえに、人びとの欲望をみたすことをたすけて、すすんでそれを抑制しなか

ったようにみえるのはどういうわけであるか。じっさい、マリウスは、身分の卑しい成り上り者であって、内戦をもっとも残酷に始め行ったが、かれが七回コンスルになり、七回目の在職中に高齢をもって死んで、やがて覇権を握ろうとしていたスュラの手にかかることを免れたのは神々の援助によるものであった。じっさい、それらのことに対して、異教徒の神々はかれをたすけなかったのなら、それは重大なことを認めるわけであって、かれらの神々が、好意を寄せなくとも、人間はその求めてやまないあの地上の幸福を得、またマリウスがそうであったように、神々が怒っていても人間は健康と力と富と名誉と威厳と生命とに恵まれて、それを享受することができ、また、反対にレグルスがそうであったように、神々が好意をもっていても、人間は虜囚と隷属と欠亡と不眠と苦痛とになやまされて死ぬこともあることとなる。もしもそのようであることを認めるなら、簡単にいって、神々はなんの役にも立たずそれを崇拝することは余計なことだと認めることになるだろう。すなわち、その報賞が死後に期待させる精神の諸徳性や、生活の誠実性のために配慮せずに、国民がむしろその反対のことを学ぶように神々が定めたとするなら、また、消滅的で時間的の諸善についても、神々はその憎むところのものを害することもなく、その愛するところのもののためになることもないなら、なにゆえ、神々は崇拝されるのであるか。なにゆえ、そのように熱烈に崇拝されて求められるのであるか。なにゆえ、苦しく悲しいときに、神々は心証を害して去ったのだと不平がいわれ、またかれらのために、キリスト教がまったく理由のない非難をもって侮辱されるのであるか。しかし、神々は、これらのものについてよいことをしたり、悪いことをしたりする能力をもっていたりする

のなら、なにゆえ、それらのものについて、極悪の人間マリウスをたすけて、最善の人間レグルスをたすけなかったのであるか。このことによって、神々自身がもっとも不義で極悪であることがわかるのであろうか。このことによって、神々はなおいっそうおそれられ、あがめられるべきであると考えられるなら、そのように考えることはまちがっている。レグルスの方がマリウスよりも神々をあがめることが劣っていたとはみられないのである。また、神々がレグルスよりもマリウスを愛護したからといって、極悪の生活を選ぶべきだとも思われない。じっさい、もっとも賞賛にあたいするローマ人、メテルス(一)は、コンスルになった五人の息子をもっていて、この世のことについても豊富であり、また、極悪の人間カティリナ(二)は、窮乏になやまされ、かれ自身の極悪の罪からおこった戦争に打ち破られ、不幸であったのであって、もっとも真実で確実な幸福をもって、他に抜んでるのは、ただそれからのみ、それが与えられ得る善を崇拝するものらである。

それゆえ、ローマの国家が悪しき習慣の腐敗によって滅びたとき、ローマ人らの神々は、それが滅びないように、習俗を指導したり、矯正したりするために、なにもしなかったのである。いや、ローマが滅びるように、習俗の悪化と腐敗に助力したのである。なおまた、人びとは、神々は善良であって、市民の不義に心証を害して去ったのだというふうに考えてはならない。神々はたしかにそこにいたのだ。神々は法廷に引き出され、有罪の判決を下される。神々は命令を下すことによって、助けることもまた、沈黙を守ることによってかくれていることもできなかったのだ。マリウスは、ミントゥルナェ人からあわれまれて(三)、万事がうまくゆくように、

その神苑にいたマリカの女神[四]にたのんでもらい、このような絶望の淵からぬけでて、無事にローマに、残酷な軍隊の残酷な将として入ったのであるが、そのことはここに語らずにおこう。そのさい、マリウスの勝利がどのように血なまぐさいものであったか、またどんなに粗暴で、敵よりも非人道的なものであったか、それを知りたいものは、それを記録している作家を読んで知るがよい。しかし、わたしは、そのことを、さきにもいったとおり、語らずにおこう。またわたしは、マリウスの血なまぐさい勝利をマリカとかいうよくは知られない女神に帰せずに、それよりもむしろ、神のかくれた摂理に帰するのであるが、それは反対者の口を閉ざし、そして党派心によって行動せずに、これらの事実を思慮ぶかく考えてみる人びとを誤謬からすくうためである。というのは、ダエモンである神々がこれらの事物において、なにかすることができるとしても、それは全能な神のかくれた意志によってゆるされるかぎりにおいてであるからである。すなわちそれによれば、地上の善は、マリウスのばあいのように、しばしば、悪人にもゆるされるのであるから、わたしたちはそれをあまりにも重くみてはならないのであり、また多くの敬虔で善良な、唯一真実の神の崇拝者たちもまた、わたしたちが知っているように、ダエモンの意に反して、地上の善をとくに恵まれていたのであるから、わたしたちはまた、それを悪であるかのように考えてはならぬのであり、また最後に、わたしたちはこの不浄きわまる霊を、この地上の善や悪のために、なだめたり、おそれたりせねばならぬと思ってはならぬのである。というのは、この地上における邪悪な人間と同じように、それらの不浄の霊もまた、その欲するところのすべてをなすことができるのではなく、その判定をなんびとも完全に理解

できず、また正当に非難できないところのものの指令によってゆるされるかぎりにおいてである。

(一) メテルスは生年不詳、前一一五年歿。ローマの将軍で政治家。グラックス兄弟の土地改革案に反対した。

(二) カティリナは前一〇八年から前六二年。ローマ共和政末期の野心的政治家。負債の帳消し案をかかげて執政官になろうとしたが、キケロに妨げられる。その後、首都略奪の陰謀を企てるが失敗に終った。

(三) マリウスは、かつて自分の副官であったスュラとミトリダテス討伐の指揮官の地位をめぐって衝突。けっきょく、マリウスはローマからアフリカへ船で逃げようとするが、強風のため途中ミントゥルナェの町に身をひそめることになる。その町でも殺されそうになったが、町の人びとの憐みにより逃され、女神マリカの森をぬけて海へ出た。

(四) マリカはラティウムで崇拝されたニンフであるが、魔女キルケと同一視された。

第二十四章

スュラの行動についてダエモンはどちらの側を援助したか

それはとにかく、スュラ(一)の方もその支配した時代は非常に乱れていたので、かれがそれから世を救ったように思われた時代の方がそれと比べてなつかしがられたのであるが、マリウスを

うつために、はじめてローマにむかって進軍したとき、リウィウスによれば、[二]犠牲を供えたところが、その内臓が非常にめでたいものであったので、腸卜者のポストゥミウス[三]は、もしもスュラがその心に考えていることを、神々の援助によって実現しないなら、監禁されて首をはねられてもよいと受け合ったのであった。じっさい、神々はことの成り行きについて預言してスュラ自身を矯正することについてはなんの注意もしなかったのであるから、「神々は、聖所や祭壇を見捨てて去った」のではないことはあきらかである。すなわち、神々は預言によって大きな幸福を約束したが、威嚇によって悪しき欲望をうちひしがなかった。それからアジアに遠征して、ミトリダテスと戦っていたとき、ルキウス・ティティウスを通じて、ユピテルから、かれがミトリダテスをうち破るであろうという知らせがあって、その通りになった。またその後、ローマに帰って、かれ自身やその一党のこうむった不法の復讐をしようとしていたときに、またもや、同じユピテルから、第六軍団のある兵士を通じて、さきにはミトリダテスをうち破るという約束をしたが、今度は、ローマの国家を政敵から——多くの血を流してであるが——回復する力を与えてやろうという知らせがあった。スュラはすぐに、兵士に、ユピテルはどのような姿で現われたかと問い、そして兵士がそれを示してみせたとき、スュラは、さきにミトリダテスをうち破るだろうというユピテルからの知らせを、かれに伝えたものから聞いたその姿であることを思い起したのであった。このばあい、どう答えることができるであろうか。神々が、あの幸福のように考えられているところのものを知らせてやることに気をつかいながら、神々のうち、スュラが極悪非道な内戦によって、ただ、ローマの国家を醜悪にするだけではな

く、まったくなくしてしまうようなひどい悪事をなそうとしているのを、諌止して矯正して注意したものがないのはどういうわけであるのか。じっさい、ダエモンは、わたしがさきになん度も述べ、聖書がわたしたちに注意し、また事実自身が十分に示しているように、自分自身の仕事をしているのがあきらかにわかるのである。すなわち、ダエモンは、神々として考えられ、あがめられることを求め、それを捧げるところのものも同類として、神の審判にさいして、いっしょにもっとも悪い立場に立たねばならぬような儀礼が供せられることを求めるのである。

その後、スュラはタレントゥム(四)にきて、そこで犠牲を捧げたとき、小羊の肝臓の中に黄金の冠のようなものを認めた。そのとき例の腸卜者のポストゥミウスは、それはすばらしい勝利のしるしであると答え、その内臓をひとりで食うように指図した。その後、しばらくして、ルキウス・ポンティウスとかいうひとの奴隷が預言者のようなことをいって、「ベルロナの使者としてきたのだ。勝利はお前のものだ」と叫んだ。そして、カピトリウムの神殿が焼けるだろうとつけ加えた。(五)こういってすぐに、かれは陣営から立ち去ったが、翌日はもっと興奮しながら帰ってきて、カピトリウムの神殿は焼けたと叫んだ。ところが、カピトリウムの神殿はじっさいに焼けたのであった。このようなことを予見したり、すぐに知らせたりすることはダエモンにはまったく容易なことであった。しかし、これは、わたしたちの問題にもっとも関係のふかいことであるから、よく考えてみなければならないが、忠信なものの意志をダエモンの支配から救われた救い主を罵る人びとは、いったい、どのような神々の保護を望むのであるか。あの奴隷はいかにも預言者のような口をきいて、「スュラよ、勝利はお前のものだ」と叫び、そして

そういったものが、神の霊によるのだと信じてもらえるように、近く起るであろう――そしてまた、まもなく起った――ところのことをも知らせたのだが、その口を借りて、かの霊が語ったところのものは、現場から遠くはなれていたのであった。しかし、その奴隷は、「スュラよ、重罪を犯すな」とは叫ばなかった。スュラは戦に勝って、ローマでじつに恐ろしい重罪を犯したのだが、そのスュラには、黄金の冠が勝利のもっとも輝かしいしるしとして、小羊の肝臓のうちに現われていたのだ。しかし、そのようなしるしは、もしも不敬なダエモンによってではなく、正しい神々によって与えられるのがつねであるなら、あの内臓によって、勝利よりもむしろ、不正と、スュラ自身にも非常に有害な禍悪であることを示したにちがいない。じっさい、その勝利はかれの欲望に害を与えたほどかれの勢威を増すことには役立たなかった。すなわち、それによってかれは、不敵な野望をいだき、幸運にのぼせあがり、無鉄砲となったのであって、かれが敵をその身体において滅ぼしたというよりも、かれ自身がその習俗において滅びたというべきであろう。ところが、このような真に悲しく嘆かわしい結果を、かの神々は、内臓によっても、占いによっても、またたれかの夢や預言によっても、予告しはしなかった。神々は、かれがうち破られることよりも、かれが矯正されることを恐れていたのだ。いや、神々は、その同胞市民をうち破って得意になっているものが、自分自身の悪習によってうち破られてとりことなり、こうしてまた、ダエモンにずっとかたく縛（しば）られて服属するようにその全力をつくしたのであった。

（一）スュラについては、本巻第十八章(注)七参照。

(二) リウィウス『歴史』七七に記されていたものとおもわれる(すでにこの部分は失われている)。
(三) プルタルコス『英雄伝――スュラ』九。
(四) 同上、二七。
(五) 同上。

第二十五章

邪悪な霊は、かれらの示した例のいわば神的な権威を与えることによって人間を刺戟し醜行を犯させた

しかし、神の恩寵によってそのような神々との交わりを断つことよりも、神々をまねることを選ぶものでなければ、どのように、その悪しき霊がその示した例によって重罪にその神的権威を与えようとしてつとめているかを、つぎのようなことによって理解しないものがあろうか。また、それに気付かないものがあろうか。じっさい、カンパニアのある広い平原にも、そこでその後、まもなく同じ市民の仲間の軍隊が不法な決戦を交えたのであるが、神々自身が、まずさきに戦うのが見られたのである。すなわち、まずそこに剣戟の音が聞こえ、ついで、数日間両軍が戦うのを見たと多くのものが伝えた。そしてその戦いが終ったとき、ひとや馬のもののような足跡が、その戦闘によって残されたと思われるほど多く見出された。それゆえ、神々が

ほんとうに戦い合ったのが真実であるなら、人間間（かん）の内戦はもちろん言い訳がたつわけである。しかし、このような神々はなんと悪意にみち、なんとあわれなものであるかを考えてみなければならない。しかしまた、神々は戦い合ったかのように見せかけたのなら、それは、ローマ人がいわば、神の模範に従って内戦をしたのであって、けっして不法をなしたのではないということを、見せるためではなかったろうか。じっさい、すでに内戦は始まっており、それに先立って二、三の極悪無道の戦闘の呪うべき殺戮が行われていた。また、すでに多くのものは、ある兵士が殺した敵の武具をはぎ取ったとき、その裸になった死体の主が自分の兄弟であることを認めて、はげしく内戦を呪い、すぐに自害して、兄弟の身体の上に身を投げたという話に心を動かされていた。このような大きな禍悪に嫌悪を感ぜず、兇悪な戦争にますます熱情を燃え立たせるために、邪悪なダエモンは——それを人びとは神々と考えてあがめおそれねばならぬと思ったのであるが——たがいに戦い合うように人間に見せようとしたのであるが、それは、市民としての感情がそのような戦争を模倣することを恐れとはせずに、むしろ、人間の重罪が神神の示す模範によってその言い訳が立つようになされたのであった。なおまた、邪悪な霊は、同じ老獪なやり方で、それについてはすでに多くのことをわたしは語ったが、（一）かれら自身のために演劇を奉納することを要求した。そしてその演劇においては、神々のひどい醜悪な行為が芝居の作りごとの所作（しょさ）によって演じられたので、神々はじっさいにそのようなことをしたと信じるものも、また、そうとは信じないが、神々が喜んでそのようなことを自分のためにしてもらうのを見るところのものもみな、安心してそれを模倣するのであった。それゆえ、詩人たち

は、神々がたがいに戦い合ったと述べたとき、神々にふさわしいことを記したのではなく、神神を非難したのだと考えるものがないように、神々自身が人間を欺こうとして詩人たちの物語を証明してみせた。すなわち、神々は自分らの闘争を、ただ劇場において演劇を通じてではなく、また平野において自分自身を通じて人間の目に示して見せたのだ。

わたしが、これらのことを語らなければならなかったのは、わたしたちの主であるイエス・キリストの降臨前にはもはや存在しなかったと語ったり、書いたりすることを、ローマの作家たちもまったく躊躇しなかったからである。そしてこのローマの国家の滅亡を、人びとはかれらの神々に帰せずに、それによって善良なものは生きているあいだも死んだ後もけっして滅びることのない消滅的な禍悪を、わたしたちのキリストに帰する。わたしたちのキリストは堕落した習俗を排して善良な習俗をすすめるあのように多くの命令をしばしば出されたが、ローマの神々は、ローマの国家が滅びることのないように、ローマの国家のために、かれらを崇拝する国民とともになにもなさず、むしろ反対に、ローマの国家が滅びてしまうように、いわばかれら自身の示した模範の有害な権威によって、その習俗を腐敗させることに努力したのである。わたしが考えるのに、ローマの国家がその当時滅びたのは、神々が「神殿をも祭壇をも見捨てて去ったからだ」[三]と、あたかも神々が徳を愛して、人間の悪徳に心証を害したかのようにあえていうものはないであろう。というのは、あのように多くの犠牲の内臓や、鳥占いや、預言のしるしによって、神々はあたかも将来のことを知り、戦勝を助けるものであるかのように、誇り吹聴しようとしたの

であるが、それによってまた、神々がまたそこに居合せたことが確認されるのである。もしもじっさいに、神々が去っていたのなら、ローマ人は内戦にさいして、神々の教唆によって燃え立ったほどはげしくは、その欲望によって燃え立ちはしなかったであろう。

(一)　本巻第八章参照。
(二)　ウェルギリウス『アエネイス』二の三五一―二。

第二十六章

あらゆる種類の邪悪がその祭礼において公然と教えられているのに、ダエモンがひそかにしているといわれる良俗に関する指示について

このようなわけであるから、そしてまた、公然とおおっぴらに、神々の汚らわしく、かつ残酷な行為や、不名誉で兇悪な仕業が、根拠のあるものも、つくりごとのものも、神々自身が要求し、行わなければ怒るので、しかも一定の周期的に催される祭礼において、神々に模倣されて人目につき、そして模倣されるべき模範として、すべてのものの目の前で演じられるのであるから、なにゆえその同じダエモンが――すなわち、そのような種類の快楽によって、不浄の霊であることを告白するところのものが、また真実の通りのものであろうと、ただよそおうたものであろうと、自分の醜行や重罪と、それらを自分のために演じることをつつしみを知らな

いものからは要求し、つつしみぶかいものからは強要することによって、みずから兇悪で不浄な生活の教唆者であることを証明してみせるところのものが――なお、かれらの聖所と奥院とにおいて、いわば、かれらの秘儀を授けられた少数の選ばれたものに、習俗についてある種の命令を与えるのであるといわれるのであるか。もしもそうであるなら、そのこと自体によって、有害な霊のいっそうずるい悪意が確証され証明されねばならない。じっさい、廉直と貞潔の力はたいしたものであって、すべての、あるいはほとんどすべての人間性はその美点に心を動かされるのであり、また、善悪正邪の感覚をまったくなくしているほど悪徳によって汚されているものもないのである。したがって、悪魔の悪意は、わたしたちが聖書のうちに記されているのを知っているように、どこかで、「光の天使にすがたをかえる」(二)のでなければ、その欺瞞の仕事を成就することはできない。それゆえ、聖所の外では不浄な不敬がやかましく民衆のまわりになりひびき、聖所の内では、偽りよそおうた貞潔が聞きとれないような声で少数のものにささやく。恥ずべきことには公開の場所が与えられ、ほむべきことには秘密の場所が設けられる。名誉はかくれ、不名誉はあらわれ出る。悪しき行いはすべてのものを呼びよせ、善き忠言は、少数の聞き手を得ることもむつかしいが、まるで廉直なことが恥ずべきであり、不正なことが誇るべきかのようである。しかし、このようなことが行われるなら、悪魔の殿堂でなくて、どこでであろうか。欺瞞の宿舎でなくてどこであろうか。じっさい、一方は、少数である正直なものを誘惑するためにし、他方は、もっとも汚れている多数のものが強制されないためにするのである。

カェレスティス(三)の女神の秘儀を授けられたものが、貞潔の教訓を聞いたのは、いつどこであったか、わたしは知らない。しかし、その女神の像がおかれているのを、わたしたちが見た神殿の前で、わたしたちは、みな方々から集ってきて、めいめいその得た場所に立って、そこで行われる演劇をもっとも熱心にながめていたのであるが、目を転じるにしたがって、一方には娼婦の行列を、他方には処女神を見るのであった。そして、女神は、祈願をこめてあがめながら、しかもその前で、恥ずべきことが演じられるのであって、そこでは赤面する道化役者も、恥ずかしがる女の役者も見られず、卑猥なつとめはまったく完全にはたされていた。それで、この処女神がなにを好んでいたかが知られたわけであり、そこで演じられていたことによって、家婦はよいことを教わって神殿から家に帰るのであった。もっとも、多くのつつしみぶかいものは、役者の汚らわしい所作から顔をそむけ、醜行の術をひそかに注意して学ぶのであった。じっさい、かれらは人目を恥じて、それらの恥知らずの所作を平気でながめることはようしなかったのであるが、しかし、かれらが恥ずかしく思った女神の祭事を、貞潔な心で罪有りとすることは、なおさらようしなかったのである。それにもかかわらず、それをなすためには、少くとも、屋内でかくれた場所が求められたのに、神殿でおおっぴらに、いかにもこれ見よがしに行われたので、もしも、人間に羞恥心があったなら、人間が遠慮なしにすることのできない恥ずべき行いが、神々にあっては、宗教的行事としてさえ教えられ、それを演劇において演じるように心がけなければ、神々の怒りを招くであろうということがまったく不思議に思われるのであった。じっさい、かくれた刺戟によって、もっとも堕落した精神を煽動し、姦淫するこ

とを教唆するとともに、その犯行をたのしむなら、いったい、いかなる霊であろうか。それは、そのような祭事をも喜び、神殿に悪魔の像を安置し、演劇のうちに、悪徳の面影を見ようとし、少数の善良なものを欺こうとするために、ひそかに正義の言葉をささやき、無数の邪悪なものを自分の手にいれようとするために、おおっぴらに誘惑をなんどもくりかえすところの霊ではなかろうか。

(一) 「コリント人への第二の手紙」一一の四。
(二) カェレスティスの女神については、本巻第四章(注)二参照。

第二十七章

ローマ人が神々をなだめるために捧げた卑猥な演劇は、どんなに公的規律をみだしたか

尊敬すべき人物であったが、似而非(えせ)哲学者マルクス・トゥリウス・キケロ(一)は、按察官になろうとしたとき、かれの職務の一つとして、とくに母なるフロラを演劇を催すことによってなだめねばならぬと、全国の人びとに高唱した。(二)そしてこの演劇は、汚らわしいほど、一般にますます敬虔なものなのであった。なお別の機会に、(三)かれがすでに執政官として、ローマが重大な危険に陥っていたとき、(四)演劇を十日間続けて行い、神々をなだめるのに必要なことはなにも怠

らなかったといっているが、それによると、むしろ、それらの神々を放縦によってなだめるよりも、節制によって怒らせる方が、また、それらの神々の心をそのようにはなはだしい醜悪によって和らげるよりも善美によって挑発して敵意をいだかせる方が適切でなかったろうか。じっさい、そのために、神々がなだめられた人間がどのように無情残酷なことをしようとも、その害は、もっとも忌むべき悪行によってなだめられる神々の与える害ほどひどくはなかったのである。すなわち、敵からその身体に受ける危険をさけるため、精神の徳が滅ぼされるような仕方で、神々の行為を求めたのであるが、その神々は、まず良俗を破壊してからでなければ、城壁をとりかこむものに対して、ローマの防禦者として立たなかったのである。そのような神神をなだめるための祭礼は、この上なく図々しく、不浄で、あつかましく、きたならしくて、それを行うところのものは、ローマ人の特性の賞賛すべき資質から名誉を奪い、その資質を仲間から追っ払い、汚れたものを認め、不名誉なものとなしたのである。わたしはくりかえしていうが、そのような神々のこのような祭礼――それは忌み嫌われ、恥ずべきものである真の宗教に対立して――や、神々に対して中傷的で誘惑的な伝説や、このような神々が極悪非道になした――あるいはそれよりもなお極悪無道につくりごとをした――不名誉な行いを、全国のものは、公然とその目で見、耳で聞いて学んだのであり、このような悪事を犯すことが神々を喜ばすということを知り、そしてそのゆえに、そのようなことをただ、神々のためにして見せねばならぬだけではなく、また自分らもまねねばならぬと信じたのであるが、しかし、それが知れわたらないことよりも、知れわたることを恐れて、ごく少数のものに、ごく内緒で語られた

（かりに語られたとして）いわゆる善良なあの教訓――それがなんであるか、わたしは知らない――についてはそうではなかったのである。

（一）フロラは花と豊穣と春の女神。ローマでは毎年四月二十八日から五月一日のあいだにその祭りがおこなわれた。
（二）キケロ『ウェルレスを駁する（二）』五の一四。
（三）キケロ『カティリナを駁する』三の八。
（四）前六三年、大きな負債を抱えた政治家カティリナが、キケロなど要人の暗殺と政府転覆を企てた。

第二十八章

キリスト教によって得られる救いについて

このような不浄きわまる権力の地獄の軛（くびき）とその刑罰をともに受けることから、キリストの御名によって人間は救い出され、そしてあのもっとも破滅的な不敬の夜からもっとも救いに役立つ敬神の光の中に移されたことを嘆き、つぶやくところのものは、不義で恩知らずな、あの兇悪な霊にかたくとらえられたところのものであるが、かれらが嘆くのは、民衆が貞潔な祭礼のために、つつしみぶかく男女両性に分れて教会に集り、そこでかれらはどのように敬虔にこの世でしばらく生きたら、この世ののちに、浄福に永遠に生きるに価するかを聞き、またそこで、

聖書とその正義の教説とは、高い場所からなりひびいて、その通りになすところの者は報酬を受けるために聞き、また、なさないところの者は、審判を受けるために聞くからである。もっとも、そこへは、そのような教訓を嘲笑しようとするものもはいってくるが、しかし、かれらの図々しさは、にわかに精神的変化をきたしてみられなくなり、あるいは、おそれやはじらいによって抑えられる。というのは、そこではいかなる汚らわしく恥ずべきことも、かれらがながめたり、まねたりするものとして示されず、真実の神の教訓がふきこまれ、その奇跡が語られ、その賜物がほめられ、その恩恵がこいねがわれるのである。

第二十九章

ローマ人に対して、神々の崇拝をやめよという勧告

これらのことを欲求せよ。おお、ローマのほむべき資質よ、おお、レグルスやスキピオやファブリキウスのような人物の子孫よ、これらのものの方をのぞんで、それらを悪魔のあのもっとも汚れた空虚と欺瞞にみちた悪意から区別せよ。もしも、あなたがたのうちに、なにか将来ほむべきものが輝いているなら、そのものはただ、真の敬虔によってのみきよめられ、完成されて、不敬によって台なしにされ、罰せられるのである。もう今後は、あなたがあなた自身においてではなく、真の神において、なんのまちがいもなしにほめられるように、あなたの進む

べき道を選びなさい。というのは、かつてあなたは、世俗の栄誉を得ていたが、神の摂理のかくれたはからいによって、あなたが選ぶべき真の宗教を与えられていなかったからである。目を覚ましなさい、もう昼である、あなたは、わたしたちがその完全な徳性と真の信仰のための受苦とを誇る人びとにおいて、すでに目を覚ましたのである。それらの人びとは、いたるところで敵意にもえた勢力に抗して戦い、雄々しい最期をとげることによってそれを打ち破り、「その血をもってわたしたちのために、この国土を買ったのである[一]」。わたしたちは、この国にあなたを招き、あなたがその市民の数に加わることを勧告するのであるが、その避難所は、いわば、罪の真の赦免なのである。キリストやキリスト者を侮辱して、現代を不幸な時代のように非難するあなたの堕落した仲間のいうことを聞いてはならない。かれらは平安な生活よりも、むしろ不正が平気でおかされた時代をなつかしがるのである。そのような時代をあなたは、たとえ、地上の祖国のためであっても、求めたことはけっしてなかった。もうこれからは天上の国をつかまえるがよい。あなたはそれを労することがなく得、またそこにおいて、あなたは真にまた永遠に支配するであろう。じっさいそこにおいては、あなたに、ウェスタの炉[二]もカピトリウムの岩もなく、ただ唯一で真の神が

「その勢力に時と所とをかぎらず、
はてしない支配権を与えるであろう[三]」。

虚偽と欺瞞の神々を求めてはならない。むしろ、かれらを放逐して真に自由な身となりなさい。それらは神々ではなくて、邪悪な霊であり、それらにとっては、あなたの永遠の幸福が罰

なのである。ユノは、トロヤ人に――あなたは肉の上ではその子孫であるが――ローマの城砦の与えられるのをそねんだようにみえるけれども、しかしそれは、あなたがなお神々であると考えているあの悪魔が、全人類に永遠の住処の与えられるのをそねむほど、はなはだしくはなかったのである。あなたは、そのような霊を演劇によってなだめながら、あなたがそれらを演じさせたところの人間を不名誉なものと考えたのは、それらの霊についてまったく的確な判断を下したわけである。自分の不名誉な行跡を祭事として催しとり行うことを命じた不浄の霊に対して、あなたの自由を擁護することを許せ。あなたは、神々の罪を演じるところのものを、あなたの名誉ある地位を遠ざけた。あなたは、真の神にむかって、自分の罪――それが真実であれば、この上なく不名誉なことであり、またつくりごとであれば、この上なく悪意にみちたことであるが――を喜ぶような神々を、真の神があなたから遠ざけるように、嘆願しなさい。あなたが、みずから進んで、役者や俳優に市民の仲間にはいることを許さなかったのはまったく正当であった。しかし、もっとよく目を覚ましなさい。人間の威厳でさえも汚されるような手段によっては、神の威厳はけっしてあがめられないのである。それゆえ、どうしてあなたは、そのような阿諛（あゆ）を喜ぶところの神々が、天の聖なる力の数にかぞえられると考えるのか。あなたは、そのような阿諛をなすところの人間を、ローマ市民のどのような階級の数にもかぞえるべきではないと考えたのではないか。天上の国は、それとは比較にならないほど輝かしくあって、そこでは勝利が真理であり、威厳が神聖であり、生命が永遠である。あなたはそのようなことをする人間をあなたの仲間にいれることを恥じたのなら、まして天上の国はそのよう

な神々をそのうちにいれないのである。それゆえ、あなたは浄福の国に到達することを希望するなら、ダエモンと交わることを避けねばならない。不名誉な行為によってなだめられるところのものが、名誉を重んじるものによってあがめられるのはふさわしくない。それゆえ、さきの役者たちが、監察官の告発によって栄誉ある地位から除外されたように、それらの神々もキリスト教の浄めによって、あなたの崇拝の対象から除外されねばならない。さて、悪しきものがただそれのみを楽しむことを欲する肉体にかかわる善と、かれらがただそれのみを耐えしのぼうとしない肉体にかかわる禍悪について、かの悪魔がそれらに対してもっていると考えられている能力をもたないということ(たとえ、もっているとしても、わたしたちは、それらの善のために悪魔を崇拝し、そして悪魔を崇拝することによって、それがわたしたちに与えられることを嫉(ねた)む善に到達できなくなるよりも、むしろそれらの善を軽蔑しなければならないということ)——しかし、悪魔はそれらの善に関しても、それらのために悪魔を崇拝せねばならぬと主張する人びとがもっていると考えるような能力をもっていないということをわたしは次に考察することによって、これでこの巻を終ろう。

(一) ウェルギリウス『アエネイス』一一の二四—五。
(二) ウェスタはローマのかまどの女神。国家のかまどの神として、神殿ではつねに火が保たれた。
(三) ウェルギリウス『アエネイス』一の二七八—九。

第三巻

第一章

邪悪なものがただそれのみをおそれ、この世が神々を礼拝していたときもこうむった禍害について

他のなにものにもまして、警戒せねばならぬ習俗と精神との禍害について、虚偽の神々は、それを崇拝する国民がそれらの禍害の重荷によって圧倒されないようにそれを助けようなどとは考えず、むしろ反対に、その重荷によってひどく圧倒されるようにふるまったのだということを、わたしはもう十分あきらかにしたと思う。わたしはいま、ただそれのみをこうむることを欲しない個々の禍悪について語らねばならぬと思うのであるが、それは飢や、病気や、戦争や、略奪や、監禁や、殺害や、その他わたしたちがすでに第一巻に述べたと類似の禍悪である。すなわち、悪人はかれらを邪悪にはしないところのもののみを悪だと考え、かれらがほめる善を享受しながら、それをほめるかれら自身が悪であることを恥じず、そしてその生活がよくな

そのさまはまったく、自分自身は別として、ほかのすべてのものがよいということが人間にとって最大の善であるかのようである。しかしながら、異教徒がただそれのみをおそれるところの禍悪もまた、神がかれらによって自由に礼拝されていたときでさえも、かれらの身に降りかからないように、異教徒の神々によって防止されたわけではない。じっさい、わたしたちの贖い主がこの世に来られる以前に、さまざまな時代と地方で、人類が無数の、またときとしては、信じられないほどの災害によっておびやかされたとき、ただユダヤ民族のみをのぞいて、またこの民族以外に、神のもっともかくれた、しかももっとも正しい判断によって、神の恩寵を受けるにふさわしいものがあったところではどこでも、少数のものをのぞいて、世界はそれらの神々以外のどのような神々を崇拝しただろうか。しかしながら、わたしは、あまりにも長たらしくならないように、他の民族が方々でこうむったはなはだしい禍害についてはふれずに、ローマとローマ帝国とに、すなわち、ローマ自体や、ローマと同盟によって結ばれ、あるいは盟約によって従属している国々に関することのみを語り、それらのものが、キリストがこの世に来られる以前、すでに、いわばローマの国家の体の一部となっていたとき、どのような禍悪にたえたかを述べることにしよう。

第二章

ローマ人によってもギリシア人によっても同じようにあがめられた神々は、トロヤの滅亡をゆるすような理由があったか

まず第一に、そこからローマ民族がおこったトロヤ、またはイリウムは、(このことは、わたしがすでに第一巻でふれたところであって、(一) 見過したり、知らぬふりをしたりするわけにはいかないのである)ギリシア人と同じ神々をもち、崇拝しながら、なにゆえギリシア人によって征服され、占領され、破壊されたのであるか。人びとによると、「プリアムスは、かれの父なるラオメドンの偽誓の報いを受けたのだ」(二) といわれる。それでは、アポロ (三) とネプトゥヌス (四) とが、日傭者のような仕事をしてラオメドンのために働いたということは事実であるか。じっさい、ラオメドンは、両者に報酬を約束しながら、その誓約を破ったのだといわれている。あの預言者と名付けられたアポロが、そのようなむつかしい仕事をさせられながら、ラオメドンがその約束を破るであろうということを知らなかったとは不思議なことだと思う。もっとも、ラオメドンの伯父であり。ユピテルの兄弟であり、海の王であるネプトゥヌス自身が、将来のことを知らないということもふさわしいことではなかった。というのは、ホメロスの筆にしたがえば、(五) この詩人はローマ建国以前のひとであったといわれるが、ネプトゥヌスは、その子孫がローマを建設したアエネアス一族について、大事業を預言しているのであって、この神はまた、ウェルギリウスの書に告白しているように、

「みずからの築いたトロヤの城壁を」(六)

「根底からくつがえそうと思っていたのに」。

ホメロスの語るところによると、アエネアスがアキレス(七)によって殺されることのないように、雲につつんで拉し去ったのである。それゆえ、ネプトゥヌスやアポロのような偉大な神々も、ラオメドンがかれらに約束した報酬を払わないだろうということは知らずに、トロヤの城壁をただで、恩知らずのもののために築いたのである。異教徒たちは、このような神々に偽誓をするよりも、そのような神々を信じる方が悪いことではないかをよく考えてみるがよい。じっさい、このことは、ホメロス自身もなかなか信じなかったのであって、伝説によれば、両者ともかの偽誓の損害を受けたのに、ホメロスによれば、ネプトゥヌスはトロヤ人と戦ったが、アポロはトロヤ人の味方であったことになっている。それゆえ、異教徒は伝説を信じるのなら、このような神々を信じることを恥じ、また伝説を信じないなら、トロヤ人の偽誓を引き合いにだしたりせずに、神々はトロヤ人の偽誓を罰してローマ人の偽誓を是認したことを奇異に思わなければならない。じっさい、このようにして、カティリナの陰謀は、あのように大きく、またあのように堕落していたローマにおいて、「腕力と弁説が偽誓と市民の流血とによって、その生活を支えているような」連中の大勢を味方にしたのであるか(八)。じっさい、あのようになんども元老院議員がその決定において、またあのようになんども人民がその投票やそのほか公開の集会でとりあつかわれる事件において誤ったのは、かれらが偽誓をすることによって罪を犯したからではなかろうか。すなわち、習慣ははなはだしく腐敗していながら、誓いをたてるむかしからの習慣がなお、なくなっていなかったのであるが、それは、人びとが宗教的な恐怖から

して、重い罪を犯すことをつつしむように行われたのではなくて、他の重い罰の上に、なお偽誓が付け加わるように行われたのである。

(一) 本書第一巻第三章および第四章参照。

(二) プリアムスについては、本書第一巻第二章(注)六を参照。ラオメドンはプリアムスの父で、かつてトロヤの王であったが、かれは神々に与えた誓いを犯した。トロヤの壊滅は、ラオメドンのこの偽誓のゆえであるとされた。

(三) アポロはギリシア神話のアポロンである。ゼウス(ユピテル)の子で、知恵の神とみなされた。

(四) ネプトゥヌスはギリシア神話のポセイドンで、ゼウス(ユピテル)の兄。海の神とみなされた。

(五) ホメロス『イリアス』二〇の二九三―三三九。

(六) ウェルギリウス『アエネイス』五の八一〇―一一。

(七) アキレスはペレウスと海の女神テティスの子で、トロヤへ遠征したギリシアの英雄。ホメロスの『イリアス』の主人公である。

(八) サルスティウス『カティリナの陰謀』一四。

第三章

姦通は神々の間でもしばしば行われたのであるから、神々がパリスの姦通によって気を悪くしたというようなはずはない

それゆえ、かのトロヤの帝国をささえていた[一]といわれる神々は、かれらが優勢なギリシア軍によって打ち破られたのであるから、トロヤ人の偽誓に対して怒ったのだというふうに話をつくってみる理由はない。なおまた、これも神々の弁護のためにいわれることであるが、パリス[二]の姦通に怒って、神々はトロヤを見捨てたのでもない[三]。じっさい、神々は、罪を罰するよりも、むしろ、罪を教え、罪に唆かすのがつねであった。サルスティウスは、「自分の聞くところによると、ローマ市は、アエネアスに導かれて、指導者として逃れいで、定住するところもなく、さまよいまわっていたトロヤ人がはじめて住まった」といっている[四]。それゆえ、神々がパリスの姦通を罰すべきものであると考えたのであるなら、アエネアスの母がそのような罪を犯したのであるから、むしろ、ローマ人こそ——あるいはすくなくともローマ人もまた——その罰を受けるべきであった。しかし神々は(他の例は省略するとして)ウェヌス[五]がアンキセス[六]とともに犯してアエネアスを生んだその恥ずべき行いを、その仲間のウェヌスのばあいはとがめなかったのであるから、どうしてパリスのばあいに、それを憎むことができようか。ウェヌスがそれを犯したばあいには、ウルカヌス[七]が同意したが、パリスのばあいにはメネラオス[八]が憤激したからであろうか。ウルカヌスが同意したというのは、神々はその妻について、嫉妬するということは、まったくないのであって、その妻を人間と共有しても平気であるからだとわたしは思う。しかし、わたしは、伝説を嘲笑してこのように重大な問題をまじめに取り扱わないと考えられるかも知れない。それなら、わたしは、アエネアスは、ウェヌスの子ではないと考えてもよい。わたしはそれを承認しよう。しかし、そのばあいには、ロムルスをマルスの子と考えることも

許されない。もしも、ロムルスがマルスの子であるなら、どうしてアエネアスはウェヌスの子であってはならぬであろうか。それとも、神々が人間の女と交わるのが正しいのに、人間の男が女神と交わることが正しくないというのか。ウェヌスの法によって、マルスにその交わりのさいに許されていたことが、それ自身の管轄区内においてウェヌスに許されないとは、なんと無情な、というよりはむしろ信じがたい規定であろう。しかしながら、両方の伝説とも、ローマの権威によって確認されている。むかし、ロムルスがマルスを父と考えたのと同様に、わたしたちに近い代にカイサルはウェヌスを祖母と考えたのである。(九)

(一)　ウェルギリウス『アエネイス』一の三五二。
(二)　パリスは別名アレクサンドロスとも呼ばれ、トロヤ王プリアモスの子。
(三)　ウェルギリウス『アエネイス』二の六〇一―三。
(四)　サルスティウス『カティリナの陰謀』六。
(五)　ウェヌスはギリシア神話アプロディテと同一視され、庭園・草花などの女神。
(六)　アンキセスはカピュスとダルダノス王の娘テミステとの子。ウェヌス(アプロディテ)に見染められ、アエネアスを生んだ。
(七)　ウルカヌスはウェヌスの夫。
(八)　メネラオスはゼウス(ユピテル)の娘ヘレネ(ヘレナ)の夫であるが、パリスがヘレネを奪ったことからトロヤ戦争がおこった。
(九)　ローマ人は女神ウェヌスをカイサル一族の始祖としたとされる(スエトニウス『皇帝伝――カイサル』六)。

第四章

人間が神々の子孫であると偽ることは、ためになると主張するウァルロの説について

「それでは、そのようなことを信じるのか」というものがあるかもしれない。わたしは、そのようなことをけっして信じない。じっさい、異教徒のもっともすぐれた学者であるウァルロ(一)も、そのようなことが虚偽であることを、もっとも大胆率直にではないが、大体認めているのである。しかし、かれによると、勇敢な人びとが、たとえ、虚偽であっても自分が神々の子であると信じることは国家のために有益なのであって、このように信じると、人間の心は、そのいわば、神的な血統に確信をいだいて、いっそう大胆に大事業にとりかかり、いっそう強力にそれを遂行し、こうして、その自信によって、いっそう大きな成功を収めるのである。わたしは、できるかぎり自分の言葉でそれを述べたのであるが、このようなウァルロの説が、どれほど大きな余地を虚偽のために認めるものであるかは、容易に推察されよう。そして、神々自身についてでさえも、虚言が市民のためになると考えられるところにおいては、祭事と、いわゆる神事について、もっと多くのつくりごとがなされることもできたであろうということが理解されるであろう。

(一) ウァルロは前一一六年から前二七年。ローマの著述家。キケロの友人でもあり、哲学的には折衷家

であった。アウグスティヌスはウァルロを異教徒のすぐれた学者として評価している（本書第六巻第二章他）。ウァルロは広い分野にわたって百科全書的著作を六二〇巻に書いたといわれるが、大部分が失われ、今日では『農業論』など二著を除いては断片のみが残っている。とくに四十一巻からなる『古代史』が失われたのは、アウグスティヌスの『神の国』を理解するにあたって大きな損失であるといえよう。

第五章

神々は、ロムルスの母のばあいに、それを罰しなかったのであるから、パリスのばあいに、密通を罰したとは考えられない

しかしながら、ウェヌスは、アンキセスを夫としてアエネアスを生み、また、マルスは、ヌミトル(一)の娘を妻としてロムルスを生むというようなことが可能であったかどうかは未解決にしておこう。というのは、それとよく似た問題が、わたしたちの聖書からも起るのである。すなわち、神にそむいた天使たちは、人間の娘と交わって巨人族、すなわちとくに、当時地上をみたしていた巨大で強力な人間を生んだかという問題である。それゆえ、われわれの議論は、さしあたって、ただつぎの二つ(二)のばあいのみを対象とすることとしよう。すなわち、異教徒の書のうちに、アエネアスの母とロムルスの父(三)とについて語られていることが真実であるなら、神々

自身のばあいには、たがいに平気でこらえられる姦通を人間が犯したばあいには、どうして神神に不快に思われるのであろうか。また、それらのことが虚偽であるなら、神々が、神々自身のばあいには、たとえ虚偽であってもそれを喜ぶのであるから、人間がじっさいに犯したばあいにはそれに怒るわけもないのである。なおそのうえに、ウェヌスについても、その伝説を信じないでおくためにマルスについてその姦通のことを信じないなら、ロムルスの母についての一件は、神との交わりを言い訳にして弁護されることができなくなる。さて、ロムルスの母は、ウェスタの女神の巫女(みこ)であった。(四)それゆえ、神々は、トロヤ人に、パリスの私通の罰を加えたよりも厳重にローマ人にかの恥ずべき瀆神の罰を加えるべきであった。というのは、むかしはローマ人自身も、ウェスタの巫女が恥ずべき行いをしているのを見つけたばあい、かの女を生埋めにしたのであるが、普通の姦婦は罰せられはしても、死刑に処せられることはなかったからである。それほどまで厳重に、むかしのローマ人は、人間の臥所に対するものよりも、神の聖所と考えていたものに対する罪を罰したのである。

(一) ヌミトルはラティウムのアルバ・ロンガ王の長子で、アエネアス王家第十六代目のアルバ王。ヌミトルの娘はレア・シルウィアである。ロムルスとレムスの双子は、軍神マルスとレア・シルウィアとの間に生れたといわれた。
(二) すなわち女神ウェヌス。
(三) すなわち軍神マルス。
(四) ウェスタについては、本書第二巻第二十九章(注)二参照。女神ウェスタにはウェタリスと呼ばれる

巫女が仕え、永遠の火が消えないよう守っていなければならなかった。ウェタリスは三十年間処女でこのつとめをおこなわねばならず、処女の戒律を犯したときには生き埋めにされた。ロムルスの母レア・シルウィアはこのウェタリスであったといわれる。

第六章

ロムルスは、その弟を殺したのに、神々はその罪を罰しなかった

もう一つの例をあげよう。すなわち、もしも人間の罪がそれらの神々にとって、ひどく不快に思われ、それらの神々はパリスの行いによって気を悪くして、トロヤを見捨てて、剣と火とにゆだねたのなら、ギリシアの夫に加えられた侮辱が神々を動かして、反トロヤ的な行動をとらせた以上に、ロムルスがその弟を殺したことは、神々を動かして反ローマ的な行動にかりたてたであろう。すでに支配している国における密通よりも、成立しつつある国における弟殺しの方が神々の心をいらだたせるであろう。なおまた、わたしたちの当面の問題には、この弟殺しは、ロムルスが他人に命じてやらせたのか、かれ自身がやったのかということは、大してかかわりがないのであるが、このロムルスがみずから手を下したということについては、多くのものが恥しらずにも否定し、また、はずかしがって疑い、また、遺憾に思って偽りかくしているのである。それゆえ、わたしたちとしてもまた、多くの作家にみえる証拠をよく考えて、こ

の問題をもっと精細に研究することに手間をかけようとは思わない。ロムルスの弟が殺された——しかも敵によってでもなく、外国人によってでもなく——ということは一般に認められているところである。もしも、ロムルスがこの罪を実行し、あるいは命じたのであるなら、ロムルスは、パリスがトロヤ人の首領であった以上にローマ人の首領であったが、なにゆえ、かの他人の妻を強奪したものが、トロヤ人の身に神々の怒りをよびおこしながら、この自分の弟を亡きものとしたところのものが、ローマ人のために同じ神々の保護が与えられるようにしたのであるか。しかしまた、この兇悪な罪がロムルスの行為にも命令にもかかわりがなかったのなら、その罪はどうしても罰せられなければならなかったのに、ローマ全体がそれに注意しなかったのであるから、ローマ全体がその罪を犯したのであり、しかも、ただの弟殺しではなくて、それよりも兇悪な父殺しをやったわけである。(二) というのは、ロムルスもその弟もともにローマの建国者なのであって、一方が他方の兇悪な罪によって、亡きものとされて支配者となることができなかったからである。わたしのみるところによると、トロヤが神々に見捨てられて滅びるような悪事をなしたといわれるわけもなく、また、ローマが神々の住まうところとなって発展するような善行をなしたといわれるわけもない。それよりもむしろ、神々は征服されてトロヤからのがれて、同じように欺こうとしたもの(ローマ人)のところへ赴いたのではなかろうか。否むしろ、トロヤにとどまって新しくその地に住むところのものを例の仕方で欺くとともに、また、ローマでは、その同じ欺瞞の術をますますふるうことによって大きな栄誉を得て得意になったのである。

(一) ロムルスは祖国の父と見なされている。

第七章

マリウスの将軍フィンブリアによるトロヤの破壊

じっさい、ローマの内乱の最中に、あの不幸なトロヤは、マリウス派の極悪の人物フィンブリア(一)によって、かつてギリシア軍から受けたよりも、ずっと兇悪残酷な仕方で破壊されたが、それはいったい、どのような悪いことをしたからであろうか。すなわち、ギリシア軍が占領したばあいには、多くのものはトロヤからのがれ、また多くのものは捕われても、少くとも奴隷として生き長らえることができたが、これに反して、フィンブリアははじめから何人も容赦するなという命令をだして、トロヤの全市をその全住民もろとも火をつけて焼き払った。このような目に――トロヤはその不義によって怒らしたギリシア人によってではなく、その災厄によって生みだしたローマ人によって――あわされたのであるが、神々はその両方に共通でありながら、この災害を防ぐために、なんの力も借さなかった――というよりもじっさいは、なんの力もなかったのである。そのときもまた、かのトロヤの市がむかしギリシア人から受けた放火と荒廃ののち、そのおかげで再建された

　神々がすべて聖所と祭壇を見捨てて逃げ去った(二)

のではなかろうか。しかし、もしも神々が逃げ去ったのなら、わたしはその理由をたずねるのであるが、しかし、その住民の態度が立派であっただけ、神々の態度がよくなかったことがわかるのである。トロヤ人は、スュラのために、その城市を無傷のまま守ろうと城門を閉したのであるが、それを怒って、フィンブリアは全市に火を放った——というよりも絶滅させたのである。さて、そのときまで、スュラはよりよき党派の首領であり、そのときまでかれは武力によって国家を再建しようと努力していたのであって、このような当初のよき意図の悪しき結果にはまだ出会っていなかったのである。それゆえ、ローマの市民としては、ローマ人のよりよき側に味方してトロヤを守り、ローマの国家の父殺しに抵抗した城門を閉すことよりも、どのような立派な、どのような誠実な、またどのようなローマとの親族関係にふさわしいことをなし得たであろうか。しかしながら、このことがローマ人にとってどれほど大きな破滅をもたらしたかを、神々の弁護者は注意してみるがよい。神々は姦通者たち(トロヤ人)を見捨てて、トロヤをギリシア人の放火に委ねたが、それはその灰からして貞潔なローマが生れでるようにしたのであるなら、なにゆえ、またのちに、神々はローマ人の親族であった同じ国を見捨てたのであるか。この国は、その娘にあたるローマに反抗したのではなく、ローマの正しい方の党派にもっとも堅固でもっとも恭順な誠実を守りつづけたのである。またなにゆえ、神々はその国を破壊されるべきものとして、ギリシア人の勇士にではなく、ローマ人中のもっとも汚れた男に委ねたのであるか、それとも、神々がスュラ派の立場に味方しなかったのであるなら——その立場のためにあわれな市民はトロヤを守って城門を閉したのであるが——なにゆえ、神々は

そのスュラにむかってあのように多くのよい約束や預言をしたのであるか。この場合にも、神が不幸なものの守護者よりも幸福なものの阿諛者であることが認められるのであろうか。したがって、そのときもまた、トロヤは神々によって見捨てられたゆえに破壊されたのではない。ダエモンはたえず欺こうとするものに注意して、そのなし得ることをなしただけである。じっさい、トロヤとともに、すべての偶像が破壊され焼き払われたとき、リウィウスが記している(三)ように、ただミネルウァの像のみはこの神殿のような荒廃のうちに、無傷であったといい伝えられているが、それは神々の賞賛のために、

つねにトロヤを守られた祖国の神々(四)

といおうとするものであったのではなくて、神々の弁護のために、

神々はすべて聖所と祭壇を見捨てて
逃げ去った

といわれるようなことがあってはならぬからであった。じっさい、神々がそのようなことをゆるされたのは、神々の力を証明するためではなく、神々がその場にいたことを認めさせるためであった。

(一)　フィンブリアは、スュラの政敵となったマリウス(本書第二巻第二十三章参照)派に属する将軍であった。アジア州の指揮官としてスュラ派に最後まで抵抗したが、前八四年自害した。
(二)　ウェルギリウス『アエネイス』二の三五一―二。
(三)　リウィウス『歴史』八三(散逸部分)に記されていたものとみられる。

（四）ウェルギリウス『アエネイス』九の二四七。

第八章

ローマはトロヤの神々に委ねられるべきであった

それゆえ、トロヤ自身によってなされた証明ののちに、(一)ローマの防衛をトロヤの神々に委ねたとは、なんと愚かなことだろう。トロヤがフィンブリアの攻撃に屈服したとき、それらの神神がすでに住みついていたというものがあるかもしれない。それでは、ミネルウァの像が荒廃のうちにたっていたのはどういうわけであるか。なおまた、それらの神々は、フィンブリアがトロヤを破壊したとき、ローマにいたのなら、ローマ自身がガリア人によって占領され焼き払われたときトロヤにいたかもしれない。しかしながら、神々はその耳にはもっともさとく、その運動はもっとも敏速であるから、鵞鳥の声にもすぐかえってきて、すくなくとも、まだ敵の手に帰していなかったカピトリウムの丘を守ったのである。もっとも、他の場所を守るためには、ローマに帰れといわれることがあまりにも遅すぎたのである。

（一）神々の無能力ぶりがトロヤにおいて証明されたのちに――。

第九章

ヌマ王治下の平和は、神々の与えたものと信じられるべきであるか

それらの神々はまた、ロムルスの後継者であるヌマ・ポンピリウス(一)を助けたので、ヌマはその治世の全体を通じて、戦時に開かれているのがつねであるヤヌスの門(二)を閉じることができたのであるが、それはヌマがローマ人の間に多くの祭事を定めたことの報賞によるのだと信じられている。じっさい、ただ、この人物がそのような長い平和の時期を有益な仕事に費やし、有害きわまる好奇の心をすてて、真実の神を真実の敬虔をもって探究することを知っていさえしたなら、かれにそのような平和を得たことの祝辞を述べねばならなかったであろう。ところがじっさいは、それらの神々がかれにかの平和を与えたのではなく、それらの神々は、かれがけっして無聊(ぶりょう)に苦しんでいないのをみたなら、おそらくそれほどかれを欺くことはなかったであろう。というのは、神々は、かれに仕事がないのをみればみるほど、ますますかれに仕事をさせたかったのである。すなわち、ヌマがどのように努力し、どのような術をつかって、そのような神々を自分自身や、その国に結び付けることができたのであるかをウァルロが述べているが、それは神の御意にかなうなら、べつに場所をつくって論じることにしよう。(三) しかしいまは、神々の恩恵を問題にしているのであるから、平和は大きな恩恵であるといわねばならないが、しかしそれは真実の神の恩恵なのであって、日の光りや、雨や、その他の

生活の資と同様、恩知らずのものや、それを受けるに価しないものにも与えられるのがつねである。(四) しかし、それらの神々はそのような大きな善をローマやヌマ・ポンピリウスに与えたのなら、なにゆえ、ローマ帝国はその後けっして、もっと賞賛に価する時代にも、与えなかったのであるか。神事は、それがはじめて定められたばあいのほうが、定められてから行われる時代よりも有効であったのであろうか。しかしながら、ヌマの時代には、それらの神事は存在しなかったのであって、ヌマがそれらを加えて存在させたのであるが、のちには、それらの神事はすでに存在したのであって、それらから利益が得られるように守られたのである。それでは、あの四十三年——あるいは他の説によると三十九年——がヌマの支配の下に、あのように長く続いた平和のうちに過ごされたのは、その後神事が定められ、そしてそれらの神事によって招かれた神々がローマの支配者と守護者となったにもかかわらず、建国からアウグストゥスにいたるあの多くの年ののちに、第一次ポエニ戦争以後、ローマ人が戦争の門を閉ざすことができた年としては、わずかに一年が一大奇跡のようにあげられるのみである。(五)

(一) ヌマ・ポンピリウスについては、本書第二巻第十六章(注)三参照。

(二) ヤヌスは門の守護神である。門は前後に向いているところから、この神も前後に向いた二つの頭をもつ姿で表わされた。扉は戦時に開かれ、平和時には閉ざされる習慣であった。ローマの歴史のなかで、三回だけ扉が閉ざされたといわれる。すなわち、ヌマ・ポンピリウス、マンリウス・トルクァトゥス、オクタウィアヌスの三人の治世のときである。

(三) 本書第七巻第三十四章参照。

(四)「マタイによる福音書」五の四五。
(五) 前二三五年。第一次ポエニ戦争がおわったのは前二四一年であった。

第十章

ローマはヌマの治世に進んだ道によって平静で安全であることができたであろうのに、あのような戦争の狂暴によってその国土を増大したことは、のぞましいことであったろうか

それとも、人びとは、休みなくたえず続いておこる戦争によってはじめて、ローマ帝国はあのように広大にその領土を拡げ、あのようにすばらしい栄誉をもって世に聞えるようになれたのだと答えるであろうか。いかにも名答である。帝国は、大きくなるためには、なにゆえ平静を失わねばならぬのであろうか。人間の身体についても、普通の身長で健康であるほうが、たえず病気に悩まされながら、巨人のような大塊となり、そのように大きくなったのちも安らかであることができずに、肢体が大きくなるにつれて、ますます大きな禍いに悩まされるのよりも、まさっているのではなかろうか。サルスティウスが簡単に触れているところの時代が、(一)ずっと続いていたなら、どのような困ったことが起ったであろうか。いやむしろ、最善であったのではなかろうか。その時代というのは、サルスティウスが「それゆえはじめに王は(というの

は、王こそ、諸国において支配権の最初の名称であったから)相分れて、あるものは精神を鍛練し、またあるものは身体を鍛練していた。当時はまた人間生活は欲望なしにおくられ、各人は自分のもので満足していた」といっている時代である。それでは、帝国があのように強大となるためには、ウェルギリウスが

「ついに時代は徐々に悪化し、その色はあせ戦争の狂暴と所有の欲望がおこった[二]」

といって非難しているところのことがおこらねばならなかったのであろうか。しかしながら、そのように多くの戦争を企て行ったことに対するローマ人の理由は、もちろん正しいものである。すなわち、不当に侵入してくる敵に対して、抵抗せねばならなかったが、しかしそれは人間の賞賛を得ようとする欲望によってではなく、身の安全と自由を守る事情によってであるというのである。もちろん、そうであったろう。というのは、サルスティウス自身も述べているように「ローマの国家がその法律と習俗と領土とによって広大となって、まったく繁栄して強力であるように見えたのち、人間に関する事柄のつねとして、この富裕から嫉妬がおこった。そのゆえに、近隣の王と国民とは戦争しかけてきた。友邦のうち援助したものは少なかった。他のものは恐怖のあまり、危険からその身を引いたのである。しかし、ローマ人は平素も戦時も注意を怠らず、すばやく事を進めて戦備を整え、たがいに励ましあって、敵をむかえ打ち、武力によって自由と祖国と家族とを守った。そしてその後、勇気によって危険を一掃したのち、ローマ人は同盟国や友邦を援助して、恩恵を受けるよりはむしろ与えることによって、新しい友邦関係を得たのである[三]」。このような方法によって、ローマが大きくなったのは当然であっ

た。しかし、ヌマの治世に、平和があのように長く続いたことは、近隣のものが不法にも侵入して、戦争をしかけたことにかかわらなかったのであるか、それともそのようなことがなかったので、その平和が長く続くことができたのであるか。じっさい、その当時でさえも、ローマは戦争に悩まされながら、しかも武力によって武力に対抗しなかったのなら、敵を、戦闘によらずに打ち敗かし、攻撃を加えずに威嚇して屈服させるように事が運ばれたその方法によって、いつも事が運ばれて、いつもローマはヤヌスの門を閉ざして、平和のうちに統治することもできるであろう。もしも、そうすることができなかったのなら、ローマが平和を享受したのは、かれらの信じた神々の意志によるのではなく、ローマに戦争をしかけなかった隣国人の意志によるのである。もっとも、そのような神々が、他の人間がそれを欲するか欲しないかによってきまるところのものを、ある人間に与えて自分の恩恵として売ろうとしたのなら話は別である。じっさい、それはかれら自身の邪悪な性質からしても大切なことであるが、それらのダエモンは、許されるかぎり、邪悪な精神を威嚇したり、刺戟したりする。しかし、もしもそれらのダエモンがいつもそうすることができて、あるもっとかくれた強い力によってかれら（ダエモン）の努力を妨げるような手段が別にとられないなら、ほとんどいつも、人間の情念によっておこる平和と戦争の勝利はいつもそれらのダエモンの意のままであろう。しかしそれにもかかわらず、平和と戦争がたいてい、それらのダエモンの意に反しておこるということは、ただ、多くの虚偽を語って、ほとんど真実を言明することも暗示することもない伝説だけではなく、ローマの歴史自体が証明している。

(一) サルスティウス『カティリナの陰謀』二。
(二) ウェルギリウス『アエネイス』八の三二六―七。
(三) サルスティウス『カティリナの陰謀』六。

第十一章

クマェのアポロの像の涙は、その神がたすけることのできなかったギリシア人の災害を示すものだと信じられた

あの有名なクマェ(一)のアポロが、アカイア人(二)とその王であるアリストニクス(三)に対して、戦争が行われていたときに、まる四日間泣いたといい伝えられているのも他の理由によるのではない。この不思議なしるしにおそれをなして、腸卜者たちがそのアポロの像を海に投じなければならぬと考えたときに、クマェの老人たちは異議をとなえて、さきに、アンティオクス(四)に対する戦争のばあいにも、ペルセウス(五)に対する戦争のばあいにも、そのような不思議なしるしが同じ像に現われたと語り、そしてローマにとってよい結果になったので、元老院の決定によって、かれらの信じるその同じアポロに、贈物がなされたと証言した。それから、もっと練達のものと考えられた腸卜者がよばれたのであるが、かれらの答えによると、クマェはギリシアの殖民地であるから、アポロの涙はローマ人にとってよい前兆であり、そしてアポロは泣き悲しむこと

によって、かれがやってきた自分の国、すなわちギリシア自身に不幸と災厄を告示したというのであった。それからまもなく、アリストニクスが打ちやぶられ、捕えられたという報告があったが、それはもちろん、アポロの欲せず、悲しんだところであって、それをアポロはその石像の涙によって現わしていたのである。したがって、ダエモンの風習が詩人たちのつくりごとのようではあるが、しかも真実に似ている詩によって記述されているのはまったく的はずれのわけではない。すなわち、ウェルギリウス(六)によれば、ディアナ(七)はカミラ(八)のために悲しみ、またヘルクレスは死のうとするパルラス(九)のために泣いた。そしてそのゆえにおそらく、ヌマ・ポンピリウスもまた、平和を満喫しながら、なにによってそれが与えられるのであるかを知りもせず、たずねもせず、ひまなままに、いったい、どのような神々にローマの安寧と支配とを委ねるべきであるかと考え、しかも、かの真実で全能な最高の神がこの地上のことを御心にかけられたとは思わず、ただ、アエネアスがもたらしたトロヤの神々がトロヤの王国をも、また、アエネアス自身がたてたラウィニウム(一〇)の王国をも長く守ることができなかったのを思いおこして、他の神々を求めねばならぬと考えたのであろうが、すでにロムルスとともにローマに移っていたものであろうと、アルバ(一一)の没落ののちに、いつか移ってくるものであろうと、それらの神々を、いわば闘争する神々の監守者に、あるいはいわば、無力な神々の援助者にしようとしたのである。

(一)　クマェはカンパニアの海岸の町。
(二)　紀元前二世紀前半、ギリシアのいくつかの都市で新興無産階級が政権をとり、アカイア同盟をつく

り、ギリシア解放戦をはじめたが、前一四六年、ローマ将軍ムンミウスによってコリント市が占領され、戦いは終結した。

(三) アリストニクスは生年不詳、前一三二年に小アジアのペルガモンのローマからの独立闘争を指導、貧民・奴隷を率いてローマ市民に反抗したが、のちローマ軍に捕えられ、前一二九年に処刑された。

(四) アンティオクスは前二四一年頃から前一八七年、シリア王、通称大王と呼ばれる。セレウコス朝の回復を意図してフェニキア、アルメニアへ領土を拡大し、東方に進出していたローマとも戦ったが失敗した。

(五) ペルセウスは前二一三年頃から前一六六年頃。マケドニア王。ギリシアなどに勢力を拡張し、ローマと戦ったが敗れ、前一六八年に捕えられた。

(六) ウェルギリウス『アエネイス』一一の八三六—四九。

(七) ディアナはギリシアのアルテミスと同一視されるローマの樹木と多産の女神。

(八) カミラは『アエネイス』に登場するウォルスキ人の王の娘。エトルリア人の王アルンスに殺されるが、女神ディアナはかの女のために復讐しアルンスを殺害する。

(九) パルラスは『アエネイス』に登場するエウアンドロスの子。トロヤ人アエネアスを助けて、トゥルヌスと戦って討たれた。

(一〇) イタリア半島に上陸したアエネアスは、北上してラティウムの王の娘ラウィニアと結婚。町を建設して、それに妻の名を冠したといわれた。

(一一) アルバ・ロンガ市のこと。ローマ市の母市である。アエネアスの息子アスカニウスの創設とされた。

第十二章

ローマ人は、ヌマが定めたもののほかに、じつに多くの神々を加えたが、それらの神々の多数はすこしもローマ人の助けにはならなかった

しかし、それにもかかわらず、ローマはヌマ・ポンピリウスがそこではじめたあのように多くの神事で満足だとは考えなかった。すなわち、ユピテル自身もまだその最高の神殿はなかったのであって、タルクィニウス(一)がはじめてそこにカピトリウムをつくったのである。また、アェスクラピウス(二)がローマに地位を得ようとしてエピダウルスからきたが、この堪能な医師はこのもっとも高貴な都市において、その技術をはなばなしく発揮しようとしたのであった。神々の母(三)もまた、ペシヌンス(四)とかいうところからきた。じっさい、その子がすでに、カピトリウムの丘にあって支配しているのに、母がまだかくれた場所にあって、知られないということはふさわしくないことであった。しかし、この女神は、神々の母であるから、そのある子のあとを追うてローマにきただけではなく、他のあとを追う神々に先んじてきたわけである。じっさい、この女神は、それからずっと後に、エジプトからきたキュノケファルス(五)の母であったとしたら、おどろくべきことである。また、フェブリス(六)の女神の子であったかどうかは、その曾孫であるアェスクラピウスがよく知っているであろう。しかし、その女神の出生がどうであろうとも、異国からきた神々は、ローマの市民であるその女神を身分の卑しいものとよぶことをあえてし

ないだろうとわたしは考える。このように多くの神々の保護のもとに(だれがそれらの神々を数えあげることができるであろうか。それらには土着のものも外来のものもあり、天のものも地のものもあり、地下のものも海のものもあり、泉のものも川のものもあり、ウァルロのいうように、確かなものも不確かなものもあり、動物におけるようにあらゆる種類の神々においても、男性のものも女性のものもあるが)――それゆえ、このように多くの神々の保護の下にローマはおかれていたのであるから、あのように大きく、おそろしい災害――多くのもののうちわずかなものだけを、わたしがここに述べようとする――によって不安にされ、悩まされたようなことはなかったはずである。じっさい、ローマは、いわば、狼煙をあげてのように、犠牲の大きな煙によって、あまりにも多くの神々を、その保護のためによび集めて、それらの神々に神殿や祭壇や犠牲や神官を設け定めたのであったが、そうすることによって、ただそのために、これらのことがとり行われるべきである最高真実の神の御心をそこなったのである。そしてローマは、神々が少いほどその生活は幸福であったのに、大きくなるにつれて、大きな船が多くの船員を必要とするように、ますます、多くの神々を招かねばならぬと考えた。わたしが思うのに、ローマは、のちの悪い生活と比べれば、まだよい生活をおくっていた時にその保護を受けた少数の神々は、もはや、大きくなったローマを助けることはできないと不安に思ったのであろう。じっさい、最初に、諸王の治世においても、(わたしがすでに上に述べたヌマ・ポンピリウスは別として)ロムルスの弟を殺させるにいたった不和と闘争の禍悪はなんと大きいものであったろう。

(一) タルクィニウスは、前六世紀の最後のエトルリア系ローマ王。専制的で性格の粗暴さゆえに、「驕慢王」(スペルブス)と呼ばれた。
(二) アェスクラピウスは、ギリシア名アスクレピオスで医神。崇拝の中心となっていたのはペロポネソスのエピダウルスであったが、前二九四年にローマに導入された(疫病流行にあたって)(リウィウス『歴史』一〇の四七)。
(三) 神々の母とはキュベレ女神(本書第二巻第四章参照)。
(四) ペシヌンスは小アジアの町。その像のローマへの移入については、本書第一巻第三十章参照。
(五) キュノケファルスについては、本書第二巻第十四章参照。
(六) フェブリスについても同上の箇所参照。

第十三章

どのような権利によって、またどのような契約によってローマははじめてその妻を得たのであるか

どうして、すでにその夫のユピテルとともに、「世界の主でトガをまとう国民であるローマ人をいつくしんでいた」(一)ユノも、またウェヌス自身も、その愛するアエネアスの子孫をたすけて、かれらに公明正大な仕方で妻を得させることができなかったのであろうか。この妻が得られなかった不幸は、じつ

その義父と戦いを交えねばならなくなり、また、あわれな妻もこのこうむった不法のゆえに、まだ夫に恨みを抱いているあいだに両親の血をもって新婦のよそおいをさせられた。いずれにしてもこの争いにおいて、ローマ人はその隣国人を征服したことはいうまでもない。そのように近く、また境を接しているものが、双方とも、どれほど多くのどれほど悲惨な傷をしたり、死をとげたりして、それらの勝利は得られたことだろう。一人の義父、カイサルと一人の婿、ポンペイウスとについて、しかもカイサルの娘でポンペイウスの妻(二)がすでに死んでいたときに、どのようにはげしく、またどのようにただただ悲痛を感じて、ルカヌスは叫んでいることだろう(三)。

「内戦ではなくて、エマティアの平原でおこなわれ、正義の名が犯罪に与えられた戦いについて、わたしたちはうたう」

それゆえ、ローマ人は戦いに勝ったのであるが、かれらはそうして、義父の血によって汚れた手をもって、そのあわれな娘たちを無理やりに抱こうとしたのであり、また、娘たちは、戦いに勝った夫の機嫌をそんじないように、殺された親のために泣くこともできず、まだ夫が戦っているときは、だれのために祈るべきかを知らなかった。そのような婚礼をローマ人にさせたのは、ウェヌスではなくてベルロナ(四)であった。それともまた、あの地下の復讐の女神アルレクト(五)は、かつて、ユノの願いにうごかされてアエネアスのためにならぬことをしたときよりも、すでにユノがローマ人に好意をよせていたとき、なお多くかれらのためならぬことをすることができたのかもしれない。アンドロマカ(六)は、捕われていたとき、それらのローマ人の妻が人妻

となったときよりも幸福であった。それは奴隷的なものであったけれども、アンドロマカを抱いたのちは、ピュルスはトロヤ人をだれも殺さなかった。ところがローマ人は、その娘をすでに妻として迎えて抱いていたのに、義父を戦争で殺した。アンドロマカは、征服者のものとなったのち、ただ自分の国のものの死を嘆けばよいのであって、おそれるにはおよばなかった。サビナの女は、(七)戦っているものと結ばれていながら、夫がでかけているときには、親の死をおそれ、夫が帰ってくるときには、その死を悲しんだのであるが、その死も悲しみも自由に現わすことができなかった。すなわち、近隣の国民や、兄弟、親の敗北のために、恭敬にも悲しむか、あるいは夫の勝利のゆえに、残忍にも喜ぶかのいずれかであった。なおそのうえに、戦運はさまざまに変ったから、夫を、親の剣に打たれて失うものもあれば、また、親と夫とを、両者が戦いあって失うものもあった。じっさい、ローマ側においても、危険はけっして軽少ではなかったのであって、ローマはついに包囲されて、ローマ人は市の門を閉ざして、その身を守っていたのである。そして、奸計によってそれらの門が開かれ、敵が城内に侵入したとき、フォルムにおいて、極悪非道の恐ろしい戦闘が、義子と義父とのあいだに行われた。婦女の強奪者もまた打ち破られて、なんども、自分の家の中に逃げ込み、それ自体恥ずべく、また悲しむべきものであった以前の勝利のいわば恥の上塗りをした。しかしそのとき、ロムルスはもう味方のものの勇気に望みを失って、かれらがふみとどまるように、祈ったのであるが、それにちなんでユピテルはスタトル(八)という名を得たのである。しかし、不幸はまだ終らなかったのであって、かの強奪された娘たちは、髪をふりみだして飛び出し、親たちの前に身を投げだして、そ

のまったく正しい怒りを、勝者の武器によってではなく、子の親に対する嘆願によってしずめねばならなかった。そのごロムルスは、その兄弟との協同にたえられなくなって、サビナ人の王ティトゥス・タティウス(九)との共同支配にがまんしなければならなくなった。しかし、自分と双生の弟にさえもたえられなかったものが、どうして長く異国の王にがまんできたであろうか。それで、かれをも殺して、王としての偉大さを増すために支配権を独占したのである。そのようなことは、なんという結婚の要求であろうか。なんという戦争の挑発であろうか。兄弟、親族、盟邦、同信関係のなんという盟約であろう。最後に、そのように多くの神々の保護のもとにありながら、なんという国家生活であろうか。このことについて、どのようなことと、どのように多くのことがいわれるであろうかはあきらかであるが、しかし、わたしたちの注意はなおつぎの時代の考察に向い、わたしたちの論議は他の対象の方へ急ぐのである。

(一) ウェルギリウス『アエネイス』一の二八一―二。トガは、ローマ人の生活と誇りを示す特有の服装であった。
(二) カイサルの娘ユリアはポンペイウスの妻であった。ポンペイウスは、カイサル、クラッススと結んで、前六〇年、第一次三頭政治をおこなったが、クラッススの死(前五三年)によって、カイサルとの対立が表面化していった。ユリアが死んだのは、その前年である。
(三) ルカヌス『ファルサリア』一の二。
(四) ベルロナはローマの戦の女神。軍神マルスの同伴者で、マルスの后あるいは妹といわれる。
(五) アルレクトは、復讐あるいは罪の追求の女神。『アエネイス』のなかでは、アエネアスを憎む女神

ユノが、かれの幸福を黙視できず、アルレクトを呼び寄せる。

(六) アンドロマカは、トロヤの勇士ヘクトルの妻で、ホメロスの『イリアス』では、典型的な貞節な妻として描かれている。トロヤ陥落のさい、ピュルス(アキレスの息子ネオプトレモス)の奴隷となる。

(七) サビナの女については、本書第二巻第十七章参照。

(八) スタトルは「脱走兵防止者」の意で、ユピテルの添え名となった(リウィウス『歴史』一の一四)。

(九) タティウスはサビナ人の王(同上、一の一三)。ローマ人に奪われたサビナ人の女たちの嘆願によって、ロムルスとタティウスは戦いを中止し、共同で統治することとなった。

第十四章

ローマ人がアルバの住民にしかけた戦争の不敬と支配欲によって得た勝利について

それからヌマののちに、他の諸王の治世に、どのようなことがおこったのであるか。アルバの住民が戦争に挑発されたことは(一)、ただそれ自身にとってではなく、またローマ人にとっても、なんという不幸であったことだろう。ヌマの治世のあのように長い平和も尊重されなくなっていたのである。なんとしばしばローマとアルバの軍隊は殺し合って、双方とも国力の減退をきたしたことだろう。すなわち、あの有名なアルバは、アエネアスのアスカニウスが建てたので(二)あって、トロヤよりもほんとの意味でローマの母であったが、ローマの王トゥルス・ホスティリウスによって挑発されて戦い、戦って敗れるとともにまた戦って敗って、ついに双方とも

ことにきまった。すなわち、ローマ側からホラティウスの三兄弟、アルバ側からクリアトゥスの三兄弟がでた。クリアトゥスの三兄弟のために、ホラティウスの二兄弟は敗かされ、殺されたが、兄弟のうち生き残った一人のためにクリアトゥスの三兄弟はたおされた。こうしてローマは勝利を得たのであるが、この最後の戦闘においても、六人のうち無事帰国したのはただ一人というような流血の惨をみたのである。その損害は両方とも、だれが受けたのであるか。またその悲痛はだれがなめたのであるか。アエネアスの部族、アスカニウスの子孫、ウェヌスの血族、ユピテルの孫ではなかったか。じっさい、この戦争もまた、娘の国が母である国と戦ったのであるから、内乱以上のものであった。この三つ児の兄弟の最後の勝利を決する戦闘のほかに、なお兇悪で恐ろしい不幸が加わった。すなわち、ローマ人とアルバの住民とは、以前仲がよかったので(隣人であり同族であった)ホラティウス兄弟の姉妹はクリアトゥスの一人に婚約していた。この姉妹はその勝った兄弟が殺された婚約者の武器をたずさえているのをみたとき、泣いたので、その兄弟によって殺された。このただ一人の婦人の感動は、ローマ人全体の態度よりも人間らしいものであったように、わたしには思われる。かの女は相互の誓約によって夫ときめていたもののために悲しんで、あるいはまた、その姉妹を妻にやろうと約束していたところのものを、殺した兄弟自身のために嘆いて、涙を流したのかもしれないが、それはとがめるべきものではないとわたしは考える。じっさい、ウェルギリウスによれば、アエネアスは、自分の手にかけて殺した敵のために嘆いたといわれるが、それが賞賛されるのはなにゆえ

であるか。マルケルルス[三]は、シラクサエ市がすこしまえに、その栄光の絶頂にあったのに、自分の手で突然たおされたことを思いおこし、そしてすべてのものの免れない共通の運命を考えて涙を流して悲しんだのはなにゆえであるか。人間としての感情から、兵士たちが自分の打ち敗かしたときのために、泣いてさえもなお賞賛されたのであるから、か弱い女が自分の兄の殺した許婚者のために泣いても、それが罪と考えられないようにしたいものだと思う。かの女が兄の手によって許婚者に加えられた殺害を嘆いていたときに、ローマはその母である都市に対して、そのように破滅的な戦争をしかけ、敵も味方も、同族のものがそのように多くの血を流して勝利を得たことを喜んでいたのである。

なんのために、賞賛とか勝利とかいう言葉が口実として出されるのであるか。不健全な考え方の邪魔ものを取り除いて、不逞の行為をありのままに認め、ありのままに考え、ありのままに判断しよう。トロヤの密通の罪が告発されたように、アルバの罪も告発するがよい。そのようなものはなにも、またそれに似たものはなにも見いだされないのである。それはまったく、怠惰になれた

「兵士とすでに勝利に縁のなくなった軍隊にトゥルスが武器を[四]」

とらせるためであった。それゆえ、まったく、この邪悪な心のために、盟邦や同族との戦争という恐ろしい罪が犯されたのであるが、この野心の大きな悪徳について、サルスティウスはついでながら簡単に触れている。すなわち、かれは、人間が欲望を抱かずに生活し、各人がその所有に十分満足していた古い時代のことをほめながら簡単に述べたのち、「しかし、アジアにお

いてキュルスが、またギリシアにおいてスパルタ人とアテナイ人とが都市を征服し、支配欲を戦争の十分な理由と考え、もっとも大きな領土をもっとも大きな栄誉としはじめたのち（五）」云々と、かれが語ろうと思ったことを語っている。わたしはかれのこの言葉を引用しただけで満足しよう。この支配欲は大きな禍いをもって人類を苦しめ、悩ますのである。この支配欲によって当時ローマは征服されながら、アルバを征服したことを喜び、自分の重罪を賞賛して栄誉とよんでいたのであるが、それは、わたしたちの聖書もいっているように、「罪人はその魂の欲望をほこり、不義をなすものは祝福される（六）」からである。それゆえ、事物から虚偽の被覆と欺瞞の偽装をとり除いて、事物がありのまま見られ、吟味されることにしよう。なんびともわたしに、これこれのものは、これこれのものと戦って勝ったから偉大であるといってはならない。剣闘士もまた戦い、勝ち、そしてその残酷は賞賛をもって報いられる。しかし、そのような武力による栄誉を求めるよりも、どのような種類の無為であろうとその罰を受ける方がまさっているとわたしは考える。しかしながら、二人の剣闘士がたがいに戦おうとして闘技場にのぼり、両者が父と子であるなら、だれがそのようなことを見るにたえられようか。だれがそれをやめさせないであろうか。それゆえ、一方は母であり、他方は娘である両国間の武力による闘争はどうして光栄のあるものであったろうか。それともこの争闘は剣闘士のばあいとちがっていたのであろうか。すなわち、その場所は闘技場ではなく、広い平原には、二人の剣闘士のかわりに両国民の多くの死体が累々とよこたわっていた。またその争闘はただ競技場の観衆の環視のうちに行われたのではなく、その悪名がおよぶかぎり、全世界の——当時生きていたものにも、

また子孫にも――目の前で不敬な見世物が演じられたのである。しかしながら、ローマの守護者で、いわば、そのような闘争の舞台の観客であるかの神々は、なおその希望が十分にみたされていなかった。それで、クリアトゥスの三兄弟が殺されたために、ホラティウス兄弟の妹が他方の側からの第三の犠牲者として、兄の剣によってたおされて、さきの二兄弟に加えられねばならなかったのであるが、それは勝ったローマが死者の数においても敗けてはならぬからであった。そのご戦勝の結果アルバは破壊されたのであるが、その地は、ギリシア人が破壊したトロヤと、アエネアスが異国人と逃走者の身をもってその王国をたてたラウィニウム(七)とののちに、かのトロヤの神々が住まっていた第三の場所であった。しかしそれらの神々は、いつもの習慣で、おそらくそこからも移り去っていたので、そのゆえにアルバは破壊されたのである。すなわち、「この国の頼みとした神々はみな、そこから離れ去って祭壇も神殿も見捨てたのである(八)」。じっさい、それらの神々は、すでに三たび離れ去っていたことはあきらかであって、四番目にローマがあらかじめそれらの神々に委ねられたのである。すなわち、アルバは、アムリウスがその兄弟を追放していたので(九)、神々の不興をこうむり、ローマは、ロムルスがその弟を殺して支配していながら、その恩顧をこうむった。しかし、アルバが破壊されるまえに、住民はローマに移されていたので、両市から一市ができたというものがある。事実そのようであったとしよう。しかしそれにもかかわらず、アスカニウスの王国でトロヤの神々の第三の住処であったアルバは、母でありながら、その娘にあたる市によって破壊されたのである。なおまた、両市の住民のうち、戦争に生き残ったものが一つのあわれむべき集塊をつくるために、両

方ともあらかじめ多くの血を流したのである。他の諸王の治下にあのようにしばしば繰り返された同じような戦争をあらためて一々述べる必要があろうか。それらは勝利をもって終ったように思われたが、なんどもなんどもあのように多くの血を流して終えられながら、なんどもなんども和約を結んだのちに、義父と義子のあいだに、またかれらの子や孫のあいだに、新しく始められたのである。それらの王のうちのだれも、戦時の門を閉ざすことがなかったということは、この災厄のよい証拠である。それゆえ、諸王のうち、だれもそのように多くの神々に守られながら、平和のうちに国を治めたものもなかったのである。

(一) リウィウス『歴史』一の二二―三。
(二) アスカニウスは、アエネアスがイタリアに来てのち、その地の王ラティヌスの娘と結婚してできた子供で、アルバ・ロンガ市を建設したとされている。
(三) マルケルルスは、前二七〇年頃から前二〇八年。ローマの将軍。第二次ポエニ戦争中、シラクサエ市を攻略した(前二一二年)。
(四) ウェルギリウス『アエネイス』六の八一四―五。
(五) サルスティウス『カティリナの陰謀』二。
(六) 「詩篇」一〇の三。
(七) 本巻第十一章(注)一〇参照。
(八) ウェルギリウス『アエネイス』二の三五二―三。
(九) アエネアスの子アスカニウスが、アルバ・ロンガ市を建設してから八代ののち、ヌミトルとアムリウスの兄弟が王座についていたが、けっきょくアムリウスは、兄のヌミトルを追放して単独支配をし

いた（リウィウス『歴史』一の三）。

第十五章

ローマの諸王は、どのような生活をおくり、どのような最期をとげたか

さて、それらの王の最期はどうであったか。ロムルスについては、かれが天にのぼったと伝えるおもねりへつらう伝説であろうと、ローマのある作家たちの説であろうと、わたしにはかかわりはない。それらの作家の説によると、ロムルスは、その兇暴のゆえに、元老院の命令によって、引き裂かれたのであるが、ユリウス・プロクルス(一)とかいうひとは、偽証をして、ロムルスがかれの前に現われて、かれを通じてローマの人民に自分を神々の列に加えてまつれと命じ語ったようにいわれている。こうしてすでに元老院に反感を抱きはじめていた民衆はおさえられ、なだめられたと伝えられている。じっさい、日蝕もまたおこったのであるが(二)、それが日の運行の一定の法則によっておこったものだということを知らない無教養な大衆は、これをロムルスの功績に結びつけて考えたのである。しかし、そのように考えると、日蝕が日の悲しみであったなら、ロムルスは殺されたのであって、むしろ、その兇悪な罪が日の光が地にむかわないことによっても示されたのだと信じてはならないかのようである。そのようなことは、主がユダヤ人の残酷と不敬とによって十字架にかけられたとき、じっさいにおこったのである(三)。

そのとき日が暗くなったことが、天体の運行の法則に従っておこったのではないということは、当時は、ユダヤ人の過ぎ越しの祝い(四)であったことによって十分証明される。というのは、この祭りは満月のさいにおごそかに行われるのに、規則正しい日蝕は、ただ新月のさいにのみおこるのである。キケロもまた、ロムルスが、あの神々の列に加えられたという説は、事実であるよりもむしろ、想像であることをあきらかに示しているのであって、かれは、『国家論』において、スピキオの口をかりて、ロムルスをほめながら、つぎのようにいっている——「ロムルスは、非常な声望を得ていたので、日が暗くなるとともに突然姿を消したとき、神々の列に加えられたと考えられたのであるが、死すべき人間の身でそのように考えられることは、非常に徳望の高いものでなければ、到底不可能であった」(五)(しかし、「ロムルスが突然姿を消した」といっているのは、あらしの暴威や、殺害や、重罪の秘密の意味であることはあきらかである。ローマの他の作家も、日蝕のほかに、なお突然あらしがおこったといっているのであるが、このあらしが重罪の機会を与え、あるいはそれ自身ロムルスをなきものとしたことはあきらかである)。じっさい、ロムルスからはじめて三代目の王であり、自分自身電光によって滅ぼされたトゥルス・ホスティリウスについて(六)、同じキケロは、同じ『国家論』において、この王もまた、そのような死によって神々の列に加えられたとは信じられもしなかったが、それはおそらく、ロムルスのばあいには真実と考えられ、一般に認められているこの名誉を、他のものにも容易に帰せられることを通俗的にローマ人は欲しなかったからであるといっている(七)。また、キケロは、「カティリナ弾該の演説」において、「わたしたちは、ローマの建設者であるロムルス

を、敬愛の念と世論に従って、不死の神々の地位にあげた[七]」と率直に語っているが、この言葉は、それが事実ではなく、かれの徳望と功績のゆえに、敬愛の念からひろめられた噂であることを示そうとするものであった。キケロは、また、『ホルテンシウス』という対話篇において、規則正しい日蝕のことを述べて、「日が暗くなったときに起ったロムルスの死のさいに生じたような暗黒にしようと……[八]」といっている。このばあい、キケロが、ロムルスの人間としての死について語ることを少しも恐れなかったことはあきらかである。かれは、賛美者としてよりは、むしろ、弁論家として語ったのであるから。

しかし、ローマ人の他の諸王は、病気で死んだヌマ・ポンピリウスとアンクス・マルティウス[九]は、別として、なんと恐ろしい最期を遂げたことだろう。アルバを征服して破壊したトゥルス・ホスティリウスは、さきにも述べたように、一家をあげて電光のために焼きつくされた。プリスクス・タルクィニウス[一〇]は、前王の子らによって滅ぼされた。セルウィス・トゥルリウス[一一]はその義子で王位を継いだタルクィニウス・スペルブス[一二]の恐ろしい不正な手段によって殺された。なおまた、ローマの最善の王に対して、そのような親殺しの大罪が犯されたのに、パリスの姦通を怒って、あわれなトロヤをあのような目にあわせ、ギリシア人の破壊を放火にまかせたという神々は、「神殿や祭壇を見捨てて去った[一三]」のではなかった。なおそのうえに、自分の殺した義父のあとをタルクィニウス自身が継いだのである。この恐ろしい親殺しの大罪を犯したものは、その義父の殺害によって国の王となり、なおそのうえに、多くの戦争に勝利を得て得意になり、その戦利品をもって、カピトリウムを建てたのであるが、ローマ人の神々は、そこから

去らずにその場に居あわせ、とどまりながら、それを黙過して、神々の王であるユピテルがかのそびえたつ神殿——親殺しの罪の産物——において、神々を指導し支配することに甘んじた。じっさい、この王は、まだ罪を犯さなかった時代にカピトリウムを建てて、それから後にその悪業のために、在位中にローマから追放されたのではなくて、王位にあるあいだにカピトリウムを建てたが、王位につくために、もっとも恐ろしい大罪を犯したのである。しかし、ローマ人が後にこの王を王位から追放して城内に入れなかったのは、ルクレティアの凌辱のためであったが、それはかれ自身の罪ではなくて、その子の罪であり、かれの関知しないところであっただけではなく、不在中の出来事であった。かれは当時アルデアの市を包囲してローマ人のために戦っていた。もしも、かれの息子の醜行がその耳にはいっていたなら、かれはどうしたであろうかはわからない。しかしそれにもかかわらず、人民はかれの考えを調べも確かめもせずに、かれから王位を奪った。そして軍隊にかれを見捨てるように命じ、城門を閉ざしてかれの帰還を許さなかった。しかしかれは、近隣の諸王を煽動してローマ人をさんざんなやましたはげしい戦争ののち、その援助を頼みとしていたものに見捨てられて、もはや、王位を回復することができなくなったので、ローマの近くのトゥスクルムの町に、(一四)伝説によると十四年間静かに隠遁的な生活をおくって、その妻とともに老いたといわれるが、その最期はおそらく、自分の義子の罪によって、しかも——伝説によれば——実の娘も関知しなかったわけではない殺されたその義父よりも望ましいものであったであろう。しかし、それにもかかわらず、ローマ人はこのタルクィニウスを残忍な王とか、大逆非道な王とかよばずに、傲慢な王とかよんでいた

が、その傲慢のゆえに、かれの王者としての存在にたえられなかったのであろう。すなわち、ローマ人は、かれがローマの最善の王であり、自分の義父であるものを殺した大罪を、大して重く考えなかったので、かれをローマの王としたほどであった。そのばあい、そのように重い罪に対して、そのような報賞を与えるということは、いっそう重い罪ではなかったかとわたしは思う。しかし、「神々は、神殿と祭壇を見捨てて、去って」はいなかった。もっとも、それらの神々を弁護して神々がローマにとどまっていたのは、恩恵によって助けるよりはむしろ、ローマ人をむなしい勝利によって誘惑し、もっともはげしい戦争によって、苦しめ悩まして、罰するものがあったというものがあるかもしれない。これが、タルクィニウス傲慢王の追放にいたるまで約二百四十三年にわたる、ローマ国の賞賛すべき時代の諸王の治下における国民の生活であったが、そのあいだに、あのように多くの流血とあのような災厄によってあがなわれた勝利のすべても、ローマの領土をその首都から二十マイルまでやっと拡げたにすぎなかった。それは、現在のゲトゥラ(一五)のどの国とさえも比較にならないほどの広さであった。

(一)　リウィウス『歴史』一の一六。
(二)　本書第二十一巻第八章参照。
(三)　「ルカによる福音書」二三の四四—五。
(四)　過ぎ越しの祭りは、ユダヤの三大祭のひとつで、かれらの祖先がエジプトから脱出した記念として守られた。
(五)　キケロ『国家論』二の一〇。

(六) リウィウス『歴史』一の三一。
(七) キケロ『カティリナを駁する』三の一。
(八) キケロの『ホルテンシウス』という対話篇で残っているのは百の断片もない。アウグスティヌスが、ここに引用しているものは、一般にその第三九のものとされるが、残されているものからだけでは、この書の全体の構造などを知るには不十分である。この書がアウグスティヌスに与えたつよい印象については、『告白』第四巻第七章に語られている。
(九) アンクス・マルティウスはローマ第四代目の王。三代目はトゥルス・ホスティリウスである。
(一〇) プリスクス・タルクィニウスはローマ第五代目の王。在位前六一六年から前五七九年。
(一一) セルウィス・トゥルリウスはローマ第六代目の王。在位前五七八年から前五三四年頃。
(一二) タルクィニウス・スペルブスはエトルリア系の最後のローマ王。在位前五三四年から前五一〇年。
(一三) ウェルギリウス『アエネイス』二の三五一―二。
(一四) リウィウス『歴史』二の一五。
(一五) ゲトゥラは、アフリカ西北部、サハラ沙漠に接する地方の住民であった。

第十六章

最初の執政官たち――さきに他人を追放したものは、のちに他人によって追放され、やがてみずからおそろしい殺害の罪を負うて、自分が傷つけた敵によって傷つけられて滅びる

その時代のつぎにくるものとして、タルクィニウスに対する恐怖とエトルリアとのはげしい戦いがおさまるまでのことである。サルスティウスが公正で穏健な法によって支配されていたという時代のことを述べようと思うが、それは、じっさい、エトルリア人が王位を回復しようとつとめるタルクィニウスを助けていた間、ローマははげしい戦争によって悩まされていたのである。それゆえ、サルスティウスのいうように、「公正で穏健な法によって国家が治められていた」(二)が、それは恐怖の圧迫によってであって正義の観念からではなかった。そのじつに短い期間のなかで王権が廃止されて執政官が選ばれたあの年は、なんと不幸であったことだろう。すなわち、はじめて執政官になったものらは、その一年の任期をも終えなかったのである。すなわち、ユニウス・ブルトゥス(三)は、その同僚であるルキウス・タルクィニウス・コルラティヌス(三)を、執政官の地位を奪ってローマから追放したが、その後、間もなくかれら自身も戦争中に、敵を傷つけ、また敵に傷つけられて、ともにたおれたのであるが、それよりさきに、その子とその妻の兄弟とがタルクィニウスの復位のために、陰謀を企てていることを知っていたのでかれらを殺していた。ウェルギリウスは、はじめはこの行為をほめていたが、すぐそれに人情から戦慄を感じた。すなわち、

「父の身でありながら、新しい戦いをおこそうとする子らを、
美しい自由のために、刑罰の座に召喚するであろう」

といったのち、すぐに叫んで、

「不幸なものよ、子孫がその行為をどのように考えようとも」

もこの不幸なものを慰めようとするかのように、

賞賛し、賞揚しようとも、その子を殺したものは不幸であるというのである。そして、あたか

といっている。すなわち、後世のものがその行為をどのように考えようとも、たとえ、それを

「祖国に対する愛と名誉に対する無限の欲望は、けっして敗れることはない」(四)

とつけ加えている。ブルトゥスはその子を殺し、かれの敵であるタルクィニウスの子を斬りながら、その子に逆に斬りかえされてさきに死に、むしろ父のタルクィニウスの方が生き残ったのであるが、この悲惨な最期のうちに、その同僚であったコルラティヌスの冤罪が立証されているようにみえないだろうか。コルラティヌスは善良な市民であったのに、タルクィニウスが追放されたのち、この僭主自身と同じ目にあったのである。すなわち、この同じブルトゥスもまたタルクィニウスの親類であったといわれるが、コルラティヌスは、(ルキウス・)タルクィニウス(・コルラティヌス)とよばれていたので、その名の類似が災いしたことはあきらかである。それゆえ、かれはその祖国をではなく、その名を変えることを強いられるべきであって、ついにその名のうちこのタルクィニウスというのを省略して、ただルキウス・コルラティヌスとよばれるべきであったろう。しかし、かれが失ってもなんの損にもならないであろうところのものを失わなかったのは、かれが最初の執政官でありながら、その栄誉をなくし、善良な市民でありながらその市民権をなくすことを強いられたからである。このようなユニウス・ブルトゥスの国家のために少しも役に立たない忌むべき不正も栄誉であったろうか。その不正をおかすためにも、「祖国に対する愛と、名誉に対する無限の欲望は勝利を得た」のであろうか。

それはとにかく、僭主タルクィニウスが追放されてブルトゥスとともに、ルクレティアの夫であるルキウス・タルクィニウス・コルラティヌスが執政官に選ばれた。人民がかれの市民として徳性を考えて、その名を考えなかったことは、なんと正しかったことだろう。それに反して、この執政官という最初のまだ新しい職にある同僚から、もしそれが気にいらなければ、その名だけを取り去ることもできたであろうのに、その祖国と栄誉をも奪い去ったことはなんと不敬な行為だろう。ローマの国家が「正しい穏健な法によって統治されていた」時代に、このような悪事がなされ、このような災厄がおこったのである。ブルトゥスのかわりに執政官となったルクレティウスもまた、その同じ年が終らぬうちに病気のために死んだ。こうして、コルラティヌスのあとをついだプブリウス・ウァレリウスとルクレティウスの空席をうずめたマルクス・ホラティウスとがあの悲しく恐ろしい年を越すことができたのであるが、その年はじつに五人の執政官を迎えたのであった。ローマの国家が、はじめてその執政官の名誉ある職を吉兆をもっておいた年のことである。

(一)　サルスティウス『史書』一。
(二)　ユニウス・ブルトゥスは、驕慢王タルクィニウス・スペルブスの甥にあたり、殺された前王セルウィス・トゥルリウスの子。
(三)　リウィウス『歴史』二の二。コルラティヌスも驕慢王の甥である。コルラティヌスの妻ルクレティアは、驕慢王の王子セクストゥス・タルクィニウスによってはずかしめられ自殺。のち、驕慢王がエトルリアへ逃亡したことによってローマの王制が終り、そのあとコルラティヌスとブルトゥスが執政

官に任ぜられたが、まもなくコルラティヌスは失脚する。
(四) ウェルギリウス『アエネイス』六の八二〇—三。

第十七章

執政官がおかれたのち、ローマの国家がこうむった禍害とそれに対する神々の無関心

それから、恐怖がいくらかしずまった——といっても戦争がおさまったからではなく、その圧力が減じたからである——のち、すなわち、「公正で穏健な法によって政治が行われていた」時代が終ったのち、サルスティウスがつぎのように簡単に述べているようなことがおこった。——「その後、貴族は平民を奴隷のように支配して苦しめ、歴代の王がなしたように、その身分と生活をとりあつかい、平民をその郷土から追い払い、他のものには関与させずに、ただかれらのみが支配していた。平民はこのような残酷な処置に苦しめられ、またとくに、絶え間のない戦争のために、同時に税と軍務との重荷を負うて、借財に悩まされたので、ついに蜂起して、聖山とアウェンティヌスの丘に拠り、そしてそのとき、護民官と法的権利とを認めさせた。貴族と平民との不和と党争のおさまったのは、第二ポエニ戦争によってであった(一)」。それではなにゆえ、わたしはそのように多くの時間を記述することに費やしたり、また読むものに費や

させたりするのであるか。第二ポエニ戦争にいたるまであの多くの年月を経た長い期間に、たえず外からは戦争によって、また内には市民間の不和や党争によって悩まされて、ローマの国家がどのように惨めであったかは、サルスティウスが簡単に述べた通りである。それゆえ、ローマ人の誇る勝利よりも、真に幸福なものの実のある喜びではなくて、惨めなものの空虚な慰めであり、けっして安んじることのないものを誘惑して、無益な悪をつぎつぎに重ねさせる刺戟であった。わたしがこのようなことを語るからといって、ローマの善良な思慮分別のある人びとは怒ってはならない。もっとも、このことについては、かれらが怒らないだろうということもまったく確実であるから、別に嘆願したり忠告したりする必要はない。じっさい、わたしたちは、ローマの作家たちよりもひどく、あるいはひどいことを語るわけではなく、ただその表現の術と閑暇とにおいて及ばないだけである。それにもかかわらず、人びとは、それらの作家を暗記することにかつてみずから努力したのであり、またその子にも努力させている。しかし、わたしに対して怒るものがあるなら、そのものは、わたしがサルスティウスが述べていることを語ったなら、わたしを許すであろうか——「じつに多くの暴動と反乱と、最後には内乱とがおこったが、その間に、大多数のものが頼っていた有力者は、元老院議員と人民のためにという立派な文句を掲げて支配権を得ようとしていた。市民はみな、等しく腐敗していたので、その国家に対する功績によって、善良とか不良とかよばれたのではなく、ひとはみな富裕で悪事に有能であればあるほど、現状の維持に役立つから、善良と考えられた[二]」。しかしまた、それらの歴史家が、それとは別の、その市民は永遠に選ばれるべきところの真実の国を知らないま

まに、多くの箇所で口を極めて賞賛せねばならなかった自分の国の諸悪を黙過しないことを、公明正大で自由な態度だと考えたのなら、その神に対する希望が正しく確実であるほど、その自由もまた大であるべきわたしたちは、どうするのがふさわしいであろうか。人びとは、現在の禍悪をわたしたちのキリストに帰して、心の弱く無知なものを、ただそこにおいてのみ永遠で幸福な生活がおくられる国から離れさせようとしている。なおまた、わたしたちは、かれらの神々について、かれらが読んで賞め賛える作家たちがなんども語ったことよりも恐ろしいことは語らないのである。じっさい、わたしたちの語ることはすべてかれらからとったのであり、またかれらの語るようにうまくそのすべてを語ることもけっしてできないのである。

それでは、この世のとるにたらぬ虚偽の幸福のためにあがめられねばならぬと考えられている神々は、欺瞞にみちた策略によってあがめられることを強要したローマ人が、そのような災厄によって悩まされていたときどこにいたのであろうか。また執政官ウァレリウスが、追放者や奴隷によって放火されたカピトリウムを守って殺されたとき、神々はどこにいたのだろうか。あの多くの神々と、その神殿をかれが救った神々の最大最善の王とは、ウァレリウス自身がユピテルの神殿をうまく守ることができる以上にかれを救けることがむつかしかったのであるか。また、ローマは、絶え間のない反乱のために、疲弊して、法律と立法の調査のためにアテナイへ派遣した使節が帰るのをしばらく平穏無事に待っていた間ひどい飢饉と疫病のために荒廃したが、そのとき神々はどこにいたのであろうか。それからまた、国民が飢饉に苦しんで、はじめて食糧長官を設けたとき、そしてその飢饉がひどくなって、スプリウス・マエリウスが飢え

ている民衆の間に穀類を施し与えたので、(三)王位を望んでいるという疑いをかけられ、さきにのべた長官の命令にもとづき、老衰した独裁執政官ルキウス・クィンティウス(四)の命令により、騎兵監のクィントゥス・セルウィリウス(五)のために殺されて、未曾有の大きく危険な国家の混乱をきたしたとき、神々はどこにいたのだろうか。また、はげしい飢饉がおこって、なんの役にもたたない神々のために、それまで行われたことのないレクティステルニアの祭り(六)を新しく催さねばならぬと考えたとき、神々はどこにいたのだろうか。神々の名誉のために、寝床がおかれたのであるが、そこからしてこの神事——というよりはむしろ、瀆神事——はその名を得たのである。また、十年間も続けて、ローマ軍がウェイ人と戦ってやぶれ、しばしば大きな損害をこうむったとき、やっとフリウス・カミルス(七)によって助けられながら、ローマがその恩を忘れてかれを罰したとき、神々はどこにいたのであろうか。また、ガリア人がローマを占領し、略奪し、放火し、死体をもってみたしたとき、神々はどこにいたのだろうか。また、あの有名な疫病がじつに多くの犠牲者をだして、そのために、恩知らずのローマを、さきにはウェイ人に対して、またのちにはガリア人に対して守ったあのフリウス・カミルスが死んだとき、神々はどこにいたのだろうか。この疫病にさいして、なおまた新しい演劇が新しい悪疫としてはじまったが、それはローマ人の身体をではなく、いっそう破滅的なことには、習俗をおかすものであった。また、ローマの婦人の企てた毒殺によると信じられるひどい疫病が別におこって、それらの婦人の信じられないほど多くの、しかも名門のものの性行がどのような疫病よりもひどいことがわかったとき、(八)神々はどこにいたのだろうか。また、カウディウム(九)の隘路において、

サムニウム人のために、執政官が二人とも軍隊といっしょに囲まれて、サムニウム人といまわしい和約を結ばねばならなくなり、ローマの騎兵は六百人も人質にされ、他の兵士は武器を失い、他のものを奪われ、軍装を脱いで、ただ着のみ着のままで、敵の軛の下をくぐらされたとき、神々はどこにいたのだろうか。また、他のものがひどい疫病に悩まされていたうえに、多くの兵士が雷光に打たれて死んだとき、神々はどこにいたのか。また、新しくたえられないほどの疫病がおこって、ローマはエピダウルスから、アェスクラピウスを医師の神として呼び迎えねばならなくなったとき(一〇)、神々はどこにいたのか。神々の王であるユピテルはすでに長らくカピトリウムに鎮座していたが、若いときに、もっぱら姦淫にふけっていたので、医術を学ぶ余裕がなかったのかもしれない。また、ルカニア人、ブルッティィ人、サムニウム人、エトルリア人、セノネス人、ガリア人などの敵が同時に共謀して、ローマに反旗をひるがえし、まず、使節を殺したのち、執政官の率いる軍隊を絶滅して、執政官とともに七人の軍団司令官と一万三千人の兵士を殺したとき、神々はどこにいたのか。また、ローマにおける長くはげしい暴動ののち、ついに平民は、反旗をひるがえして、ヤニクルムに退き、この禍悪の不幸はまことに恐るべきものであったので、そのために、危急のばあいにのみ行われることとして、ホルテンシウス(一一)が独裁執政官に選ばれたが、かれは平民を呼びかえしたのち、独裁執政官として在職中死んだ――独裁執政官としては前例のないことであって、アェスクラピウスもすでに来ていたのであるから、神々にとってその責はますます重大であった――とき、神々はどこにいたのだろうか。しかし、そのご多くの戦争が方々につぎからつぎとおこって兵士の不足のために、そ

の貧困の故に軍勢に服することができず、ただ子供を生むしか能のないところから、そうよばれたプロレタリア軍籍に編入された。なおまた、タレントゥム人に誘われて、当時その名声が四方に聞えていたギリシア王、ピュルス(一二)も、ローマ人の敵となった。そしてこのピュルスに、かれがその計企の成否について神託を求めたとき、アポロは、いかにも当意即妙に、まったく二つの意味にとれる答えをしたので、その二つのうちどちらがおこっても、預言者として認められるわけであった(その答えは、ピュルスよ、「あなたはローマ人を征服することができるであろう」または「あなたをローマ人が征服することができるであろう」というのであった)。それゆえ、ピュルスがローマ人によって征服されようと、あるいはローマ人がピュルスによって征服されようとアポロは預言者としてどちらの成り行きも安心して待てるわけであった。それから、どのようなまた、どのように恐ろしい虐殺が両軍におこったことだろう。しかし、ピュルスは、その戦いに勝利を得たので、もうすでにアポロを自分の見方から、預言者として賞めることができたであろうが、間もなく次の戦闘において、こんどはローマ人が勝利を収めたのである。そして、このような戦争の災難の最中に、また恐ろしい婦人の疫病がおこった。すなわち、妊婦は、月みちて子を生み出すまえに死ぬのであった。そしてそのさい、アェスクラピウスは、医師の頭であって、産婆を職とするものではないと弁解したこととわたしは思う。動物もまた同じように死んでいったので、動物の類は絶えるであろうとさえ考えられた。なおまた、寒さが信じられないほど厳しくて、雪がおそろしいくらいフォルムにも積って四十日間きえず、ティベリス河もまた氷結したこともあったが、そのような忘れられない冬が、わたし

たちの時代に来たなら、人びとはどのようなことを、またどのように多くのことをいうだろうか。なおまたはげしい疫病がおこったのであるが、それはなんと長く猛威を振い、なんと多くのものを殺したことだろう。そしてこの疫病は、アェスクラピウスがいてもむなしく、ますますひどくなって翌年に及んだので、ついにシビュラの書に伺いを立てることになったが、この書の神託については、キケロがその『予言について』[一三][一四]においていっているように、できるだけ、また欲するように疑わしいものを解いてみせる解釈師の方が信用されるのがつねであった。そういう次第で、そのばあいには、疫病の原因は多くのものが多数の聖所を私的に専有していることだと説明されたのであるが、こうしてアェスクラピウスは差し当って無為無能という情けないそしりをやっと免れることができた。しかしそれらの聖所がなんびとの妨害も受けずに多くのものによって専有されていたのは、どういうわけであろうか。それは、そのように多くの神々の群に対する長い間の嘆願もむなしかったのでそれらの聖所は、次第に礼拝者によって見捨てられ、ついに、空屋と同じように、少くとも人間の使用に供せられるようになったからではなかろうか。じっさい、それらの聖所は当時、いわゆる疫病の防止のために熱心に探し求められ、修理されたのち、また同じ仕方で見捨てられ、個人によって占有されて世間から忘れられたが、もしもそうでなかったなら、ウァルロが聖所についてあのように多くの未知の事実を記していることもけっしてウァルロの偉大な学識に帰せられなかったであろう。しかし、当時は、疫病を撲滅することよりも神々をうまく弁護することの方が大切であった。

（一）　サルスティウス『史書』一。第二ポエニ戦争が始まったのは前二一八年である。

(二) 同上。
(三) リウィウス『歴史』四の一二—三。
(四) ルキウス・クィンティウス・キンキナトゥスのこと。キンキナトゥスは前五世紀のローマの半伝説的政治家。ローマがアエクィ人に攻撃されたとき独裁官となって勝利をもたらせた。二回目に独裁官になったときは八十歳(前四三九年)であったとされる(同上、四の一三)。
(五) カイウス・セルウィリウス・アラのこと。かれはキンキナトゥスの騎兵総監であった(同上、四の一四)。
(六) 饗宴や芝居によって神々をなだめる祭り。前三九九年におこった(同上、五の一三、本書第二巻第十一章参照)。
(七) フリウス・カミルスはローマの将軍。前四〇六年から三九六年のウェイとの戦いで勝利に導いた。ウェイ攻略の後、かれは、戦利品を私したというかどでローマ人に告発されたことを知り、自発的にアルデアへ逃亡した(前三九一年)。
(八) リウィウス『歴史』八の一八。
(九) カウディウムはサムニウムの町。その近くの隘路でローマ人がサムニウム人によって包囲された(前三二一年)(同上、九の三—六)。
(一〇) 本巻第十二章(注)二参照。
(一一) クィントゥス・ホルテンシウスは前三世紀のローマ独裁執政官。前二八七年、貴族と平民のあいだの闘争が激化したときに独裁官に選ばれ、平民会の決議が全市民を拘束するというホルテンシウス法を成立させた。
(一二) ピュルスは前三一九年から前二七二年。エピルスの王。ローマに圧迫されたタレントゥム救援の

ためイタリアに渡り、ローマ軍・カルタゴ軍を破った。
(一三) シビュラはアポロンの神託を告げる巫女。また「シビュラの書」はローマの預言集のこと。
(一四) キケロ『予言について』二の五四。

第十八章

ポエニ戦争によって、ローマ人は神々の援助を求めたのもむなしく、どのように多くの災害によってなやまされたことだろう。

さて、ポエニ戦争がはじまって、両国間の勝敗がなかなか決らず、その行方が知られないままに、二つの強国がたがいにその勢力と資力をつくして戦っていたとき、どのように多くの小国が打ちひしがれたことだろう。どのように豊かで高貴な国が破壊され、どのように多くの国が攻略され、どのように多くの国が滅ぼされたことだろう。どのように広く、また遠く、そのように多くの地方が荒廃に帰したことだろう。どのようにしばしば、両者は勝者と敗者との地位をかえたことだろう。実戦に兵士であろうと武器をとらない一般市民であろうと、人間の消耗はなんと莫大であったことだろう。またなんと多くの艦船が海戦によって損傷し、さまざまの海難によって沈んだことだろう。これらを一々あげて述べようとするなら、わたしたちもまた歴史記述家になってしまうであろう。そのとき、ローマはひどい恐怖にうろたえて、愚かな

笑うべき手段に訴えた。すなわち、シビュラの書の権威にもとづいて、百年祭が計画されたのであるが、それは百年毎に催されることになっていたけれども、もっともよい時勢には忘れられて、行われなかった。なおまた、神官は、下界の神々のための祭りを復興したが、これもまた、以前のもっともよい時代には廃止されていた。じっさい、それらの祭りが復興したとき、そのように、大勢の死者でふくれあがった下界の神々がその祭りをも喜んだのはもっともであった。たしかに、あわれな人間は、はげしい戦争と流血の闘争と、双方の不幸な勝利とによって、ダエモンのために、大掛りな祭りと、下界の神々のためにぜいたくな御馳走をしていたにちがいない。しかし、第一次ポエニ戦争を通じてもっとも不幸なできごとは、ローマ軍が破れて、あの有名なレグルス[一]も捕虜になったことであった。かれについて、わたしはすでに本書の第一、二巻で述べたが、実に偉大な人物で、さきにカルタゴ軍を征服し支配したのであって、そのときもあまりにも賞賛と栄誉を求めて、疲弊したカルタゴ人に到底たえられないような苛酷な条件を課しさえしなかったら、第一次ポエニ戦争も終結させたであろう。このひとがまったく思いがけなく囚われの身となり、なんのいわれもなく奴隷におとされ、あくまでも誠実に誓約を守り、ついに残酷きわまる最期を遂げたことによっても、なお、かの神々が顔をあからめないなら、それは、それらの神々が鉄面皮で血の通っていない証拠である。

　またローマ市内においても、当時被害はけっして軽少ではなかった。すなわち、ティベリス河はいつもよりひどく氾濫して[二]、下町のほとんどすべては水に没し、さながら滝のような水流によって押し流された建物もあれば、いつまでもひかない水につかって腐ってしまった建物も

あった。それからこの災難ののちに、もっとも破滅的な大火がおこって、フォルムの周囲のある高い建物をおそい、火にとってもっともなじみのふかいウェスタの神殿をも容赦しなかったのであるが、そこでは、その仕事をする名誉を与えられた――というよりもむしろ――罰をうけた処女たちが、もっとも入念に薪をいれかえることによって、いわば永遠の生命を火に与えるならわしであった。(三) しかし当時そこでは、火は燃えていただけではなく、あれ狂っていた。火の猛威におそれをなして、処女たちが、そのおさめられていた三つの国(四)をすでに滅ぼしたあの不吉な聖物を劫火から救うことができなかったとき、神官のメテルスは、いわば自分の身の危険を忘れて火の中に飛び込み、半焼けになりながら神像をとり出した。(五) じっさい、火がこの神官が誰であるかさえも知らなかったか、それともたとえそこにいても逃げださなかったような神がそこにいたかである。それゆえ、ウェスタの聖物が人間に役立つ以上に人間はその聖物に役立ったのである。しかしそれらの聖物は、自分からさえも火を追い払うことができなかったのなら、それの安全を守ると考えられていた国家を、あの洪水や劫火に対してどうして守ることができるであろうか。それらがまったく無力であったことが、すでに事実によってもあきらかなのである。しかし、わたしたちの反対者がそれらの聖物は、消滅的な善を守るためにつくられたのではなく、永遠なものを表示するためにつくられたのであるから、したがって目に見える形体的なものであるかぎり、滅びることがあっても、そのためにそれらの聖物がつくられたもの自体はすこしも損傷することはないのであって、それらの聖物は同じ目的のために修復されることができるというなら、わたしたちは、かれらに上に述べたような反対をとなえな

いであろう。ところが、その盲目はじつに驚くべきものであるが、人びとは、消滅するかもしれないそれらの聖物によって、地上の安寧と国家の消滅的な幸福とが消滅を免れることができたと考えるのである。それゆえ、それらの聖物が消滅していなくても、安寧の破壊と不幸とがおこったということを示してみせるなら、人びとは、その弁護することのできない説をひるがえすことを始めるのである。

(一) レグルスについては、本書第一巻第十五章参照。
(二) オロシウス『歴史』四の一一に前二四七年の大氾濫の記事がある。
(三) 本書第二巻第二十九章(注)二参照。
(四) 三つの国とは、トロヤ、ラウィニウム、アルバ・ロンガである。
(五) オウィディウス『祭事暦』六の四三七―五四。

第十九章

第二ポエニ戦争後の災禍

さて、第二ポエニ戦争に関して、両国民のこうむった災害を述べることは余りにも長たらしいが、両国民はじつに長い間、またじつに広い範囲にわたって交戦したのであって、ローマの戦争を語ることよりも、ローマの征覇を賛美することを目的とした諸家も告白しているように、

勝者はむしろ敗者に似ていたほどである。すなわち、ハンニバルがイスパニアからおこって、ピレネ山脈を越え、ガリアをよこぎり、アルプスの険を突破し、そのような長い進軍の間に、その兵力を増し、あらゆるものを略奪し、あらゆるものを屈服させながら、さながら急流のように、イタリアの喉元にせまってきたとき、なんと血腥い戦闘が行われ、なんとしばしば敗れたことだろう。なんと多くの都市が敵の手に帰し、なんと多くのものが占領され破壊されたことだろう。なんと恐ろしい戦闘が行われて、その都度、ローマ人によってハンニバルの名誉をあげたことだろう。しかし、わたしは、カンナェのじつに恐ろしい敗戦についてなにを語ろうか。そのさいハンニバルは、残酷きわまる男であったが、しかもかれの憎んでやまない敵のあまりにも多くの血にあいて、敵の生命を容赦せよと命令を出したと伝えられている。かれは、戦場から枡に三杯の金の指環をカルタゴに贈ったが、それはその戦闘において、数えるよりも計る方が容易なほどのローマの貴族がたおれたことを人びとに理解させるためであった。そしてまた、そのことから、その指環をつけていないような、身分が卑しいほどその数も多かった普通の兵士の犠牲は、ただ推測されるのみであって、とても報告されるものではないと信じさせるためであった。それからまた、兵士は非常に不足をきたしたので、ローマ人は重罪犯人を赦免の条件で徴集し、奴隷を解放して、これらのものから、まことに恥ずべきことであったが、軍隊を補充した――というよりはむしろ――編成した。そういうわけで、これらの奴隷は、いや、正しくよぶなら、すでに自由の身となったものは、ローマの国のために戦おうとしていたのに武器を持っていなかった。それで神殿から武器をとったのであるが、ローマ人はその神々にむ

かってこういっているようであった。――「長らく持っていながら、なんの役にも立たなかった武器を捨てよ。わたしたちの神々がなんにも役立たせることのできなかったものを、わたしたちの奴隷はなにかに役立たせることができるかもしれないのだ」。なおまた、当時、国家は兵士に俸給を支払うことができなかったので、私人の資産が公用に供せられることになり、ひとはみな、その持っているところのものを喜んで提供した。それで、その威厳のあわれむべき表徴である一つずつの金の指環と胸飾りとを除いては、元老院議員さえも――ましてその他の階級や部族のものは――金のものはなにも持たないほどであった。もしも、わたしたちの反対者が今日そのような窮乏に陥っているなら、だれがかれらの非難を耐えしのぶであろうか。わたしたちは今日かれらに耐えかねるのであるが、当時国家の存亡のために、軍団に醵金されたよりも多くのものが無駄な快楽のために役者に与えられているのである。

(一) カンナェはイタリア東南部アプリア地方の村。前二一六年、ハンニバルによって大破した。

第二十章

サグントゥムの最期――かれらは、ローマとの友交のために滅んだのであるが、ローマの神々の援助を受けなかった

しかし、第二ポエニ戦争のすべての惨禍のうち、もっとも悲しく、またもっとも悲嘆に価し

たものはサグントゥム人の最期であった(二)。すなわち、このイスパニアの都市は、ローマ人ととくに友交が厚かったが、ローマ人に信義を守ったために破壊されたのであった。ハンニバルは、このことから、ローマ人との約束を破って、ローマ人を戦争に挑発する理由を求めた。そのゆえに、サグントゥムを包囲して、はげしく攻撃した。このことがローマに聞えたとき、使者がハンニバルのもとに遣わされて、その包囲を解くように要求した。それが無視されたので、使節はカルタゴに赴き、約束を破ったことに対する抗告をしたが、ついに使命を達成せずにローマに帰還した。このようなことに時間をとっている間に、そのあわれな——もっとも富裕で、それ自身の国家にとっても、またローマの国家にとってもこの上なく大切であった——都市は八か月目か九か月目かにポエニ人によって破壊された。その滅亡はただ読むだけでも——まして書くばあいには——戦慄を感じる。しかし、簡単にそれを述べよう。当面の問題と大いに関係があるからである。すなわち、まず飢饉になやまされていた味方の死体を食って生きたものもあったといわれる。それからまったく、精根つきはて、捕虜になってハンニバルの手にかかることだけは免れようと、巨大な火葬の薪堆を公然とつくり、なおまた、たがいにさしちがえてその燃えさかる中へ、家族もろとも身を投じた。このとき、神々は犠牲の脂肪に涎(よだれ)をだし、虚偽の預言のあいまいによって欺く道楽者や、香具師である神々は、なにかなすべきであった。ローマ人にとって、もっとも友交の厚かった都市を助け、その信義を守ったゆえに滅びようとしている都市が、滅びないようになにかなすべきであった。たしかに、それらの神々は、その都市がローマの国家と同盟条約を結んだとき、仲介者として指揮したのであった。それゆえ、

いわば、それらの神々の臨席のもとに、約束によって結び、信義によって負い、誓約によって包囲され、打ち破られ、滅ぼされたのだ。それらの神々はのちにハンニバルがローマの城壁に近づいたとき、あらしと電光をもってかれを脅かし、遠くへ追っ払ったのなら、まずそのときに、そのようなことをなすべきであったろう。すなわち、わたしはあえていうが、それらの神々は、自分自身のために戦い、ハンニバルの攻撃に対して十分の備えのあったローマ人のためによりも、ローマ人に対して信義を破らないために危険をおかし、なんの備えもなかったローマ人の友邦のために、あらしとなって荒れ狂うことができたらいっそう立派であったろう。それゆえ、それらの神々は、もしもローマの幸福と光栄の守護者であったなら、ローマに、サグントゥムの滅亡という重い責めを負わせはしなかっただろう。しかし、そのローマに対する友交のために滅びないように、サグントゥムの都市を助けることのできなかった神々の守護によって、ローマは、ハンニバルに破れながら滅びなかったと信じるものがあるなら、それはなんと愚かなことだろう。サグントゥムの住民は、キリスト者であって、福音の信仰のために、このような目にあったのなら、剣や火をもってその身を滅ぼすようなことをしなかったであろうが、しかしそれにもかかわらず、福音の信仰のために、絶滅される目にあったのなら、それは、それを抱いてキリストを信じた希望、すなわち、ほんの束の間の報酬ではなく、無限の永遠性の報酬に対する希望によってであろう。さて、かの神々の弁護のために、それらはこのような不安定で消滅的な事物の幸福が確保され得るように、あがめられるといわれ、またあがめられることが要求さ

れるのであるが、それらの神々の擁護者や弁護者はサグントゥム人の滅亡についてわたしたちになんと答えるであろうか。かのレグルスの最期についてした以外のどんな答えをするであろうか。じっさい、一方は個人であり、他方は国家全体であるという相違はあるが、しかし両方を通じて、その滅亡の原因は信義を守ったことなのである。すなわち、それを守るために、一方は進んで敵のもとに帰り、他方は背くことを肯じなかったのである。それでは信義を守ることが神々の怒りをよびおこすのであるか。それとも、神々が好意をよせているのに、ただ個人だけではなく国家全体も滅びるようなことがあるのか。わたしたちの反対者はこれら二つのばあいのうち、どちらか一つを事実だと考えるがよい。すなわち、神々は誓約を守ったことを怒るのなら、誓約を破ったものを求めてあがめられるがよい。しかしまた、神々が好意をよせているのに、個人も国家も多くの恐ろしい苛責をこうむって滅びるようなことがあるのなら、神神を崇拝してもこの地上の幸福は得られないわけである。それゆえ、自分らの神々の祭事が廃止されたので不幸になったと考える人びとは、怒ることをやめるがよい。じっさい、神々がただいるだけではなく好意をよせていても、現在のように不幸を嘆くだけではなく、むかしレグルスやサグントゥム人がそうであったように、恐ろしい苦しみにあったうえに、なお滅亡を免れないようなこともあるのである。

（一） サグントゥムはイスパニア東岸の町。前二一八年、ハンニバルの攻囲により、八か月で陥落した（リウィウス『歴史』二一の六―一四）。

第二十一章

ローマ国はその解放者スキピオに対してどんなに忘恩であったか、また、サルスティウスが最善と表した時代に、その道徳的状態はどうであったか

さて、つぎに、第二次のカルタゴ戦争と最後のカルタゴ戦争との間、サルスティウスによれば、(一)ローマ人が最善の習俗と最大の和合をもってくらしていたとき(わたしは、着手した仕事の限度を考えて多くのものを省略するのであるが)すなわち、ほかならぬこの最善の習俗と最大の和合が行われていた時代に、かのスピキオは――ローマとイタリアとを解放し、あのように恐ろしく、また破壊的で危険であった第二次ポエニ戦争を、あのように見事に驚くべき仕方で終結させ、ハンニバルを打倒し、カルタゴを征服し、また、青年時代からその生活を神々に捧げて、神殿のもとに送ったといわれていながら――政敵の告訴に屈してその勇気によって救い解放した祖国を去り、リンテルヌムの町に余生を送った(二)のであるが、かつての輝かしい勝利にもかかわらず、二度とローマを見ようとは思わず、その死後忘恩の祖国において葬式を行うことさえも禁じたといわれる。それからまた、当時、前執政官グナエウス・マンリウスの戦勝(三)によって、ガログラエキア人(四)から、すべての敵軍よりもなお恐ろしいアジアの放縦がローマにしのびこんできた。すなわち、当時はじめて、金属製の寝台や敷物が見られたといわれ、また当時、琴を弾く女が饗宴にあらわれ、その他いろいろ放縦な不行跡がはじまったのであった。しかし、

わたしはいま、人びとが好んでなしたことについてではなく、人びとが耐えがたいのに耐え忍んだ禍悪について語ることにした。したがって、わたしがスキピオについてさきに述べたことの方が当面の問題に関係が深いわけである。すなわち、スキピオは政敵に屈して、その解放した祖国をはなれて死んだのであるが、その神殿がスキピオのおかげでハンニバルの難を免れ、ただこの地上の幸福のためにのみ崇拝されるローマの神々は、かれになにも報いなかったからであった。しかし、サルスティウスは、当時ローマの習俗は最善であったと語っているから、わたしはアジアから移入された放縦の風について語らねばならぬと考えたが、それは、サルスティウスがその時代をほめたのは、まったく、和合を欠いて劣悪であった時代と比較してのことであったということを理解させるためであった。すなわち、当時、というのは第二次のカルタゴ戦争と最後のカルタゴ戦争との間、あの悪名の高いウォコニア法(五)がだされて、なんびとも婦女を、一人娘さえをも、相続人とすることを禁じられた。じっさいこの法律よりも不法なものが挙げられ、あるいは考えられようとは思われない。しかし、それにもかかわらず、これら二回のポエニ戦争の中間の時期を通じて、公けの不幸も比較的耐えやすいものであった。ただ外に対してのみ、軍隊は戦争によっていためられたが、勝利によって慰められ、また内においても、他の時代のように、不和と軋轢(あつれき)ははげしくなかった。しかも最後のポエニ戦争において、第二のスキピオ――その功のゆえに、またアフリカヌスという添名(そえな)(六)を得たのである――の一撃によってローマ帝国の競争者は根本から破壊されたが、その後ローマの国家はじつに多くの害悪の累積によって苦しめられたので、そのために習俗がひどく腐敗して、それらの害悪がおこ

った繁栄と安寧とによって、カルタゴはさきに敵として、あのように長い間に与えたよりも多くの損害を、あのように速やかに滅亡してから与えたということが分るのである。それから、カエサル・アウグストゥスにいたる長い期間を通じて――かれは、ローマ人自身の目からしても、もはや栄光を失って、党争と危険にみち、すでに生気を欠いて弱っていた自由を、ローマ人から奪い取り、すべてのことを王者の自由意志に帰し、さながら老病によって衰弱していた国家を、いわば復興し更生させたのであるが――この期間を通じて、わたしはさまざまな原因からおこったかずかずの戦争の惨禍や、ヌマンティア人と結んだ恐ろしく不名誉で恥ずべき条件については述べずにおこう。すなわち、聖雛(ひな)が籠から飛び出して執政官のマンキヌスに悪い占いがなされたといわれているが、この小さな都市が包囲されていながらローマの軍隊をさんざん悩まし、ローマの国家にとって脅威となりはじめていたあのように長い年月の間、他の将軍は、別の占いによって攻めていたかのようであった。

(一)　サルスティウス『史書』一。
(二)　前一八五年、告訴ののち、スキピオはカンパニア地方の小都市リンテルヌムに退去した。
(三)　グナエウス・マンリウスは、地方総督として、前一八九年、ガラテヤ人およびガログラエキア人に対する遠征を命じた。
(四)　ガログラエキア人は小アジアへ移住したガリア種族である。
(五)　護民官ウォコニウスの提議で通過した(リウィウス『歴史』四一の三七)。
(六)　スキピオ(小アフリカヌス)のこと。大アフリカヌスの長子で、第三次ポエニ戦争には執政官として

ローマ軍を指揮。カルタゴを占領し完全に破壊した。

(七) ヌマンティアは北部イスパニアの町であるが、スキピオ(小アフリカヌス)によって破壊された。ヌマンティア人と結ばれた条件とは、執政官ホスティリウス・マンキヌスによるもの(前一三七年)であるが、元老院によって否認された(リウィウス『歴史』五五)。

第二十二章

アジアにいるすべてのローマ市民を殺すことを命じたミトリダテスの勅命について

しかし、これらのことは立ち入らずにおく。ただ一つ、けっして看過できないのはアジアの王ミトリダテス(一)の命令であって、かれはアジアのどの地方においてでも滞在してその仕事に従事しているじつに多数のローマ人を一日のうちに殺せと命じ、しかもその命令は実行されたのである。それはなんと悲しい光景であったろう。まったく突然ローマ人はみなどこでみつかろうとも、田野においても、道路においても、都市においても、家庭においても、村においても、市場においても、神殿においても、寝台においても、食卓においても、不意を打たれて無残に殺されたのだ。死ぬものはなんと痛ましいうめき声を発したことだろう。それを目撃するものは、おそらく涙を流したことだろう。殺すもの自身もまた、おそらくそうであったろう。ローマ人をむかえていた主人が自分の家でそのような不法な虐殺をただ見るだけではなく、実行す

ることを強いられたのは、なんとつらいことであったろう。すなわち、平和の時代に戦争の仕事をなしとげるために、平生の人情のこもった柔和な親愛の様子から、突然その態度をかえ、わたしはこういいたいのであるが、たしかに両方とも傷を負うた――殺されたものはその身体をうたれ、殺したものはその精神をうたれて――のであった。これらの不幸にあったものらもまた、みな占いを軽んじたのであろうか。かれらは、自分の家を出てふたたび帰ってくることのない旅にたったとき、占いを求めるべき、一家のまたは公けの神々を持たなかったのであろうか。もしもそうであったのなら、人びとは、この問題について、わたしたちの時代に不平をいう理由はない。ローマ人は昔からこのような愚かなことを軽蔑しているのだ。しかし、もしも占いを求めたのなら、そのようなことは、もちろん人間の法によって許されてなんびとも禁じなかった時、どんな役に立ったか答えてもらいたいものだ。

（一）ミトリダテスは前一三二年頃から前六三年。ポントス王。三回にわたりローマと戦い、しばしばローマ軍を破ったが、最後に敗北した。勅命は前八八年に発せられた。

第二十三章

すべての家畜の狂暴にあらわれたおそろしい表徴と、それにつづいてローマの国家が悩まされた国内の禍悪

しかしつぎに、わたしは、国内のものであっただけますます不幸なものであった禍悪をできるだけ簡単に述べよう。これらの市民間の、というよりはむしろ、反市民的な闘争は、もはや反乱ではなく、すでにローマ内の本式の戦争であったが、そのさいにどんなに多くの血が流されたことだろう。またそのさいに、党争心はたがいに対立して集会し、たがいに論争し合うことによってではなく、すでに直接兵力と武器に訴えることによって、猛威をふるったのであるが、これらの同胞間の戦争、奴隷仲間の戦争、市民間の戦争は、どんなに多くのローマ人の血を流したことだろう。どんなにひどいイタリアの攻略と荒廃をきたしたことだろう。すなわち、かつて同盟を結んでいたラティウムがローマに対して反旗をひるがえす前に(一)、人間の用に供せられていたすべての動物はみな、犬、馬、驢馬、牛など人間に支配されていた家畜は、みな暴れだして、飼いならされていた従順さを忘れて、檻を抜けだし、思うがままに走り廻って、ただ、他人だけではなく、自分の主人さえも近づくことさえまったく許さず、もしあえて近づくものがあれば、殺されたり危険な目にあったりするのであった。たとえ、しるしでなくとも、それ自体そのように大きな禍悪であったところがしるしであったのなら、それはなんと大きな禍悪のしるしであったことだろう。もしもそのようなことが、わたしたちの時代におこったなら、人びとがその動物からこうむった以上の猛威を、わたしたちは人びとからこうむるであろう。

(一) ラティウムがローマに対して反旗をひるがえしたのは前九〇年のことであった。

第二十四章

グラックス兄弟の反逆によっておこされた市民の不和

さて、内戦の不幸の起源は、土地均分法をきっかけにおこったグラックス兄弟の反乱(一)であった。すなわち、かれらは貴族が不当に所有していた土地を人民に分かとうとしたのであった。しかし、年を経て固まった悪習をあえて根絶しようとすることは危険きわまるものであり、いや、事の成り行きが示したように、破滅的な結果を伴うものであった。さきに兄のグラックスが殺されたとき、どんなにむごたらしい殺戮がなされたことか、またそれから間もなく、弟のグラックスが殺されたときも同じであったろう。貴族も平民も、法律や当局の命令によってではなく、群衆や武力の闘争によって殺されたのだ。グラックスの弟の死後、執政官のルキウス・オピミウス(二)は、さきにグラックスをうつためにローマに軍勢を集め、グラックスをその同盟者もろとも撃ち破り、息の根をとめて殺して、じつに多くの市民を殺害したのであったが、審問をはじめたときにはもう法的な操作をして、残党を追及し、三千人をも殺したといわれる。このことによってもわかるのであるが、裁判官たちの綿密な審理でもそのような大きな犠牲をだしたのであるから、群衆が武器をもって戦ったとき、どれほど多くの死者がでたことだろう。このようなグラックス兄弟の殺害者はその頭を執政官に、頭の重さだけの黄金で売り渡したが、このような約束を虐殺前にしていたのであった。この虐殺のさいに、もと執政官マルクス・フルウィウ

ス[三]もまた、その子とともに殺された。

(一) グラックス兄弟の反乱は、兄のティベリウス・グラックスが、前一三三年護民官になったとき始まった。弟のガイウス・グラックスは十年後の前一二三年に護民官となった。本書第二巻第二十一章(注)二参照。

(二) ルキウス・オピミウスは、前一二一年に執政官となった。

(三) マルクス・フルウィウスはグラックス兄弟の友人で、前一二五年に執政官となった。

第二十五章

元老院の決議によって、反乱と虐殺との場所につくられた和親の神殿について

元老院のじっさい思いつきのよい決議によって、あの血なまぐさい騒動がおこり、あらゆる階級のあのように多くの市民がたおれたその場所に、和親の神殿がつくられたのであるが、[一]それはグラックス兄弟の受けた刑罰の証人として、民衆の指導者の眼を開き、その記憶をあらたにさせるためのものであった。しかし、和親の女神に神殿を建てることは神々を嘲弄すること以外のなんであろうか。この女神がローマにいたなら、ローマはあのような分裂に陥って崩壊しはしなかったであろう。それとも、和親の女神は、市民の心から去っていたから、この重罪の責めを負うて、あたかも牢獄のうちにのように、あの神殿に閉じこめられねばならなかった

のであろうか。じっさい、現実におこったことにあうようにしようと思ったのなら、なにゆえ、そこに和親よりもむしろ不和の女神の神殿をつくらなかったのであるか。ラベオ[二]の区別によれば、一方は善であり、他方は悪であるから、和親が女神であって不和は女神でない理由が挙げられるであろうか。しかも、ラベオ[三]自身は、かれがローマにおいて、健康のためにと同様、熱のためにも神殿が建てられているのを見たことのみを考えていたようにみえる。したがって、それと同じ意味では、ただ、和親にだけではなく、不和にもまた神殿が建てられるべきであった[四]。それゆえ、ローマ人がそのように有害な女神を怒らしたまま生きようと欲し、トロヤの滅亡がその女神の立腹に起因することを忘れたのは危険であった。じっさい、この女神は、他の神々といっしょに招かれなかったので、黄金のりんごをおくって、三女神の争いをおこした[五]。そして、それから神々の争いが生れて、ウェヌスが勝ち、ヘレナは略奪され、トロヤは破壊されたのであった。それゆえ、この女神は、ローマに他の神々といっしょに神殿を建てられなかったことを、おそらく怒ったであろうが、そのゆえに、さきにあのような騒動をもってローマを混乱させたのであったなら、まして、あの虐殺の場に、すなわち、女神がその業（わざ）を示した場に、そのときの神殿が建てられたのを見たとき、どんなにひどく怒りにもえたことだろう。わたしたちが、このような愚かなことを嘲笑するとき、かの学者や賢者はそれに不快を感じるのであるが、しかし、かれらは善き神々をも悪しき神々をも崇めるかぎり、この和親と不和との女神に関する問題を免れることはできない。人びと[六]が、これらの女神の礼拝を怠って、むかしから聖所が建てられているフェブリスやベロナの方を重んじたにしても、あるいはまた、人び

とがそれらの女神をまつっているのに、コンコルディア(和親の女神)がかれらを見捨てて、ディスコルディア(不和の女神)が猛威をふるって、ついにかれらを内戦に導いたにしても事情にかわりはない。

(一) ローマ史のいくつかの時期にコンコルディア(和親の女神)の神殿がつくられたが、前一二一年のグラックス(弟)の死後、執政官オピミウスによってもコンコルディアの神殿がつくられた(アッピウス『ローマ史』一の二六)。

(二) ラベオについては、本書第二巻第十一章(注)二参照。

(三) フェブリス(熱病の女神)については、本書第二巻第十四章(注)五参照。

(四) 不和(ディスコルディア)もまた、女神として擬人化されている(ウェルギリウス『アエネイス』六の二八〇)。

(五) 不和の女神(ギリシア名エリス)は、ペレウスと海の女神テティスとの結婚に招かれなかったことに立腹し、神々の集まりのなかに金のりんごを投じた。

(六) ベロナはローマの戦の女神。前四世紀、ローマの政治家クラウディス・カエウスによって神殿がたてられた(オウィディウス『歴詩』二〇一—八)。

第二十六章

コンコルディアの神殿の建立後おこったさまざまの種類の戦争について

さて、人びとは、グラックス兄弟の虐殺と懲罰との証拠であるコンコルディアの神殿を、将来の反乱の有効な防止策として、デマゴグの目の前に建てねばならぬと考えた。それがどれだけ役立ったかは、続いておこったなおいっそう恐ろしい不幸によってあきらかである。すなわち、その後、デマゴグはグラックス兄弟の例を避けようとはせずに、その先例を越えようとさえした。護民官のルキウス・サトゥルニヌス、(一)およびカイウス・セルウィリウス、(二)またずっと後にマルクス・ドルスス(三)がそうであって、これらのものの反乱を通じて、まずそれだけでもひどい虐殺がおこり、また後には、同盟市間の戦争がおこったのであるが、それによってイタリアは、重大な被害を受け、おどろくべき荒廃をきたした。またそれに続いて、奴隷の蜂起や、内戦がおこった。(四)どんな戦争が行われ、どんな血が流されたことだろう。イタリアのほとんどすべての種族は、そのおかげでローマ帝国はとくに優越した地位を占めていたのだが、猛々しい野蛮人のように征服されてしまった。さて、ごく少数のものから、すなわち、七十人たらずの剣闘士から、どのようにしてその奴隷の反乱がひきおこされたか、(五)どんなに多数に、またどんなにはげしく残酷になったか、どんなに多くのローマ軍の将軍を暴徒は打ち敗かしたか、どんなに多くの都市や領地を荒略したか、それは、歴史を書いた諸家も十分に説明できないのであった。しかも、奴隷の反乱は、ただそれだけではなかった。そのほかにも、奴隷の集団は、まずマケドニアの属領を、また後には、シリアと海岸地方とを荒略した。どんなに大きな、またどんなに恐ろしい略奪をかれらがまずなし、また後には、はげしい海賊戦をなしたかを、だれが事態の重大さにふさわしく語ることができようか。(六)

(一) ルキウス・サトゥルニヌスはローマ平民派の指導者である。かれは、前一〇二年、護民官に選ばれ、その後、貧民や兵に土地を分配し、小麦の公定価格を引下げる法を通過させた(リウィウス『歴史』五九)。

(二) カイウス・セルウィリウスは、サトゥルニヌスの政治上の支持者で、前一〇〇年には執政官となっていた。

(三) マルクス・ドルススは前九一年護民官に当選した。かれもまた、民会に土地分配などの大改革案を提出した。

(四) 内戦のおこったのは前九〇年。マリウスとスュラとの間におこった。

(五) アウグスティヌスがここで触れているのは、スパルタクスの戦のことであろう。すなわち、スパルタクスは剣闘士養成所の奴隷を率いてそこから脱出したのであるが、七十人が脱出に成功し、奴隷蜂起の指導者となった。

(六) 地中海の海賊は、最終的に、前六七年、ポンペイウスによって掃討された(リウィウス『歴史』九九)。

第二十七章

マリウスとスュラとの間の内戦

しかし、マリウスが、かれの政敵の多くのものを殺して、その手はすでに同胞市民の血によ

ごれながら、破れてローマを逃れ、市民がほっと一息ついたとき、キケロの言葉をかりるなら、「その後、キンナとマリウス(一)とが勝った。そのとき有名人士は殺され、国家の灯は消えた。のちに、この勝利の残酷にスュラは復讐したが、それがどんなに多くの市民の生命を奪い、どんなに多くの災害を国家に与えたかは、あらためて語るまでもない(二)」。この復讐は、それによって罰せられた重罪が罰せられずにすんだばあいよりも、もっと破壊的であったが、それについて、ルカヌスもつぎのようにいっている。

> 治療はあまりにもはげしく、検査の手は病根をあまりにもふかくたずねた。犠牲者は滅びた。しかも、ただ有害なもののみが生き残れたのだ(三)。

あのマリウスとスュラとの間の戦争において、ローマ以外の戦線でたおれたものは別として、ローマ市内においても、その街路も広場も市場も劇場も神殿も、すべて死体に充満していたので、いつ戦勝者が多くのものを殺したか、さきに勝利を得るためにか、それとものちに勝利を得たためにか、判断に苦しむほどであった。すなわち、まず、マリウスが勝利を得て自力で追放から帰ってきたとき、いたるところで殺戮がなされたほかに、執政官オクタウィウス(四)の首が演壇にさらされ、カエサル兄弟(五)はその家で刺殺され、グラックス父子はたがいにその面前で屠殺され、バェビウスとヌミトリウス(六)とは、鉤(かぎ)で引きずられ内臓を引き裂かれて死に、カトゥルス(七)は毒を飲んで敵の手にかかることを免かれ、大神ユピテルの神官メルラは、みずからその血管をきりひらいて、ユピテルに自分の血を犠牲としてささげた(八)。なおまた、挨拶をしているのに、マリウスが右手をあげてそれに答えようとしなかったところのものは、その面前にたちど

ころに殺されるのであった。

(一) マリウスとキンナについては、本書第二巻第二十二章(注)一および第二十三章(注)三参照。
(二) キケロ『カティリナを駁する』一〇の二四。
(三) ルカヌス『ファルサリア』二の一四二―四。
(四) クナェウス・オクタウィウスは、前八七年執政官となり、スュラに追われたマリウスがアフリカから帰還してのち、元老院の議席で死んだ。
(五) カエサル兄弟の兄のほうは、前九〇年、イタリアの参政権の法案を起草した。弟のほうは弁論家で、キケロの『弁論家について』の対話の相手である。兄弟ともマリウスの命令で死ぬことになる。
(六) バェビウスとヌミトリウスはスュラ派であったが、前八七年、マリウスとキンナがローマに入ったとき処刑された。
(七) ルタティウス・カトゥルスは前一〇二年、マリウスの同僚として執政官となったが、のち、炭火を沢山おこして窒息死したといわれる。
(八) メルラはマリウスとキンナの手にかかることを避けるため、神殿で自害(前八七年)。

第二十八章

マリウスの残酷の復讐をしたスュラが勝利を得てからはどうであったか

さて、つぎにスュラが勝利を得て、このような残酷の復讐をしたわけであったが、その勝利

はじつに多くの市民の血を流したのち、それによって贖(あがな)われたものであり、また戦争がすでに終ってからも、敵意はなおなくならずに、平和の時代にますます猛威を振った。さきに、大マリウスがなしたまだ耳新しい虐殺に続いていままた小マリウスと同じマリウス党に属するカルボ(一)とによって、もっとひどい虐殺がなされたのであるが、かれらはスュラがせまってきたとき、ただ勝利にだけではなく、その生命にも望みを断って、あらゆるものを味方と敵との血をもって染めたのであった。すなわち、じつにさまざまなところで、ひとの血を流したのち、なおまた元老院をも囲んで、あたかも牢獄からのように、議事堂から議員を引き立てて処刑するのであった。(二)神官のムキウス・スカェウォラは、ローマではウェスタの神殿ほど神聖なものはないと考えられていたので、その祭壇によりすがって殺されたが、処女の不断の注意によって絶えたことのない聖火も、かれの血でほとんど消えかけたほどであった。それから、スュラが勝者としてローマにはいったが、それよりさきに、ウィラ・プブリカ(三)において、もはや戦争ではなく、平和が猛威を振ううちに、七千人の降服者(したがって、もちろん武装していなかったもの)を、戦闘によってではなく、ただの命令によって殺していた。また、ローマ全市を通じて、スュラの党派のものはだれでもその欲するままに殺しまわったので、死体は算えきれないほどになり、ついに勝者が命令することのできるものがなくなるといけないから、いくらかは生かしておくようにと、スュラに忠言するものもあった。その後、ところかまわずどこでも猛威を振っていた殺戮は抑止されて、あの有名な表(ひょう)が歓呼の声にむかえられて出されたが、それには、上層の二階級、すなわち元老院階級と騎士階級のうちで、殺されるべきもの、追放されるべき

もの二千人の名があげられていた。その数の多いことは人びとを悲しませたが、それに限度のあることがせめてもの慰めであった。そのように多くのものが殺される悲しみも、他のものが恐怖を免れた喜びほど大きくはなかった。しかし、多くのものが、命令によって殺されたとき、他のものは残酷にも自分の安全を喜んだけれども、そのよりによった死に方を嘆いた。すなわち、あるものは処刑者たちによって素手で引き裂かれたが、かれらは人間でありながら生きた人間を、野獣がいつもころがっている死体を食いちぎるばあいよりも、もっと残酷に扱ったのであった。またあるものは眼をえぐりとられ、手足を一つ一つ切りとられて、このような苦しみのうちに長い間生きる——というよりは死ぬ——ことを余儀なくされた。なおまた、有名な諸市がさながら別荘のように競売にふせられたが、ある都市は、あたかも一人の罪人が処刑のために引き立てられるように、その全住民がスュラの命令によって殺害された。これらのことは戦後の平和の時代に、勝利の獲得を促進するためにではなく、獲得した勝利が軽んじられないためになされたのであった。平和は戦争とその残酷を争ってそれに勝った。戦争は武装したものをたおしたのに、平和は武器を帯びないものをたおしたのである。戦争においては、うたれたものは、できれば、打ち返すことを許されたが、平和においては、難を免れたものも、生きながらえることができずに無抵抗で死ななければならなかったのだ。

(一) 小マリウスおよびカルボはともに前八二年執政官となった。
(二) リウィウス『歴史』七六。
(三) マルスの原にあった公共建築物のこと。

第二十九章

ゴート人の侵入と、ローマ人がガリア人や、内戦の発頭者から受けた被害との比較

どのような外敵の狂暴も、またどのような野蛮人の残酷も、このような同胞の同胞に対する勝利に比べられようか。どちらがローマにとって悲惨でいまわしくつらかったであろうか。むかしのガリア人の侵入や、また近くはゴート人の侵入であったろうか。それとも、マリウスとスュラとの党派に属する、いわばその光として輝く他の有名人士が自分の肢体に加えた残虐な行為であったろうか。ガリア人は、なるほど、元老院議員を、それだけはどうにか防禦できたカピトリウムの城砦をのぞいて、ローマ全市に見つかりしだい殺した。(一)しかし、かれらはその丘にいたものの生命だけは、たとえ武器をもって奪うことができなくとも包囲することによって突き刺せることができたのに、黄金をとって許してやった。また、ゴート人は、じつに多くの元老院議員の生命を助けてやったので、若干のものを殺したことの方が意外に思われるのであった。(二)ところが、スュラは、まだマリウスの存命中に、ガリア人によってもおかされなかったカピトリウムを勝者として占拠して、死刑執行の命令を出した。そしてマリウスが敗走して、姿を消したとき、かれはやがて帰ってきてますます猛威を振うのであったが、スュラはカピトリウムにあって、元老院の決議に訴えてまでも多くのものの生命と財産とを奪った。またスュ

ラがローマにいなかったとき、マリウスの党派のものにとって、なにが神聖でおかすことのできないものであるとみえたであろうか。かれらは、ローマ市民で、元老院議員で神官であったムキウス(三)が、ローマの運命がかかっているといわれる祭壇からはなれずにあわれにも抱いていたとき、その生命を助けてやらなかったのである。さて、その他無数の殺戮は省略するが、スュラが出した最後の表は、ゴート人が略奪することができなかったほど多くの元老院議員を虐殺したのであった。

(一) リウィウス『歴史』五の四。
(二) オロシウス『歴史』二の一九。
(三) 前章(第二十八章)にその名が出ている神官ムキウス・スカェウォラのこと。

第三十章

キリストの降臨前にたびたび起ったかずかずの惨禍をもたらせた戦争の連続について

それゆえ、人びとが、むかしの災厄をかれら自身の神々に帰せずに、現在の災厄をわたしたちのキリストに帰するとは、なんという厚顔、なんという無情、なんという愚かさ――というよりもむしろ、なんという狂気であろう。それらの血なまぐさい内戦は、異教徒の作家たちさ

えも告白しているように、いかなる外敵との戦争よりもきびしく、それらによってローマの国家はただ悩まされただけではなく、まったく滅ぼされたと判定されているが、キリストの降臨よりもずっと以前におこった。そして兇悪の原因の連鎖によって、マリウスとスュラとの戦争からセルトリウスとカティリナ(両者のうち、一方はスュラによって追放され、他方は養われていた)との戦争に、(一)またそれからレピドゥスとカトゥルス(両者のうち一方はスュラの事業を無効にしようとし、他方は擁護しようとつとめた)との戦争に、(二)またそれからポンペイウスとカエサル(両者のうちポンペイウスはスュラの徒党であって、かれに匹敵する、あるいはすでに凌駕しさえする勢力をもっていた。カエサルは、ポンペイウスの勢力を容赦しなかったが、しかし、それは、自分がもたなかったからであって、ポンペイウスを破って殺した後は、それを凌駕した)との戦争に、また、それから、のちにアウグストゥスとよばれた第二のカエサル(三)にいたったのであるが、その治下にキリストは生れられた。すなわち、このアウグストゥス自身も多くの政敵に対して戦争をおこなったのであって、その戦争のうちに多くの有名なひとが滅びたのであるが、あの雄弁な政治の妙手キケロもその一人であった。すなわち、ポンペイウスを打ち破ったガイウス・ユリウス・カエサルは、内戦の戦果を寛大に実行にうつして、その反対派の人びとにも生命と威厳とを許したが、王権を得ようとするものと疑われて、ある高貴な(生れの)元老院議員の共謀によって、いわゆる国家の自由のためにという名で、元老院の議事堂で殺された。その後、アウグストゥスの権力を、かれとは非常に性格が異なり、あらゆる悪徳によってけがされ腐敗したアントニウスが得ようと欲しているようにみえたが、かれに対してキケロ

は、さきのばあいと同じように、国家の自由という名ではげしく抵抗した。そのとき、第二のカエサル、おどろくべき資質をもった青年、あのガイウス・ユリウス・カエサルの養子があらわれたが、かれはさきにも述べたように、のちにアウグストゥスとよばれた。キケロは、この青年カエサルを愛護して、その勢力をアントニウスに対してのばさせようとしたが、かれは、カエサルがアントニウスの支配を打倒し、一掃して、国家の自由を復興することを期待していた。しかし、キケロは、まったく目が見えず、また目先きがきかなかったのであって、その威勢と勢力とを愛護していた若いカエサルは、いわば和親の保証として、その愛護者のキケロを殺すことをアントニウスに許し、キケロがその擁護を叫んでやまなかった国家の自由を、自分の支配の犠牲にしたのである。

(一) セルトリウスの戦いは前七八年に、カティリナの戦いは前六三年に始まった(リウィウス『歴史』九〇)。

(二) スュラの死ののちのこと、すなわち前七七年である。

(三) カイウス・オクタウィウスで、のちにアウグストゥス(尊厳なる者)と呼ばれることになった。カエサルの養子で、前六三年から後一四年。カエサルの死後、第二次三頭政治を始めたが、のち、事実上の帝政となった。かれはローマ初代の皇帝とされる。

第三十一章

神々が崇拝されていた時代にも、あのように多くの災厄がおこったのに、神々の崇拝を禁じられたものが現在の苦難をキリストに帰するのは、なんと恥知らずのことだろう

このように多くの善について、わたしたちのキリストに感謝しないものは、あのように多くの禍悪についてかれらの神々を非難するがよい。たしかに、それらの禍悪がおこったとき、神の祭壇は赤々と燃え、サバの香料と新しい花環とによって芳香を発し、神官は光彩をはなち、聖所は壮麗をきわめ、神殿には、犠牲と遊戯と熱狂とがみられたが、またそのとき、いたるところで、ただ他の場所においてだけではなく神の祭壇においてでさえも、あのように多くの同胞の血が同盟の手によって流されていた。キケロは、神殿を避難所として選ばなかったが、それはさきに、ムキウス(一)がそれを選んで失敗したからであった。しかし、キリストの御代をもっともひどく侮辱するところの人びとは、とくにキリストのために捧げられた場所にみずから逃れたものか、野蛮人自身が救けてやろうとそこへ連れていったものかである(わたしがすでにあげた多くの例や、その他それをあげるならあまりにも長たらしくなると考えたずっと多くの例を省略することにする)。わたしが知り、また党派心なしに判断するすべてのものがわたしとともにもっとも容易に認めることであるが――もしも人類がポエニ戦争以前にキリスト教を受け入れ、そしてそれらの戦争のあいだに、ヨーロッパとアフリカをおそったようなはなはだしい荒廃がおこっていたなら、今日、わたしたちがその非難を耐え忍ぶ異教徒のいかなるもの

もその禍悪をキリスト教以外には帰しなかったであろう。しかし、すくなくとも、ローマ人に関して、キリスト教の受容と普及とにつづいて、あのガリア人の侵入や、あのティベリス河の氾濫や火災による荒廃がおこっていたなら、かれらの非難の声はずっと耐えがたいものであったろう。なおまた、まったく信じがたい出来事であるので、異兆のうちにかぞえられるところのものがキリスト教の時代におこっていたなら、かれらはそれらを罪としてキリスト者以外のだれに帰したであろうか。わたしは、おどろくべきではなかったが、さほど有害ではなかったところのもの、たとえば、牛がものをいったこと、まだ生れていない赤子が母の胎内からなにか叫んだこと、蛇が飛んだこと、婦人と牝鶏（めんどり）が男子と牡鳥になったことなど、そのほか、真実であろうと虚偽であろうと異教徒の伝説の書にではなく、歴史の書に語られていて、人間に害をもたらさずにおどろきをおこすところのものは省略する。しかし、土が降り、白灰が降り、石が降ったなら（雹が普通そうよばれるが、そうではなくてほんとうに石が降ったのである）、それらはじっさい重大な損害を生ずるものであった。また、かれらの書によると、アェトナ山の火は、山頂から近くの海岸まで噴出したので海は沸騰し、岩はやけただれ、船の瀝青はとけたといわれる。このようなことは、信じられないほどおどろくべきことであったが、その損害はけっして軽少ではなかった。またかれらの記録によれば、別のときに、同じような噴火の熱のために、シチリアはじつにおびただしい熱灰におおわれたのであって、カティナ市の家屋はそれによって包まれ押しつぶされたほどであったが、ローマ人は、その災厄に心を動かされて、あわれみ深く、その市に同じ年の貢税を免じた。なおまた、かれらが記録にとどめているとこ

ろによると、当時はすでにローマの属領となっていたが、アフリカ蝗の大群があらわれたが、それはさながら奇兆のように思われた。すなわち、木々の果実や葉を食いつくしたのち、巨大で測りしれないほどの雲霞となって、海に没したが、それが死んで海岸にうちあげられたとき、そのために空気はきたなくなって、悪性疫病がおこり、マシニッサの王国(二)だけでも八十万人もが死に、また、海岸の近くの諸地ではもっと多くの犠牲者をだしたといわれる。当事、ウティカには、三万人の青年兵がいたがそのうち一万人だけが生き残ったと確言するものもいる。それゆえ、そのような愚かさをわたしたちは耐えしのび、それに向って答えねばならぬのであるが、これらの禍悪のうちのなにがキリスト教の時代におこっていたとしたならキリスト教に帰せられないだろうか。しかも人びとは、それらの禍悪をかれら自身の神々に帰しはしない。むかし神々を崇拝していた者たちが、もっと大きな禍悪を耐えしのばねばならなかったのに、現在の小さい禍悪さえをも免れるために、かれらはその崇拝を要求しているのである。

(一)　ムキウスについては、本巻第二十八章参照。
(二)　北アフリカのヌミディア地方。

第四巻

第一章

第一巻において論じたことについて

わたしは、神の国について語ることにとりかかったとき、まず第一に、この地上のよろこびを求め、はかないものにあこがれ、それらのものにおいて――罰せられる神の厳格によるよりも、勧告される神の慈悲によって――あうすべてのかなしみを、唯一の健全で真実な宗教であるキリスト教におわせようとする神の国の敵に答えなければならぬと考えた。そしてかれらは、そのうちには無学な民衆もあるので、学者たちの権威にでもよるかのようにうごかされて、ますますはげしくわたしたちを憎むのであるが、かれらは無知なままに、自分の時代に異例なこととしておこったところのものは、他の過去の時代には例でなかったかと考える。そしてかれらの考えは、それが偽りであることを知っていながら、かれらのわたしたちに対する不平が正当なものであるとみせかけるために、それを知らないようなふりをする人びとによって、ます

ます強められるのである。それゆえ、かれらの仲間の著作家たちが過去の偉大な歴史を認識するように後世に残した書物からして、事実はかれらが考えるとはまったくちがっていることを示すと同時に、かれらが公然と守っていた、あるいはまた、いまもなおひそかにまつっている偽りの神々が、もっとも不潔な霊であり、もっとも悪意と虚偽にみちたダエモンであることを教えなければならなかった。じっさい、それらの神々は、真実のものであろうと、つくりごとであろうと、とにかく自分のものである罪をよろこび、それらの罪が自分の祭礼に際して自分のためにとりおこなわれることを欲したほどである。それで、人間の弱さは、このようなことをまねるように、神的なものとも思われる権威が示されるかぎり、破滅的な行いをなさずにいることはできないであろう。そしてこのようなことをわたしたちは、わたしたちの推測によってではなく、一部は、なお記憶に新しいところから――というのは、わたしたち自身、そのようなことがそのような神々のためにとり行われるのをみたのである――また一部は、かれらの仲間の著作家たちの書物から証明した。かれらはそのようなことを、いわばかれら自身の神々の名をはずかしめるためではなく、いわばその名誉をあげるためにしるして後世に残したのである。すなわち、かれらのあいだでもっとも学識にすぐれ、もっとも重みのある権威として仰がれるウァルロ(一)は、人間に関することがらと神々に関することがらとについて別々の書物をつくり、それぞれの対象の威厳にしたがって、そのあるものを人間に関することがらにあて、また他のあるものを神々に関することがらにあてたとき、演劇をすくなくとも人間に関することがらのうちにはおかずに、神々に関することがらのうちにおいたのであるが、もしもローマの

国家のうちに、善良で正直なひとも、いさえしたなら、演劇は人間に関することがらのうちにさえ存在をゆるされなかったであろう。ウァルロはもちろん、自分の権威によってそのようなことをなしたのではなく、ローマにまで教育を受けたものとして、演劇をも神々に関することがらの一つと考えたのである。さてわたしたちは、第一巻の終りに、それからつぎに語るべきことを簡単に述べ、そのうちあるものは、それにつづく二巻においてすでに述べたのであるから、わたしたちは、なお残っているところのものを語って読者の期待にそわねばならぬと考える。

（一）ウァルロについては、本書第三巻第四章およびその(注)一を参照。

第二章

第二巻と第三巻とにふくまれていることについて

それゆえ、わたしたちは、ローマの国家のこうむった災厄をわたしたちの宗教に帰しようとする人びとに対して反駁をくわえ、そしてわたしたちの心にうかぶかぎりの、また十分と思われるかぎりの、多くのまた大きな災いを、ローマの国家やその支配に属する地方領が、かれらの犠牲が禁じられるままにこうむった災いを述べようと約束したわけである。そしてそれらすべての災いは、もしもわたしたちの宗教がすでにその当時かれらを啓発し、あるいは現在のようにかれらが瀆神的な祭事を行うことを禁じていたなら、きっとわたしたちに帰せられたにち

がいない。これらの約束を、わたしはすでに第二巻と第三巻とにおいて、わたしのみるかぎり十分に果したと思う。すなわち、第二巻においては、唯一の悪が、あるいは最大の悪と考えられるべき道義の悪について論じたのに対して、第三巻においては、愚者がそれのみをこうむることをおそれるところのもの、すなわち、身体や外的諸物の悪について論じたのであるが、それらの悪は善き人びともこうむるところのものである。このように、あとの方の悪をおそれながら、そのために悪人となるさきの道義の悪を忍耐強くこうむっているのではなく、むしろ喜んで受けている。じっさい、わたしはかの一つの国とその支配とについても、なんとわずかしか語らなかったことだろう。それについては、カエサル・アウグストゥスの時代にいたるまでも、すべてを語ってはいないのである。もしもわたしが、たとえば戦争するための荒廃や破壊のような、人間がたがいに加えあう悪ではなくて、世界自体の構成からこの地上の諸物におこる悪をとりあげ述べようとしたならどうであったろう。そのような悪について、アプレイウス(一)は、かれがあらわした『世界論』のある箇所において、簡単にふれて、この世界のすべてのものは、変易と転覆と滅亡をまぬがれないといっている。すなわち、かれの言葉をかりるなら、はげしい地震によって、地面がひきさかれ、都市は住民もろともにひっさらわれるという。また、にわかの豪雨によって、いくつもの地方全体があらいさらわれ、また、まえには離れていなかった諸地方は、これまで知られなかった新しい波がおしよせてきて離れ島となり、反対に他の諸地方は、海の水がとおのいたためにあるいて渡れるようになった。風や嵐によって諸市が破壊された。猛火が雲のなかから発し、それによって東方の諸地方は焼き払われて滅び、また

西方の諸地域においても、津浪や洪水のようなものがそれに劣らぬ災害を引きおこした。なおまた、かつてアェトナ山[二]の頂上からその噴火口をあふれて、あたかも神によって火をつけられたかのように、火焰のながれが斜面を急流となって下ったといわれる——もし、わたしが歴史の伝えるこれらの、またそれに似たすべてのことを、わたしのできるかぎり集めようとしたなら、いつ終ることがあったであろうか。それらはかのキリストの御名が偶像崇拝のむなしく真の救いに有害な行いのあるものを抑制するまえにおこったことなのである。なおまたわたしは、かれらの風習のどのようなものをも、またどのような理由によって、すべての国の支配をその権能のうちにおさめる真の神が、かれらの帝国を増大させるために援助の手をさしのべたかを、また、どのようにかれらが神々と考えるところのものが役に立たなかったかを、またそれよりもむしろ、どれほどそれらのものがあざむき偽ることによって害をなしたかを示そうと約束した[三]。わたしはいまそれらのことについて、またとくにローマ帝国の増大について語らねばならないように思われる。というのは、かれらが神々として守っていたダエモン等の偽りにみちた害悪について、どれほどそれがかれらの道義を悪化させるようになったかを、すでにわたしはとくに第二巻において十分述べたのである。またすでに完成した三巻を通じて、わたしたちは、適当と思われたときに、神がどれほど多くのなぐさめを、戦争の禍害のうちにさえも、野蛮人たちが戦争の習慣に反してあのように多くの栄誉をおしみなくささげたキリストの御名によって、善人にも悪人にも与えられたのであるかということについて論をすすめたのであった。すなわち、かれは「その日を悪しきもののうえにも、善きもののうえにも昇らせ、雨を正しいも

のにも、正しからぬものにも降らせられる」[四]のである。

(一) アプレイウスは二世紀頃、ローマ帝政期の哲学者、修辞学者。アフリカのマダウラに生れ、カルタゴ、アテナイで教育をうけ、ローマ、エジプトなど各地を旅行。アウグスティヌスが触れているように、『世界論』という書を著したが、かれの著作のなかでもっとも有名なものは、当時の世相を描いた『黄金の驢馬』である。アウグスティヌスはアプレイウスをプラトン派にかぞえている。

(二) シチリアの火山。

(三) 本書第一巻第三十六章参照。

(四) 「マタイによる福音書」五の四五。

第三章

戦争によってのみ獲得した広大な領域における帝国支配は幸福であるか

それゆえに、わたしたちの敵対者が、いかなる理由によってローマ帝国の広大さと存続とが神々のおかげであるとするのであるかを見てみようとおもうのである。かれらは、それらの神神を、下劣な遊戯によろこんで従事することによって、またけがらわしい人間の奉仕によってさえも、りっぱにまつったと主張するのである。もっともわたしがまず第一に少しく探究してみようと思うのは、帝国の広く大きなことを誇ろうとするなら、どのような根拠とどのような思慮によるものであるかということである。じっさい、たえず戦争の禍害のうちに、また同胞

市民のものであろうと敵のものであろうと、とにかく人間の血のうちに、暗黒な恐怖と血なまぐさい欲望とをもって生きる人びとの幸福を指摘することはできないのであって、とつぜんこわれはしないかとおそろしく案じられる、ひかりかがやきながらいたってもろいガラスのような喜びが得られるのみである。そしてこのことをいっそう容易にみきわめるために、わたしたちは、いたずらに大言壮語してむなしくなったり、国民、王国、属領などという調子の高い言葉を耳にして、わたしたちの注意力をにぶらせたりせずに、ただ二人のものを考えてみよう。(というのは、各文字が言語においてそうであるように、各個人が国家や王国――たとえそれがどのように広い地域を占めようとも――のいわば字母であるから)そしてこれら二人のうち、一人は貧しい――というよりも中程度であり、他の一人は特に豊かであると考えよう。しかしこのような豊かなものというのは、恐怖に悩まされ、苦痛にやつれ、欲望に焼けただれ、けっして安心できず、いつも不安であり、敵とたえず争ってあえぎ、じっさい、このようなみじめな目にあうことによってその財産をひじょうに増し、そしてこのように財産を増すことによって、またその苦難を増し加えているのである。これに反して、かの中程度のものの方は、小さく余裕のない財産であっても、それに満足し、その身内のものにはもっとも親まれ、親類や隣人や友人とともに、この上なく甘美な平和を楽しみ、神をうやまうことがあつく、その心はいつくしみぶかく、身体は健康、生活はつつましく、行状は貞潔、精神は平静である。わたしは、これら二人のもののうち、いずれを選ぶべきかにあたって、あえて躊躇するほど無思慮なものがあろうとは思わない。それゆえ、これら二人のものにおけるように、二つの家においても、

また二つの国民においても、また二つの王国においても、同一の公正の規準を注意ぶかく適用して、わたしたちの見方を正しくするなら、わたしたちは、どこに空虚な幸福があり、どこに真の浄福があるかをもっとも容易に知ることができるであろう。それゆえ、もしも、真の神があがめられ、正しい祭事と善良な習俗とをもって祀られるなら、善良な人びとが長い間遠く広く支配することはこのましいことである。そしてこのことは支配するものら自身によりも、かれらによって支配されるものにこのましいのである。というのは、支配するものら自身に関するかぎりは、神の大きな贈りものであるかれらの敬神と誠実とだけでかれらが真の浄福を得るためには十分なのであり、それによって、この生は正しくおくられ、またそのうちに永遠の生も得られるのである。それゆえ、この地上の生においては、善良な人びとの支配はかれら自身によりは、むしろ人間社会に役立つのである。これに反して、悪しき人びとの支配は、むしろ支配するものら自身を害するのであるが、それは、かれらが不敬な罪を平気でおかしてかれら自身の魂を滅ぼすのに対して、かれらに服属して奉仕するものらは、自分自身の不正によってでなければ、その身を害することがないからである。じっさい、不義な支配者に課せられるあらゆる悪は、義人にとっては罪の罰ではなくて徳の試練なのである。したがって、善人は、たとえ僕であっても自由であるが、悪人は、たとえ支配者であっても僕である――しかも、ただ一人のものの僕であるのではなくて、なおいっそう重大なことではあるが、多くの悪徳をもてばもつほど多くの支配者の僕なのである。そしてその悪徳について、聖書はそれを論じたさいに、「征服されたものは征服したものの奴隷とされる」といっている。(一)

（一）「ペテロ第二の手紙」二の一九。

第四章

正義がなければ、王国も盗賊団と異なるところはない

正義がなくなるとき、王国は大きな盗賊団以外のなにであろうか。盗賊団も小さな王国以外のなにでもないのである。盗賊団も、人間の集団であり、首領の命令によって支配され、徒党をくんではなれず、団員の一致にしたがって奪略品を分配するこの盗賊団という禍いは、不逞なやからの参加によっていちじるしく増大して、領土をつくり、住居を定め、諸国を占領し、諸民族を征服するようになるとき、ますます、おおっぴらに王国の名を僭称するのである。そのような名が公然とそれに与えられるのは、その貪欲が抑制されたからではなく、懲罰をまぬがれたからである。ある海賊が捕えられて、かのアレキサンデル大王にのべた答はまったく適切で真実をうがっている。すなわち、大王が海賊に、「海を荒らすのはどういうつもりか」と問うたとき、海賊はすこしも臆すところなく、「陛下が全世界を荒らすのと同じです。ただ、わたしは小さい舟でするので盗賊とよばれ、陛下は大艦隊でなさるので、皇帝とよばれるだけです」と答えたのである。（一）

（一）この話はノニウス・マルケルルスによって語られ、マルケルルスはキケロからそれを借りてきてい

る（キケロ『国家論』三）。

第五章

王の権威にも劣らぬほどの勢威になった剣闘士のこと

それゆえわたしは、どのような徒党をロムルスが集めたかをせんさくせずにおこう。ロムルスは、かれらのために大いに配慮して、これまでの生活から国家の共同生活に導きいれ、かれらがその恐怖のためにますます兇悪な罪をかさねていた、当然受くべき懲罰のことをもはや考えないようにして、ついにかれらを人間社会の温和な成員にしようとしたのである。しかし、このことをわたしは語らずにはすまさないのであるが、ローマ帝国は、すでに多くの民族を服属させて強大となり、他の民族には恐怖の的であったにもかかわらず、それ自体は不安を感じて、ひどくおそれ大きな破滅をさけるために、けっして些少でない仕事になやんだことがあった。というのは、ごくわずかの剣闘士たちがカンパニアで競技場から逃走し（一）、大軍を集め、三人の首領格のものを定め（二）、イタリアを各地にわたってひどく荒略したときのことである。かれらは、小さくてとるにたらない軍団から、ローマ人のあの偉大な武力と防禦に対して一大脅威となったのであるが、それはなんという神がかれらを助けたからであるかかれらは語るがよい。それとも、かれらの全盛はながくつづかなかったので、かれらは神の援助を受けなかったとい

われるであろうか。まるで、人間はみなその一生が長いかのような口ぶりである。したがって、そうすると、各個人はやがて死ぬのであるから、神々はなんびとをも助けて支配を得させることはなく、また、支配ということも、まもなく各個人において、したがって、つぎからつぎへと、まったく、すべてのものを通じて、さながら水蒸気のように消えさるのであるから、それは恩恵と考えられるべきではない。じっさい、かつて、ロムルスのもとに神々をあがめ、そしてとくに死んだ人びとにとって、かれらの死後ローマ帝国があのように大きくなったということはなんのかかわりがあろうか。かれらは下界にあって、その言い分を申したてているのであって、それが正しいものであるかいなかは当面の問題にかかわりはないのである。しかしこのことは、(帝国時代は死すべき人間がいれかわりたちかわることによって長いあいだ続くのであるが)そのローマ帝国の舞台を、かれらの一生のわずかな日々のあいだ大いそぎで通りすぎて、自分の行為の責任を負うているすべてのものにあてはまると考えなければならない。しかしそれにもかかわらず、このようなきわめて短いあいだの恩恵でさえも、神々の援助に帰せられるべきであるなら、かの剣闘士たちは少なからぬ援助を受けたわけである。かれらはその奴隷の身分の束縛をたちきり、脱走し、逃走し、もっとも強大な軍隊を集めたのであるが、その軍隊は、首領の意見と命令によくしたがい、ローマの権勢にとって大きな恐怖の的となり、いく人かのローマの将軍もそれを抑えることができず、多くの戦利品を獲得し、なんども勝利を得てその欲するままに快楽をつくし、欲情の動かすままにふるまい、それはじつにむつかしいことであったがついに征服されるにいたるまで、王者のように尊大な生活をおくったのである。

しかしそれはさておき、わたしたちはもっと重大なことに進もうと思う。

（一）本書第三巻第二十六章参照。

（二）三人の首領格とは、スパルタクス、および副官のオエノマウスとクリクススのこと。

第六章

その領土を拡げようとして、はじめて隣国をおかしたニヌス王について

ユスティヌス(一)は、トログス・ポンペイウス(二)に従って、ギリシアの——というよりはむしろ異国——歴史をただポンペイウスと同様ラテン語を用いただけではなく、また簡潔に書いたが、かれの書のはじめにこのように述べている。——「民族や国民の歴史のはじめには、支配権は諸王の手にあったが、かれらは、一般人民にへつらうことによってではなく、すぐれた人びとのあいだによく知られているその節欲によってこの威厳の高い地位にのぼったのであった。人民はいかなる法律によっても拘束されず、君主の意志がそのまま法律であり、帝国の境界を拡げることよりもむしろそれを守ることがならわしであり、その領土は各君主の王国のうちにかぎられていた。すべての王のうち、アッシリアのニヌス王(三)がはじめてこの古く、いわば諸民族に伝統的となっていた風習を新しい征服欲によって破った。この王がはじめて隣国に戦争をしかけ、まだ反抗の経験のない諸国民をリビアの境にいたるまで征服した」。なおすこしのうち

に、ユスティヌスはいっている。――「ニヌスは、その求めていた偉大な権勢をつぎからつぎと占領しつづけることによって確保した。すなわち、まず近隣の民族を征服したのち、武力の増加によって強大となって、他の民族にむかい新しい勝利を得るごとに、それをつぎの勝利のための手段となして、ついに東方全体を屈服させた」。さて、どのような真実性をもってユスティヌスやトログスが記録したにせよ、（というのは、いっそう信用に価する文書は両者が時として虚偽を語っていることを示しているから）しかもなお、アッシリア王国が、ニヌス王によってその領土を大いに拡張したということは、他の作家たちのあいだにおいても認められている。さて、この王国は、じつに長いあいだ続いたのであって、ローマ帝国もまだその年齢に達していない。というのは、年代史を研究した人びとの記しているように、この王国はニヌス王が支配しはじめた最初の年からメディア人の手に帰するまで(四)、千二百四十年も続いたのである。しかし隣国に戦争しかけ、それからまた他の国に侵入し、自分になんにも害にならない諸民族を、たんなる支配欲によってうちひしぎ、屈服させるということは大きな盗賊行為以外のなんとよばれるべきであろうか。

（一）ユスティヌスは、二世紀後半に出たとおもわれる歴史家。トログス・ポンペイウスの世界史の著書を短縮して歴史書を残した。

（二）トログス・ポンペイウスは、皇帝アウグストゥス時代の歴史家。かれは、古代ギリシアからその当時までの地中海世界の『歴史』を書いた。

（三）ニヌス王はアッシリアの首都ニネベの伝説的な建設者（前二〇〇〇年頃）である。

(四) アッシリアはすぐれた軍国として発展し、前八世紀には、メソポタミア以西、エジプトを含むオリエント世界を併合した大帝国を建設したが、前七世紀はじめ、新バビロニア(カルデア)とメディアとの連合軍により滅ぼされた。

第七章

地上の諸王国は、その栄枯盛衰を通じて、神の援助を受けたか、それとも受けなかったか

もしもこの王国が神の援助によらずに、あのように偉大で長続きしたのなら、なにゆえ、ローマ帝国の広大と永続とは、ローマの神々に帰せられるのであるか。じっさい、その原因はなんであろうとも、それは、さきのばあいもいまのばあいも同一なはずである。しかし、もしもさきの王国の隆盛が神々の援助に帰せられるものであると主張するものがあるなら、それはどのような神々によるものであるかを考えてみよう。じっさい、ニヌス王が征服し、屈服させた他の民族も別の神々をあがめていたのではない。あるいはまた、もしもアッシリア人がかれら特有の神々をもっていて、それらの神々が帝国を建設し保持するのに特にすぐれた技術者であったとするなら、アッシリア人自身が覇権を失ったとき、それらの神々は死んでしまったのであろうか。それとも、報酬を与えられないために、あるいはいっそう大きな報酬を約束されな

いために、メディア人の方に移りかわり、それからまた、キュロス(二)が招き、いっそう有利なことを約束したので、ペルシア人につこうとしたのであろうか。このペルシア民族はその領土は広大であったが、覇権はつかのまであった。マケドニアのアレキサンデルの王国ののちももちこたえて、今日にいたるまで、東方にけっして小さくはない領土をもっている。もしもこのようであるなら、それをまつるところの民を見捨てて、敵の方にうつった神々が不実である(そのようなことはただの人間であるカミルス(三)さえもしなかったのであって、かれは、ローマにとってもっとも強力であった敵をうちまかし、征服したのち、ローマがその征服の努力に報いないのを知りながら、しかもその不法を忘れて、ただ祖国のことのみを思い、ローマをまたもガリア人から救ったのである)のか、あるいは、人間のはかりごとや力によってうちまかされるような神々が、神々らしく強くないかである。あるいはまた、神々がたがいに争って、神々が人間によってまかされるのではなく、各々の国家に特有の神々が他の神々によってまかされるというようなことがあるとするなら、神々自身もまた、それぞれ味方のために抱く敵意をたがいに持っているわけである。したがって、国家は、それ自身の神々よりもむしろ、自国の神々が援助を受ける異国の神々をあがめるべきであった。最後に、神々がそのように一方から他方についたり、はなれたり、あるいは戦いにかったりまけたりしたことが、どのように行われたにしても、それらの王国はおそろしい戦争の災禍によって滅び、その支配がある民族から他の民族にうつされたとき、キリストの御名は、その時代にも、またその地方にもまだ述べ伝えられていなかった。というのは、もしもそれから千二百年余りの後に、王国がアッシリア人から奪

われたときに——もしもそのときすでにキリスト教がそれとはちがった王国を述べ伝え、虚偽の神々の瀆神的な崇拝を抑圧していたとするなら、かの民族のおろかな人びとはなんといったであろうか。——あのように長く続いてきた王国が滅びたのは、まったく、かれらの神々を祀ることをやめてキリスト教を受けいれたからであるといったであろう。おそらくこのようにいったであろうが、このおろかな言葉のうちに、かの(キリスト教に反対する)人びとは、自分の姿を認めて、もしもかれらにはじらいがあるなら、同じようなぐちをこぼすことをはじめるがよい。もっとも、ローマ帝国は他の民族にうつったのではなく、ただくるしめられたのであり、そしてそのようなことはキリストの御名が述べ伝えられるまえの時代にもすでにおこったのであるが、しかしそのようなくるしみからローマ帝国はたちなおったのであり、そしてそのことは現代においても、なお絶望してはならない。じっさい、このことに関して、だれが神の意志を知るであろうか。

(一) キュロスは古代ペルシアの王で、アケメネス朝の創始者。メディア王族の内紛に乗じてメディアを滅ぼし、前五三八年にはバビロンを攻略、捕囚されていたユダヤ人を解放した。
(二) カミルスについては、本書第二巻第十七章、および第三巻第十七章参照。

第八章

どのような神々の援助によってローマ人はその帝国が拡大され、保護されると考え

るのか

かれらは個々の仕事の保護さえも、個々の神々にゆだねるべきものとは考えなかった。つぎに、そうしてさしつかえがなければ、ローマ人があがめたあのように多くの神々のうち、かれらはとくにどの神々を、またどの神々がかの帝国を拡げ、保護したと信じるのであるかをしらべてみよう。もちろん、このように卓越し、このように威厳にとんだ事業について、かれらはいかなる役割をも、女神クルアキナ(一)や、快楽にちなんでそうよばれたウォルピア(二)や、その名が色欲からおこったルベンティナ(三)や、こどものなくのをもりするウァティカヌス(四)や、こどものゆりかごをまもるクニナ(五)にあえて帰することはない。しかし、この書物の一箇所において神々や女神のすべての名をあげることがどうしてできようか。それらの名はローマ人も、もっと大きな書物において十一のことがらについて、それぞれの神々のつとめをなべて述べつくすことはむつかしかったのである。かれらは、土地の管理をさえもある唯一の神にゆだねるべきとは考えず、平地はルシナの女神に、山地はユガティヌスにゆだね、また丘陵にはコラティアの女神を、谷間にはウァロニアを管理者としておいた。なおまた、かれらは、たねまきの仕事をすべてまかせておけるようなセゲティア(六)をみいだすことさえできなかったのであって、穀類のたねがまかれて地中にあるあいだは、それをセイアの女神(七)にゆだねようとし、それが地上にあらわれて草木となるときには、セゲティアに、また穀類がとりいれられて収められたのちには、安全に保存されるように、トゥティリナの女神(八)にまかされたのである。さて、それがはじめて草

木となるはじめから、穂が枯れるまで、かのセゲティアだけで十分であると考えないものがあろうか。しかし、それにもかかわらず、唯一まことの神の貞潔な抱擁をさげすむあわれな魂を、おのおのくダエモンにまかせようとして、じつに多くの神々を愛する人びとにとっては、セゲティアだけでは十分でなかったのである。すなわち、穀粒が芽を出しかけるときには、プロセルピナ[九]に、茎の小さな節や大きな節ができるときには、ノドウトゥスに、まださやが穂を包みこんでいるときには、ウォルティナの女神に、穂からわれでるように、さやが開くときには、パテラナの女神に、またそれが新しい穂をつけて一面に青々となるとき——一様にすることをむかしの人びとは「等しくする」[一〇]といったから——ホスティリナの女神に、穀物が花をひらくときには、フロラの女神[一一]に、乳汁を出すときには、ラクトゥルヌスの神[一二]に、熟するときには、マトゥタ[一三]に、そしてまた、ひきぬかれる——すなわち、地面からとりのぞかれる——ときには、ルンキナにというように、それぞれの管理をゆだねたのである。わたしは、このようなことをすべて述べようとは思わないのであるが、それは、かれらがはじないこともわたしには不快なのである。しかし、そのごくわずかな部分だけを述べたのは、それらの神々が、ローマ帝国を建設し、拡大し、保護したと、ローマ人がけっしてあえて主張しないということをあきらかならしめるためである。それらの神々は、それぞれそのなすべき仕事を定められているので、いずれか一つの神に全体がゆだねられることはないのである。それゆえ、セゲティアは、同時に穀物のことと樹木のことを考えることを許されていないのに、どうして帝国のことを考えられようか。クニナは、その監督の仕事が幼児のゆりかご以外にわたることをゆるされていない

のに、どうして戦争のことに気をつかえようか。また、ノドウトゥスは、穂を包むさやにさえも関係がなく、ただ茎の節に関係しているだけであるのに、どうして戦争に力をかすことができようか。ひとはみな、自分の家に門番をおくが、門番は人間であるから、それでまったく十分である。ところが、ローマ人は、戸にはフォルクルスを、蝶番にはカルデアを、また閾にはリメンティヌスというように、三神をおいた。そういうわけで、フォルクルスは、同時に、蝶番と閾をまもることはできなかったのである。

(一) クルアキナは、女神ウェヌスにつけられた呼び名で、「清める者」の意味を含む。ローマ人たちがサビナ人との戦いがおわったのち、その像の近くで身を清めたからであるといわれる。
(二) ウォルピアは快楽を擬人化した女神。
(三) ルベンティナは色欲の女神。
(四) ウァティカヌスについては、アウルス・ゲルリウス『アッティカの夜』一六の一七参照。
(五) クニナはゆりかごの女神。したがって、幼児の守護神でもある。
(六) プリニウス『自然史』一八の二の八。ラテン語の「セゲス」(seges)は「種まき」の意である。
(七) 同上。
(八) ウァルロ『ラテン語論』五の一六三。
(九) プロセルピナは、豊穣の女神ケレスの娘であり、農業の女神である。
(一〇) 「等しくする」という動詞は hostire である。
(一一) フロラ女神については、本書第二巻第二十七章参照。
(一二) ラクトゥルヌスは乳の女神。

（一三） マトゥタは、ローマの曙の女神とされているが、むしろ、お産と成長の女神として崇拝された。

第九章

ローマ帝国の強大と永続とは、その崇拝者たちが最高神と考えたユピテルに帰せられるべきであるか

それゆえ、そのような多くの神々のことは省略して――あるいはしばらく、さておいて――そのおかげでローマがあのように偉大になり、あのようにながくつづいて、あのように多くの民族を支配した、もっと大きな神々のことをしらべてみなければならない。さて、このことは、うたがいもなく、ユピテルのわざである。ローマ人は、ユピテルこそ、すべての神々と女神との王であると主張するが、このことは、ユピテルの笏（しゃく）が示しており、また、高い丘にあるカピトリウムの神殿（一）が示している。この神については、それが元来詩人の言葉であるが、「すべてのものはユピテルにみちている」と、ローマ人はいかにも適切に述べている。（二）この神は、ウァルロの説にしたがえば、偶像なしに唯一神をあがめる人びとによってさえも、もっとも、別の名でよばれているがあがめられているといわれる。（三）もしもそうであるなら、ユピテルは、他の民族においてもそうであるが、ローマにおいてもまた、偶像をつくられるというような悪い待遇を受けたのであるか。このことは、ウァルロ自身でさえもはなはだ不快としたものであって、

かれはこのように、偉大な国家のまちがった習慣のとりこになっていたが、それにもかかわらず、民衆に偶像崇拝を教えた人びとは、神々に対するおそれをなくするとともに、あやまちを増し加えたものであると述べ、かつ記すことをけっして躊躇しなかったのである。

(一) ユピテルのカピトリウムの神殿は、タルペイウスの岩(罪人がそこから投げ落されたといわれる)の上にあった。
(二) ウェルギリウス『田園詩』三の六〇。
(三) 本巻第三十一章参照。

第十章

世界のいろいろな部分に、それを主宰するものとしていろいろの神々を考えた人びとはどのような考え方にしたがったのか

なにゆえ、ユピテルにはなおまた、「妹で妻である」(一)といわれるユノがめあわされたのであるか。人びとのいうところによると、それは、わたしたちが、ユピテルをアエテルのうちに、またユノを空気のうちにあるものと考え、そしてこれら二つの元素は、一方が上に、他方が下に、結びついているからである。(三)そうすると、もしユノが、またある部分をみたしているなら、ユピテルは、「すべてのものはユピテルにみちている」(二)としるされているところのものではな

くなるのである。それとも、ユピテルもユノも二つの元素をうみだして、この夫婦の神が両方ともかの二つの元素のうちにあるとともに、また、いずれか一方のうちにも同時にあるのであろうか。それでは、なにゆえ、アエテルは、ユピテルのものとされ、また、空気はユノのものとされるのであるか。いずれにしても、これら二つで十分であったろうに、なにゆえ、海はネプトゥヌス(四)に、また地はプルトン(五)にわりあてられるのか。そしてこれら二神も妻なしではないように、ネプトゥヌスにはサラキア(六)が、またプルトンにはプロセルピナ(七)が妻として与えられる。すなわち、人びとの説によれば、天の低い部分、すなわち空気はユノが占めているように、海の低い部分はサラキアが占め、また地の低い部分はプロセルピナが占めることとなっている。人びとは、どうしたらこのような寓話をとりつくろえるか、その方法を求めているが、それをみつけることができない。もしもこのようなことが事実であるなら、かれらのむかしの作家たちは、神々の三夫婦がそれぞれ別の元素を分担するように、世界には四元素ではなくて、三元素があると主張したであろう。ところが、現在、人びとは、アエテルと空気とは別のものであると断乎主張した。さて、水は、高いところのものであろうと低いところのものであろうと水であることにはかわりはない。たとえ似ていないとしても、だからといって水ではないほど、ひどく似ていないわけではない。また、地の低い部分は、どれほど高い部分とちがっていても、地以外のなんであることができようか。つぎに、形体的世界のすべてが、これら四つの、あるいは三つの元素からできるとするなら、ミネルウァ(八)はどこにいるのだろうか。なにを占めるのだろうか。なにをみたすのだろうか。ミネルウァは、ユピテルとユノとの娘ではないのに、両

者といっしょにカピトリウムにまつられている。あるいはまた、もしもミネルウァが、かれらの説にしたがって、アエテルの高い部分を占め、そしてそのゆえに、詩人たちが、ミネルウァはユピテルの頭から生れたとつくりごとをしたのなら、ミネルウァはユピテルよりも高いところにあるのだから、なにゆえミネルウァの方が神々の女王と考えられないのであるか。[九] それは、娘を父の上位におくことはふさわしくないからであろうか。それでは、なにゆえこの正しい関係は、ユピテル自身のサトゥルヌス[一〇]に対するばあいに守られなかったのであるか。それはサトゥルヌスが敗けたからであろうか。それでは、両者は戦ったのであるか。「そのようなことはけっしてない。そのようなむだな話はつくりごとだ」と、人びとはいう。よろしい、わたしたちはつくりごとを信じずに、神々についても、もっとよいことを考えよう。それではなにゆえ、ユピテルの父に、たとえそれよりも高くなくとも、すくなくともそれにひとしい栄誉ある位が与えられなかったのか。それはサトゥルヌスが時の長さであるからだと、人びとはいう。[一一] それゆえ、サトゥルヌスをあがめるものは時をあがめるのであって、神々の王であるユピテルが時から生れていることがほのめかされているのである。じっさい、天も地もまったくつくられたものであるから、ユピテルが天であり、ユノが地であるとするなら、両者が時から生れたといってもそれはけっして不相応ではないのである。このことは、かれらのうちの学者たちや、智者たちもその書物のなかでいっているのであって、ウェルギリウスもまた、詩的なつくりごとによらずに哲学者たちの書によってつぎのように述べている。――

「そのとき、全能の父、アエテルは、豊饒な雨となって、

その歓喜に酔う妻の膝にくだったというのである。すなわち、このばあいにも、人びとは若干の相違があると主張するのであって、地についても、テラとテルスとテルモとは別のものであると考え、[一三]これらすべての神々はそれぞれその仕事によって区別され、それぞれ別の祭壇とまつりによってあがめられるというのである。この同じ地はまた、神々の母とよばれるのであって、たとえ、詩人たちのつくりごとであるとしても、かれらの詩書にしたがってではなく、異教の聖徒の書にしたがって、ユノはただユピテルの「妹であるとともに妻」であるだけではなく、またその母であるとする方がまだゆるされやすいのである。この同じテラは、なおまた、ケレス[一四]であり、あるいはウェスタ[一五]であるといわれるが、しかし、それよりも人びとは、しばしば、ウェスタは、それなしには国がなりたたないいろりに関係している火以外のなにものでもないと主張する。そしてそのゆえに、ウェスタには処女が仕えるならわしになっているが、それは処女からなにものも生れないように、火からなにものも生れないからである。しかし、このようなたわいもないことはすべて、処女から生れたかたによってまったくなくなされ、消し去られるべきであった。じっさい、人びとがあのような栄誉と貞潔のようなものを認めながら、ウェスタを、時にはまたウェヌスともよんで、その下婢たちがあがめる処女性が無に帰してしまうようなことをして恥じないのに、だれがたえられようか。じっさい、もしも、ウェスタがウェヌスであるなら、どのようにして処女たちは、ウェヌスのわざをつつしみながら、ウェヌスに正しく仕えられようか。ウェヌスに二つあって、一方は処女であり、他方は処女でな

いのであるか。それともむしろ、三つあって、第一は処女の女神であって、それはまたウェスタともよばれ、第二は妻の女神であり、第三は娼婦の女神であるのか。この第三のウェヌスにさえも、フェニキア人は、その娘をとつがせるために、そのかせいだ利益によって贈りものをしたのである。これらのウェヌスのうち、ウルカヌス(二六)の妻であるのはどれであるのか。夫をもっているのであるから、処女のウェヌスであるはずはない。また、娼婦のウェヌスと考えてはならない。ユノの息子でミネルウァの協力者であるものを不当にあつかうようにみられてはならないからである。それゆえ、ウルカヌスの妻というのは結婚したウェヌスであることがわかる。しかし、結婚したものは、ウェヌスがマルスとしたおこない(二七)などをまねてはならない。「もう一度寓話にかえろう」と人びとはいう。かれらはわたしたちがこのようなことをかれらの神神について述べたてるといって、わたしたちに怒るのに、かれらの神々のこのような罪を劇場において喜んで見ながら、自分自身に怒らないのは、はたして正しいことであろうか。ところが(これはもっともたしかに証明されないかぎり、信じられないことであるが)このように劇場で神々の罪を演じること自体、その同じ神々をあがめるために始められたのである。

(一)　ウェルギリウス『アエネイス』一の四七。
(二)　ユノについては、本書第一巻第三章(注)三参照。
(三)　アエテルは上部の澄んだ気、空気は下部の濃密な気である。
(四)　ネプトゥヌスについては、本書第三巻第二章(注)四参照。
(五)　プルトンは地下の神である。地中より植物を芽生えさせ、地下の富の所有者とされる。

（六） サラキアは、ローマのネプトゥヌスの后の女神。
（七） プロセルピナはローマの農業の女神。
（八） ミネルウァについては、本書第一巻第二章（注）七参照。その神殿はカピトリウムの丘に建っていた。ハリカルナソスのディオニシウス（一世紀のギリシアの歴史家）によれば、ユピテルの神殿の両側にユノとミネルウァの神殿が建っていたと述べている（ディオニシウス『古ローマ史』四の六）。
（九） マクロビウスは、ミネルウァはアエテルのもっとも高い部分を占めるものとしているが、しかし、ミネルウァがユピテルの頭から生れたという伝説については触れていない。
（一〇） サトゥルヌスはローマの農業の神。ギリシア神話でのクロノスと同一視され、ゼウスに王位を奪われたのち、ローマに来たとされている。その神殿は、カピトリウムへの道路上にあったといわれている。
（一一） 本書第七巻第十九章参照。
（一二） ウェルギリウス『農耕詩』二の三二五—六。
（一三） テラ（Terra）は元素としての地、テルス（Tellus）は懐妊するという意味における地の女神、テルモ（Tellumo）は地に産み出させる男神。アウグスティヌスは、本書第七巻第二十三章でも論じている。
（一四） ケレスはローマの古い豊穣の神。
（一五） ウェスタ女神については、本書第二巻第二十九章（注）二参照。
（一六） ウルカヌスについては、本書第三巻第三章参照。
（一七） 不貞な行為のこと。

第十一章

異教徒の学者たちが、同一のユピテルであると弁護した多くの神々について

それゆえ、人びとは、自然学的な論拠や議論によって、その欲するところのことを主張するがよい。すなわち、ユピテルをこの世界の魂となして、四つの、あるいは任意の数の元素から構成され合成されているこのかたまりの全体を、ユピテルがみたし動かすと考えるがよい。あるいは、ユピテルがそのうちから自分のわけまえを妹や弟たちにゆずると考えるがよい。あるいは、ユピテルは、アエテルと考えて、その下にひろがる空気であるユノをいだけるようにするがよい。あるいは、ユピテルは空気をも含めて天全体であると考えて、いわばその妻であると同時に母である(このことは神々にあってはけがらわしいことではない)地を、豊饒と雨と種子とをもって孕ませるとするがよい。あるいはまた、(すべてのものを一々あげる必要がおこらないように)多くの人びとは、もっともすぐれた詩人の言葉と考えているが、

「神はすべてのものに、すなわち、地にも、海のはてにも、天のふかみにも遍在する」(一)といわれているところのもの自身が、アエテルにおいてはユピテルであり、空気においてはユノであり、海においてはネプトゥヌスであり、海のふかいところではサラキア(二)であり、地においてはプルトンであり、地のふかいところではプロセルピナなどであり、家々の炉辺においてはウェスタであり、工匠の炉においてはウルカヌスであり、天体においては日と月と星であり、

うらないにおいてはアポロであり、商業においてはメルクリウス[三]であり、もののはじめにおいてははじめるものであり、おわりにおいてはおわらせるものであり、時においてはサトゥルヌスであり、戦争においてはマルスとベルロナであり、ぶどう畑においてはリベル[四]であり、穀物においてはケレスであり、森においてはディアナ[五]であり、智力においてはミネルウァであるところのものとしよう。最後にまた、ユピテルはかのいわば平民の神々の胸のうちにあると考えよう。すなわち、ユピテルはリベルという名をもって男の精子を、リベラという名をもって女のそれをつかさどるとしよう。また、生れたものに日のめをみせるディエスパテル[六]であるとしよう。また女の月のものをつかさどるメナの女神であるとしよう。また、子を生みだそうとするものによってよび求められるルキナ[七]としよう。地の懐からとりあげることによって、生れ出るものを助けるところのものとしてオピスとよぼう。泣きさけぶことができるように口をあけてやるものとしてヴァティカヌスとよぼう。地からあげるものとしてレヴァナとよぼう[八]。ゆりかごを守るものとして、クニナの女神とよぼう。ほかの神ではなく、ユピテルこそ、新しく生れたものの運命をうたって、カルメンテス[九]とよばれる女神のうちにあるものと考えよう。偶然のできごとを支配するものとして、フォルトゥナ[一〇]とよぼう。むかしの人びとは、乳房をルマとよんだのであるから、ルミナの女神[一一]のうちにあって、赤子のために乳房に乳をしぼりいれるものとしよう。ポティナの女神のうちにあって、飲みものをつかさどり、エドゥカ[一二]のうちにあって、食物を与えるものとしよう。幼な子のおそれのゆえに、パウェンティア[一三]、かなえられる希望のゆえにウォルピア[一四]、行動のゆえにアゲノリア[一五]とよぶことにしよう。また、それによって人間

がはげしい行動にかりたてられる刺戟のゆえに、スティムラの女神とよぶことにしよう。また、活動的にすることによって、ストレニアの女神であり、数えることをおしえるゆえにヌメリアであり、うたうことをおしえるゆえにカメナ[一六]であるとしよう。また、よい知恵をかすことによって、コンスス[一七]の神であると同時によい考えをふきこむことによってセンティアの女神[一八]であるとしよう。また少年の衣服を脱いだのち、青年期にはいるのを見守るユウウェンタスの女神[一九]であるとしよう。また、青年にひげをつけてやるフォルトゥナ・バルバタ[二〇]であるとしよう(人びとは、青年をあまり尊重しなかったのでこの神がどのようなものであろうと、すくなくとも男神として、節のゆえにノドゥトゥス[二一]とよばれたように、ひげのゆえに、バルバトゥスとよぶか、あるいはすくなくともフォルトゥナとはよばずにひげをつけるのだから、フォルトゥニウスとよぶべきであったのに、そうはよばなかったのである)。また、ユガティヌスの神々[二二]のうちにあって、男女をめあわすところのものであり、処女妻の帯がとかれるときによび求められるものとして、ウィルギネンシスとよぶことにしよう。それはまた、ギリシア人においては、プリアプス[二三]であるムトゥヌスあるいはトゥトゥヌスであるとしよう。もしもそうすることがはずかしいことでなければ、わたしがこれまで語ったすべてのことと、まだ語らないすべてのもの(というのは、わたしはすべてのものを語らねばならぬとは考えないから)――それらすべての神々と女神とが唯一のユピテルであるとしよう。そして、それらすべてのものは、ある人びとの主張するように、ユピテルの部分とも考えられ、あるいは、ユピテルを世界の魂と考えようとする人びとにそう思われるようにユピテルの能力ともみられるのであるが、このあとの方が偉大

しばらく問わずにおこう）人びとがもっとかしこく、はしおって唯一の神をあがめてもなにを失うことがあろうか。じっさい、この唯一神があがめられるなら、そのどの部分が軽蔑されるであろうか。しかし、もしもその忘れられ、なおざりにされた部分が怒ることをおそれるべきであるとするなら、そうすると、人びとの主張するように、その全体はいわば唯一の生きたものの生命であって、この唯一のものが、いわばその能力や肢体や部分としてすべてのものを含むわけではなく、そのある部分が他の部分とはべつに怒り、なだめられ、刺戟されるとするなら、各部分は他の部分とはべつの生命をもつわけである。しかし、もしもその部分もまた、個々別別にすこしずつあがめられなかったなら、すべてのものが同時に——すなわちユピテル自身の全体が——きずつけられたであろうというものがあるなら、それは愚かなことであろう。じっさいそれらすべてのものをもつところの一者自身があがめられるとき、それらの部分のいかなる部分もおろそかにされることはないのである。すなわち、数限りなくあるところのものは省略して、すべての星はユピテルの部分であって、[二四] それらはすべて、生命と理性的な魂とをもち、したがって疑いもなく神々であると人びとがいうとき、かれらはきわめて少数の神々に祭壇をつくり、別々に犠牲をささげねばならぬと考えていながら、どれほど多くの神々をまつらずにいるか、またどれほど多くの神々に神殿を建てず、祭壇をつくらずにいるかに気付かないのである。それゆえ、もしも、個々別々にあがめられていないところの神々が怒るとするなら、人びとは、天全体が怒っているのに、少数のなだめられた神々とともに生きることをおそれない

のであろうか。しかし、人びとは、そのあがめるユピテルのうちにすべての星があるのであるから、そのゆえに、すべての星をあがめるのであるとするなら、この簡単な仕方で、ただユピテルのみにおいて、すべてのものに祈ることができるであろう(そうすれば、ユピテルにおいてなにものも軽んじられることはないから、なにものも怒ることはないであろう)。そしてそのあるものをあがめることによって、なおざりにされるずっと多くのものに、いかなる正当な理由も与えることがなくなるであろう。とくに、その高い場所から光り輝く星よりも、けがらわしい裸体でその身をのばしているプリアプスの方が重んじられるのであるから。

(一)　ウェルギリウス『農耕詩』四の二二一―二。

(二)　サラキアについては、本書第七巻第二十二章参照。

(三)　メルクリウスはローマの商売の神、ギリシアのヘルメスと同一視される。

(四)　リベルはイタリアの古い生産と豊穣の神で、ギリシアのディオニュソスと同一視された。

(五)　ディアナについては、本書第三巻第十一章(注)七参照。

(六)　ディエスパテルは、語原的にはユピテルと同じである。すなわち、Dieu Pater(天なる父よ)という呼びかけの表現が一語となり、ユピテル(Jupiter)となった。アウグスティヌスはここではラテン語の dies(日)をかけて、ディエスパテルと呼んでいる。

(七)　ルキナは、光へもたらす女神、すなわち、誕生の女神として、元来はユノの呼称であるが、ここでは区別された神として扱われている。

(八)　ローマでは、新しく生れた子供を床に置くという風習があった。父親がその子供を抱き上げることによって、養育すべき子供であることを認知することになる。レウァナはラテン語の levare(揚げる)

からとられている。

（九） カルメンテスは、元来、ひとりの女神（お産の神）で、カルメンティス（Carmentis）などと呼ばれたが、複数形カルメンテス（Carmentes）と呼ばれて、前むき（Prorsa）と後むき（Postverta）の二人を意味するようになった。

（一〇） フォルトゥナは豊穣多産の女神。ローマ以外の場所でも古くより崇拝されていたが、のち、運命の女神テュケーと同一視されるにいたった。

（一一） ルミナは、ローマの、子供に乳を飲ませる母を護る神。ルマ（ruma—乳房）という語よりきている。

（一二） ポティナ、エドゥカ、そして他の一人キュバの三女神は、子供が乳離れをしたときに崇拝することを教えられたとされる。

（一三） パウェンティアは、子供の驚きや恐怖を護る女神。「おそれ」は pavor である。

（一四） ウォルピアについては、本巻第八章参照。

（一五） アゲノリアはラテン語の agere（行動する）からとられている。

（一六） カメナという名は、語原的にはカルメン（carmen—歌）からきたものといわれる（ウァルロ『ラテン語論』七の二七）。

（一七） コンススはローマの古い神で、農業、とくに取り入れの神であったとされる。

（一八） センティアはウァルロによって触れられている女神なのであろうが、知られていない。

（一九） ユウウェンタスの女神は、ユウウェンタ（青春・若者の意）からとられ擬人化されたものであろう（キケロ『神々の本質について』一の四〇の一一二他）。

（二〇） バルバタは、バルバトゥス（barbatus—ひげのある）からとられている。

(二一)　ノドゥトゥスは、ノドゥス(nodus—関節)からとられている。
(二二)　ユガティヌスについては、本書第六巻第九章参照。
(二三)　プリアプスについては、本書第二巻第十四章参照。
(二四)　このような説はストア派からおこっているものである。すなわち、ストア派によれば、光は神性をもつものであり、したがって、太陽、その他の天体も神性をもつものであった(キケロ『神々の本質について』二の一五の三九)。

第十二章

神は世界の魂であり、世界は神の身体であると考える人びとの説について

しかし、どうなるのであるか。それは鋭敏な人びとの、またあらゆる人びとの心を動かすべきことであって(というのは、そのことにはとくにすぐれた智力を必要としないから)、すべての人びとは、論争を求めることをやめて注意すべきではなかろうか。すなわち、もしも神が世界の魂であり、この魂である神に対して、世界はいわば身体である——したがって、魂と身体とからなる一つの生きたものがある——とするなら、そしてこの神が、いわば自然のふところとして、その自然のうちにすべてのものを含み、この世界というかたまりの全体が生かされているその魂からして、あらゆる生命をもったものの魂が、それぞれその生れ方にしたがってお

こるのであるなら、神の部分でないようなものはまったく残らないわけである。もしもこのようであるなら、どのように多くの不敬や、不信心なことがおこるであろうかということに、だれが気付かないであろうか。すなわち、ひとはなにをみつけようと、神の一部分をふみつけることであり、また、生きものを殺すごとに、神の一部分を殺すわけである。わたしはそのようなことを一々あげようとは思わない。それらはすべて、誰でも考えてみれば思い付くことであるが、はずかしくていえないのである。

第十三章

ただ理性をもつ生物のみが、唯一神の部分であると主張する人びとについて

しかし、たとえば、人間がそうであるような理性的動物のみが神の部分であると主張するものがあるなら、全世界が神であるのに、どうして獣類が神の諸部分であるものと区別されるのか、わたしにはわからないのであるが、しかし、そのようなことについていい争う必要があろうか。理性的動物、すなわち人間について考えてみるのに、少年が打たれるとき神が打たれるということほど不幸なことが考えられようか。じっさい、神の部分が放縦になり、不義不敬になり、救われないものとなるというようなことは、まったく正気を失ったものでなければ、どうしてたえられようか。要するに、神は、それをあがめないものがあっても、その部分によっ

てあがめられないのであるから、どうしてそれに怒ることがあろうか。それゆえ、すべての神は、それ自身の生命をもって、それぞれ、それ自身のために生き、そのいかなるものも他のあるものの部分であることはなく――そのすべてのものがあがめられないほど多くのものがあるから――知られあがめられるかぎりのすべてのものが、あがめられねばならないというほかはない。これらの神々のうち、ユピテルこそ王として支配するものであるから、この神によってローマ帝国は建設され拡大されたと、人びとによって考えられているのだとわたしは信じる。というのは、もしもこの神がそのことをなさなかったら、他のどの神がそのような大事業を企てたと信じられようか。神々はみな、自分自身のつとめと仕事にいそがしく、他の神の領分に手を出すことはできないのである。それゆえ、神の王によって、人間の王国も拡大され増大されることができたのである。

第十四章

王国の増大をユピテルに帰することは適切でない。もしも、人びとの主張するように、ウィクトリアが女神であるなら、この女神のみで、その仕事には十分であろうから

さて、つぎに、なにゆえ、王国自体が神でないのか、まずその理由をたずねよう。じっさい、

もしも、ウィクトリア(一)が女神であるとするなら、なにゆえそうであってはならぬのであるか。また、もしもウィクトリアがその勝利を得させようとするものをひいきにし、かばい、いつもその側につくとするなら、その仕事について ユピテルをわずらわす必要があるだろうか。この女神がひいきにし、かばいさえするなら、たとえ、ユピテルがはたらかず、あるいは別のことをしているとしても、どの民族が征服されずにいるであろうか。またどの王国が屈服されないであろうか。しかし、なんの理由もないのに、無法にも戦争をしかけ、平穏でなにもなさない隣国に、ただ王国を拡大するためにみずから進んで挑戦することは、おそらく、善良な人びとの不快とするところであろう。もしも、そのように感じるものがあるなら、わたしはまったく同感であって賞賛する。

(一) ウィクトリアはギリシアのニーケーと同一視される勝利の女神。その神殿は、ローマのパラティウムの丘(古代ローマ七丘の中心の丘)にあったとされる。

第十五章

その領土を拡大しようと欲することは、善人にふさわしいことであるか

それゆえ、人びとは、領土の拡大をよろこぶことが善良な人間にふさわしいことであるか、それを考えてみるがよい。正義の戦いをしたその相手の不義が領土の増大をたすけたのであっ

て、もしも、隣国が平穏で正しくあって、不法にも、それにむかって戦端をひらくというようなことをさせなかったら、それはまったく、小国であったであろう。そしてそうすれば、人間世界にとっていっそう幸福なことに、すべての国はむつまじい近隣のよしみを楽しみながら小国であるだろう。そして、一都市にじつに多くの家があるように、世界にもじつに多くの民族国家があるであろう。それゆえ、戦争をしかけ、諸民族を屈服させて領土を拡張することは、邪悪なものにとっては幸福と思われるが、善良なものにあっては必然性と思われる。しかし、不義なるものが義なるものを支配する方がいっそうよくないから、そのかぎり、この必然性を幸福とよんでも不適当ではない。しかし、戦争することによって、近隣のよくないものを屈服させるよりも、善良な隣邦とむつまじくくらすほうがいっそう大きな幸福であることは疑いをいれない。それを征服の対象にしようとして、憎悪や恐怖の対象を得ようと欲することはよくない希望である。それゆえ、不敬で不義な戦をではなく、正義な戦をすることによってローマ人があのように大きな領土を獲得することができたのであるなら、他国の不義もまた、いわばある種の女神としてあがめられるべきではなかろうか。というのは、わたしたちの知っているとおり、この他国の不義が帝国の拡大に協力したのであって、この不義は他国のものを不義ならしめて、正義の戦がそれに対して行われるようなものを存在させて、帝国が増大させるようなものにしたのである。さて、もしもパウォルやパルロル（二）やフェブリス（三）がローマの神々であるのに価したなら、なにゆえ不義はすくなくとも外国の民族の女神であってはいけないのであろうか。それゆえ、これら二つのものによって、すなわち、他国の不義とウィクトリアの女神と

によって、不義が戦争の原因をつくり、ウィクトリアがその戦争をうまく終結させるときには、たとえユピテルは休んでいても帝国は増大したわけである。じっさいその恩恵とも考えられるところのもの(勝利)が神々とみなされ、神々とよばれ、神々としてあがめられ、そしてそれらのものがその部分として呼び求められるとき、ユピテルはこの勝利を得ることになんのかかわりを持つであろうか。しかし、勝利がウィクトリアとよばれるように、ユピテル自身がレグヌム(王国)とよばれるなら、ユピテルも勝利を得ることにかかわるところがあるであろう。しかし、王国がユピテルの賜物であるなら、なにゆえ勝利もまたユピテルの賜物であると考えられないのであろうか。もしも、ユピテルがカピトリウムの石(三)としてではなく、諸王の王、諸支配者の支配者としてみとめられ、あがめられるなら、たしかにそのように考えられるであろう。

(一) パウォルとパルロルは、ローマの軍神マルスの従者で、恐怖という意をもつ。ローマ第三代目の王トゥルス・ホスティリウスによってその崇拝が定められた(リウィウス『歴史』一の二七)。
(二) フェブリスについては、本書第二巻第十四章参照。
(三) ユピテルの石の像。

第十六章

なにゆえ、ローマ人は、すべてのものごとと、あらゆる動きとにそれぞれの神を考えながら、休息の女神の殿堂を門外におこうとしたのか

さて、わたしははなはだ奇異に思うのであるが、ローマ人は、一々のものごとと、ほとんど一々の活動に、それぞれそれをつかさどる神々を考える――たとえば、行動にかりたてるところの女神をアゲノリアとよび、過度の行動を刺戟するところの女神をスティムラ(一)とよび、極度に人間の行動を抑制して、人間を、ポンポニウス(二)のことばをかりていえば、ムルキドゥス(三)にする、すなわち、ひどく不精で不活発にするところの女神をムルキア(四)とよび、また、人間を活動的にするところの女神をストレニア(五)とよび、それらの女神たちに、公けのまつりをすることをひきうけたのに、かれらは休息をもたらすところの女神をクィエスとよびながら、その神殿を丘の門外に設けて(六)、その女神を公けに受け入れることを欲しなかったのである。このことは不安な精神のしるしであるか、それともむしろ、あの――もちろん神々のものではなくて――ダエモンの群をあがめつづけるところのものが休息をもつことができないということを意味しているのだろうか。この休息にむかって、まことの医師は、「わたしは柔和で、心ひくければ、わたしにまなべ、そうすればあなたの魂に休息を得させる(七)」と語って、まねかれているのである。

(一)　アゲノリアおよびスティムラについては、本巻第十一章で触れられた。
(二)　ポンポニウスについては、同名の人物が多く、だれであるか指示できない。
(三)　ムルキドゥス(murcidus)は「怠惰な、不精な」の意。
(四)　ムルキアはウェヌス女神の添名であるが、アウグスティヌスは不精の女神としてあつかっている。
(五)　ストレニアはラテン語の strenus(活動的)からとられている。
(六)　クィエス女神の神殿は、ラティウムの古い町ラビカナの道にあったとされる(リウィウス『歴史』

四の四一)。同じ女神の別の神殿がローマ東北の門、すなわち、ポルタ・コルリナの外側にあったのであろう。クィエスはラテン語の quies(休息)からとられている。
(七)「マタイによる福音書」一一の二九。

第十七章

ユピテルが最高の権力をもつものであるなら、ウィクトリアも女神であると考える必要があるだろうか

それとも、人びとは、ユピテルがウィクトリアをつかわすのであって、ウィクトリアはいわば、神々の王であるものの指図にしたがって、その王が命じるところのもののところへおもむいて、それらのものの味方になるのだというのであろうか。このようにいうことは、人びとがその憶測にしたがって神々の王だと考えるユピテルについては真実ではないけれども、かのもろもろの世のまことの王であるところのものについては真実である。この王は、いかなる実体でもないウィクトリアをつかわすのではなくて、その御使をつかわして、(一)その欲するところのもので征服したもうのであるが、その意図はかくれているかもしれないけれども、けっして不義ではないのである。じっさい、ウィクトリアが女神であるなら、なにゆえトリウンフス(二)もまた神であって、ウィクトリアは、その夫か、兄弟か、息子として結ばれはしないのか。じっさ

い、それらの人びとが神々について考えたところのことは、もしも、詩人たちがつくって、わたしたちがとりたてたなら、それらは詩人たちの笑うべきつくりごとであって、まことの神に帰せられるべきではないと、かれらが答えたようなことである。しかしそれにもかかわらず、それらの人びとは、そのようなたわけたことを詩人たちの書のうちに読んだときではなく、神殿でまつったとき笑いはしなかったのである。それゆえ、なにごとについても、ユピテルにたのみ、ただユピテルにのみ乞い願うべきである。というのは、ウィクトリアは、どこにつかわされようとも女神であって、ユピテル王のもとにあるかぎり、あえてそれにさからって自分の意志をとおすことはできないのである。

（一）「御使をつかわす」という表現は、旧約聖書において用いられる（「創世記」二四の七、「歴代志上」二一の一五など）。

（二）triumphus——勝利の意。

第十八章

幸福と幸運とが女神であると考える人びとは、どのような根拠で両者を区分するのであるか

幸福もまた女神であるというのはどうであろうか。幸福もまた神殿を建てられ（一）、祭壇を設け

られ、ふさわしい祭祀をささげられている。それゆえ、ただ幸福のみがあがめられるべきであろう。じっさい、幸福が存在するなら、いかなる善が存在しないであろうか。しかし、幸運（二）もまた女神であると考えられあがめられるのはどういうわけであるか。幸福と幸運とは別のものであるのか。幸運は悪いものであることができるが、幸福は悪いものであるなら幸福ではないであろう。たしかに、両性のすべての神々（神々にもまた性別をもっているとして）はまったく善であると考えねばならぬであろう。このことは、プラトン（三）も、他の哲学者たちも、国家や民族のすぐれた指導者たちもいっている。それでは、幸福がときには善であり、ときには悪であるというのはどうしてであろうか。悪であるときには、女神ではなくて、にわかに邪悪なダエモンにかわるのであろうか。それでは、その女神はどれだけ多くあるのか。もちろん、幸福にめぐまれた、すなわち、運のよい人びとがあるだけである。しかし、同時にすなわち同一のときに、運の悪い人びともずいぶん多くあるのだから、同一の幸運でありながら、同時に善と悪とである。――あるものに対しては善であり、あるものに対しては悪であるのか。女神であれば幸運はいつも善であるのか。そうすれば、幸運が幸福なのであって、なにゆえちがった名が与えられるのであるか。しかし、このようなことはこらえなければならない。同一のものも二つの名でよばれるのがならわしである。しかし、なにゆえ、ちがった殿堂や、ちがった祭壇や、ちがった祭祀があるのか。その理由は、人びとの説によると、幸福のほうは善人がそれにさきだつ功績によってもつところのものであるのに対して、幸運のほうは、善とよばれるところのものも功績の吟味なしに善人にも悪人にも、まったく偶然おこるのであって、そのゆえにこそ

幸運とよばれるからである。それでは善悪の判断なしに、善人にも悪人にもつくところのものは、どうして善であるのか。しかし、まったく盲目であって、前後のみさかいもなく、だれにでもぶっつかって、自分をあがめるものをたいてい見逃し、自分を軽蔑するものにくっつくところのものは、なにゆえあがめられるのであるか。あるいはまた、この女神をあがめるところのものらが、なにかためになることをして、そのゆえに女神によって認められ、愛されるのであるなら、女神はもう功績にしたがってくるのであって、偶然くるのではない。そうすると、上にあげたフォルトゥナの定義[四]はどうなるのか。その名をも偶然からとったということはどうなるのか。じっさい、まったく偶然であるなら、この女神をあがめることも無益である。しかし、女神をあがめるものを見分けて、そのためになるなら偶然ではない。フォルトゥナをも、ユピテルは、その欲するところへつかわすのであるか。そうすると、ユピテルのみがあがめられるべきである。フォルトゥナは、それに命令してその欲するところへつかわそうとするものに、さからうことができないのである。それはとにかく、それによって、フェリキタスをまねくことができるような功績をもとうとしない悪人は、フォルトゥナをあがめるがよい。

(一)　幸福(フェリキタス)の神殿については、キケロが触れている(キケロ『ウェルレスを駁する(二)』四の二の四)。
(二)　幸運はフォルトゥナ(Fortuna)である。
(三)　プラトン『国家』二の三七九以下。
(四)　本巻第十一章参照。

第十九章

女性のフォルトゥナについて

人びとは、フォルトゥナとよぶこのものに、いわば神としてじつに多くのものを帰したのであって、ローマの婦人たちによって奉献され、フォルトゥナ・ムリエブリスとよばれた(一)その女神像がものをいって、ただ一度だけではなく何度もくりかえして、ローマの婦人たちはその女神をまつったと語ったということを記憶にとどめているほどである。じっさい、このことは、真実であっても、わたしたちはおどろくべきではない。というのは、そのような悪意をもったダエモンにとっては、あざむくことは、たいしてむつかしいことではないのであって、人びとは、その手管と策略とを、むしろ、その語ったという女神がただ偶然におこるのであって、功績を報いにくる女神ではないということからさとらねばならぬからである。じっさい、フォルトゥナはおしゃべりで、フェリキタスはものをいわなかったのであるが、それはなにゆえかといえば、人間が、なんらの善行がなくともかれらを幸運にしてくれるフォルトゥナを味方に引き入れて、正しく生きることに心を用いないからである。そしてもしも、フォルトゥナがものをいうとするなら、それはすくなくとも、女性のフォルトゥナではなくて、男性のフォルトゥナ(二)がものをいうのであろう。偶像を奉献した婦人たちがそのように大きな奇跡を婦人のおしゃべりによってつくりあげたのだと考えられるといけないからである。

（一）フォルトゥナ・ムリエブリスの神殿は、前四八八年、元老院の命によって建てられた。その場所は、前五世紀の貴族ガイウス・マルキウス・コリオラヌスが、自分の母やローマの婦人たちの嘆願にこたえてローマ攻略を思いとどまり、立ち去った地点であるとされる（リウィウス『歴史』二の四〇、プルタルコス『英雄伝――コリオラヌス』三七参照）。

（二）フォルトゥナ・バルバタにかんしていわれている。本巻第十一章参照。「幸運」の神は、女神だけでなく、男神も存在したのである。

第二十章

異教徒は、他の諸徳をさておいて、ウィルトゥスとフィデスとに殿堂や祭祀をささげたが、それらに神性を帰することが正しかったなら、他の諸徳も同様にあがめられるべきではなかったか

ウィルトゥス（徳）をもまた、人びとは女神となしたのであるが、じっさい、ウィルトゥスが女神であるなら、その方が他の神々よりも選ばれるべきであった。ところが、ウィルトゥスは女神ではなくて、神の賜物であるから、ウィルトゥスは、ただそれのみが与え得るところのかたから祈り求められるべきであって、その他の偽りの神々のむれはみな無効であろう。しかし、なにゆえ、フィデス（信仰）もまた、女神であると信じられて神殿と祭壇を設けられたのであるか。フィデスを正しく理解するところのものはみな、自分自身をその住処となすのである。し

かし、人びとはフィデスがなんであるかをどうして知るのであるか。その第一の最高のつとめはまことの神を信じることではないか。しかし、なにゆえ、ウィルトゥスだけで十分でなかったのか。ウィルトゥスがあれば、フィデスもあるではないか。じっさい、人びとは、ウィルトゥスを四種に――すなわち、知恵と正義と勇気と節制とに分けねばならぬと考えたから、(一)そして、それら四種は、それぞれに属するところのものを持つかぎり、フィデスは正義の部類に属するのであって、「義人は信仰によって生きる」(二)ということがどういうことであるかをわたしたちが知るかぎり、そのわたしたちにおいてはもっとも重要な地位を占めるのである。しかし、人びとはこのように多くの神々を求めながら、なにゆえ、――もしもフィデスさえも女神であるなら――他の多くの神々にも同じように殿堂と祭壇をささげることができたのに、それらの神々をなおざりにして不当にとりあつかったのであるか、わたしにはわからない。なにゆえ、テンペランティア(節制)はそのおかげで多くのローマの首領たちがけっして小さくはない光栄を得たのに、なにゆえ、女神としてあがめられるのに価しなかったのであるか。最後になにゆえ、勇気は女神ではないのであるか。それは、ムキウスがその右手を焔のなかにさしのばしたとき、かれを助けたのではないか。(三)それは、クルティウスが祖国のために、まっさかさまに地のさけめに身を投げたとき、かれを助けたのではないか。(四)また、それは、デキウス父子が軍隊のためにその身をささげたときにかれらを助けたのではないか。(五)もっとも、これらすべてのものにまことの勇気があったかどうかは、いまは問わずにおこう。なにゆえ、思慮は、なにゆえ知恵は神の地位を与えられるのに価しなかったのであるか。それらすべては徳自体という一般

的な名称のもとにあがめられたのであるか。そうであるなら、他の神々がその部分である唯一神もまたそれと同じようにあがめられることができるであろう。しかし、信仰と貞淑とは、かの徳一般のうちに含まれていながら、にもかかわらず、それぞれその神殿で祭壇を設けられるに価したのである。

(一) キケロ『義務について』一の五以下。
(二) 「ハバクク書」二の四。
(三) 前六世紀、エトルリアのクルシウムの王ポルセンナは、エトルリア王位の奪還のためにローマに進軍したが、ローマの勇士ムキウス・スカェウォラは敵陣に忍び込み、ポルセンナを殺そうとはかった。しかし、事成らず、剣を持っていた右手を燃える火にかざして焼いたので、ポルセンナは驚きのあまりかれを放免した(プルタルコス『英雄伝――プブリコラ』一七)。
(四) ローマでは、前七九年に、人間を神々の犠牲にささげることを禁じる法律が出たが、一般市民には、みずからすすんで犠牲になる者もあった。クルティウスは地震のとき、神々をなだめるために地割れの中に飛び込んだ(リウィウス『歴史』七の六)。
(五) ラテン諸都市がローマに反旗をひるがえしたとき、執政官プブリウス・デキウスは祖国のため単身敵に斬り込み討死した(前三四〇年)。また、その息子は、サムニテス人をはじめとするイタリア諸族がローマに迫ったとき、父と同じ行動を再現した(前二九五年)。

第二十一章

唯一神の存在を認識することのできないものも、徳と幸福とで満足すべきであった

これら女神は真実がつくるのではなく、空想がつくるのである。これらの善は、まことの神の賜物なのであって、それ自体女神ではないのである。しかし、徳と幸福とがあるばあい、なおそのほかに、なにが求められようか。徳と幸福とで満足しないものはなにで満足しようか。じっさい、徳はなさねばならぬすべてのものを含み、幸福は望むべきすべてのものを含むのであるからである。もしも、ユピテルが、徳と幸福が与えられるようにあがめられたのであるなら——帝国の拡大と永続がある善であるなら、それはこの同一の幸福に属するのである——なにゆえ、それらの善が女神ではなく、神の賜物であることが理解されなかったのであるか。しかし、それらの善が女神であると考えられたのなら、すくなくとも、その他のあのように多くの神々は求められるべきではなかった。しかし、人びとがその臆測にしたがってつくりだしたすべての神々と女神との仕事を考えてみたのち、すでに徳と幸福をもっているところのものに、ある神によって与えられるようなものがあるなら、それをあげてみるがよい。すでに、徳がすべてのものをもちあわせているとき、どのような教説がメルクリウス(一)やミネルウァから求められねばならぬだろうか。じっさい、徳は、個人によって、よく正しく生きる術と定義された。それゆえギリシア語で徳がアレテーとよばれるところからして、ラテン人はアルスという名を

つくりだしたと考えられた。しかし、もしも徳がただ才智のあるものにのみ与えられるとするなら、人びとを明敏にすなわち、鋭利にするところの父なるカティウス(二)を必要とするのであろうか。このこともまた、幸福の与えるところのものである。じっさい、才智あるものに生れるということは、幸福なのであって、そのゆえにまだ生れないものは、フェリキタスの女神を味方として、それからこの贈りものを受けられるように、女神をあがめることはできないけれども、才智ある息子が生れるようにと、これをあがめるところの両親はこの才智という贈りものを女神から授かるのである。子を生もうとする母にとって、もしも、フェリキタスがその場におれば、ただうまく子を生むだけでなく、よき子を生めるようにルキナをよび求める必要があったろうか。子供が生れようとするときオピスの女神に、呱々の声をあげるときウァティカヌスの神に、ゆりかごのうちにあるときクニアの女神に、乳を吸うときにルミナの女神に、立つときにスタティリヌスに、来るときにアドエオナの女神に、去るときにアブエオナの女神に(三)、子供をゆだねる必要があったろうか。また、かれらがよき理解力をもつようにメンスの女神に(四)、よきものを欲するようにウォルムヌスの神とウォルムナの女神に、よき結婚をするように結婚の神々に、もっともゆたかな収穫が得られるように田野の神々――とくにフルクテスカの女神――に、うまく戦えるようにマルスとベルロナに、勝利が得られるようにウィクトリアの女神に、尊敬が得られるようにホノルの神に(五)、金持になるようにペクニアの女神に、青銅貨や銀貨をもてるようにアエスクラヌスの神と息子のアルゲンティヌスとに、子供をゆだねる必要があったろうか。人びとがアルゲンティヌスの父としてアエスクラヌスを考えたのは、まず青銅貨

がつかわれて、のちに銀貨がつかわれたからである。しかし、そのつぎには金貨もつかわれるようになったのであるから、アルゲンティヌスはアウリヌスを生んだのではないかと思う。もしも、人びとがアウリヌスを神と考えたとするなら、かれらは、サトゥルヌスよりもユピテルをまさったものと考えたように、その父のアルゲンティヌスよりも、また祖父のアエスクラヌスよりもアウリヌスをまさったものと考えたであろう。それゆえ、これらの精神や身体の、あるいは外的な善のために、そのように多くの神をあがめよび求める(それらの神々のすべてをわたしはあげたのではなく、人びともまた、すべての人間の善をこまかく個々別々に分けて、それぞれに別々のこまかい神を割りあてることはできなかったのである)必要があったろうか。大きくうまくまとめられて、それらの善はことごとく、フェリキタスの女神のみによって与えられるのであって、善を得るためにも、また悪をさけるためにも他の神を求めるにはおよばないのである。じっさい、疲れたもののためにフェッソナの女神[六]を、敵をおっぱらうためにペルロニアの女神[七]を、また、病人のために医師としてアポロ[八]か、アェスクラピウス[九]を、あるいは重態のばあいに両者をよび求めるわけがあろうか。また、田野からいばらをひきぬいてもらおうとスピニエンシスの神[一〇]に、かびがはえないようにロビゴの女神[一一]にたのむわけがあろうか。フェリキタスさえいて守ってくれさえすれば、いかなる悪も生じることはなく、また生じても、まったく容易におっぱらわれたことであろう。最後に、わたしたちはかの二女神、すなわち、ウィルトゥスとフェリキタスとのことを論じているのであるが、もしも、フェリキタスがウィルトゥスの報賞であるなら、それは女神ではなくて神の賜物である。また、フェリキタスが女神

であるなら、それ自身ウィルトゥスをも与えるといわれないのであるか。じっさい、ウィルトゥスを得るということは大きなフェリキタスなのである。

（一）メルクリウスについては、本巻第十一章参照。
（二）カティウスは少年の保護神であるといわれるが明確なことは知られない。ラテン語の catus（明敏な）からとられたものであろう。おそらく、このような神々の名が、ウァルロの神学のなかに見られたものであろう。
（三）アドエオナ、アブエオナの女神についても上と同様である。
（四）メンスは正しい考え方の女神であるとされる。ラテン語の mens（思考力）からとられたものであろう。
（五）ホノル（またはホノス）は、ローマの「徳」の擬人神。ポルタ・コルリナの門外、その他の場所に神殿があったとされる。ホノルはラテン語の honor（名誉）である。
（六）フェッソナという名は、ラテン語の fessus（疲れたという意）からきたものであろう。
（七）ペルロニアという名は、ラテン語の pellere（追い払うという意）からきたものであろう。
（八）アポロは医術の神でもあった。
（九）アェスクラピウスについては、本書第三巻第十二章（注）二参照。
（一〇）ラテン語の「いばら」は spina である。
（一一）ロビゴは麦のさび病の神。

第二十二章

ウァルロは、ローマ人に、あがめるべき神々を教えたと誇っているが、それはどういうものであるか

それではウァルロがローマ人があがめるべき神々をあげたばかりでなく、各々の神に属するつとめをも述べて、同胞市民に大きな恩恵を与えたと誇っているのはどうであろうか。かれがいうには、医者であるひとの名と顔を知っていても、そのひとが医者であることを知らなければなんの役にもたたぬように、アェスクラピウスが神であることを知っていても、この神が健康のためになることを知らず、したがって、なにゆえ、この神に願わねばならないかを心得ていないなら、せっかくの知識もなんの役にもたたないのである。かれはまた別のたとえによってこのことを確認しているが、それによると、なんびとも、だれが鍛冶屋であるか、だれがパン屋であるか、だれが裁縫師であるか、だれにいろいろの道具を求めたらよいか、だれから援助を得たらよいか、だれを指導者や教師としたらよいかを知らなければ、ただ、よく生きることができないだけでなく、一般に生きることもできないだろうという。また、ウァルロの言葉によると、それと同様に、神の認識も各々の神が一々のことがらに、どのような力と能力と権力とをもつかを知られていてはじめて有用であることは、なんびとにも疑いのないことである。かれは「こうして、わたしたちはどのような目的のために、どのような神によびかけ、よび求

めねばならぬかを知ることができるであろうが、それは、道化役者がよくするように、リベル(一)から水を求めたり、リュムファ(二)から酒を求めたりしてはならないからである」という。じっさい、それはたいへん有益なことである。もしも、ウァルロがほんとのことを示して、それからすべての善が由来する唯一のまことの神をあがめるべきことを人間に教えたのなら、だれがかれに感謝しないであろうか。

(一) リベルについては、本巻第十一章参照。
(二) リュムファはローマの水の精の総称。

第二十三章

ローマ人は多くの神を崇拝しながら、すべてのことに対して、ただ、それのみで十分であったのに、フェリキタスには神の礼遇を与えなかった

しかしながら、(さしあたっての問題として)ローマ人の書物と祭式とが真実のものであって、フェリキタスが女神であるなら、それがすべてのものを与え、もっとも簡単に人間を幸福にするのに、なにゆえフェリキタスは崇拝すべき唯一のものであると定められなかったのであるか。じっさい、ひとがあるを望むのは、幸福になること以外のなんのためであろうか。なにゆえおそく、またあのように多くの支配者ののちに、やっとルクルス(一)がはじめてあのように有力な女

神に神殿を建てたのであるか。なにゆえロムルス自身も、幸福な国を建設しようと欲しながら、まっさきに、この女神に神殿をつくらなかったのであるか。またそれさえあれば、なにものも欠けてはいないのに、あるもののために、他の神々に嘆願することを止めはしなかったのであるか。というのは、もしも、この女神が好意をよせなかったなら、ロムルス自身もまず王となることも、またのちに、人びとの考えるように神となることもなかったであろう。それでは、なにゆえ、かれは、ユピテルやマルスやピクス[二]、ファウヌス[三]やティベリヌス[四]やヘルクレス[五]やその他のものをローマ人に神々として定めたのであるか。また、なにゆえ、ティトゥス・タティウス[六]は、サトゥルヌスやオプスやソルやルナやウルカヌスやルクスを神々の列に加え、そのうちにはクルアキナ[七]の女神をもいれながら、フェリキタスを無視したのであるか。また、ヌマ[八]はあのように多くの神とあのように多くの女神を加えなかったのであるか。あるいは、あのように大勢の神々のうちに、フェリキタスを認めることができなかったのであるか。たしかに、ホスティリウス[九]もまた、かの女神を知って崇拝していたなら、新しくパウォルとパルロル[一〇]とを神々としてなだめねばならぬとは考えなかったであろう。じっさい、フェリキタスがいあわせれば、パウォルとパルロルとは、なだめられて立ち去るのではなく、おっぱらわれて逃げ去るであろう。つぎに、ローマ帝国がすでにその領土と勢力とを大いに拡大していたのに、まだ、なんびともフェリキタスを崇拝しなかったのはどういうわけであるか。それでは帝国は大きくなっただけで、あまり幸福ではなかったのであろうか。じっさい、真の敬虔のないところに、どうして真の幸福があるだろうか。敬虔は真の神の正しい崇拝であって、偽りの神々——ダエモンが

あるだけである——の崇拝ではないのである。しかしながら、のちに、フェリキタスが神々の列に加えられてからも内乱の大きな不幸がおこったのである。フェリキタスはそのようにおそく、しかも不名誉を与えられるためではなく、侮辱を加えられるために招かれたことを怒ったのかもしれないが、それは当然ではなかろうか。フェリキタスとともに、プリアプスやクルアキナやパウォルやパルロルやフェブリスやその他崇拝の対象となる神々が崇拝されたのではなくて、崇拝者自身の罪が崇拝されたのである。最後に、もしもそのように偉大な女神をもっともいやしいものの群とともに崇拝せねばならぬと考えられたとするなら、なにゆえ、それはすくなくとも、他の神々よりもすぐれた仕方で崇拝されなかったのであるか。じっさい、この女神が、ユピテルの助言に招かれるといわれる顧問の神々のうちにいれられず、また、選ばれた神とよばれる神々のうちに加えられないことにだれがたえられようか。その場所の崇高なことにおいても、また、建築の壮麗なことにおいても、他のものを断然引きはなすような神殿が、この女神のためにつくられるべきであった。じっさい、なにゆえ、ユピテル自身のためにつくられたものよりも、すぐれたものがつくられなかったのであるか。ユピテルもその支配権をフェリキタスによって与えられたのではないか。それともユピテルは支配していたとき幸福ではなかったというのか。いずれにしても、幸福は支配にまさっている。というのは、王となることをおそれるところのものは容易に見出されるにちがいないが、幸福になることを欲しないようなものは、だれも見出されないからである。それゆえ、もしも神々が、鳥占いや、その他なんらかの方法によって、その意見を求められることができると考えられるなら、フェリキタス

のために、とくに大きく崇高な殿堂が建てられるべき場所が、すでに他の神々の殿堂や祭壇によって占められているようなことがあるとき、神々自身、フェリキタスにその場所をゆずることを欲するかという問題についてその意見を求められるであろう。そしてユピテル自身でさえも、フェリキタスがかれにかわってカピトリウムの丘の頂上を占めることができるように、その場所をゆずるであろう。不幸であることを欲する――そのようなことは不可能であるが――ものでなければ、なんびともフェリキタスにさからうものはないからである。たしかに、ユピテルはその意見を求められたなら、自分よりも偉大で自分の王であるものに対してその場所をゆずるであろうと欲しなかったマルス、テルミヌス（一二）、ユウェンタス（一三）三神が、ユピテルに対してなしたようなことはなさなかった。すなわち、ローマ人の書が語り伝えるところによれば、タルクィニウス王がカピトリウムの神殿を建てようとして、ほかよりもそれにふさわしく適当であると思われた場所が、すでに他の神々によって占められているのを認めたとき、それらの神神の意志に反したことをあえてなそうとはせずに、それらの神々は、そのように偉大な神であり、またかれらの首領であるものの意志によろこんで従うであろうと信じて――カピトリウムの建てられたところには、じつに多くの神々がまつられていたのである――鳥占いによって、それらの神々がユピテルに場所をゆずろうとするか、いなかをたずねてみた。そして、すべての神々は、さきにその名をあげた三神マルスとテルミヌスとユウェンタスをのぞいて、ユピテルに場所をゆずろうというのであった。そういうわけで、カピトリウムは建てられ、それらの三神もそのうちにまつられたのであるが、その像はまったく、人の目につかぬので、学者たち

もほとんどそれを知らないほどである。それゆえ、ユピテル自身は、テルミヌスやマルスやユウェンタスによって軽んじられたように、けっして、フェリキタスを軽んじたのではない。しかし、ユピテルにはゆずらなかったところの神々でさえも、ユピテルをそれらの神々の王となしたところのフェリキタスにはきっとゆずったにちがいない。あるいはまた、たとえ、フェリキタスにゆずらなかったとしても、それはこの女神を軽んじたからではなく、フェリキタスからはなれて自分自身の場所で目立つことよりも、むしろ、フェリキタスとともにまつられて、目立たずにいる方を望んだからであろう。

こうして、フェリキタスの女神は、もっと広大でもっとも崇高な場所におかれたなら、人びとはどこからすべての正しい願望の援助を求めねばならぬかを学ぶであろう。そうすれば、いわば自然自身の示唆にしたがって、他の多くの余分の神々は見捨てられて、ただフェリキタスのみが崇拝され、ただこの女神にのみ祈願がなされ、ただこの女神のみの神殿が幸福であろうと欲する市民によって——市民のうち幸福であることを欲しないようなものはない——おとずれられ、こうして、すべての神々によって求められていた幸福はフェリキタス自身から求められるであろう。じっさい、だれがある神から、幸福以外のあるものを、あるいは自分が幸福に属すると考える以外のものを求めようか。それゆえ、もしも、フェリキタスがだれにでもつくことができるなら(女神であるならそうすることができるはずである)フェリキタス自身から得ることのできるところのものを、他のある神から求めようとすることは、いったい、なんと愚かなことだろう。それゆえ、人びとは、この女神を、その礼拝の場所の威厳によってさえも、

他の神々にもましてあがめるべきであった。じっさい、かれら自身の書にみえるように、古ローマ人は、夜の電光が属すると考えられていたスンマヌスとかいう神を、(一四)昼の電光がそれに属していたユピテルよりもそれを崇拝していた。しかしながら、ユピテルのために、りっぱで壮大な神殿が建てられたのちは、その殿堂の壮麗さのゆえに、群衆はもっぱら、その方に流れていったので、もはや、耳にすることもできなくなったスンマヌスという名をかつて読んだことを記憶しているものさえもほとんどみつからないのである。しかし、もしフェリキタスが女神でないなら――真実には、神の賜物なのであるから――それを与えることのできるような神が求められなければならない。そしてこの愚かな人間のむなしい大群が求めるような虚偽の神々の有害な大群が見捨てられねばならない。これらの人びとは、神の賜物をもって自分の神々となし、それらの賜物が与えられるところのもの自身を、奢りたかぶって頑固に傷つけるのである。じっさい、フェリキタスを女神として崇拝し、幸福を与えられる神を見捨てるところのものは不幸を免れないのであって、それは、画かれたパンをなめて、ほんとうのパンをもつところのひとからそれを求めないところのものが飢を免れないのと同様である。

(一) ルクルスは前一一七年頃から前五六年。ローマの将軍。前七四年、執政官となり、ミトリダテス六世の反乱鎮定の将となる。前七五年、ローマにフェリキタス女神の神殿を建てたとされる(プリニウス『自然史』三五の一二の一五六)。
(二) ピクスは農業の神。サトゥルヌス(農耕の神)の子。
(三) ファウヌスは森の神。農産物・家畜などの保護者。

(四)　ティベリヌスはティベル河の神。

(五)　ヘルクレスはギリシアのヘラクレスのローマ名。禍除けの神として崇拝された。

(六)　ティトゥス・タティウスはサビニ王であった。かれはロムルスと共同統治をおこなったとされる。

(七)　クルアキナについては、本巻第八章(注)一参照。

(八)　ヌマについては、本書第二巻第十六章参照。

(九)　ホスティリウスについては、本書第三巻第十五章(注)九参照。

(一〇)　パウォルとパルロルについては、本巻第十五章(注)一参照。

(一一)　もっとも高い地位にある十二の神々の像が広場に立てられたとされる(ウァルロ『ラテン語論』八の七〇の七一)。

(一二)　テルミヌスはローマの境界の標の神。境界の標は神聖なものとして立てられたので、その神が考えられた。テルミヌスはユピテル神殿が建てられる以前からカピトリウムにあって、その場所をユピテルにゆずることを拒んだので、ユピテル神殿の中にその席が与えられたとされる(リウィウス『歴史』一の五五)。

(一三)　ユウェンタスはローマの青春の女神であるが、主として成年男子の保護者である。この女神もカピトリウムにまつられ、テルミヌス神と共に、神殿建造のさいにその場を立去ることを拒んだとされる。

(一四)　スンマヌスはローマの夜の電光の神。その名はキケロやリウィウスの書のなかに現われる(キケロ『予言について』一の一〇の一六、リウィウス『歴史』三二の二九)。カピトリウムのユピテル神殿に、雷によって首が飛んだというスンマヌス神の像があって、これは、その神が別個の神殿を要求したものであると解されたとされる。

第二十四章

異教徒が神々の列に加えて、神々の賜物をも崇拝した理由

しかしながら、異教徒の理由をも考えてみようと思う。かれらはつぎのようにいう。わたしたちの祖先は、それらのものが神の賜物であって神ではないということを知らないほど無知であったのであろうか。そうではなくて、それらのものは、ある神が豊かに施すのでなければなんびとにも与えられないということを知っていたが、それぞれの神々の名を知らなかったから、それらの神によって与えられると、かれらが考えたところのものの名をもって、それらの神々をよんだのである。そしてあるばあいには、そのために名称をすこしくかえて、たとえば、戦争の神をベルムとはよばずに、ベルムからかえてベルロナとよび、ゆりかごの神をクナとはよばずに、クナからかえてクニナとよび、穀物の神をセゲスとはよばずに、セゲスからかえてセゲティアとよび、果実の神をポムムとよばず、ポムムからかえてポモナとよび、家畜の神をボスとよばずに、ボスからかえてブボナとよんだ。また、他のばあいには、すこしもその名称をかえることなく、事物自体のとおりに、たとえば、金を与えるところの女神はペクニアとよばれたが、けっして金自体が女神と考えられたのではない。徳を与えるところのウィルトゥスについても、名誉を与えるところのホノルについても、和合を与えるところのコンコルディアについても、勝利を与えるところのウィクトリアについても同様である。そして人びとのいうと

ころによると、フェリキタスが女神といわれるばあいも同様であって、与えられるところのもの〔幸福〕自体ではなく、それから幸福が与えられるところの神性が考えられているのである。

第二十五章

その名は知られないけれども、幸福を与えると考えられる唯一神のみが崇拝されるべきである

このように事情があきらかにされたので、わたしたちは、その思うところのことを、その心がまだ、あまりにかたくなっていないところの人びとに、おそらく、ずっと容易に説くことができるであろう。すなわち、もしも、人間がその弱さにもかかわらず、幸福はある神によってでなければ与えられることはできないということをさとったら、そしてユピテルもその仲間であると同時にその王である、あのように多くの神々を崇拝するところの人間が、このことをさとったなら——かれらは、幸福がそれから与えられるところのものの名を知らなかったので、その知られないものから与えられると信じていたそのもの(幸福)の名をもってそのものをよぼうとしたのである——かれらは、幸福は、かれらがすでに崇拝していたユピテル自身から与えられることはできず、かれらがほかならぬ幸福という名によって、崇拝せねばならぬと考えていたところのものによって、与えられるにちがいないということをあきらかに示したのである。

かれらがその名を知らないところの神から幸福を与えられるにちがいないと信じていたことは、たしかに正しいと思う。それゆえ、その神をたずね求め、崇拝すれば、もうそれで十分である。さわがしい無数のダエモンの群はしりぞけられるべきであって、その贈物に満足するものは、この神に満足しなければならない。くりかえしていうが、幸福自体を受けて満足するものは、それを与える神を崇拝して満足しなければならない。しかし、それで満足するところのものは、(人間はそれ以上に望むべきなにものもないから)幸福を与えられる唯一神に奉仕しなければならない。この神は、かれらがユピテルとよぶところのものではない。というのは、もしもかれらが、ユピテルこそ幸福を与えるものであると認めたなら、それから幸福が与えられる他の神や女神を、けっして、フェリキタスという名によって求めはせず、また、ユピテル自身をあのようにはずべき行事をもってまつるべきだとは考えないであろう。ユピテルは他人の妻と密通し、美しい少年をみだらに愛しかどわかすものといわれているのである。

第二十六章

神々がその崇拝者に催すことを要求した演劇について

しかし、マルクス・トゥリウス・キケロは、「これらのことはホメロスがつくったのであって、かれは人間的なことを神々に移したのであるが、むしろ神的なことをわたしたち人間に

移したらよかったのに」といっている。[二] 詩人ホメロスが神々の罪を故意につくったことがこのまじめなひと（キケロ）を不快ならしめたのももっともである。それでは、これらの恥ずべき行いが語られ、うたわれ、行われ、神々の名誉のために催される演劇は、なにゆえ、もっともすぐれた学者たちによって、神事のうちにかぞえられるのであるか。このばあい、キケロは、詩人たちのつくりごとにではなく、祖先のならわしに反対の声をあげるべきであったろう。しかし、祖先のものも、「わたしたちがなにをしたというのか。神々自身がそのようなものを、その名誉のために催すことをしきりに求め、はげしく強要し、それを行わなければ、破滅に陥れるぞとおどしつけた。すなわち、それを怠ったばあいには、きびしく復讐し、怠ったものをどこまでもやりとげさせて、やっと満足したようであった」。これらの神々の力をおどろくべき行いを示すものとして語り伝えられているところのものをつぎに述べよう。ローマの農夫で家長であるティトゥス・ラティニウスは、夢のなかで、元老院に行って、ローマの演劇をやりなおすようにと伝えよといわれた。[三] というのは、初日に、ある死刑の判決を受けた犯人が公衆の目の前を刑場にひかれていったが、そのような苛酷な処置は、あきらかに演劇をたのしもうとしている神々にとって不快きわまるものであったからである。さて、夢の中でこのような指示を受けた農夫は、翌日その命令を実行しなかったが、つぎの夜、同じことがふたたび、もっときびしいかたちで命じられた。すなわち、実行しなかったので息子をなくしたのである。また、つぎの夜には、なお実行しなければ、もっと重い罰を受けるぞと警告された。それでもまだ、よく実行しなかったが、はげしくおそろしい病気にかかった。そこで、やっと仲間の忠告に従

って、奉行に事実を報告し、担架で元老院にはこばれ、夢の話をしたところが、たちまち病気がなおって、しゃんと歩いて帰れるようになった。このような大きな奇跡におどろいて、元老院は費用を四倍にして、演劇をやりなおすことにきめたのであった。健全な理解力を持つものなら、だれが気づかぬであろうか。人間は悪意をもったダエモンに服従して、ダエモンの支配から人間を、ただ神の恩寵のみが主であるイエス・キリストによって救うのであるが、正しい考え方によれば、けがらわしいと思われるようなことを、そのような神々のためにしてみせることを強いられたのである。たしかに、神々に強いられ、元老院の命令によってやりなおされた演劇において行われたのは詩人たちのつくった神々の罪であった。それらの演劇において、もっともけがらわしい役者たちが、ユピテルを貞潔の破壊者としてうたい、演じて、なだめたのである。もしも、そのようなことがつくりごとであったならユピテルは怒ったであろう。ところが、ユピテルは、たとえつくりごとであっても、自分の罪が演じられるのを喜んだのであるから、それを崇拝するということは、悪魔に奉仕すること以外のなんであったろう。このようにして、その神――どのローマ人よりも、そのような演劇に不快を感じていた人間よりも、なおいやしい神――がローマ帝国を建設し、拡大し、保護したというのか。そのように、不幸な仕方で崇拝され、そのような仕方で崇拝されなければ怒るところの神が幸福を与えたというのか。

（一） キケロ『トゥスクルム論議』一の二六の六五。なお、キケロが述べていることについていえば、ヘロドトス（前五世紀のギリシアの歴史家）は、その『歴史』のなかで、詩人ホメロスとヘシオドスとが

ギリシア人のための神統をつくり、神々に性を与え、顕職や技能などを割り当てたと述べている(二の五三)。ギリシアの神学は、かなりの程度で人間学的なものであったと考えられよう。

(二) キケロ『予言について』一の二六の五五、リウィウス『歴史』二の三六などに、同様の話が述べられている。

第二十七章

祭司長スカエウォラが区別した三種の神々について

もっとも学識のすぐれた祭司長スカエウォラ(一)は三種の神々を区別したと、書に語られているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。かれによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分のものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。この余分のものについては、大した問題はない。法律に通じた学者がいつもいっているように、「余分のものは害にならない」からである。しかし、人民にひろまると害になるというところのものはなんであるか。スカエウォラによれば、「それはヘルクレスや、アエスクラピウスや、カストルや、ポルルクス(二)は神ではないというようなことである。それらは人間であって(三)、人間の条件に従って滅び去った(四)」。そのほかに

はなんであるか。「神々であるところのものについて、国家は正しい像をもっていないということである。まことの神は、性も年齢もきまった肢体ももっていないから」。祭司長はこのようなことを民衆に知らせることを欲しない。かれらは、そのような主張を虚偽であるとは考えないからである。それゆえ、かれは、国家は宗教の問題について欺かれる方が得であると考えるのであるが、このことは、ウァルロ自身もまた、神的事物に関する書において述べることを躊躇しないのである。弱いものが、そのもとに救いを求めて逃れながら、なにゆえ救われるのかその理由をたずねるとき欺かれる方が得だと信ぜよといわれるとは、なんというすぐれた宗教なのだろう。じっさい、なにゆえスカェウォラは詩人のつくった神々を斥けたか、その理由は同じ書物のなかに語られている。すなわち、詩人たちは、神々の姿をひどくゆがめたので、よき人間とさえも比較にならないほどである。かれらは、神々に盗みや姦通をさせ、そのほかさまざまな仕方でけがらわしい、おろかなことを語らせたり行わせたりしている。二女神がたがいに美の報賞をあらそって、ウェヌスにまかされた二女神はトロヤを破壊した。ユピテル自身も、ある女と臥すために牛や白鳥に姿をかえた。ある女神は人間と結婚し、サトゥルヌスはその子をむさぼり喰った。要するに、考え得られる奇跡的で背徳的なもので、詩人たちの神々にみられないものはなにもないのであるが、それらは、神々の本性からとおくかけ離れている。おお、大祭司長スカェウォラよ、できれば演劇を止めさせるがよい。不死の神々にそのようなことで敬意を表しないように、民衆を教えさとすがよい。民衆は神々の罪に喜んで感嘆し、できるかぎりそれを好んで模倣するのである。しかし、民衆が「祭司長よ、あなたがたがそのよ

うなものを始めさせたのである」というなら、その示唆によって、あなたがたがそのようなことを命じた神々自身に、そのようなものを催すことを命じるなとたのむがよい。しかし、それらのことが悪であって、そのゆえに、神々の威厳について信じられないものであるなら、そのようなことが、なんの罰も受けずに考えられる神々に対する不法は、ますます大きいわけである。しかし、それらの神々は、あなたのいうことをききはしない。それらは、ダエモンなのであって邪悪なことを教え、けがれたことを喜ぶのである。それらは、自分らについて、そのようなつくりごとがなされるとき、それを不法と考えないだけではなく、それらのことが自分の祭祀にとり行われないなら、むしろ、それをたえがたい不法と思うのである。しかしまた、あなたがそれらのものに反対して、ユピテルに——というのは、かれの罪がもっとも多く演劇でなされるから——訴えるなら、あなたがたはユピテルをこの世界全体を支配する神とよぶにもかかわらず、かれにもっともはなはだしい不法を加えるものではなかろうか。あなたがたは、ユピテルを、かのダエモンとともに崇めるべきものと考え、それらの王とよぶのである。

(一)　クィントゥス・ムキウス・スカェウォラのこと。スカェウォラは前一一七年執政官になったが、法学者としてすぐれ、キケロ自身も法にかんする知識をかれから受けとったとされ、その大著『弁論家について』のなかで、スカェウォラに賛辞を述べている(一の三九の一八〇)。

(二)　カストルとポルルクスはゼウスとレダの子供である。ホメロスはかれらを人間として描いた。

(三)　異教の神々は、たんに人間を神としてまつったものにすぎないという説は、ギリシアのエウヘメロス(前三〇〇年頃)によって提出された。アウグスティヌスは、本書第八巻第二十六章においても、こ

のエウヘメロス説について言及している。

(四)「人間の条件に従って」とは「人間と同じように」の意。

第二十八章

神々の崇拝は、ローマ人に領土の獲得と拡大に役立ったか

それゆえ、かれらについてのはなしが、たとえ真実であっても、そのばあいよりも、それを喜ぶほうがずっと大きな罪であるような栄誉によってなだめられる——というよりはむしろ非難される——ような神々は、けっしてローマ帝国を増大したり保護したりすることはできなかった。じっさい、もしもそうすることができたなら、それらの神々はそのように大きい賜物を、ローマ人によりもむしろギリシア人に与えたであろう。ギリシア人は、このような神事、すなわち演劇において、もっとりっぱでふさわしい仕方で神々をまつったのである。ギリシア人は詩人たちの誹謗によって、神々がさんざんにやっつけられるのを見たが、詩人たちにその欲するところをひどくとりあつかう自由を与えて、自分自身もその誹謗を受けることを免れず、また役者というものを、けがらわしいものと考えなかっただけではなく、とくにすぐれた栄誉に価するものと考えた。(一) しかし、ローマ人は、アウリヌスの神を崇拝しなかったのに金貨をもつことができたように、たとえ、アルゲンティヌスをも、また、その父なるアエスクラヌスをも

崇拝しなくとも銀貨や青銅貨をもつことができたであろう。そしてこのことは、改めて述べるのがわずらわしい他のすべてのものについてもかわりはない。それと同様に、ローマ人も、もしも、まことの神がそれを欲せられないなら、そのように広大な領土をもつことはけっしてできないであろうが、しかし、たとえ、かの多くの偽りの神々が知られず、あるいは軽んじられ、かの唯一神が知られ、まことの信仰と正しい習俗とをもって崇拝されさえするなら、この地上に、どれほどの大きさのものであろうとよりよき王国を持つであろう。また、この生ののちに、この地上にそれをもつにしても、もたないにしても永遠の王国を与えられるであろう。

（一）本書第二巻第十一章参照。

第二十九章

ローマ帝国の強力と安定とがそれによって示されたと考えられた鳥占いの虚偽について

もっともすばらしい鳥占いであったといわれ、わたしがすこし前に語ったところのもの(一)、すなわち、マルスとテルミヌスとユウェンタスとは、神々の王であるユピテルにさえもその地位をゆずることを欲しなかったという鳥占いは、いったい、どういうことなのだろうか。それは、人びとによれば、マルスの民族すなわち、ローマ民族はその占めている場所をなんびとにもゆ

ずることがなく、ローマの国境は、テルミヌスの神のゆえになんびとによっても乱されることがなく、また、ローマの若さは、ユウェンタスの女神のゆえになんびとにも屈することはないという意味であったといわれる。それゆえ、人びとは、かの鳥占いがユピテルを、それに屈しないことがほむべきことであるような敵と定めながら、どのような仕方でユピテルをかれらの信じる神々の王となし、また、かれらの支配権を与えたものとすることができるかを考えてみるがよい。もっとも、この鳥占いが真実であるなら、人びとがおそれるべきものは、まったくなにもないわけである。鳥占いは、ユピテルに従うことを欲しなかったところの神々が、キリストに従ったと告白しようとはしないであろう。じっさい、それらの神々は、帝国の領域が侵されることなしに、キリストに屈服し、そのまつられていたところから、また、とくに信者の心から去ったのであった。しかしながら、キリストが肉となって宿られるまえに、いや、わたしたちがいま、ローマ人の書からとって語るところのことがまだ書かれないまえに、しかも、かの鳥占いがタルクィニウス王の治下においてなされてからのちに、ローマの軍隊はなんどもうち破られ敗走させられて、かのユウェンタスがユピテルに屈しなかったという鳥占いが偽りであることをあきらかにした。また、マルスの民族は、ほかならぬ首都において、勝ちほこって進入してくるガリア人によってうち破られた。また、帝国の国境は、多くの都市がハンニバルの手に帰することによって縮められた。こうして、かのりっぱな鳥占いもからっぽになって、ユピテルに対する――神々のではなくて、ダエモンの――反抗が残るのみであった。屈しなかったということと、屈したところから立ち帰ったということは、別のことである。なおまたの

ちに、東方において、ハドリアヌス帝の意志によってローマ帝国の国境は変更をみた。(二)すなわち、ハドリアヌス帝は有名な三地方領、アルメニア、メソポタミア、アッシリアをペルシア帝国にゆずったのであるが、ローマ人によれば、その国境を守り、かのもっとも立派な鳥占いによれば、ユピテルにその地位をゆずらなかったといわれるかのテルミヌスの神は、神々の王よりも、人間の王であるハドリアヌスのほうをおそれたようにみえる。それからまた、上に述べた地方領が回復されたのち、また、わたしたちがほとんど忘れずにいるころに、テルミヌスがまったく無謀にも、糧食を積んでいた船に放火することを命じた。(三)すなわち、ユリアヌス帝は例の神々の託宣にしたがって、まっもう一度退いたことがあった。すなわち、ユリアヌス帝は例の神々の託宣にしたがって、まったく無謀にも、糧食を積んでいた船に放火することを命じた。(三)ローマ軍は、糧食をなくしたうえにまもなく皇帝自身も敵の剣にかかってたおれたので、まったく窮境におちいった。すなわち、敵は四方八方から、将軍を失って混乱している兵士におそいかかったので、講和によって帝国の国境が今日もなおそのままであるところに定められなかったなら、なんびとも免れることができなかったほどであって、その境界はハドリアヌスが認めたようなはなはだしい損害をともなうものではなかったけれども、やはり、両者の歩み寄りによって、いわゆる中をとって定められたものであった。それゆえ、テルミヌスがユピテルにしたがわなかったというのは、うその鳥占いである。(四)テルミヌスは、ハドリアヌスの意志にしたがい、また、ユリアヌスの無謀やヨウィアヌスの窮状にもしたがったのである。このようなことはローマ人のなかでも聡明でまじめなものは気付いていたが、かれらは、ダエモンの祭事を守らねばならなかった国家の慣習に反対するにはあまりにも無力であった。すなわち、かれら自身も、そのようなことがま

ったく偽りだということを知っていたが、それにもかかわらず、唯一真実の神の支配と統治を受けるものと定められた事物の本性にその唯一真実の神のみが受けるべき宗教的礼拝を捧げるべきだと考えていた。すなわち、かれらは、使徒パウロのいうように「永遠にほむべき造物主をおいてつくられたものに仕える」[五]ものであった。この真の神が虚偽の宗教を生けるものの心から一掃しようと、真の宗教のためには死ぬことも辞さない真実に敬虔な聖徒たちをつかわして助けられることが必要であった。

(一) 本巻第二十三章参照。

(二) ハドリアヌス帝(在位一一七年—一三八年)は、ローマ帝国の境界線の変更を決定した。すなわち、国境を管理するテルミヌス神は皇帝ハドリアヌスの権威に屈服し、ハドリアヌス帝は前帝トラヤヌスの東方征服の果実を放棄し、アルメニア・メソポタミア・アッシリアの諸属領地からローマの守備隊を撤去し、ユーフラテス河をもって帝国の境界線と制定した(ギボン『ローマ帝国衰亡史』一の一参照)。

(三) ユリアヌス帝(在位三六一年—三六三年)はコンスタンティヌス帝の甥であるが、その死により即位、前帝時代からのペルシアとの戦争を継いだ。軍勢を集め、チグリス河を下る船団をととのえたが、けっきょく頑強な抵抗にあって撤退。船は無用となり焼き捨てられた(同上、二の二四参照)。

(四) ヨウィアヌス帝(在位三六三年—三六四年)は、ユリアヌス帝の死により登位。ペルシアに譲歩して講和を結び、アルメニア、メソポタミアを割譲した。

(五) 「ローマ人への手紙」一の二五。

第三十章

その崇拝者たちでさえも、異教徒の神々について、どのようなことを考えたと告白しているか

キケロは、自分も鳥占いの職にあったが、鳥占いを嘲笑して、からすや小鳥の鳴き声によって生活の計画を調整している人びとを非難している。(一)しかし、このアカデミア派の哲学者(二)は、すべてのものは不確実だと主張するのであるから、このような問題に権威をもつものと認められるにはふさわしくない。キケロの筆によると、クィントゥス・ルキリウス・バルブス(三)は、『神々の本質について』においてこの問題をとりあげ、かれ自身、事物の本性からおこった、いわば自然学的・哲学的な迷信をゆるしたが、偶像をつくったことや、虚妄の臆説に憤懣(ふんまん)を感じてこういっている。(四)――「それゆえ、諸君は、その得た正しく有用な自然学的認識から、理性が架空のつくりごとの神々を考えるようになったということに気がつかないのか。そしてこのことが、まちがった臆見や、混乱した誤謬や老婆の語るといってもよいような迷信を生みだしたのである。じっさい、神々の形態も年齢も衣服も装飾もわたしたちに知られており、それからまた、系譜や夫婦関係や親族関係も知られているが、それらすべては、引き下げられて人間の弱点に似たものとされている。すなわち、神々は乱心の状態で舞台にあらわれる。わたし

たちは、神々の欲望や、心配や、憤懣を見聞きしているのである。なお、つくりばなしによると、神々も戦争や闘争をしなかったわけではない。しかも、ホメロスによると、(五)神々はどちらかについて、二つの相争う軍隊を守ったのではなく、(ティタネスやギガンテスとのばあいのように)神々自身の戦争をやったのである。このようなことはすべて、語られ、信じられているが、この上なく愚かなことであって、まったく虚妄であり、はなはだしく軽薄である」。異教徒の神々を弁護する人びとの告白としてはこれだけにしておこう。のちに、かれらは、これらは迷信に属するといいながら、かれ自身ストア派に従って説くようにみえるところのものを述べている。——「ただ哲学者だけではなく、わたしたちの祖先もまた、迷信と宗教とを区別した。自分よりも息子が長生きするように終日祈り、犠牲をささげるものは迷信的とよばれたのである」。キケロが、国家の慣習をおそれながら、祖先の宗教をほめたたえ、それを迷信と区別しようと努力して、しかも、どうしてそれが可能であるかはわかっていないのだということにだれが気付かないだろうか。じっさい、終日神々に祈り、犠牲をささげていたものらが祖先によって迷信的とよばれたのなら、なにゆえ、(これはかれが非難したところであるが)神々の年齢のちがいや、衣服の異なる偶像をつくり、神々の系譜や夫婦関係や親族関係を定めたところのものは迷信的とよばれなかったのであるか。このようなことは、たしかに迷信的として非難されるのであるから、この非難はそのような偶像をつくりまつるところの祖先にもあたるのである。それからまた、どのような雄弁をふるって束縛を脱して自由の身になろうと努力しようとも、そのようなものを必要だと考えたところのものにも当るのである。この論議において能

弁に述べ立てるところのものを、民衆の集会においては、そっと語ることもなし得ないのである。それゆえ、わたしたちキリスト者は、わたしたちの主なる神に、キケロが説いたように、天地にではなく、天地をつくられたものに感謝しよう。この天地をつくられたものこそ、かのバルブスがいかにもかれらしく口ごもって十分に非難できなかったところのことを、キリストのもっとも卑しい謙虚と、使徒たちの宣教と、真理のために死に、真理とともに生きる殉教者たちの信仰とによって、ただ、篤信なものの心においてだけではなく、迷信にみちた殿堂においても、その信者の自由な奉仕を受けて覆したのである。

(一) キケロ『予言について』二の三六―八。なお、キケロは前五三年に鳥占いに選ばれたとされている。

(二) キケロは、若い時代に、エピクロス派、ストア派、アカデミア派の哲学を摂取したが、かれの哲学的な基本的姿勢は新アカデミアの懐疑論を代表するものと考えられる。

(三) クィントゥス・ルキリウス・バルブスは、ストア派のギリシア人哲学者パナエティウス(前一八五年―前一〇九年)の弟子。かれは、キケロの『神々の本質について』のなかに登場する対話者の一人である。

(四) キケロ『神々の本質について』二の二八の七〇。

(五) ホメロス『イリアス』二の三一以下。

第三十一章

民衆の考え方を非難して、真実の神の認識には到達しなかったけれども、しかも唯一神を崇拝すべきだと考えたウァルロの説について

ウァルロ自身はどうかというのに、わたしたちは、かれ自身の判断によってではないが、かれが演劇を神事のうちに加えたことを悲しむものであるが、かれは多くの箇所において、いかにも信心家らしく神々を崇拝するように説きすすめているとき、ローマの国家が定めたと記述しているところのものに、自分の判断によってかれが賛成するものではないということを告白してはいないだろうか。したがって、もしも、かれが新しく国家を建設するとするなら、かれはむしろ、自然の規範から神々とその名をとろうとするであろうと告白することを躊躇しないであろう。(二) しかし、事実、かれのいうように、古い民族のうちに生き、古人が受け継いだ神々の名称と仇名(あだな)との歴史をそのままに守らねばならぬから、それらのことを記述し、研究したのも、民衆がそれらの神々を軽蔑せずに崇拝することを目指してであった。このように語ることによって、このもっとも鋭利な作家は、ただ自分自身にとって軽蔑すべきものであっただけでなく、それをかくしておかなければ、民衆自身にも軽視すべきものと思われたようなすべてのものを明るみにだしていないということをよく示している。わたしは、このようなことを憶測しているように思われるかもしれないが、ウァルロ自身がまた別の箇所で宗教について語って

明瞭にいっているのである。——すなわち、ただ、それを知らないほうが民衆に有益であるだけではなく、民衆が、たとえ、偽りであっても、そのように考えないほうがためになるような多くの真理があるから、そのゆえに、ギリシア人は入信の儀式と密儀を沈黙のうちに、また壁の中で行ったのであるといっている。ウァルロがここに、国家や民衆を支配するいわゆる賢人の方策を述べていることは疑いないが、しかしこのような欺瞞を邪悪なダエモンは大いに喜ぶのであって、ダエモンは、欺くものも、欺かれるものをも、その意のままに支配する。その支配から解放するものは、わたしたちの主、イエス・キリストによる神の恩寵以外にはないのである。

なおまた、このもっとも鋭利で博学な作家は、神は世界を運動と理性とによって支配する魂であると信じるところのもののみが神がなんであるかを知るものだと考えられるといっている。それゆえ、かれは、まだ完全な真理には到達していなかった(真の神は魂ではなくて、魂をもつくり、存在させられるものであるから)けれども、もしも慣習の偏見を免れることができたなら、世界を運動と理性とによって支配する唯一神こそ崇拝すべきだとみずから告白し、また、他人にも説いたであろう。したがって、この点についてなおかれと論じなければならないことは、かれが、神は魂の創造主であるといわずに魂といったことだけである。なおまた、かれの語るところによると、むかしのローマ人は百七十年余りもの間偶像なしに神々を礼拝していた。そして「そのままであったなら、神々はもっと純粋にあがめられたであろう」とかれはいっている。この説の正しいことを証明するために、かれはほかにもいろいろあげているが、ユダヤ

民族の例をひいている。そして、なんの躊躇することなく、その章節の結びとして、はじめて国民のために偶像をまつることにしたものたちが、国民から恐怖をなくし誤謬を増し加えたといっているが、かれは、神々が愚かしい偶像によってまつられると、とかく軽蔑されるものだと賢明にも考えたのである。しかし、かれは「誤謬を伝えた」とはいわずに、「誤謬を増し加えた」といっているのであるから、偶像なしにも、すでに誤謬があったということをわからせようとしていることは明らかである。それゆえ、神は世界を支配する魂だと信じるもののみが神がなんであるかを認識したのだと主張し、そして偶像なしのほうが宗教的儀式は純粋に行われると考えるとき、かれがどれほど真理に近づいていたかということに気付かぬものがあろうか。じっさい、そのように古くこりかたまった大きな誤謬に対して異議をとなえることができたのなら、かれが世界を支配すると信じた唯一神のみが、しかも偶像なしに崇拝されるべきであると考えたであろうことは疑いない。そして真理にまったく近づいて、おそらく容易に魂の変易性に近づいたであろうから、魂自体をもつくられた不変の本性のものこそ真の神だということを悟ったであろう。こういうわけであるから、そのような人びとがその書のなかで、多数の神神に対してどのような嘲笑をあびせかけたにしても、かれらはそのようなことを神のかくれた意志によって、強制されて告白したのであって、それを他人に説得しようとこころみたのではない。それゆえ、もしもそのことから、わたしたちのためになんらかの証拠が得られるとするなら、それは、あのように神聖なわたしたちのためにながされた血の独得な犠牲とわたしたちにくだされた聖霊の賜物が、どのように強大な、またどのように邪悪なダエモンの力から、わ

たしたちを解放するかということを認めようとしないものを反駁するためのものである。

（二）「自然の規範から」は「自然の規範に従って」の意である(本書第六巻第四章参照)。ウァルロの個人的な傾向は、明らかに自然的神学の方向を目ざしている。しかし、かれは自分の書のなかでは、ローマ国家において形成された神学をうけいれていたようである。

第三十二章

どのような種類の有用性のために、異教徒の支配者たちは、虚偽の宗教が隷属国民の間に行われることを望んだのであるか

ウァルロは、また神々の系譜について語っているが、それによると、民衆は自然学者よりも詩人のいうことをよくきいたのであり、そのゆえに、かれらの祖先、すなわち、むかしのローマ人は、神々の性別や、系譜を信じ、また神々の夫婦関係を定めたのだといわれる。そしてそのようなことのなされた唯一の理由といえば、それはまったく、国民を宗教上の問題について欺き、そしてそのように欺くことによって、なによりも欺くことを望むダエモンをただまつるだけでなく、まつることがいわゆる有能で賢明な人間の仕事であったからだと思われる。じっさい、ダエモンは、偽ることによって欺くものでなければわがものとすることができないように、支配者である人間も——けっして正しくはなくてダエモンに似ている——虚妄であることと

を知っていたところのものを、宗教の名によって民衆に真理として説いたのである。そしてこのようにして、ダエモンがするのと同じように、民衆を隷属者としてわがものとすることができるように、いわば、民衆をもっともうまく国家社会に結びつけるのである。さて、弱く無学な人間で、国家の指導者とダエモンとの欺瞞を同時に免れられるものがあろうか。

第三十三章

真の神の判断と権能とによって、あらゆる王と王国の支配の期間は定められている

それゆえ、かの幸福をつくり、与えられるところの神——かれのみが真の神であるから——この神自身が善きものにも悪しきものにも地上の王国を与えられるのであるが、しかもそれは、無暴に、いわば偶然にではなく——かれは神であって、フォルトゥナ(一)ではないから——わたしたちには知られないが、かれ自身にはもっともよく知られている事物と時間との秩序によるのである。しかし、その時間の秩序に神は服属するものとして奉仕するのではなく、主人としてそれを支配し、指導者として導くのである。かれは幸福をただ善きものにのみ与えられる。じっさい、幸福は奉仕するところのものも支配するところのものも持ったり持たなかったりすることができるのであって、この点においてはかわりがない。しかし、幸福はもはや、なんびとも奉仕することのない生において完全なものとなるであろう。そのゆえに、地上の王国は、神

によって善きものにも悪しきものにも与えられるのであるが、それはその精神的年齢がまだ幼児のようである崇拝者たちが、そのような賜物をなにか偉大なものとして欲しがることがあってはならないからである。そして、そのことこそ旧約聖書の神秘なのであるが、そこには、新しいものが隠されているのであって、約束も賜物も地上のものであるにもかかわらず知的で霊的であるものは、すでにそのとき、まだ明瞭な形においてではないけれども、かの時間的なもののうちに、どのような永遠性が暗示されているか、また神のどのような賜物のうちに真の幸福があるかを述べ伝えたのである。

（一）フォルトゥナについては、本巻第十一章参照。

第三十四章

ユダヤの王国は、唯一真実の神によって建設され、真の宗教を信じつづけたかぎり保護された

こういうわけで、それよりもよいものを考えることのできない人びとが、ただ、それのみをほしがるかの地上の善もまた、ローマ人がかつて崇拝していた多くの虚偽の神々の力によるものではなくて、唯一神自身の力によるものだということを知らせるために、神はエジプトにおいて、その民を、はじめはきわめて少数であったのにふやし、また、おどろくべきしるしによ

って解放した。すなわち、ユダヤの女は、子供を産むときルキナをよび求めるには及ばなかったのであって、子供がおどろくべき仕方でふえ、ユダヤ民族が信じられないほど大きくなるように、神自身が、生れた子供を迫害してすべての幼児を殺そうとしていたエジプト人の手から守られた。また、子供は、ルミナの女神なしに乳を吸い、クニナなしにゆりかごにゆられ、エドゥカとポティナなしに飲食し、あのように多くの子供を守る神々なしに育てられ、結婚の神々なしに結婚し、プリアプスを礼拝することなしに妻と交わった。また、ネプトゥヌスをよび求めなくとも海は分かれて、それを渡るかれらのために道を開き、寄せてはかえす波浪によって、かれらを追跡するものらを飲みこんだ。また、天からマナをうけたときにも、マニアの女神のようなものをまつることもしなかった。また、かれらが渇いたとき、水が裂けた岩から溢れ出たのであるが、そのときも、かれらはニュムファやリュムファを崇めたのではなかった。かれらは、マルスやベルロナなしに戦いを進めた。そしてじっさい、かれらは勝利なくして征服することはなかったのであるが、しかし、その勝利が女神であるとは考えず、かれらの神の贈物であると考えたのであった。

かれらは、セゲティアなしに穀物を、ブボナなしに牛を、メルロナなしに蜂蜜を、ポモナなしに果実を得た。要するに、ローマ人たちが、虚偽の神々の群れに嘆願しなければならぬと考えたところのすべてのものを、かれらはいっそう幸福に真実の一なる神から受けとったのである。そして、人びとが、不敬虔な好奇心によって真実の神に背くということがなかったら、また、魔術のようなものによって異国の神々や偶像へとそそのかされて最後にはキリストを殺す

に至るまでに欺かれるということがなかったら、ユダヤの人びとは、たとえ(ローマ国家よりも)広くはないとしても、同じ王国のなかにいっそう幸福に生き残ったことであろう。そして、いま、かれらはほとんどあらゆる国、あらゆる民族に散らされているのであるが、それは、あの唯一の真実の神の摂理によることであって、虚偽の神々に属するすべての像、祭壇、森、神殿が打ち倒され犠牲が禁じられるのは、それが、すでにはるか以前に預言者によって預言されていたことが、かれら自身(ユダヤ人)の書において証明されるためである。そして、これら同じことをわたしたち(キリスト教徒)の書において読んだとき、かれらが、それがわたしたちによって虚構されたことだなどと考えないためである。

さて、これらに続けて考察されるべきことがらは次の巻において述べられるであろう。この巻はすでに十分に長いものとなってしまったので、ここで打ち止めなければならない。

(一)　本巻第十一章(注)一二参照。
(二)　プリアプスは豊穣(男性の生殖力)の神である。
(三)　「出エジプト記」一四の二一以下。
(四)　リュムファ(本巻第二十二章参照)は古くからニュムファ(ニンフ)と同一視されていた。
(五)　セゲティア、ブボナ、ポモナについては、本巻第二十四章参照。

第五巻

序 言

すべての望ましいものの充足は幸福であり、幸福は女神ではなく、神の賜物であり、したがって人間を幸福にすることのできるものでなければ、いかなる神も人間によって礼拝されるべきではない（それゆえ、幸福は女神であるなら、ただそれのみが当然礼拝されるべきだといわれるであろう）から、したがってわたしたちはつぎに、善良でなく、それゆえ幸福でもないものもまた、もつことのできるような善をも与えられる神が、どういう理由で、ローマ帝国をあのように大きくならせ、また長く続かせたのであるかを考察しようと思う。というのは、人びとが礼拝していたあの多くの虚偽の神々がそうさせたのではないということは、もうすでに詳しく述べたし、また適当と思われるときに、あらためて述べようと思うからである。

第一章

ローマの覇権もまた他の諸国の支配もその原因は偶然や星の位置にあるのではない

それゆえ、なんらの原因をも、あるいはすくなくとも、なんらかの合理的な秩序からおこるような原因をもたないものを偶然的とよび、また神や人間の意志によらずに、ある秩序の必然性にしたがっておこるものを宿命的とよぶ人びとの説または意見にしたがっていうなら、ローマの権勢の偉大な原因は、偶然的でもなく、また宿命的でもない。人間の支配権が神の摂理によってうちたてられたことはまったく疑いない。もしもそのゆえに、神の意志や能力を運命とよび、人間の支配権を運命に帰するものがあるなら、そのようなひとは、その説は保持していてよいが、その言葉を訂正しなければならない。じっさい、そのひとはのちにだれかが「運命ということばによって何を意味するか」と問うたとき答えることを、なにゆえはじめにいわないのであるか。というのは、運命ということばをきくとき、ふつうのことばづかいによって、ひとが生れあるいは妊(はら)まれるときに、それがどうであるかというような、星の位置の影響力以外のことを考えないのであるからである。そのような影響力は、神の意志にかかわらないと考えるものもあれば、それもまた神の意志にかかわるものであると主張するものもある。しかし、神の意志にかかわりなしに、星がわたしたちのなすことと、わたしたちがもつ善や、こうむる禍悪とを決めるのだと考える人びとは、すべてのものによって、すなわち、真の信仰をもって

いるものだけではなく、どういう種類の神々でも――たとい虚偽の神々でも――崇拝するものによって耳をかされないにちがいない。このような考えかたの帰するところは、いかなる神も崇拝されず、また祈願されないということにほかならないからである。しかし、わたしたちは、さしあたって、そのような人びとを相手に議論をしようとするのではなく、かれらが神々だと信ずるものを擁護するためにキリスト教に反対する人びとを反駁しようと思う。しかし、各人がどのような性質であるか、また各人がどのような善や悪を受けるかを、ある仕方で決めるところの星の位置は神の意志によっているのだと考える人びとが、もしもそれらの星はそのような力を神の最高の力から与えられたのであり、したがって、その意志のままに決めるのだと考えるなら、それははなはだしい誤解である。すなわち、そのような人びとは、天のいわばもっとも明るい元老院や、もっともかがやかしい議事堂において、ある地上の国家がそれを決めたならあたかも人類の決議によって、破壊されねばならぬというような兇悪な行為も決められると考えるからである。また、神は、星と人間との主であるのに、人間の行為が天の必然性によってなされるなら、それについてどのような審判をなすのであるか。また、さきの人びとが、星は最高の神からそうする能力を受けたが、自分の意志によってそれらのことを決めるのではなく、そのような必然性を強いるさいに、まったく神の命令をなしとげるのだといわれるなら、星の意志について考えるだけでもこのうえなくふさわしくないことを、神自身について考えねばならないであろう。また、星はそのようなことをひきおこすのではなく、ただ表示するだけであり、星の位置というのは、いわば未来のことをあらかじめ語る告知であって、じっさいに

それをひきおこすものではない(凡庸でない学者たちはそのように考えていた)[一]といわれるなら、それは占星家たちのふつうのいいかたとはちがっているのであって、占星家たちはたとえば「火星がその位置にあるのは人殺しのしるしだ」とはいわずに、「人殺しの原因だ」という。それにもかかわらず、わたしたちは、占星家が正確な仕方で語っていないということ、そしてかれらが星の位置のうちに見出すと信ずるものを予告するためには、哲学者たちから正しい表現の仕方を借りてこなければならぬということを認めるけれども、双生児の一生について、かれらの行為について、出来事について、また職業や技術や名誉など、その他人間の一生にかかわることがらについて、また死についてさえも、じつにははだしい相違があるので、そのようなことに関しては、双生児が――生れるさいにはほんのわずかな時間をへだてて別々に生れでたのであるが、受胎のさいには同一の交接によって、また同一の瞬間につくられたのに――たがいに似ているよりも、多くのあかの他人のほうがかれらに似ているくらいなのである。

(一) たとえば、オリゲネス(エウセビウス『福音の準備』六の一一参照)。

第二章

双生児の健康の類似と相違

キケロの語るところによると、[一]あのもっとも有名な医師のヒッポクラテス[二]は、ある兄弟が同

時に病みはじめ、二人の病気が同じときに重くなり、同じときに軽くなったとき、それを双生児だと考えたと書きのこしているということである。ところが、ストア派のポシドニウス[三]は、占星術に大いにこっていたが、そのようなばあいに、その二人は同じ位置の星に生れ、同じ位置の星に受胎したのだと主張するのがつねであった。このように、医師が体質の高度の類似にかかわると考えたことを、かの哲学者で占星家であるポシドニウスは二人が受胎し、出生したときにそうであった星の位置とその影響に帰したのであった。この問題については、医師の推測のほうがずっと受け入れられやすく、またあきらかに信じられやすそうである。というのは、親が交接のさい親の身体がそうであったとおりに受胎された両児ははじめからそのとおりに受けつぐのであって、かれらは母の身体において同じような最初の成長をとげたのち同じような体質をもって生れる。それからまた、かれらは同じ家で、同じ食物をもって養われるのであるが、そのばあい、空気と環境と水質とが身体の形成に良くも悪しくも甚大な影響をおよぼすことは医学が証明している。またかれらは、いつも同じ運動をやってその身体はまったくよく似ているので、病気のばあいにも同じ原因によって、同じようになるのである。しかしながら、双生児が妊まれ、あるいは生れたさいにそうであった天や星の位置を、あの同じように病気になることに関係があると考えることはなんという不遜な考えかたであろう。じつにさまざまなはたらきと運命をもったじつにさまざまな種類の多くのものが同一の天のもとに属する一つの地域において同時に妊まれ生れることもあるからである。なおまた、わたしたちの知っているように、双生児は、ただ違った仕事をしたり、違ったところへ旅行するだけでなく、べつの病

のみであった。しかもなお、ポシドニウスやその他だれでも星の宿命的な力を主張するものが、かれら自身も知らないことについて、無知な心のものをだまそうとしないで、この問題についてなにか説明の方法を見つけることができたらまことに驚くべきことであろう。双生児が生れるごくわずかな間隔を、人びとは、生れでる時刻が記されいわゆる天空図とよばれる天の点によって、なにか説明のもとにしようとつとめるが、それは双生児の意志や仕事や習性や運命に見出されるはなはだしい相違に比べると十分でなく、またかれらは双生児の素性の最大の相違を、ただ各人が生れる時刻にのみ帰するのであるから、素性が卑賤であろうと高貴であろうとかれらが生れるときの同一性に比べるとあまりにも大である。したがって、天空図の同一の点がなお続いているほど早く二人が相次いで生れるなら、二人はあらゆる点で相等しいはずであるが、このようなことは双生児にみられない。また、天空図がかわるほど次に生れるものがおくれるなら、その親は違っているはずであるがそのようなことは双生児にはありえない。

（一）ヒッポクラテスについてのキケロのこのような記事は、現存するキケロ自身の著作には見当らない。アウグスティヌスは、あるいはキケロの『宿命について』という作品を考えているのかもしれないが、それも欠損部分があって完全なかたちでは残っていない。

（二）ヒッポクラテスは、前四六〇年頃から前三七五年頃。ギリシアの医者。科学的医学の祖といわれ、

宗教的・迷信的医学を排した人物として知られている。また、かれは、食事や環境が病気の経過におよぼす影響を強調した。アウグスティヌスは本書第二十二巻第八章においてふたたびヒッポクラテスについて言及している。

(三) ポシドニウス(またはポセイドニオス)は、前一三五年頃から前五一年頃。ストア派の哲学者、歴史家。シリアで生れ、アテナイで学んだが、のちロドスでストア派学校の学頭となる。キケロもこの地でその教えをうけた。

第三章

双生児の問題をとくために占星家のニギディウスが陶工の轆轤（ろくろ）から引き出した証明について

それゆえ、ニギディウス(一)がこの問題に悩まされて、答なしといい、またそのためにフィグルス(陶工)というあだ名を得た、あの有名な轆轤との比較をもちだしてもむだである。すなわち、かれは陶工の轆轤を力いっぱいまわし、それがまわっているあいだに、墨汁で二度、同じ場所にと思われるほど、すばやくしるしをつけた。さて、それがまわりやむと、かれがさきにつけた一つのしるしはその轆轤のふちにかなりはなれて残っていることがわかった。そこでかれがいうには、「天の廻転はあのようにはやいのであるから、かれ自身が二度轆轤にしるしをつけたほどはやく双生児が相次いで生れようとしても、それの天におけるへだたりはひじょうに大

である」。そして「そのことが双生児の習性や運命に認められるというあらゆる相違のもとである」と主張した。この空想事はかの轆轤によってつくられる器よりもなおこわれやすいものである。じっさい、星の位置によってはとらえられないような相違も、天にあっては双生児の一人が遺産を受け、他の一人が受けないほど大きなものであるなら、なにゆえ占星家たちは、双生児でない他のものについて、かれらの運星の位置をながめて、なんびともとらえて出生の瞬間に帰することができないような神秘に属することを予告することをあえてするのであるか。しかし、占星家たちが、双生児でないものの出生についてそのようなことを予告するのは、そのようなことが比較的長い時間的間隔に関係するのであるのに対して、双生児が相次いで生れるあいだのごくわずかな部分の時間は、占星家たちがふつう意見を求められないようなささいなことがらに関係する(じっさい、いつ席につくか、いつ散歩にでかけるか、いつ食事をとるかということについて、占星家の意見を求めるものがあろうか)とするなら、わたしたちが双生児の習性や仕事や運命について、じつに多くの相違をしばしば指摘するときにも、そのようなささいなことがらを語るのであるか。

(二) ニギディウス・フィグルスはキケロと同時代人で、キケロの友人でもあった。占星学と哲学とを結合したピタゴラス派の哲学者である。

エサウとヤコブとは双生児でありながら、その習性も行動も大いに異なっていたわたしたちの父祖の古い時代に(とくに著しい例について語ると)、さきのものがのちのものの踵を摑むほど双生児が相次いで生れた。(二) さて、両者は、その生活も習性もはなはだしく異なり、また活動もけっして似ていず、両親の愛もひじょうにちがっていたので、その相違はまた両者はたがいに敵としたほどであった。両者がたがいにちがっていたといわれるのは、一方が散歩しているときに他方は席につき、一方が眠っているときに他方は目を覚ましており、一方が話しているとき他方は黙っていた――そのようなことは、各人が生れるばあいの運星を、それについて占星家たちの意見をきくために、書きとめる人びとによってとらえられないささいなことに属するのである――からであろうか。その双生児のうち、一方はかれらのあいだで大きな栄誉と考えられたものを失ったのに他方はそれを得た。またその妻と子と財産とについてなんと大きな相違があったことだろう。それゆえ、もしもこのようなことが、双生児が相次いで生れるあいだに存在して、運星に記されないようなわずかの時間に関係するものであるとするなら、なにゆえ双生児でないものの運星をしらべて、そのようなことがいわれるのであるか。しかしまた、そのようなことがいわれるわけは、それらがとらえることができないわずかな時間に関係せずに、観察され記録されることができるような時間的間隔に関係するからであるとするなら、あの轆轤はこの問題についてなんの役にたつだろうか。それはただ粘土のよ

うな心をもつ人間をぐるぐるまわして、占星家たちの虚言の証拠があげられないようにするだけではなかろうか。

（一）「創世記」二五の二四―五参照。

第五章

どのような仕方で占星家たちの唱える学問が虚偽であるという証拠があげられるのであるか

両方とも、その病気が同じ時に重くなりまた軽くなるようにみえたのを、ヒッポクラテスが医学的に考えて双生児ではないかと思ったあの二人のばあいは、体質の類似からおこるものを星に帰しようとする人びとに反駁するのに十分ではなかろうか。じっさい、両者が同時に生れることができなかったことは明らかであるから、なにゆえ二人は生れたばあいと同様に相次いで病気にならずに同時に同じように病気になったのであるか。それとも、二人がちがった時に生れたということが二人がちがった時に病気になることになんの関係ももたなかったとするなら、たにゆえ人びとは、二人の出生の時刻の相違が他のことがらの相違の原因であると主張するのであるか。二人がちがったときに旅行し、ちがったときに妻を迎え、ちがったときに息子をもうけまたちがったときにその他いろいろのことをするわけは、二人がちがったときに生れ

るからであるのになにゆえ二人は同じ理由によってまたちがったときに病気をしなかったのであるか。じっさい、出生の時刻の相違が運星をかえて、他のことがらにも相違をきたしたのであるなら、なにゆえ二人の受胎の時刻が同じであったことが、ただ病気になるばあいのみその原因となったのであるか。また、健康状態がどうであるかが受胎によって決まるのに、他のことがらがどうであるかは出生によって決まるとするなら、人びとは、それをしらべるように受胎の時刻が示されていないのであるから、出生のさいの運星をしらべて、健康がどうであるかわかるのであって、したがって受胎のさいの運星をしらべずに予告するのであるなら、どうしてについてなにもいってはならないであろう。しかし、もしも病気のことは出生の時刻によって人びとは、双生児のいずれか一方にその出生のさいの運星からして、いつ病気になるかを予告するのであるか。同じ運星をもたない他方のものも必然的に同時に病気になるのではないか。またつぎに、双生児の出生のさいの時間的間隔がひじょうに大切であって、そのために占星のちがいによって双生児の運星がちがい、それから運命もまたちがってくるほど重くみられているかんじんな点もちがうとするなら、双生児の受胎はあきらかに同時であるのに、どうしてそのようなことがおこるのであるかが問題となる。なおまた、同一の瞬間に孕まれた二人の運命が、すでに出生に関して異なっていたのなら、同一の瞬間に生れた二人の運命もまたその生と死に関して異なっていないわけがあろうか。すなわち、両人が同一の瞬間に孕まれたにもかかわらず、一方がさきに生れ他がのちに生れたのなら、両人が同一の瞬間に生れるとしても、一方がさきに死に他方がのちに死んではならぬわけがあろうか。双生児は同一の瞬間に孕まれた

のに、母の胎内でちがった運命をもつことができるのなら、両者は同一の瞬間に生れても、この地上でそれぞれちがう運命をもってはならぬわけがあろうか。このようにして、この術、というよりもこの虚偽のつくりごとはすべて否定されるのではなかろうか。また、これはどういうわけであろうか。——同じときに、いな、同じ瞬間に、同一の運星のもとに孕まれたものが、ちがった運命をもって、そのためにちがったときに生れるようになるのに、同じ瞬間に、同一の運星のもとに、別の母から同じように生れた二人のものが、ちがった運命をもつことができ、そのためにちがった生き方とちがった死に方をしなければならぬのはどういうわけであろうか。孕まれたときには、まだ運は定っていないのであって生れてはじめて定まるのであるか。それでは、妊娠の時刻がわかれば、占星家たちによって多くの預言がなされるということができるのはどういうわけであるか。このような考え方からして、ある賢人はおどろくべき才能をもった子を生むために、妻と臥する時刻をとくに選んだと多くの人びとによっていいつたえられるのである。なおまた、それにもとづいて、あのように病気をした双生児について、偉大な占星家で同時に哲学者でもあったポシドニウス（一）は「その理由は、二人が同時に生れ、孕まれたからだ」と答えるのであった。すなわち、かれが「孕まれた」とつけ加えたのは二人がたしかに同時に生れたのみではないと反対されないためであったが、二人が同時に孕まれたことはまったく異論がないからである。すなわち、かれは、二人が同じように同時に病気になったことを、簡単に二人の同じような体質に帰せずに、健康状態の類似をも星とのつながりにおいて考えようとしたのであった。それゆえ、妊娠が運命の類似にそのように大きな意味をもっているのな

ら、その同じ運命は出生によって変るべきものではなかったのである。それとも、双生児がちがったときに生れるのでその運命が変るのなら、なにゆえわたしたちは、それよりも、二人がちがったときに生れるようにその運命がすでに変っていたと考えてはいけないのであろうか。それゆえ妊娠のさいの運命によって出生の順序が変るのであるから、出生のさいの運命も出生後の人間の意志によって変るのではなかろうか。

（一）　ポシドニウスについては、本巻第二章参照。

第六章

異性の双生児について

なおまた、双生児の懐妊のばあいにも二人ともその瞬間は同一であるのに、どうして同一の運星のもとにありながら、一方は男として孕まれ、また他方は女として孕まれるのであるか。わたしは、ちがった性の双生児を知っているが、二人ともなお生きていて二人ともなお元気である。この二人は、ちがった性のものとして可能なかぎり、その身体の形姿は似ているが、しかしその仕事と生活の仕方はずいぶん異なっているのであって、男性のものと女性のものとして異なるのもやむをえない活動（すなわち、一方は長官の職をつとめてほとんど家からはなれて旅行しているのに、他方は故郷の土や自分の在所からはなれたことはない）は別として、な

おそのうえに（これは、星によって定まる運命を信ずるならますます信じられないことであるが、人間の意志や神の賜物を考えるなら、おどろくべきことではない）、一方は妻帯しているのに他方は純潔な処女であり、また一方は多くの子女を設けたのに、他方は結婚さえもしていない。しかし、それは運星の力がじつに大きいからであろうか。それがまったく問題にならないことはもう十分に説明しておいた。しかし、その運星がどうであろうと、それは出生のさいには意味をもっていると占星家たちはいうが、それは受胎のばあいにも同様ではなかろうか。受胎が同一の交接によることはあきらかであり、そして自然の力はじつに偉大なものであるので、婦人が一度孕んだからには、もう二度と孕むことがまったく不可能であるから、それゆえ、双生児のばあいにはその受胎はかならず同時でなければならない。それともちがった運星で生れたので、生れたときに一方は男性にかわり他方は女性にかわったとでもいうのであろうか。それゆえ、ただ身体の相違のみにかんしては、ある星の影響が力をもっているということは、あながち不合理ではない——たとえば、太陽が近づいたり、遠のいたりすることによって四季がうつりかわり、また月が満ちたり欠けたりすることによってうにやかきや海の潮のようなある種のものが大きくなったり小さくなったりするのをみるように——が、人間の意志もまた星の位置の影響を受けるということは不合理である。しかし、それらの占星家たちは、わたしたちの行動をも星の位置に結びつけようとするとき、なにゆえ、身体に関してさえも、そのような考え方が首尾一貫していないのであるかをわたしたちに考えさせるのである。すなわち、身体の性別ほど身体に関係のふかいものがあろうか。しかしそれにもかかわらず、同一の運星の

もとにちがった性の双生児が生れることができたのである。それゆえ、受胎のときに二人に対して同一であった星の配置が、一方は他方と同一の運星をもっているのに、一方は他方とちがった性をもたないようにすることができないにもかかわらず、出生のときの星の配置が、一方を他方から純粋な処女性によってあのように遠くへだてるようにすることができるといったり、信じたりするほど無知なことがあるだろうか。

第七章

妻を迎えたり、樹木を植えたり、種を蒔いたりする日を選ぶことについて

さて、特別の日を選ぶことによって、いわば自分の行為に新しい運をつくるのであるというような愚かな考え方をだれががまんするであろうか。それによると、そのひとは、立派な息子をもつように生れたのではなく、むしろくだらぬ息子をつくるように生れていたのであって、そのゆえに、学者として、妻と交わる時刻を選ぶわけである。それゆえ、そのひとはそれまでもっていなかった運命をつくり、自分自身の行為によって、その出生のさいになかったものが運命となりはじめたのであった。なんと類例のない愚かな考え方だろう。妻を迎えるために日を選ぶのであるが、それは、日を選ばなければ結婚がよくない日にあたって、不幸になるかもしれないからだとわたしは思う。それでは、星がすでに出生のさいに定めたものはどうなるの

であろうか。人間はすでに自分のために定められたものを、日を選ぶことによって変えることができるのに、自分が日を選ぶことによって定めたものは、他の力によって変えることができないのであるか。つぎに、天のもとにあるすべてのものではなく、ただ人間のみが運星の支配を受けるとするなら、なにゆえ人びとは、ある日を葡萄や樹木を植えたり種を蒔いたりするために選び、また別の日を家畜をならしたり、馬や牛の群が孕まれるように雄をむかえたりするために選ぶようなことをするのであるか。しかし、選んだ吉日がそのようなことに影響するのは、地上のすべてのものが、物体も生命も有するものも時々刻々の相違する星の配置によって支配されるからであるとするなら、まったく同一の瞬間にどれほど多くのものが生れたり、おこったり、はじまったりすること、またそれらのものはじつにさまざまな最期をとげるので、そのような日を守ることを人びとは考えてみなければならない。じっさい、すべての樹木、すべての草、すべての獣類、すべての爬虫類、すべての鳥、すべての魚がそれぞれちがった出生の時刻をもっているということをあえて主張するほど愚直なものがあるだろうか。しかし、それにもかかわらず、人びとは、占星家たちの腕をためそうと、その出生を自分の家で注意ぶかく観察していたところのものいわぬ動物の運星を占星家たちに見せるのであるが、その運星をしらべて生れたのは人間でなくて畜生であるといいあてるものを、他のものよりもえらいと考えるのがつねである。なおそのうえに、占星家たちは、それがどのような動物であるか、すなわち、羊毛を売るのに適しているか、荷物を運ぶのに適しているか、畑を耕すのに適しているか、

家を守るのに適しているかをも、あえていいあてようとする。すなわち、占星家たちは犬の運命についてまでもためされ、そして感心する人びとの歓声のうちにそのようなことを答えるのである。人びとはじつに愚鈍なものであって、人間が生れるときには、他のものが生れることはまったくさし止められるので、その人間とともに、同一の天の区域のもとでは、はえ一匹さえも生れることができないと考えるほどである。じっさい、人びとがこのはえのばあいを認めるとするなら、推理はそこにとどまらずに一歩一歩進められて、人びとははえからついにらくだや象についてまでも同じことを考えるようになる。なおまた、人びとは、畑に種がまかれる日が選ばれるとき、あの無数の穀粒が同時に地面におち、同時に発芽し、熟しながら、しかも同じ時期の、またいわば同じ芽に属する穂も、あるものはさび病によって枯死したり、あるものは鳥によって食われたり、あるものは人間によって食われたりするということに注意しようとしない。それらの穂はちがった運星をもっていたのであり、そのようなさまざまな最期をとげるのを見るのであるから、どうしてそうでないということができるであろうか。それとも、人びとは、そのような仕事のために日を選ぶことを好まずに、それらが天によって定められたものであるということを否定して、この地上におけるすべてのもののうち、ただそれのみが神によって、自由意志を与えられている人間のみを星の影響をうけるものであるとするか。これらすべてのことを考えてみると、占星家たちがおどろくべき仕方で多くの正しい答えをするとき、それは、このような星の運命的な力についての虚偽で有害な考え方を人間の力に植えつけ強めようと考えている、良くない例のかくれたはたらきによるのであって、じっさいは技術でもな

んでもないような、運星をしるしたりしらべたりする技術によるのではないと信じてもけっして不当ではないのである。

第八章

運命という名で、星の位置をではなく、神の意志による諸原因の結合をよぶ人びとの説について

しかし、あるものが孕まれたり、生れたり、はじめられたりするときにそうであるような星の配置をではなく、なるものがすべてそれによってなるすべての原因と系列を運命という名でよぶ人びとについてであるが、それはただ言葉のうえの問題であるから、多くの労苦を費やしてかれらと争うにはおよばない。じっさい、かれらは原因の秩序とある結合とを最高神の意志と力とに帰するのであるが、この神は、すべてのものがなるまえに、それを知るとともに、なにものにも秩序づけずにはおかないと、もっとも正しくまた、もっとも真実に信じられ、そしてまた、その神から、すべてのものの意志はそうではないが、すべての力はおこるのである。それゆえ、それらの人びとが、その力がすべてのものにうちかちがたくおよぶような最高神の意志そのものを、とくに運命とよぶということはつぎのようにして証明される。この詩句は、わたしの思いちがいでなければ、アンナエウス・セネカのものである。(一)——

導かれよ。父よ、天の支配者よ、どこまでも、あなたの欲したどこへでも。わたしは一刻も躊躇せずにしたがおう。わたしはまちがっている。欲しないばあいには、ためいきをしながらついていくであろう。

有徳であったならすることができたところのものを、不徳であるためにさせられるであろう。

運命は、欲するところのものを導き、欲しないところのものをひきずっていく。

じっさい、この作者がさきに最高の父の意志といったものを、この最後の句で運命とよんだことはまったくあきらかなのであるが、かれは、欲せずしてひきずられずに、欲して導かれるために、その意志にすすんでしたがおうといっている。というのは、

運命は、欲するものを導き、欲しないものをひきずっていく

からである。なおまた、つぎにかかげるホメロスの詩句(二)もそのような考え方を支持している。

神々の父、ユピテル自身がゆたかな宗教を生じる地を照らす
その光をもって人間の心を照らされる

このような問題については、詩人の意見は、権威をもっていたわけではないが、しかしキケロがいっているように、ストア派の哲学者たちは、運命の力を主張していつもこのホメロスの詩句をひくのであるから、かの詩人の考えは問題にならなくとも、それらの哲学者の考えは問題となるわけである。すなわち、哲学者たちが運命についてなす論争に援用するそれらの詩句によって、かれらが運命をどういうものと考えているかがもっともあきらかに示されるのである

が、それは、かれらが最高神と考え、運命の連結がそれにかかっているというところのものをユピテルとよんでいるからである。

(一) セネカ『書簡』一〇七。ルキウス・アンナエウス・セネカは、前五(四)年から後六五年。ローマのストア派の哲学者。

(二) ホメロス『オデュッセイア』一八の一三六―七。

第九章

神の予知と人間の自由意志についてキケロの定義を反駁する

キケロは、ストア派を反駁しようとつとめるが、占いというものを一般に否定し去らないかぎり、ストア派に対する異論は無効であると考える。(一) すなわち、この占いを否定しようとして、かれは、将来のことに関する知識を否定し、そのような知識は、人間にも神にもまったくなく、いかなるものについても、その預言というようなものはありえないと全力をつくして主張する。このようにしてかれは、神の予知を否定するとともに、すべての預言を、光よりもなおあきらかなものをも、空虚な論証と、安易に否認されうるような神託を引き合いにだすことによってくつがえそうとこころみるのであるが、(二) このような神託についてさえも、それが正しくないということを証明することができない。さて、このような占星家たちの憶測を否認するためには、

キケロの弁説は有力であるが、それは、かれらの憶測自身がたがいに破壊しあい、否認しあうからである。しかし、星による運勢のようなものでも認める人びとの方が、将来の予知をまったく認めないひとよりも、ずっとがまんができるのである。というのは、神の存在を告白しながら、将来の予知を否定することは、まったくあきらかに狂気であるからである。このことはキケロ自身よく知っていたので、かれは、「愚かなものは、心のうちに、神は存在しないという(三)」と記されているように、神の存在を否定しようとくわだてたが、しかし自分自身でそうしたのではなかった。すなわち、かれは、そのようなことがどのようにまた厄介なことであるかを心得ていたからであってそのゆえにかれは、その『神々の本質について』の書のなかで、この問題について、コッタ(四)をしてストア派に対する反論を述べさせ、そしていかなる神的本性も存在しないと主張するコッタによりも、かれがストア派の立場を弁護させたルキリウス・バルブス(五)に賛意を表したのであった。しかし『予言について』の書では、自分自身あからさまに将来の予知の説を攻撃している。しかし、かれがこのようなことをしているのは、まったく、運命の存在を認めて、自由意志を失わないためであるようにみえる。すなわち、一度将来についての知識を認めると、運命の存在はさけられない帰結であって、それを否定することはまったく不可能だと考えるのである。しかし、哲学者たちのこみいった論争や議論がどうであろうとも、わたしたちは最高真実の神を告白するように、その神の最高の意志と力と予知とを告白しよう。そしてわたしたちは、その予知がけっして誤ることのない神が、わたしたちがそれを将来なすであろうことを知られるからといって、意志によってなすところのことが、意志によっ

てなすのではなくなることをおそれはしない。しかし、そのことをキケロはおそれて、予知に反対したのであり、またストア派もすべてのものは運命によっておこると主張しながら、すべてのものは必然性によっておこるのではないといったのである。

それでは、キケロが将来の予知についておそれ、わたしたちがいまわしい議論によってそれを打倒しようとつとめるのはなんであるか。それはいうまでもなく、すべての将来のことが知られているなら、それらは将来おこるであろうと知られている順序でおこるからである。そしてこの順序でおこるとするなら、予知する神には諸物の秩序が定まっているわけである。そして諸物の順序が定まっているなら、原因の秩序も定まっている。というのは、さきにある作用因がないかぎり、なにものもおこらないからである。さて、生起するすべてのものがそれにしたがって生起するところの原因の秩序が定まっているなら、生起するすべてのものが生起するのは運命によってであるとキケロは主張する。もしもそのようであるなら、なにものもわたしたちの力によるものなく、意志の自由な決定も存在しなくなる。キケロによれば、もしもわたしたちがそのようなものを認めるなら、人間の生活全体がくつがえされ、法律が定められたのも無駄であり、非難と賞賛、叱責と奨励との手段にうったえるのも無駄であり、良きものに報賞と、あしきものに懲罰を定めることもけっして正義ではなくなるのである。それゆえ、このような人間の身にとって不名誉、不合理かつ有害な帰結をまぬがれるために、キケロは将来のことの予知を否定した。そしてかれは人間の宗教心を、なにかわたしたちの意志によるものがあるか、それとも将来の予知があるのか、両者のうちいずれか一つを選ばねばならぬという窮

境に陥れた。というのは、かれは、両者の併立は不可能であって、一方を立てれば、他方が倒れる——将来の予知をとれば意志の自由な決定はなくなり、また意志の自由な決定をとれば将来の予知はなくなる——と考えたからである。そういうわけで、キケロ自身は、偉大で博学なひととして、人間の生活をよく考えたのち、両者のうち意志の自由な決定の方をとった。そしてそれをたてるために、将来の予知を否定したのであるが、このように人間に自由を認めることによって、人間を瀆神的にしたのであった。しかし敬虔な心は、同時に両者を選び、両者を告白し、敬虔な信仰をもって両者をうちたてる。しかし、それはどのようにしてであるかと、キケロは反問する。というのは、かれによれば将来の予知があるなら、たがいに連関している帰結がつぎつぎに生じて、つぎにわたしたちの意志によるものはなにもないという結論に到達する。また、なにかわたしたちの意志によるものがあるなら、同一の推論を逆に進めてついに将来の予知はないという結論に到達する。すなわち、それらのすべてをへて、推論は逆にこう進められるのである。——意志の自由な選択があるなら、すべてのものが運命によって生起するのではない。すべてのものが運命によって生起するのでなければ、すべての原因の秩序は定まっていない。原因の秩序が定まっていないなら、諸物の秩序は神の予知においてさえも定まっていない。諸物は、それにさきだつ作用因によってでなければ、生起することができないからである。さて、諸物の秩序が神の予知によってさえも定まっていないなら、すべてのものは、それがおこるであろうと神によって予知されたようにはおこらないであろう。また、すべてのものが神によっておこるだろうと神によって予知されているようにおこらないなら、神には将

来の予知はないことになると、キケロはいうのである。

このような瀆神的で不敬な大それた試みに対して、わたしたちは、一方、神はすべてのものが生起するまえにそれを知られるとともに、他方、わたしたちは、ただわたしたちがそれを欲してのみなすと感じ知っているすべてのものを意志によってなすのであると主張する。しかし、わたしたちは、すべてのものが運命によっておこるとはいわない。むしろそれとは反対に、なにものも運命によってはおこらないと主張する。そのわけは、運命という名は、それについて語るものがふつう考えるような意味では、すなわち、各人が孕まれ、あるいは生れるさいの星の配置という意味では、そのようなことを主張してもそれに相応するものがないかぎり無意味であることを、わたしたちは証明するからである。しかし、神の意志が最高度にはたらく秩序を、わたしたちは否定もしないし、また、運命（ファトゥム）という名でよびもしない。もっとも、ファトゥムを話す（ファリ）、すなわち、「語る」からおこったものとして解するならはなしはべつである。(六) じっさい、わたしたちは、聖書につぎのように記されているのを否定することはできない。――「神はひとたびこのようにいわれ、わたしたちはこれら二つのことを聞いた。力は神に属する。そして主よ、あわれみもまたあなたに属する。あなたは、各人にそのわざにしたがってその報いをなされるであろう」(七)。じっさい、「ひとたびいわれた」というのは、「動かしがたく」という意味である。すなわち、神は、将来なるであろうところのもの、かれ自身がなされるであろうところのものを、変わることなく知っておられるように、変わることなく「いわれた」という意味である。それゆえ、このような意味からして、わたしたちは、人間の心がそれにかたむくの

が好ましくないようなべつの意味にファトゥムという名がもはや解されるのでないなら、「話す」からおこったものとして、ファトゥムとよぶこともできるであろう。しかし、神にとって、原因の秩序が定まっていても、そのゆえになにものもわたしたちの意志の自由な選択によるものがないという帰結は生じない。じっさい、わたしたちの意志自体も、原因の秩序に属するものであり、この秩序は、神によって定まっていて、神の予知のうちに生れているのである。というのは、人間の意志は人間の行為の原因であるからである。したがって、すべてのものの原因を予知されるものが、わたしたちの意志がわたしたちの行為の原因であることを予知していながら、そのすべての原因のうちにわたしたちの意志を知られないというようなことはけっしてありえない。

すなわち、キケロ自身が、なにものもそれにさきだって作用因がなければなにも生起しないと認めているところのものが、[八]この問題に関して、かれを反駁するのに十分である。じっさい、かれが、なにものも原因なしには生起しないがすべての原因が運命によるのではないといっていることも、偶然的な原因、自然的な原因、意志による原因があるからには、かれにとってなんの役にたつであろうか。生起するすべてのものは、それにさきだつ原因によらなければ生起しないということを告白すれば十分なのである。すなわち、わたしたちは、偶然的とよばれる原因は、そこから偶然という名がおこったのであるが、いかなる原因もないと主張するのではなく、それらの原因は、かくれた原因であると主張するのである。そしてわたしたちは、それらの原因を真実の神の意志か、なんらかの霊の意志に帰するのであり、また自然的原因は、自

然全体の創作者と創造者であるものの意志から、それをけっして引き離しはしないのである。しかし、意志による原因は、神か、天使か、人間か、あるいは動物かによるものである。もっともそれは、動物があるものを求めたり避けたりするとき、その本性にしたがってなにかをなすところの、理性を欠いた魂の動きが意志とよばれるかぎりのことである。わたしたちが、天使の意志というばあいには、わたしたちが、神の御使とよぶ善き天使のものもあれば悪魔の使い、または悪霊とさえよぶ悪しき天使のものもある。人間についても同様であって、善き人間のものもあれば、悪しき人間のもの(八)もある。このことから生じる結論として、生起するすべてのものの作用因については、意志による原因、すなわち、生命の霊であるような本性のものからおこる原因以外にはなんらの作用因もないことになる。すなわち、空気や風のようなものも気とよばれるが、しかしそれは、物体であるから生命の霊ではない。それゆえ、すべてのものを生かし、すべてのものの物体とすべてのつくられた霊の創造者であるところのものは、神自身であり、もちろんつくられない霊である。そして神の意志のうちに最高の力があって、その力はつくられた霊の善き意志を導き、悪しき意志を裁き、また、すべての意志を秩序づけながら、ある意志には力をかし、他の意志には力をかさない。というのは、神はすべての存在の創造者であるように、すべての力の施与者であるが、しかし、すべての意志の施与者ではないからである。じっさい、悪しき意志は神からおこらないのであるが、それは、悪しき意志が神からおこる自然に反するからである。(九)つぎに、物体は意志に服従することがいっそう大きいのであって、そのうちにはわたしたちの意志に、すなわち、すべての可死的な生命をもつ意志に

――獣類の意志に従うものよりも人間の意志に従うものもあれば、また、天使の意志に従うものもある。しかし、すべてのものは、他のなにものによりも神の意志に従うのであって、すべての意志は、神がそれを与えられないかぎり力をもたないのであるから、すべての意志も神の意志の支配を受けるのである。つくってつくられない諸物の原因は神であり、これに対して、他の原因はつくり、かつ、つくられるのであるが、すべてのつくられた霊とくに理性的な霊はそうである。しかし、物体的な原因はつくるよりもむしろ、つくられるのであるから、作用因のうちにかぞえられるべきではない。物体的な原因は、霊的存在の意志がそれらの原因を通じてなすところのものしかなすことができないのである。それゆえ、神の予知には、定まっている原因の秩序によって、なにものもわたしたちの意志によるものはないというようなことがどうしておこるのであろうか。原因の秩序においても、わたしたちの意志は重要な地位を占めるのである。それゆえ、キケロは、このような原因の秩序を宿命的とよんだり、あるいはむしろ、秩序そのものを運命とよんだりする人びとと論争するのはよいが、わたしたちはこのような考え方を、ふつう正しい意味に解せられない運命という言葉のゆえにとくに嫌悪するのである。しかしキケロは、すべての原因の秩序がまったく定まっていて、神の予知にもっともよく知られていることを否定するのであるから、わたしたちは、ストア派の人びとがいみきらう以上にかれの説をいみきらう。というのは、キケロは、『神々の本質について』の書において、他の[一〇]人物の口をかりてなそうとこころみているように、神の存在を否定するのか、それとも神の存在を告白しながら、神の将来に対する予知を否定するかであるが、のちのばあいには、かの「愚

者がその心において、神は存在しないといった(一二)」のと異なることはないのである。というのは、将来のすべてのことを予知しないものが神でないことは明らかである。したがって、わたしたちの意志は、神がそれを欲し、あるいはまた、予知されただけのことをなし得るのであり、またそのゆえに、そのなしうることはもっとも確実になり、また、そのなすであろうこともそれ自身たしかになすであろう。というのは、その予知がけっして誤ることのないものが、わたしたちの意志のなし得ることをなすのであるということを予知されるのである。それゆえ、わたしは、運命という名をなにかに用いようというばあいには、ストア派がふつうの仕方ではなく、その独得の仕方で運命とよぶかの原因の秩序によってわたしたちの意志の自由な選択がなくなるというよりも、むしろ弱者の運命はそれを左右することのできる強者の意志であるといおう。

(一) キケロのこの考えは『予言について』のとくに第二巻において表明される。

(二) キケロ『予言について』二の五六。

(三) 「詩篇」一四の一。

(四) アウレリウス・コッタは前七五年執政官となった人物。キケロの『神々の本質について』のなかで対話者の一人となっている。かれは、そこでアカデミア派の説を代表している。

(五) ルキリウス・バルブスについては、本書第四巻第三十章(注)三参照。『神々の本質について』の第二巻において、バルブスはストア派の代表として登場する。

(六) fatum(運命・宿命)という語が、fari(話す・いう・預言する)という動詞から派生したと考えるわけである。

(七) 「詩篇」六二の一一―一二。

(八) キケロ『宿命について』一〇の二〇—一。
(九) アウグスティヌスによれば、すべて自然は神からおこるものであって、必然的に善である。人間においても、世界においても、善でないものは自然に反するものである(本書第十一巻第九章参照)。
(一〇) 他の人物とは前掲のコッタをさす。
(一一) 「詩篇」一四の一。

第十章

必然性は人間の意志を支配するか

それゆえ、ストア派の人びとが必然性をおそれて、事物のあるものを必然性から脱却させ、また、他のものを必然性に屈せしめるというように事物を区別し、かれらが必然性に服させることを欲しなかったところのものの一つとしてわたしたちの意志を考えたのである。というのは、もしも必然性に服するなら、わたしたちの意志は自由ではないであろうからであるが、しかし、そういう必然性というものもおそれるにはたりないのである。というのは、もしも必然性というものが、わたしたちの力のおよばないもので、わたしたちが欲しなくても、そのなし得るところのものを生じるものである——たとえば、死の必然性がそうであるように——なら、わたしたちがそれによって、あるいは正しく、あるいは悪しく生きるわたしたちの意志が、そ

のような必然性の支配を受けないことはあきらかであるからである。わたしたちは、それを欲しなければ、きっとなさないであろう多くのことをなすのである。そして、そのようなものとしてまず第一にあげるものは、欲するという作用自体である。すなわち、わたしたちが欲するなら、その作用は存在し、欲しないならそれは存在しない。わたしたちは、欲しないなら欲することはないのである。しかしながら、必然性ということが、あるものがこうあるとか、こうなるとかいわれるものだと定義されるなら、そのような必然性が、わたしたちから意志の自由を奪い去らねばならぬ理由をわたしは知らない。というのは、わたしたちは、神が永遠に生き、あらゆるものを知られることが必然的であるといっても、神の生命と予知とを必然性に服させることはないのであって、それは神が死ぬことも、誤ることもできないというとき、神の力が減じられないのと同様である。じっさい、そういうことができないのは、もしもそういうことができるなら、かえって、神の力が小さくなるからである。神は死ぬことも、誤ることもできないにもかかわらず、まったく正当に全能とよばれている。というのは、神はその欲することをなされることによって全能とよばれるのであって、欲しないことをこうむることによってではないからである。もしも、欲しないことをこうむることがあるなら神はけっして全能ではないであろう。したがって、神は全能であるがゆえに、ある種のことはできないのである。それと同じように、わたしたちが欲するとき、わたしたちは自由意志によって欲するということは必然的であるというばあい、わたしたちは、まったく疑いをいれない真実を語りながら、だからといって、自由を奪うような必然性に自由意志を服させることはない。それゆえ、わたした

ちの意志は存在して、そのわたしたちの意志は、わたしたちが欲してなすすべてのことをなすのであり、もしも、わたしたちが欲しないなら、それはなされはしないであろう。しかしながら、だれかが他の人びとの意志によって、みずから欲せずにこうむるところのものも、それをなすことができるのは意志である——それをこうむるところのひとの意志でなくとも、やはりある人間の意志である——が、しかしその意志の力は神のものである（というのは、意志がただ存在するだけであって、その欲することをなすことができないなら、もっとも強い意志によってさまたげられるであろう。しかし、そういうばあいでも、その意志は意志であることにはかわりなく、また他人の意志ではなくて、その欲することを実現できなくても欲するひとの意志なのである）。それゆえ、人間がその意志に反してなすすべてのことを、人間は他の人間や、天使や、その他の創造された意志に帰すべきではなく、それよりもむしろ、もろもろの意志に力を与えた神の意志に帰すべきである。

それゆえ、神がわたしたちの意志におこるであろうものを予知されるからといって、なにもわたしたちの意志には属しないというわけではない。というのは、このことを予知されるものは、なにものも予知されなかったのではない。なおまた、わたしたちの意志におこるであろうものを予知されたものが、まったく、なにものをも予知されなかったのではなく、なにかを予知されたのであるなら、たしかに、その方が予知されたばあいにも、なにかがわたしたちの意志のうちにあるにちがいない。それゆえ、わたしたちは、神の予知を認めても、意志の自由を廃棄せねばならぬわけではなく、また、意志の自由を認めても、神の予知を否定する（それは

不敬である）必要もない。わたしたちは両者を包容し、両者を誠実に忠実に告白する。そして神の平和を告白するのは、よく信ぜんがためであり、意志の自由を告白するのは、よく生きんがためである。しかし、神について正しく信じないものは正しく生きることができない。それゆえ、わたしたちは、自由に生きんがために、その扶助によってわたしたちが自由であり、あるいは自由になるであろうもの〔神〕の予知を否定することをけっしてしてはならない。それゆえ、律法や、懲戒や、勧説や、賞賛や、叱責は無駄ではないのであって、それは、それらのことが将来なされるであろうことを神が予知され、そしてそれらのことが将来有益であろうことを神が予知されたかぎり、はなはだ有益であるからである。そして祈願もまた、神が祈願するもののみに将来与えるであろうと予知されたものを得るために有益であり、善行に報賞、罪に罰が定められているのも正当である。というのは、人間が罪を犯すのは、人間が将来罪を犯すだろうということを神が予知されたからではない。いな、人間が罪を犯すとき、その人間自身が罪を犯すということは疑いをいれないからである。それは、その予知がけっしてあやまることのないもの〔神〕が、宿命でもなく、運命でもなく、その他のなにものでもなく、まったく、その人間自身が、将来罪を犯すであろうということを予知されたからである。その人間は、それを欲しないなら、もちろん罪を犯すことはないのであるが、しかし、罪を犯すことを欲しなかったなら、神はそのことをも予知されたのである。

第十一章

その律法によって万物が制約される神の普遍的摂理について

それゆえ、その御言(みことば)と聖霊とをもつ、最高で真実の神――その三者は一である――唯一で全能の神、すべての魂と物体との創造主と形成者、虚妄によってでなく、真実によって幸福であるすべてのものがそれにあずかることによって幸福である源泉、人間を魂と身体からなる理性的動物としてつくられたところのもの、罪を犯したものを罰せずに許されることもなく、また、あわれみなしに見捨てられることもなかったもの、善人にも悪人にも石のばあいと等しく存在を、草木のばあいと等しく植物的生命を、動物のばあいと等しく感覚的生命を、ただ、天使のみのばあいと等しく理性的生命を与えられたところのもの、すべての節度とすべての形態とすべての秩序とがそれから由来するところのもの、すべての質量と数と重量がそれから由来するところのもの、すべての自然的に存在するものが、どのような種類のもので、また、どのような価値のものであろうと、それから由来するところのもの、形態の種子と、種子の形態と、種子や形態の運動とがそれから由来するところのもの、肉体も、その起源と美と健康と繁殖の豊饒性と肢体の合目的な配置と健全な調和を与えられたところのもの、非理性的な魂にも、記憶と感覚と欲求とを与えられたが、理性的な魂には、なおそのうえに、精神と認識と意志とを与えられたところのもの、ただ天と地とではなく、また、天使と人間とではなく、卑小で軽蔑す

べき動物の内臓にも、鳥の羽毛にも、草の小さな花にも、樹木の葉にもその諸部分の調和と一種の和合を与えずにはおかなかったところのもの――このような神が人間の諸王国とその支配と隷属とをその摂理の律法のそとにおこうとされなかったとはけっして信じられないのである。

第十二章

むかしのローマ人は、真の神を崇拝しなかったのに、どのような習俗によってその神によって、かれらの支配権が拡大されるに価したのであるか

それゆえ、わたしたちは、その権能に地上の王国もかかっている真の神がローマ人をたすけてその支配権を拡大させたのは、かれらのいかなる習俗によるのか、また、なにゆえであるかを考察することにしよう。そしてこのことを徹底的に論じるために、この問題に関係のある前巻を書いたのであるが、それによると、人びとがたわいもない祭事によってもまつらねばならぬと考えた異教徒の神々は、このことにはまったく無力であることが証明された。また、ここまで筆をすすめてきた本巻の諸章もそうであって、運命についての問題を解決したのであったが、それは、ローマ帝国の偉大と維持とが、異教徒の神々の崇拝によるものでないということはすでに納得していながら、しかもそれを、最高神のもっとも有力な意志によりも、なにかしら、運命のようなものに帰するものがあることをおそれてであった。それゆえ、むかしの最初

のローマ人は、かれらの歴史が伝えほめたたえているところによると、ただヘブライ民族のみをのぞいて、他の民族と同様、偽りの神々を崇拝し、神にではなく、ダエモンたちに犠牲をささげたけれども、しかし、それにもかかわらず、「賞賛をしきりに求め、金銭にはおおまかで、無量の名誉と公明正大な富を欲していた[一]」。かれらは、この無量の栄誉をもっとも熱烈に愛して、そのゆえに生きることを欲し、そのために死ぬことを辞さなかった。かれらは、この栄誉を求める唯一の無量の欲望のために他の欲望を抑えた。そしてついに、かれらの祖国についても、服従することが不名誉であり、支配し命令することが名誉であると考えたので、かれらはまず、もっとも熱心に祖国が自由になることを、ついで支配者となることを望んだ。そのゆえに、かれらは、王の支配にたえられず、「一年間の支配権とそれを行使する二人のものを定めたが、そのものは、協議（コンスレレ）することにちなんでコンスルとよばれたのであって、統治（レグナーレ）するとか支配（ドミナーレ）することから王または支配者とよばれはしなかった[二]」。もっとも、王というものも、指導することとからそうよばれ、したがって王国は王から、また上にのべたように、王は指導することからそうよばれると考える方が適切であろう。ところが、王の高慢は、指導するものの指図や、協議するものの好意ではなくて、支配するものの傲慢であると考えられたのである。こうして、タルクィニウス王が追放され[三]、コンスルが設けられたのち、さきに引用した同じ作家（サルスティウス）がローマ人を賞賛していっているように、「ローマの国家は、自由を得たのち、短い期間にどれだけ大きくなったか、記述しても信じられないほどであって、それほどまでにはげしい名誉の欲望のとりことなっていたのである[四]」。それゆえ、そのような賞賛の熱望と栄誉の欲

望とがあの多くのおどろくべき事業をなしたのであるが、それはもちろん、人間の評価によれば賞賛に価し、また、光栄あるものであった。

同じサルスティウスは、その時代の卓越した偉人として、マルクス・カト(五)とガイウス・カエサル(六)とを賞賛して、ローマの国家はながらくその能力の偉大なのをだれも持たなかったが、かれの時代にはその習性は異なりながら、無量の能力をもつかの二人がいたといっている(七)。そして、カサエルの賛辞として、かれは、その能力を発揮できるように大きな領土と軍隊と戦争とを望んでいたという。このように、戦争の女神があわれな民族を戦争に挑発し、その血なまぐさい笞をもって刺戟することは、その能力の偉大な人びとの願望の一つであったが、それは、かれらがその能力を発揮する機会を得ようとしてであった。そしてこのことこそ、賞賛の熱望と栄光の欲望とがなしたところのことにちがいない。したがって、まず、自由の愛が、そしてのちにはまた、支配と賞賛との欲望が多くの偉大な事業をなしたのである。その両者について、かれらのもっとも有名な詩人〔ウェルギリウス〕もまた証言している。——

「ポルセンナ王(八)はまた、追放されたタルクィニウスを迎えいれることを〔ローマに〕命じて、その都市をはげしい攻囲をもって圧迫し、アエネアスの子孫は自由のために、進んで死地についた(九)」。

このように、そのとき勇敢に死ぬか、それとも自由人として生きるかが、かれらにとって大事なのであった。しかし、一度自由を獲得したのちは、まったく栄誉のとりことなってしまったので、自由のみでは不十分であり、なおそのうえに支配が求められねばならなかった。同じ

詩人が、ユピテルの語ることばのようにして、述べていることが大事であると思われたのである。——

「いな、無情のユノさえも、
いまは海をも陸をも大空をもおそれをもって揺り動かしているが、
いつか心をよい方にあらためて、われとともに
世界の支配者でトガをまとう種族であるローマ人を愛護するであろう。
これこそわが意志である。年月を経て、アスサラクス家[一〇]がプティア[一一]と有名なミュケナエ[一二]を
隷属させ、
またアルゴス[一三]を征服して支配する日が来るであろう[一四]」。

これらのことを、ウェルギリウスは、ユピテルに、あたかも未来のことのように預言させながら、自分はすでに過去のこととして回想し、また現在のこととして認識していたのであるが、わたしがそれらのことを語ろうと欲したのは、ローマ人が自由についで支配をひじょうに重んじて、それをローマ人の大きな賞賛をうけるに価するものに数えていたことを示さんがためであった。そしてまた、同じ詩人が他の民族の諸術よりも、ローマ人特有の技術——諸族を統治し、支配し、服属させ、屈服させる術をすぐれたものと考えていっていることも同じ理由によるのである。——

「他のものらはやわらかく呼吸する青銅の像をこしらえるであろう。
かれらは、大理石から生きた面貌を作り出すであろうと、わたしは信じる。

かれらは、〔ローマ人よりも〕たくみにその言い分を申し立て、天体の運行をむちをもって指し示し、星ののぼるのを告げるであろう。ローマ人よ、なんじは権勢をもって諸国民を支配し(これらこそ、なんじ特有の術であるだろう)平和の習俗を課し、服属したものを容赦し、おごりたかぶるものをうちまかすことを忘れるな」[一五]。

そして、これらの術を、ローマ人は揮(ふる)うたのであるが、それは、かれらが快楽に身を委ねることが少なく、また富を求めて殖やし、そして富によって習俗を腐敗させる——あわれな市民から奪い去り、汚らわしい役者に施すことによって——心身の柔弱化にふけることが少ないほど、ますます有能に発揮されるのであった。そういうわけで、サルスティウスが上にあげたことを記し、ウェルギリウスがうたっていたころに、すでに習俗の腐敗にかけてはかれらの先輩をしのいで数多くあったローマ人は名誉と光栄を、そのような術によってではなく、奸計と欺瞞とによって求めていた。そのゆえにサルスティウスは記している。——「しかし、最初は貪欲よりも大望が人心を駆りたてていたが、これは悪徳ではあるけれども、徳に近いものであった。というのは、光栄と名誉と権勢とは、有能なものも無能なものも、ひとしく得ようと望むからである。しかし、有能なものは、真実の道によって努力するが、無為なものは正しい術を欠いているから奸計と欺瞞とによって得ようとつとめる」[一六]。ここに、名誉と栄光と権勢とに到達する正しい術というのは、徳性によるものであって、欺瞞的な野望によるものではない。それらのものを、有能なものも無為なものも、ひとしく得ようと望むけれども、前者、すなわち

有能なものは真実の道によって努力する。その道は徳であり、それによって、いわば目的の達成に、すなわち光栄と名誉と支配権にむかって努力する。このような考え方をローマ人がふかく肝に銘じていたことは、かれらの神々の殿堂によって示されているのであって、かれらは、徳と名誉との殿堂をもっとも接近させてたてたのであるが(一七)、神によって与えられるものを神々と考えたのである。このことによって、善良であった人びとが徳の目的がなんであると考えようとしたか、また、徳をなにに帰しようとしたか――すなわち、名誉に帰したのである――が理解される。というのは、邪悪な人びとは名誉を得ることを望むけれども、徳さえもたず、名誉を邪悪な術策によって、すなわち、奸計と欺瞞とによって得ようとつとめていたからである。

カトが賞賛されたのは、なおいっそう正当であった。カトについては、サルスティウスはつぎのようにいっているのである。――「かれは、栄光を求めることが少なければ少ないほど、ますます多くの栄光を得た(一八)」。じっさい、ローマ人がその欲望にもえたっていた栄光というのは、他人について高い評価をする人びとの判断にほかならなかったからである。そしてそのゆえに、自分の良心の証言によるのでなければ、人間の証言には満足しない徳の方がそれよりもまさっているのである。それゆえ、使徒は、「じっさい、これはわたしたちの誇りであり、良心のあかしするところである(一九)」といい、また、他の箇所では、「ひとはそれぞれ自分の行いを検討してみるがよい。そうすれば、自分自身には誇りをもつことはできても、他人には誇りをもつことはできないであろう(二〇)」というのである。それゆえ、ローマ人がそれを得ることを望み、善良な人びとが、善良な術によってそれに到達しようとつとめる光栄と名誉と支配権とは、徳

の結果であるべきであって、徳がそれらの結果であるべきではない。というのは、真の徳は、それにまさるものはない人間の(最高)善がそこに存在する目的にむかうところのもの以外にはないのである。したがって、カトが求めたところの名誉も、かれは求めるべきではなかったのである。国家は、かれが求めなくとも、かれの徳のゆえにそれらを与えるべきであった。

しかしながら、その当時(サルスティウスの時代に)二人のローマ人、すなわち、カエサルとカトとがその徳性によって偉大であったが、カトの徳性の方がカサエルの徳性よりも真の徳性にずっと近いものであったように思われる。それゆえ、ローマの国家がその当時はどのようなものであったか、また、それ以前にどのようであったかを、カトの意見に即して考察することにしよう。カトがいうには、「わたしたちの祖先が国家を小から大にしたのは武力によってであると考えてはならない。もしも、武力によってであるなら、ローマの国家は、今日、もっともっと立派であるだろう。じっさい、わたしたちは、祖先よりもいっそう多くの同盟者と市民を、なおそのうえにいっそう多くの武器と馬をもっているのである。しかしながら、祖先を偉大ならしめたのは、それらとは別の、わたしたちのまったく持たないものであった。すなわち、内には勤勉、外には正しい統治、罪にも邪悪にも屈せず、自由に考量する精神であった。それらのかわりにわたしたちにあるのは、奢侈と貪欲であり、公けの窮乏と私人の富裕である。わたしたちは富を重んじ、安逸を求めるのであって、善き人びとと悪しき人びととの区別はなくなり、徳のうけるべき報賞はすべて野望の得るところとなる。諸君がめいめい自分のことだけを考えるとき、そして家にあっては快楽の僕となり、ここ(カトがこの演説をしている元老院)

においては、金銭の恩顧の僕となるとき、なんの防備もない国家に攻撃が加えられるという事態がおこっても、すこしもおどろくにはあたらない」(三)。

このような、カトの、というよりもサルスティウスのそれを語り伝えた言葉を聞くものは、むかしのローマ人はすべて、あるいは大多数、その当時ここに賞賛されているとおりであったと考える。しかし、じっさいはそうでないのであって、もしそうであったとすると、これまたサルスティウス自身が記して、わたしがこの書の第二巻第十八章において述べたことは事実でないわけである。すなわち、サルスティウスの記すところによると、権力者の不正や、そのためにおこった平民と貴族との分裂や、その他の対立は、すでに最初からローマにみられたのであって、公正で穏健な統治が行われていたのは、諸王が追放されたのち、タルクィニウスに対する恐怖がつづいて、この王のゆえにエトルリアと始めていたはげしい戦いが終わるまでのことであった。ところが、その後は、貴族は平民を奴隷のように支配して苦しめ、王者のように笞うち、その共有地から追いはらい、他のものをすべて除外して、ただ自分らだけが支配権をにぎっていた。そして、このような不和は、そして一方は支配することを欲し、他方は隷属することを欲しないからであったが、ようやく、第二次カルタゴ戦争〔前二一八年―前二〇一年〕にいたって終ったのであって、それというのは、ふたたび、大きな恐怖がのしかかってきて、いままでよりも別の大きな憂慮が不安な心を抑制して、そのような動乱をやめさせ、国民間の和合に立ち帰らせ始めたからである。このようであったとはいえ、少数の、かれらなりにすぐれた人びとによって立派な統治が行われたのであり、それら少数のものの先見の明によって、

上に述べたような禍悪は堪えしのばれ軽減されて、ローマの国家は拡大していったのである。それは、サルスティウスが、ローマ人が平時と戦時とにおいて、また海と陸とにおいてなした多くの輝かしい偉業を読んだり聞いたりしたとき、このような大事業をなしとげさせたのは特になんであるかを理解しようと考えたといっているとおりである。(二) すなわち、かれは、ローマ人がしばしば少数の軍隊をもって敵の大軍団と戦ったのを知っていたのであり、また、とぼしい軍勢をもって軍備のゆたかな諸王と戦争したことを知っていたのである。そして多くのことを熟考してみると、少数の市民のとくにすぐれた特性がすべてのことをなしとげたのであり、貧困が富裕にうちかち、少数が多数にうちかったことは自分にとって明らかであると述べている。「しかしながら、奢侈と怠惰とによって、ローマの国家が腐敗したのち、こんどは逆に、国家がその強大さをもって、将軍や役人の悪徳を支えていた」(三) とかれはいっている。したがって、カトによっても、賞賛されたものは、栄誉と名誉と支配権を正しい道によって、すなわち徳そのものによって得ようと努める少数のものの徳である。そして、この特性から、カトが述べているとおり、国庫は富み、私人の財産はとぼしくなる、ローマ国内の勤勉がおこったのである。したがって、習俗が腐敗したのち、カトは前とは反対に、公けの窮乏と私人の富裕をあげているのである。

(一) サルスティウス『カティリナの陰謀』七。
(二) 同上、六。
(三) タルクィニウス・スペルブスをさす(本書第三巻第十五章)。伝承によれば、タルクィニウス王はロ

ーマ人によってエトルリアへ追放され、王制時代は終ることになる。それによって、ローマは共和制時代を迎えた(前五〇九年)。

(四) サルスティウス『カティリナの陰謀』七。

(五) カト(小)については、本書第一巻第五章(注)一参照。

(六) ガイウス・カエサルは前一〇二年から前四四年。ローマの政治家。クラッススおよびポンペイウスと結び第一次三頭政治をおこなう。のち、終身の独裁官となるが、ブルトゥスらによって暗殺された。『ガリア戦記』などを著わし、弁舌にもすぐれていたといわれる。

(七) サルスティウス『カティリナの陰謀』五三。

(八) ポルセンナ王については、本書第四巻第二十章(注)三参照。

(九) ウェルギリウス『アエネイス』八の六四六―八。

(一〇) トロヤの王アスサラクスの伝説上の子孫。

(一一) プティアはテッサリアの一地方。

(一二) ミュケナエはアルゴリスの古都。

(一三) アルゴスはアルゴリアの首都。

(一四) ウェルギリウス『アエネイス』一の二七九―八五。

(一五) 同上、六の八四七―五三。

(一六) サルスティウス『カティリナの陰謀』一一。

(一七) 本書第四巻第二十四章参照。すなわち、ローマ人は、徳や名誉というものを神格化し、そのための神殿を建てたのであった。

(一八) サルスティウス『カティリナの陰謀』五四。

(一九) 「コリント人への第二の手紙」一の一二。
(二〇) 「ガラテヤ人への手紙」六の四。
(二一) サルスティウス『カティリナの陰謀』五二。
(二二) 同上、五三。
(二三) 同上。

第十三章

賞賛の愛好は、悪徳であるけれども、それによっていっそう大きな悪徳が抑制されるがゆえに徳であると考えられる

そういうわけで、東方の諸王がながらく栄えていたのち、神は、時代のうえではあとであるが、その支配権の広大な点ではそれらにもまさるような王国が西方にもおこることを欲しられた。(一) そして多くの民族にみられるひどい悪を征服するために、その王国の建設をとくに次のような人びとに委ねられたのであるが、それらの人びととは、名誉と賞賛と光栄とのために、祖国のことを思い、祖国のうちに光栄をも求め、祖国の安全を自分の安全よりも重んじることを躊躇せず、あのただ一つの悪徳すなわち賞賛の愛ゆえにのみ金銭の欲望とその他多くの悪徳を抑えていたのである。すなわち、健全な判断をもつものは、賞賛の愛好もまた、悪徳であることを

認めるのであって、このことは、詩人ホラティウスも見のがしてはいない。かれはいう。——
「あなたが賞賛の愛でふくれあがっているなら、たしかなきよめの方法があります。その祭文を心きよめて三度読めば、生れかわることができるような方法です」(二)。
また同じ詩人は、吟唱歌のなかで支配欲を非難して次のようにうたった。——
「あなたは貪欲な精神を抑えることによって、リビアを遠いガデス(三)にむすびつけ、カルタゴ人が両方からただあなたがたに服属するばあいよりもなお広い領土をもつだろう(四)」。

しかしながら、もっとも汚らわしい邪悪を聖霊を得て敬虔な信仰と叡智的な美の愛とによって抑えはしないが、すくなくとも、人間の賞賛の欲望によって抑えるものは、それだけまさっているのであって、まだ聖徒であるとはいえないが、それだけ汚らわしくはないのである。マルクス・トゥリウスでさえも、前にあげた国家について論じた書物の中で、このことを偽りかくすことができずに、国家の君主の教育について語って、君主は光栄を栄養としなければならぬと主張し、それにつづいて、かれらの先祖は光栄の欲望によって多くのおどろくべきまた、かがやかしい事業をなしとげたと述べている(五)。したがって、先祖の人びとは、この悪徳に抵抗しなかっただけでなく、それをよびおこし、もえたたせねばならぬと考えていたのであるが、かれらはそれを国家に有用であると思ったのである。しかし、トゥリウスは、かれの哲学に関する書においてさえも、このような害悪を偽りかくしはしなかったのであって、そこにおいては、その害悪をもっともあからさまに告白している。すなわち、かれは、人間の賞賛という空

虚な目的ではなく、真の善を目的とし、追究すべき研究について語ったとき、つぎのような普遍的で一般的な説を述べている。――「術策をやしなうのが名誉であり、すべてのものは光栄によって燃えたたされて熱心に努力し、なんびとによっても、是認されないところの事業は打ち捨てられる(六)」。

(一) アッシリア、メディア、ペルシアなど。
(二) ホラティウス『書簡詩』一の一の三六―七。
(三) ガデスはイスパニア南海岸の町。
(四) ホラティウス『頌歌』二の二の九―一二。
(五) キケロ『国家論』五の七五。
(六) キケロ『トゥスクルム論議』一の二の四。

第十四章

義人の光栄はすべて神のうちにあるのだから、人間の賞賛の愛は除去されねばならない

それゆえ、このような欲望には、したがうよりも抵抗する方がよいということは疑いをいれない。というのは、その汚れによって汚されていなければいないほど、ひとは神にますます似

ているのである。その欲望は、この世においては根本的に絶滅されはしない――正しい道を前進している精神をも誘惑することをやめないから――けれども、しかし、すくなくとも、栄誉の欲望は正義の愛によって打ち負かされるべきであって、もしもどこかに、なんびとによっても是認されないところのものがあり、そしてそれが善で正しくあるなら、人間の賞賛の愛でさえも顔あからめて真理の愛に従うほどなのである。じっさい、栄光に対する欲望が心において、神に対するおそれや愛よりも大きいばあいには、この悪徳は敬虔な信仰にとって、はなはだしい敵となるのであって、主は「たがいに栄誉を受けようと期待しながら、ただ、神からのみ得られる栄誉を求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか[一]」といわれている。なおまた、神を信じていながら公けに告白することをおそれていたある人びとに対して福音書記者は「かれらは神の栄誉よりも人間の栄誉を好んだ[二]」といっている。そのようなことを、聖なるひとたちはしなかった。かれらは、キリストの御名がただ是認されない(「なんびとによっても是認されないところのものは、いつもうち捨てられている」とキケロがいっているように)だけではなく、このうえなく嫌悪すべきものと考えられていた場所において、キリストの御名を述べたとき、かれらが同時に霊の意志でもある善なる教師から聞いたところのこと――「ひとのまえでわたしをこばむものは、わたしを天にいますわたしの父のまえでこばむであろう[三]」――を守って、呪いと非難、はげしい迫害と残酷な刑罰で、ともに屈せず、人間のそのようにはげしい怒りによっても、人間の救いを述べ伝えることをやめなかった。そしてかれらが、いわば、頑固な心をうち破り、正義の平和を導きいれたのち、神的な行いをなし、神的

な言葉を語り、神的な生活をおくって、キリストの教会において大きな栄誉を得たのであるが、かれらはその栄誉をいわば、かれらの徳性の目的として、それに安んぜずに、それをまた——その恩恵によってかれが現にあるようなものである——神の栄誉に帰し、そして、それと同じ炎をもってかれらがそのためを思うていた人びとの心を燃えたたせて——そのおかげで、それらの人びともかれらと同じようになる——神の愛に到らせた。というのは、かれらが人間の栄誉のために善になろうとすることがないように、かれらの善なる教師はかれらをさとしてこういっておられるのである——「人びとに見てもらうために、ひとのまえで義を行わないように、注意しなさい。そうしないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けることがないであろう(四)」。しかし、他方、このことからして、人びとを喜ばすことをおそれ、かれらが有徳であることをかくすことによって、人びとの役に立たなくならないように、なんのために知らねばならぬかを示して、「あなたがたの光を人びとのまえに輝かし、人びとがあなたがたの善い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい(五)」といっておられる。それゆえ、「あなたがたが、人びとによって見られるために」ではなく、すなわち、人びとの注意をあなたがたに向けようとする意図によってではなく——あなたがたは自分によってはなんでもないのであるから——かれらがその方に向かうことによってこそ、現にあなたがたがそうであるようなものになれるところの「天におられるあなたがたの父を、人びとがあがめるようにしなさい」といわれているのである。そしてかれら(使徒たち)の範にしたがったのは殉教者たちであったが、殉教者たちは、自分に罰を加えることなく加えられた罰を耐えしのびながら、

真の敬虔にもとづく真の徳においても、その無数の集団においてもスカェウォラやクルティウスやデキウスのような人びとを凌駕していた。(六) しかし、それらのローマ人は地の国のものであったから、かれらは、その国のためのあらゆる奉仕の目的はその安全であり、その王国は天にはなく地にあり、永遠の生ではなく、いれかわりたちかわり死んでゆくとともに、また、やがて死ぬべきものがつぎつぎにあらわれるところにあると考えていた。かれらは、それによって死後もなお、いわば、かれらを賞賛するものによって語り伝えられようと思った栄誉以外のなにを愛したであろうか。

(一)「ヨハネによる福音書」五の四四。
(二) 同上、一二の四三。
(三)「マタイによる福音書」一〇の三三。
(四) 同上、六の一。
(五) 同上、五の一六。
(六) スカェウォラ、クルティウス、デキウスの犠牲的行為については、本書第四巻第二十章参照。

第十五章

神がローマ人の善良な習俗に与えられた時間的な報賞について

それゆえ、神はローマ人に、かれの天の国におけるかれの聖なる御使とともなる永遠の生を

与えられようとしなかったのであって、その国に加わるためには、ギリシア人がラトレイア(一)とよんだ宗教的奉仕を、ただ唯一の真なる神にのみなすことによって与えられるのであった。しかし、もしも神がローマ人に、このもっとも卓越した支配権という地上の栄誉をも与えられなかったなら、かれらがそれによってそのような偉大な栄誉を得ようとつとめたかれらの術、すなわち徳性は、その報賞を受けることがなかったであろう。というのは、人間によって賞められんがために、ある善行をなすようにみえる人びとについて、主もまた、「よくいっておくが、かれらはその報賞を受けてしまっている」(二)といわれているからである。そのように、かれらもまた、公けのために、すなわち国家のために私事を軽んじ、国庫のために私欲を抑え、自由な判断をもって祖国のためを思い、かれらの法にしたがって罪を犯すこともなく、邪悪のとりことなることもなかった。これらすべての術を、いわば正しい道とすることによって、かれらは名誉と支配権と栄誉とを得ようとした。かれらは、ほとんどすべての種族を通じて尊敬され、その支配権の法を多くの種族に加え、今日、文学と歴史においてほとんどすべての種族を通じて名声をかち得ている。かれらが最高で真なる神の義について嘆くわけはない。――「かれらはその報賞を受けてしまっている」のである。

（一）ラトレイア(λατρεία)は、本来的にはいわゆる「奉仕」の意味であるが、そこから神の奉仕――宗教的礼拝をも意味するようになった。新約聖書においては、イスラエルの人びとの公的な「礼拝」を意味している(「ローマ人への手紙」九の四、「ヘブル人への手紙」九の一参照)。アウグスティヌスは本書第十巻第一章において、神にたいしてなされる奉仕(礼拝)としてのラトレイアと、人間にたいし

てなされる奉仕としてのドゥレイア(δουλεία)とを区別する。

(二)「マタイによる福音書」六の二。

第十六章

永遠な国の聖なる市民の報賞について——その市民には、ローマ人の徳性の模範は有用である

しかし、この世を愛するものらにとっては嫌悪すべき神の真理のために、この世においてさえも非難を耐えしのんでいる聖徒たちの報賞はまったく別である。その神の国は永遠である。そこにおいては、なにものも死滅するものはないから、なにものも生起するものはない。そこには、真の完全な幸福があるが、それは女神ではなくて、神の賜物である。そこからわたしたちは、異国を遍歴しながら、その美にむかって嘆息するあいだ信仰の担保を受けたのである。そこにおいては、日は善人のうえにも悪人のうえにも上るのではなく(一)、義の日がただ善人のみを守るのである。そこにおいては、私的生活をきりつめて、国庫をゆたかにしようとする努力はみられないが、それは真理という共通の宝庫がそこにあるからである。それゆえ、ローマ帝国が拡大して人間の栄誉を得たのは、そのような人びとがそのような報賞を受けるためだけではなく、なおそのうえに、かの神の国の市民がこの世を遍歴するあいだに、かのローマ人の示

した模範を誠実に注視して、永遠の生のゆえにその天の祖国にいかに大きな愛をささげねばならぬかをさとるためであった。地の国は、人間の栄誉のゆえにその市民からそのように愛されたのである。

（一）「マタイによる福音書」五の四五。

第十七章

どのような成果のために ローマ人は戦争を行ったのであるか、また、どれほどその征服した人びとに貢献したか

じっさい、わずかな日だけつづいておわるこの可死的な生にかんするかぎり、支配するところのものがひとを不敬と不義とに強制しさえしないなら、やがて死ぬ人間がだれの支配のもとに生きようとなんのかかわることがあろうか、また、ローマ人はそれを服属させたのち、その法をおかした諸民族に、戦争の巨大な殺害をもってなしとげた以外に、なにか害を加えたであろうか。もしも、かれらの法を課することが平和のうちになしとげられたのなら、同じ結果がいっそう大きな成功をもって得られたであろうが、しかし、征服者の栄誉は得られなかったであろう。ローマ人もまた、かれらが他の民族に課したその法のもとに生きていたのである。もしも、このことがマルスやベルロナ（一）なしになしとげられ、なんびとも戦わないところではなん

びとも征服することがないのであるから、ウィクトリアのあらわれる余地はなかったのであって、ローマ人も他の民族もその状態はまったく同一ではなかったろうか。とくに、のちにもっとも人情ぶかく、また感謝にみちみちてなされたことが、もっとはやくになされていたなら、そうであったであろう。そのことというのは、ローマ帝国に属するすべてのものが、市民権を与えられてローマの市民となり、こうして以前は、少数者のものであったものが万人のものとなったことである。もっとも、自分の畑をもたないところの下層民は公費をもって養われなければならなかったのであるが、下層民は、その食糧が被征服者から強奪されるよりも、国家の賢明な役人を通じて、すすんで提供するものから与えられた方がありがたかったであろう。じっさい、あるものは征服し、また他のものは征服されたということが安全と良俗と、またすくなくとも人間の威厳になんのかかわることがあるか、わたしはまったくわからない。異なるところは、ただ、そのはげしい欲望によって燃えたって、はげしい戦争を行ったところのものが、それにおいて報賞を受けたあのもっとも空虚な栄誉の自負のみである。じっさいローマ人は、その地租をはらわなかっただろうか。かれらは、他のものがゆるされていないことを学ぶことをゆるされているのだろうか。ローマの光景さえも知らないような多くの元老院議員が他国にもいるではないか。うぬぼれをなくすれば、人間は人間以外のなんであろうか。たとえ、この世の邪曲が、すぐれたものたちの大きな栄誉を得ることを認めるとしても、だからといって、人間の名誉が大したものだと考えられるべきではなかった。それはなんの重みもない煙のようなものだからである。しかしながら、わたしたちは、このようなものについても、わたしたち

の主なる神の恩恵を利用することにしよう。わたしたちは、いわばそのような徳性の報賞として、人間の栄を受けるに価した人びとがそのためにどのように多くのものを軽んじたか、なにを耐えしのんだか、どのような欲望を制御したかを考察することにしよう。そして、そのことをもわたしたちの傲慢を抑えるために有用なものとしよう。すなわち、そこにおいて、わたしたちを支配することを約束された国がこの世の国からかけはなれているのは、天が地から、時間的な喜びが永遠の生から、堅実な栄誉が空虚な賞賛から、天使たちの交わりが可死的な人間の交わりから、日と月をつくられたものの光が日と月との光からかけはなれているのと同様であるから、そのような偉大な祖国の市民は、その祖国に到達するためには、なにか善行したり、あるいはなにか禍悪を耐えしのんだりしないかぎり、なにも偉大な事業をなしたと考えてはならぬわけである。それらの人びと(ローマ人と異教徒)は、あのように偉大なことをなし、またあのように苦しいことを耐えしのんだのであり、とくに、市民を永遠の国によび集めるところの罪の赦免は、あのロムルスの避難所(三)がかすかながらそれに似ているようなものをもっているからであるが、そこでは、どういう種類の罪も罰せられないために、それからやがて、かの国が成立する群衆がそこにより集ったのである。

(一) マルスとベルロナについては、本書第三巻第十三章(注)四参照。
(二) ウィクトリアについては、本書第四巻第十四章(注)一参照。
(三) 本書第一巻第三十四章参照。

第十八章

キリスト者は、永遠の祖国の愛のためになにごとかをなしたのなら、自慢をしりぞけなければならない。ローマ人は、人間の栄誉と地の国のためにあのような大事業をなしたのである

それゆえ、あの永遠な天の祖国のために、この世のあらゆる魅力あるものを、どれほど愉快なものであろうとさげすむことはなにか偉大なことであろうか。この消滅的な地の国のために、ブルトゥスは、そのようなことをかの天の国はなんびとにもすることはしはしないのであるが、自分の子を犠牲にすることができたではないか。(一)それはとにかく、自分の子を殺すことは、天の国のためになすべきこと、たとえば、子供のために集め、貯えねばならぬと考えたものを貧者のために施したり、あるいは、正義と信仰とのために、それがおこることを強制するような試練がおこったばあいにそのものを失ったりすることよりも、困難であるに相違ない。じっさい、わたしたちやわたしたちの子を幸福にするのは、わたしたちの生きているあいだにも失われ、また、わたしたちの死んだのちにもわたしたちの知らないだれかによって、あるいは、わたしたちの欲しないだれかによって所有されねばならぬ地上の富ではなくて、精神の真の富である神である。しかし、ブルトゥスについて、かれを賛美した詩人でさえも、かれはその子を殺したので不幸であったことを証言している。すなわち、

父の身でありながら、新しい戦いをおこそうとする子らを、
美しい自由のために、刑罰の座に召喚するであろう
不幸な父よ、子孫がその行為をどのように考えようとも(二)

といっているが、しかし、そのつぎの句で

祖国の愛と名誉の無限の欲望は〔なにものにも〕うちかつ

と、不幸なものをなぐさめている。ローマ人を駆っておどろくべき事業をさせたのは自由と賞賛の欲望である。それゆえ、死を免れないものの自由と、可死的な人間によって求められる賞賛の欲望とのために、父によって子が殺されることもできたのなら、わたしたちを罪と悪魔の支配から解放する自由のために、子が殺されずにキリストの貧しい子のうちに数えられるということはなにか偉大なことだろうか。その自由がわたしたちを解放するなら、人間の賞賛を求める欲望によってではなく、人間を解放しようとする愛によるのであり、しかも、それが解放しようとするのは、タルクィニウス王からではなく、ダエモンとダエモンの君主とからなのである。なおまた、もう一人のトルクァトゥス(三)という家名のローマの首領は、その子を——祖国にそむいてではなく、むしろ祖国のために、しかも父の命令に反して、すなわち、父が将軍として命令したところに反して、敵から挑戦されたとき、血気に走って戦ったために戦いには勝ったけれども、敵を殺した栄誉の与える善よりも、将軍の命令を軽んじた例の及ぼす悪の方が大であることをうれいて——殺したのであるなら、不死の祖国の法のために、子よりもずっとわずかしか愛されない地上のすべての善を軽んじた人びとはどうして得意になるわけがあろ

うか。フリウス・カミルス(四)が恩知らずの祖国をも――その頸からウェイ人というもっとも猛々しい敵の軛をはずしながら、競争者のために有罪とされたのであるが――こんどは、ガリア人から解放した――それ以上の栄光をもって暮らせるよいところはなかったから――のであるなら、たまたま、教会において卑しい心術にとらわれたときから、その名誉を失うようなはなはだしい不法を敵からこうむったとき、異端者である教会の敵の仲間になったり、あるいは、みずから教会に対して異端をおこしたりせずに、むしろ、その力の及ぶかぎり、異端者のもっとも兇悪な邪曲から教会を守った――人間の栄誉のうちに生きようとするのではなく、永遠の生が得られるような教会は他になかったから――ものが賞賛されるわけがあろうか。ムキウスは、もっともはげしい戦いをしかけてローマ人を苦めていたポルセンナ王と和睦しようとして(五)――王を殺すことができずにあやまって他人を殺したので――かれの目の前で燃えさかる祭壇の火の中に右手をさしのべて、現にみる自分のような大勢のものが王を亡ぼすために団結しているといったとき、ポルセンナ王は、かれの勇気とそのような団結の強さにおそれをなして、なんの躊躇もなしに戦いをやめて和睦をむすんだのであるが、もしもムキウスがそうであったのなら、だれが天国のために片手をささげたのではなく他人に強制されて止むなくその全身を炎に投じたとき、その功績を天国にいるにふさわしいものであると考えようとするであろうか。また、クルティウス(六)は、その神々のお告げにしたがって、馬をはげまし、大きく口をあけた地の割れ目に武装したまま、まっさかさまにつきこんだ――神々のお告げは、ローマ神のもつ最善のものをそこになげこめと命じていたが、それは、ローマ人が軍人と武力とにすぐれているか

ら、したがって、神々の命によって、武装した軍人がかの破滅の淵に身を投じなければならぬという意味にしかローマ人は解することができなかったからである――。もしも、クルティウスがそうしたのなら、自分の信仰の敵と戦って、そのような死に身をみずから進んで委ねたのではなく、敵のために委ねなければならなくなって滅んだところのものは、永遠の祖国のためになにか大事業をなしたと誇るであろうか。じっさい、同時にその祖国の王でもある主から、なお確実な神託――「からだを殺しても、魂を殺すことのできないものを恐れるな（七）」を与えられているのである。また、デキウス父子（八）はいわば、ある文句でその身を神聖にしたのち死についたが、それはかれらが倒れ、その血によって神々をなだめることによって、ローマ軍が救われることを求めてであった。もしもデキウス父子がそうであったなら、聖なる殉教者たちは、そこに永遠で真実な幸福があるかの祖国に加わるに価することをしたかのように、おごりたかぶるわけがあろうか――殉教者たちはその血を流しつくすまで、そのために血をのこした兄弟だけではなく、なおそのうえに、そのために血を流させた敵をも、神の教えのとおりに愛して、愛の信仰と信仰の愛とをもって戦ったのである。マルクス・プルウィルルスは、ユピテルとユノとミネルウァの神殿を聖別したとき、かれをねたむものらから息子が死んだという偽りの報せを受け、そしてそれは、かれがその報せにろうばいして仕事をやめ、そのためにかれの同僚が奉献の栄誉を得るために仕組んだものであったが、かれはそれをまったく無視して、息子を葬らずそのままにしておけと命じた（九）（そのようにかれは心中では栄誉の欲望が死んだ息子のかなしみにうちかっていたのである）――もしもマルクス・プルウィルルスがそのようであった

のなら、その父の埋葬について心配していたとき、主が「わたしにしたがいなさい。そして死人を葬ることは死人にまかせておくがよい」[一〇]といわれたものは、聖なる福音――それによって天上の祖国の市民はさまざまな過ちから救われて、呼び集められるのであるが――を述べ伝えるために、なにか偉大なことをなしたというであろうか。また、マルクス・レグルス[一一]は、その誓いを破ったもっとも残酷な敵を欺くことのないように、わざわざローマからかれらのもとに引き返した――ローマ人がかれらを引き止めようとしたとき、答えたといわれるように、一度アフリカ人(カルタゴ人)の奴隷となったからには、ローマにおいて名誉ある市民の威厳を保つことができないであろうから――そしてカルタゴ人は、レグルスがローマの元老院においてかれらに不利なことをいったので、かれをもっともひどい刑罰によって殺したのであるが、もしもレグルスがそのようであったのなら、その至福にまで信仰そのものがわたしたちをみちびく祖国の信仰のために、どのような苛責を軽んじてはならないであろうか。また、レグルスがもっとも兇悪な敵に対して守らねばならなかった誠実のためにこうむったと同じ目に、人間が主に対して守らねばならなかった誠実のためにあったとするなら、人間は、主が賜わったすべての恵みのためになにを主に報いるであろうか[一二]。またキリスト者は、そこに真の富――いな、神自身がそれであられる祖国にむかってこの世を遍歴するさい、身軽に道を歩めるための自発的な貧困について誇ることをどうしてあえてするだろうか。かれは、ルキウス・ウァレリウス[一三]が、執政官在職中に死んだとき、人民から出した金でやっとその埋葬の心配ができたほど貧しかったということを聞いたり読んだりするのである。また、クィンティウス・キンキナトゥス[一四]がわ

ずか四聯(れん)の牛で耕せるだけの畑をもって、自分の手で耕していたとき、鋤をすてて、その名誉はコンスルにもまさるディクタトール（独裁執政官）になることを命じられたが、敵を征服して大きな栄誉を得たのち、もとの貧しい生活を続けたということを聞いたり読んだりするのである。(一五) また、この世の報賞によって誘惑されることによってかの永遠の祖国の交わりから離れ去ることのなかったものも、なにか偉大なことをなしたと誇るであろうか。——かれは、ファブリキウス(一六)がエピルス王ピュルス(一七)のあのようにすばらしいおくりものによっても、王国の四分の一を与えようと約束されても、ローマの国家との関係を断ち切らずに、それよりもむしろローマにあって、いつまでも一個の私人として貧しい生活を続けようとしたことを学び知っているのである。じっさい、ローマ人は、もっと豊かで富んだ国家すなわち人民の財産、祖国の財産、共有の財産をもちながら、かれら自身はその家にあって、まったく貧しい生活をしていたのであって、かれらのうち、すでに二回執政官をつとめたものが、食器に十ポンドの銀をつかったということがわかったので、監察官の告発によって、貧民の元老院から追放されたほどであった。——このように、その戦勝のおかげで国庫が豊かになっていた人民が貧しかったのであるが——もしもそうであったのなら、それよりも高い意図をもって、「使徒行伝」に記されているところにしたがって、「各人にその人に応じて分け与え、なんびともあるものを自分のものとよぶことはなく、すべてのものがみなに共有される(一八)」ように、その富を共有のものとなしたすべてのキリスト者は、そのことを天使たちとの交わりを得るためにしたからとて——さきのローマ人もほとんどそれと同じことをかれらの栄誉を失わずにいるためになしとげたのであるか

ら――そのために、喋々と吹聴されるべきではないということを悟らないであろうか。

このようなことがらや、その他同じ種類のものがローマ人の書にみられるとして、これに似たことがらは、もしもローマ人の支配力がそのすばらしい成功によって、広く遠く及んで拡大されなかったら、どうしてそのように知れわたり、またそのように広く人びとの口にのぼって賞めそやされたであろうか。それゆえ、あのように広くひろがり、あのようにながく続き、またあのような人びとの徳性によって、卓越し、光栄に輝く支配権を通じて、ローマ人の意図にたいしては、その求めていたところの報賞が与えられるとともに、またわたしたちにたいしては必要な刺戟となる模範が提供されたのであるが、それは、ローマ人がその国の栄誉のために守った徳性が、それになんらかの仕方で似ているところの徳性を、もしもわたしたちが、もっとも光栄ある国のために守らなかったなら、わたしたちはふかく恥じるべきであり、またその徳性を守らなかったなら、おごりたかぶり得意にならないように示されたのである。というのは、使徒がいっているように、「現代の苦しみは、やがてわたしたちにあらわれようとする栄光に比べると、いうに足りない(一九)」からである。しかし、この世に関する人間の栄誉を得るためには、他のローマ人の生活はまったくふさわしいものと考えられていた。したがって、キリストを殺したところのユダヤ人たちは――旧約聖書において、おおいかくされていたところのことを、新約聖書があきらかに示しているように、神の摂理が善人にも悪人にも無差別に与えられた地上の消滅的な恩恵のためにではなく、永遠の生と永続的な賜物と天上の国の交わりのために、唯一で真の神が崇拝されねばならぬのであるから――かの有徳なローマ人の栄誉の犠牲

になったのもまったく当然であった。すなわち、どういう種類のものであろうと、その徳性によって地上の栄誉を求めていたローマ人は、そのはなはだしい悪徳をもって真の栄誉と永遠の国を与えたところのものを殺して斥けたユダヤ人に打ち勝ったのである。

(一) ユニウス・ブルトゥスのこと。本書第三巻第十六章参照。
(二) ウェルギリウス『アエネイス』六の八二〇―三。
(三) トルクァトゥスについては、本書第一巻第二十三章(注)二参照。
(四) カミルスについては、本書第二巻第十七章参照。
(五) ポルセンナ王とムキウスについては、本書第四巻第二十章(注)三参照。
(六) クルティウスについては、本書第四巻第二十章(注)四参照。
(七) 「マタイによる福音書」一〇の二八。
(八) デキウス父子については、本書第四巻第二十章(注)五参照。
(九) リウィウス『歴史』二の八。
(一〇) 「マタイによる福音書」八の二二。
(一一) レグルスについては、本書第一巻第十五章参照。マルクス・レグルスの英雄的行為は、アウグスティヌスにつよい印象を与えたということが本書において推察される。
(一二) 「詩篇」一一六の一二。
(一三) ルキウス・ウァレリウスは、じっさいには、ローマ共和制初期の執政官ウァレリウス・プブリコラである。かれの死にさいしての貧しさについては、一世紀前半に出たローマの歴史家ウァレリウス・マクシムスの『著名言行録』(四の四の一)に記されている。

（一四）クィンティウス・キンキナトゥスについては、本書第三巻第十七章(注)四参照。
（一五）ウァレリウス・マクシムス『著名言行録』四の四の七。
（一六）ファブリキウス・ルスキウスは前二八二年にコンスルとなったが、エピルス(ギリシア西北部)の王ピュルスを相手に戦い、勝利をおさめ、二度まで凱旋式を挙げた。かれは、上述のキンキナトゥスと同様に、ローマ人の貧困と清廉を代表する人物である。
（一七）ピュルス王については、本書第三巻第十七章参照。ファブリキウスがローマの使節としてピュルス王を訪ねたとき、王は、友情と歓待のしるしとして金をとらせようとしたが、かれはそれを拒絶する(プルタコス『英雄伝――ピュルス』二〇)。
（一八）「使徒行伝」二の四四―五。
（一九）「ローマ人への手紙」八の一八。

第十九章

なにによって栄誉の欲望と支配の欲望とは区別されるか

たしかに、人間の栄誉と支配の欲望とには相違があるにちがいない。すなわち、人間の栄誉をはなはだしくよろこぶものがまた支配することをも熱望するということは自然的傾向であるけれども、それにもかかわらず、たとえ人間の賞賛によるものであっても、その真の栄誉を求めるものは、正しく判断する人びとに不快を与えないように骨を折るのである。じっさい、多

くの人びとがそれを持っているわけではないが、多くの人びとがそれについて正しく判断する道徳上の善があるのであって、サルスティウスが「かれは正しい道によって求める」(一一)といっているような人びとが、栄誉と権力と支配を得ようとつとめるのは、このような道徳上の善なのである。他方、ひとがそれを求めるゆえに、正しく判断する人びとに不快を与えることを恐れる栄誉の欲望をもたずに支配し命令することを熱望するものはみな、もっとも明白な罪を犯してさえも、その好愛するものを得ようとつとめるのがつねである。したがって、栄誉を欲し求めるものは、正しい道によって得ようとつとめるか、あるいはすくなくとも、じっさいはそうでないのに、善であると見られようと思って術策と欺瞞によって、努力するかである。それゆえ、徳をもっているひとが栄誉を軽んじるということは、そのひとにとって大きな徳なのであって、それというのは、栄誉を軽んじるということは、神の目には見えるけれども、人間の判断にはあきらかに現れないからである。すなわち、ひとが栄誉を軽んじていることをあきらかに示そうとして他人の目の前でするすべてのことは、いっそう大きな賞賛、すなわちいっそう大きな栄誉を得るためにしているのだと信じられるなら、そのひとは邪推している人びとの考えているようではないということをかれらの心に示してみせる方法はないのである。しかしながら、賞賛する人びとの判断を問題にしないひとは、邪推する人びとの軽率をも問題にしないが、それにもかかわらず、そのひとがほんとうに善良であるなら、邪推する人びとの救いを問題にしないのではない。それというのは、その徳性を神の霊から受けているひとの義はじつに大なのであって、そのひとは敵さえも愛し、そして自分をにくみそしるものをも回心させて、

地上の国においてではなく天上の国において自分の仲間にしようとするほどである。他方、自分を賞賛する人びとに対しては、かれらが自分を賞賛するということは軽視するけれども、それにもかかわらず、かれらが愛してくれるということは軽視しないのであって、愛してくれる人びとを欺かないために、賞賛してくれる人びとに思い違いをさせることを欲しない。したがって自分自身よりも、むしろ、人間が自分のうちに正当に賞賛されるすべてのものをそこから得ている神の方が賞賛されるように熱心に努力するわけである。他方、栄誉を軽んじて支配を熱望するものは、残酷と放縦との悪徳において、獣類をしのぐものがあった。かれらは、名声にはまったく無頓着で、ただ支配の欲望だけをもっていた。そのようなものが大勢いたことは歴史の伝えるところであるが、しかしその悪徳の頂上に、いわば牙城にはじめて達したのはネロ帝(二)であって、その放縦はじつにはなはだしく、かれにはおそるべき男らしさはなにもないと考えられたほどであり、またその残酷はじつにはなはだしく、それが知られなければ、一片のやさしさもないと思われたほどである。しかしながら、このようなものにも支配力が与えられるのは、ただ、最高の神の摂理によって、人間界の事情がそのような支配者をもつにふさわしいと判定されるときにのみである。この問題については、神の御声はあきらかに聞かれるのであって、神の知恵は、「わたしによって王たるものは治め、僭主たるものは地を支配する」(三)といっておられる。しかしながら、僭主といわれるのが極悪非道な王ではなくて、その古名によって強者と考えられる(それにしたがってウェルギリウスは、

僭主の右手を握ったことは、わたしにとって和約の一部だろうといっている(四))

ことのないように、また別の箇所で、神についてまったくあきらかに、「神は人民の邪悪のゆえに偽善者をして支配させられた(五)」といわれている。そういうわけであるから、わたしは、どのような理由で唯一の真実で義である神が、地の国のある基準にしたがって善であったローマ人を助けてあのように大きな支配権の栄誉を得させたかを、わたしにできるかぎり説明したのであるが、しかし、それにもかかわらず、なおそのほかに、人類の種々異なった功績による、もっとかくれた――わたしたちによりも神によりよく知られた――理由があるのかもしれない。なんびとも、真の敬虔なしには、すなわち、真の神の真の崇拝なしには、真の徳をもつこと、そしてまた、徳は人間の栄誉に奉仕するかぎり真の徳でないということ、それにもかかわらず、わたしたちの聖書に神の国とよばれている永遠の国の市民でないところのものは、そのような徳、人間の栄誉に奉仕する徳をもつときには、それさえもたないときよりも地の国にとって有用であるということは、真に敬虔なものすべてを通じて異論のないところである。しかし、真の敬虔を賦与されている善き生活をおくる人びとが人民を統一する術をもっているばあい、かれらが神のあわれみによって権力をもつときほど人間にとって幸福なことはないのである。しかし、そのような人びとは、この世の生においてどれほど大きな徳をもつことができても、それらの徳をただ神の恩恵にのみ帰する――神は、それらの徳を、欲し信じ求めるものらに与えられるのであるから――のであり、そして同時に、かれらがそれにふさわしくなろうとつとめるかの聖徒たちの交わりにみられるような義の完全性に到達するためには、どれほどかれらには足りないかをわきまえている。他方、真の敬虔なしに人間の栄誉に奉仕する徳は、どれほ

ど賞賛され、宣伝されようともその希望が真の神の恩恵と慈悲とにかけられている聖徒たちの徳のささやかなはじめにもけっして比べものにもならないのである。

(一) サルスティウス『カティリナの陰謀』一一。

(二) ネロ帝は三七年から六八年。ローマ皇帝(在位は五四年から六八年まで)。クラウディウス帝の養子となり、同帝毒殺後、皇帝となった。セネカなどの後見で、はじめは善政をおこなったが、しだいに残虐性を示し、母、妻、さらにセネカなどを殺害し、多くの政敵を暗殺した。六四年のローマの大火にさいしては、キリスト教徒を犯人に仕立てて迫害をおこなった。最後は、元老院、近衛兵にも見捨てられて自殺した。

(三) 「箴言」八の一五。

(四) ウェルギリウス『アエネイス』七の二六六。

(五) 「ヨブ記」三四の三〇。

第二十章

徳性が人間の栄誉に奉仕することは身体の快楽に奉仕することと同様に恥ずべきことである

人間の最高善は徳自体にあると考えた哲学者たちは(一)、なるほど徳は認めるけれども、徳を身体的快楽という目的によってはかり、快楽はそれ自体のために求められるべきであって、徳は

ただ快楽のために求められるべきであると考えるある哲学者たち[二]をはずかしめようとして、いわば、言葉で絵を画いているのがつねであるが[三]、そこでは、快楽は、いわば、好みのむつかしい女王として王座を占め、そして諸徳は僕として快楽に服従させられて、その目くばせに注意し、その命ずるところに注意して、その命ずるところのことをなすように画かれている。すなわち、思慮には、どのようにして快楽が支配して安全であることができるかを注意ぶかく調べるように命じ、正義には、身体的快適に必要な友愛を得るために、できるだけの恩恵を施し、律法を破ったために、快楽が安全な生活をおくることができなくならないように、なにものにも不法を加えないことを命じ、勇気には、自殺にいたらないような苦痛が身体におこったばあい、その主人公、すなわち快楽をつよく心のうちにいだいて、その以前の甘美な喜びの想起によって現在の苦痛を軽くすることを命じ、節制には、なにか気にいった食物があっても、度をすごしてなにか有害なものが健康を害して、エピクロス派の人びとがその最大のものは、まさしく身体の健康に存すると考えるところの快楽がはなはだしく乱されることのない程度に摂取することを命じる。このように、諸徳は、その威厳のすべての栄誉をもちながら、この快楽という、さながら帝王のようなふしだらな女主人に仕えるのであろう。かの哲学者たちによれば、この絵ほど不名誉でぶかっこうなものはなく、善良な人びとの目が耐えがたく思うものはないといわれるが、まったくそのとおりである。しかしわたしは、たとえ諸徳が人間の栄誉に奉仕するように画かれていても、その絵はそれにふさわしい上品さをもっているとは考えない。というのは、この人間の栄誉は気ままな女ではないとしても、やはり思いあがって多くの空虚な

ものをもっているからである。したがって、堅実で確固とした諸徳が人間の栄誉に奉仕して、ただそれによって人間を喜ばし、空虚な栄誉に奉仕するためにのみ思慮が将来のことを考え正義が配分し勇気が忍耐し節制が抑えるのであるなら、それはふさわしくないことだろう。なおそのうえ、栄誉を軽んじるものとして他人の判断を侮りながら、自分は賢者だと考えて自分に満足している人びとも、そのような汚らわしさをまぬがれているとはいえないであろう。というのは、かれの徳は、それでもなお徳という名に価するとして、また別の意味で人間の賞賛に従属しているからである。じっさい、自分に満足するものもやはり人間なのである。これに反して、その愛し、信じ、希望をおく神に対する真の敬虔をもって、自分自身にとってよりも真理にとって満足であるところのもの——そのようなものがそのひとのうちにあるとして——に注意するよりも、自分自身にとって不満足であるところのものに注意するところのひとは、いまや真理を満足させることができるということを、これまでその不満を恐れていたところのもの(神)の慈悲に帰するのである。そしてすでにいやされたところのものについて感謝し、なお、いやされなければならぬところのものについて祈りつづけるのである。

(一)　ストア派の哲学者のこと。

(二)　徳は快楽のために求められるべきであると説いたのは、エピクロス(前三四一年—前二七〇年頃)を祖とするエピクロス派の哲学者たちである。もっとも、エピクロス自身は、身体的快楽と知的快楽とを区別し、後者を優位においたのであったが、弟子たちは二つの快楽の区別を徐々にあいまいなものにし、身体的快楽に強調点がおかれるようになった。

（三）「絵を画いた」といわれるのは、具体的にはストア派の哲学者クレアンテス（前三三一年―前二三二年）である（キケロ『最高善と最大悪について』二の二一の六九）が、アウグスティヌスは拡張して、ストア派の哲学者にあてはめている。

第二十一章

ローマの支配権は、それからすべての権力が由来し、その摂理によって万物が支配される真の神によって与えられた

そういうわけであるから、わたしたちは、王権や帝権を与える力をただまことの神にのみ帰しようと思うのであるが、その神は天の国における幸福をただ敬虔なものにのみ与えながら、地上における支配権を、その御意のままに、いつも正しい御意のままに、敬虔なものにも不敬なものにも与えられるのである。じっさい、わたしたちは、神がわたしたちにあきらかに示そうとしたかぎり、それを説明したけれども、それにもかかわらず、人間のかくれたところのものをあげつろい、諸王国の功罪をあきらかに吟味して判定することは、わたしたちにとって大仕事であり、わたしたちの力をはるかにこえるものである。それゆえ、正しい審判と援助とをもって人類をけっして見捨てられない唯一真実の神が、それを欲しられたとき、またその欲しられるかぎり、ローマ人に支配権を与えられたのであるが、その同じ神は、アッシリア人と、

それからまたペルシア人にも――かれらがただ二神[一]のみを、すなわち善神と悪神とを崇拝したということは、かれらの書が示すとおりである――支配権を与えたのであり、また、すでに必要と思われるかぎり、上に述べた[二]ヘブライ民族――かれらは支配していたときでさえも唯一神を崇拝していた――についてはあらためて述べる必要はないのである。それゆえ、セゲティアの女神[三]を崇拝しないのに、ペルシア人に穀物を与えられた神、また、ペルシア人があのように多くの神々――ローマ人はその神々の各々が別々の仕事をつかさどり、あるいはその多くのものが別々の仕事をつかさどるものと考えていた――を崇拝しないのに、その地の他の賜物を与えられた神、その神がペルシア人が神々――ローマ人がその崇拝によって支配権を得たと信じていた――を崇拝しないのに支配権を与えられたのである。このことは、個人についても同様であって、マリウス[四]に支配権を与えられたものが、ガイウス・カエサルに与え、アウグストゥス[五]に与えられたものがネロにもそれを与え、もっともやさしい皇帝ウェスパシアヌス父子[六]に与えられたものが、もっとも残酷なドミティアヌス[七]にも与え、またその一々を挙げるまでもなく、キリスト者コンスタンティヌス[八]に与えたものが背教者ユリアヌス[九]に与えたのである。ユリアヌスのすぐれた資質も、支配欲のために、瀆神と忌むべき好奇心によって欺かれ、そしてその好奇心の空虚な神託に夢中になって、勝利の確実性を信じきって、糧食食料を積んでいた舟を焼いた。それから狂気の沙汰にも、無謀きわまる企てを試みようとして、その軽率の当然の報いとして殺されたのであるが、敵地に残された軍隊は、まったく糧食に欠乏して、――それについてはすでに前巻で述べたテルミヌス神[一〇]の占いに反して――ローマ帝国の国境をかえずには、

ないであろうか。

まに統べ導かれるのであって、わたしたちには、かくれた理由によるものであっても、正しく必要には従ったのである。これらすべてのことは、あきらかに、唯一真実の神がその御意のまその窮況から脱することができなかった。じっさい、ユピテルに従わなかったテルミヌス神も、

(一) 二神とは、オルマズドとアーリマンで、ゾロアスター教においては、前者は光の神、後者は闇の神である。

(二) 本書第四巻第三十四章参照。

(三) セゲティアについては、本書第四巻第八章参照。

(四) マリウスについては、本書第二巻第二十二章参照。

(五) アウグストゥスについては、本書第三巻第三十章(注)三参照。

(六) ウェスパシアヌスは九年から七九年。ローマ皇帝(在位七〇年—七九年)。ネロ帝の自殺により、皇帝に推され、ネロ時代に破綻に瀕した財政再建など、賢明な治世をおこなった。皇帝は、皇子ティトゥスをパレスチナでの反乱鎮圧に赴かせたが、気のやさしいこの皇子を可愛がったとされる。

(七) ドミティアヌスは五一年から九六年。ローマ皇帝(在位八一年—九六年)。ウェスパシアヌスの第二子。皇帝の神性を強調してキリスト教徒を迫害、粛清や財産没収など、恐怖政治をおこなった。

(八) コンスタンティヌス帝については、本書第四巻第二十九章参照。

(九) ユリアヌス帝についても同上参照。

(一〇) テルミヌス神については、本書第四巻第二十三章(注)一二参照。

第二十二章

戦争の期間も結末も神の裁断による

戦争の期間もまた同じであって、人類を苦しめ、あるいは慰めようとする神の意志と正しい判断と慈悲のままに、戦争ははやく終ったり長く続いたりするのである。すなわち、海賊の乱(一)はポンペイウスによって、第三次ポエニ戦争(二)はスキピオによって信じられないほどすみやかに短い期間で終えられた。脱走した剣闘士の乱(三)もまた、そのために多くのローマの将軍と二人の執政官とが破られ、イタリアがおそろしく乱され荒らされたけれども、それでも三年目に、多くのものを耗損したのち、それ自身も終息した。ピケヌム人、マルシ人、ペリグニ人など、異民族ではなくイタリア民族であったものは、ローマ人に服属して、長い間もっとも忠実に奉仕したのち、頭をもたげて自由を回復しようと企てたが(四)、そのころすでに多くの民族はローマの支配権に屈服し、そしてカルタゴも破壊されていた。このイタリア本土の戦争に、ローマ人はじつにしばしば打ち破られて、そのあいだに二人の執政官(五)のほかに、なおもっとも高貴な元老院議員たちも死んだが、しかし、その惨禍はそう長いあいだにわたらなかった。すなわち、五年目には終結をみたのである。しかし、第二次ポエニ戦争(六)は、十八年間にわたって、ローマの国家に甚大な損害を与え、ローマ人の勢力を弱め、ほとんど耗損しつくしたが、二回の戦闘に約七万のローマ人がたおれた。第一次ポエニ戦争(七)は二十三年間つづき、ミトリダテスの乱は四

十年間にわたった。(八) また、むかしのローマ人は、戦争をすみやかにしとげるのにもっとも勇敢で強力であった——あらゆる徳にかけて大いに賞賛される古い時代に——と考えるものがないように、その例をあげれば、サムニテス人との戦いにほとんど四十年間もつづいたのであって、(九) その戦争にローマ人は大敗を喫して、一時サムニテス人に屈服したほどでさえあった。しかし、ローマ人は正義のために栄誉を愛したのではなく、栄誉のために正義を愛したようにみえたから、その結んだ和約を破ったのである。わたしがこれらのことを語るのは、過去のことを知らない多くのものが、あるいはまた、自分の知っていることを知らないふりをする多くのものが、キリスト教の時代に戦争がいつもよりすこし長びくのをみると、すぐにわたしたちの宗教をはげしく攻撃して、もしもキリスト教が存在せずに、むかしの祭式によって神々が崇拝されたなら、かつてマルスとベルロナとの助力によってあのように大きな戦争をすみやかに終結させたあのローマ人の武力によって、この戦争も終らせられるであろうと叫ぶからである。それゆえ、歴史を読んだ人びとは、昔のローマ人がどのようにさまざまな結果とどのように悲惨な災悪とを経験しながら——この地上の世界がさながらあらしの大海原のように、そのような禍悪のさまざまなあらしによっていつも動かされるのに似て——いったかを想起してみるがよい。また、かれらが欲しないところのことを告白し、神に向って狂気じみた言葉をあびせかけて、その身を滅ぼしたり、無知なものを欺いたりしない方がよい。

(一) 海賊の乱は二か月足らずで終った(前六六年)。本書第三巻第二十六章参照。
(二) 第三次ポエニ戦争は、前一五〇年から前一四六年まで。

(三) 剣闘士の乱については、本書第三巻第二十六章参照。
(四) ピケヌム人、マルシ人、ペリグニ人はいずれも中部イタリアに住んでいた民族で、内乱は前九〇年におこり、前八八年スュラにより終結せられた。
(五) 二人の執政官とは、ルティリウス・ルプス(前九〇年死)およびポルキウス・カト(前八九年死)のこと。
(六) 第二次ポエニ戦争は、厳密には、前二一八年から前二〇二年までの十六年間である。
(七) 第一次ポエニ戦争は、前二六四年から前二四一年まで。
(八) 小アジアのミトリダテス王との戦いは前二六四年から前六三年まで続いた。
(九) 中部イタリアのサムニテス人との戦いは四回にわたっており、前三四三年にはじまり、前二七二年まで全期間は七十年をこえる。アウグスティヌスが四十年間といっているのは、もっとも短い第四回目の戦いを数えていないのであろう。

第二十三章

ダエモンの崇拝者であるゴート王、ラダガイススがその大軍とともに一日で征服された戦闘について

しかしそれにもかかわらず、わたしたちの記憶にもある最近のことであるが、神がおどろくべき仕方で、また慈悲ぶかくなされたところのことを、人びとは感謝しながら述べずに、かれ

らに関するかぎり、できればすべての人間の忘却のうちに埋めようとつとめている。そしてわたしたちも、それについて語らないなら、忘恩のそしりを免れないであろう。すなわち、ゴート王ラダガイススは、その獰猛な大軍を率いてすでにローマの近辺に迫り[二]、まさにローマ人の頸をおさえようとしたとき、一日のうちにおそろしくはやく打ち破られたので、ローマ軍は一兵も失わなかった——いな負傷さえもしなかった——のに、その軍隊は十万以上もの損害をだし、また王自身もまもなく捕えられて、当然の報いとして殺されたのである。じっさい、このような不敬なものが、あのように大きく、またあのように不敬な軍勢を率いてローマに侵入したならだれを容赦したであろうか。どのような殉教者の墓に敬意を表したであろうか。なんびとを取り扱うさいに、神をおそれたであろうか。だれの血を流さずにすましたであろうか。だれの貞潔をおかさずにおいたであろうか。しかし、かれらは、かれらの神々のためにそのような大声をあげたことだろう。またどのように侮辱的言葉を発して得意になったことだろう。すなわち、かれら、ラダガイススが勝ったのは、またかれらがそのような大勝利を得たのは、キリスト教がローマ人にそうすることをゆるさない神々を、かれらが日々犠牲を捧げることによってなだめひきよせたためだといったことだろう。すなわち、ラダガイスス王が最高神の意のままに打ち敗られたその場所にすでに近づいていたとき、かれの名声はいたるところに高まっていたので、わたしたちはカルタゴにおいてもこういう話をきくのであった——異教徒たちは、ラダガイスス王がその日々犠牲を捧げているといわれる味方の神々の保護と援助のおかげで、そのような祭事をローマの神々に対して行わず、またなんぴとにも行うことをゆるさないとこ

ろのローマ人によって征服されることはけっしてないと信じ、いいふらし、得意になっているというのであった。そしていま、それらのあわれむべき人びとは、神のあのように大きなあわれみに感謝しないのである。神は、野蛮人の襲撃よりもひどい罰を受けるに価する人間の習俗を匡正し、是正しようとされたがその怒りをまったく柔和にやわらげて、まず第一にゴート王がおどろくべき仕方で征服されるように――弱い心の人びとに傾倒されて、かれが嘆願していることが知れわたっているダエモンに栄誉が帰せられてはならないから、――されたのである。それからのちに、ローマが別の野蛮人に占領されるようにされたのであるが、その野蛮人というのは、これまでの戦争のすべての習慣に反して、聖所に逃れ集ってきたものを、キリスト教に対する尊敬のゆえに、保護し、ラダガイスス王が頼みとしていたダエモン自体や不敬な犠牲の祭式に対して、キリストの御名によって抗(あらが)ったので、かれらは人間に対してしていたよりもはげしい戦いを、むしろダエモンに対してしていたように思われた。このように万物を支配する主は、ローマ人をあわれみぶかく懲(こらし)められるとともに、ダエモンに嘆願するものをおどろくべき仕方で打ち敗かして、そのような犠牲が現世の安全のためにも必要でないことをあきらかに示された。すなわち、頑固に反対しつづけるのではなく、賢明に注意してみる人びとは、現世の必要のためにも、真の宗教を捨て去るべきでなく、むしろ永遠の生をかたく信じ期待して保持すべきであることが説明されたのである。

（一）　アウグスティヌスがここでゴート王と呼んでいるラダガイススのイタリアへの侵入は、四〇五年、ホノリウス帝の治世時代であった。ラダガイススは二十万人以上のゲルマン諸族の大混成軍を率いて

アルプスをこえ、イタリアへ迫ってきたが、当時の西ローマ最高司令官スティリコ（三五九年頃―四〇七年）はわずか三万の軍と同盟部族を動員してこれを撃退した（ギボン『ローマ帝国衰亡史』三の三〇参照）。

第二十四章

キリスト教的皇帝の幸福はなにか、またどれほど真実か

じっさい、わたしたちはキリスト教徒の皇帝のあるものを幸福とよぶけれども、しかしそれは、かれらが長いあいだ帝位にあったり、平穏に死んだのち、あとに残った息子が帝位をついだり、国家の敵を平げたり、あるいは、自分に敵意をもって手向う市民を警戒して屈服させることができたからではない。これらの、またその他の、この辛苦に満ちた世の賜物や慰藉は、幸福とよばれる皇帝が属している神の国に属していないダエモンの崇拝者たちも、受けるに価したものである。そしてこのことは、他ならぬ神の慈悲によってなされたのであるが、それは、神を信じるものなら、そのようなことを最高善として神から求めないためにである。わたしたちが幸福とよぶのは、このような皇帝ではなくて、つぎのようなものである。すなわち、正しい統治をしたもの、敬々しく尊敬する人びとのへつらいのことばと卑屈なほどにあがめたてまつる人びとの従順にもかかわらず思いあがらないもの、神の崇拝をできるだけ弘めるために、

その権力を神の威厳の僕となすところのもの、神をおそれ、愛し、崇拝するところのもの、そこに仲間がいることをおそれないあの国を地上の国よりも愛するところのもの、なかなか罰せずにすぐにゆるすところのもの、同じ罰するにしても、国家を治め守る必要からして、敵意と憎悪を満足させるためにしないもの、同じゆるすにしても、不義を罰せずにすますのではなく、改善を期待してそれを認めるもの、たいてい、その必要にせまられて定めた峻厳なことを慈悲のやさしさと恩恵の豊かさによってうめあわせするところのもの、自由にふるまえるほど、ますますその放縦をいましめるもの、どの諸族をも支配することよりも、邪悪な欲望を支配しようとし、しかもそのことを、空虚な栄誉の熱望によってではなく、永遠の幸福の愛によってなすところのもの、そして自分の罪のために、謙虚と慈悲と祈願との供物を捧げることをおこたらないところのもの——このようなキリスト教徒の皇帝こそ、わたしたちは、いまは希望において、またのちには、わたしたちが期待しているところのものが成就するときには、現実に幸福であるというのである。

第二十五章

神がキリスト教徒皇帝コンスタンティヌスに与えられた繁栄について

すなわち、善なる神は、永遠の生のために神を崇拝せねばならぬと信じる人びとが、なんび

とも、ダエモンに嘆願しないかぎり、これらの悪霊はそのようなことにかけてはきわめて有力であるから、あのように高い地位とこの地上の支配権を得ることはできないと考えることのないように、ダエモンに嘆願をしないで真実の神自身を崇拝したコンスタンティヌス帝(一)になんびとも希望することをあえてしないほど大きな贈物をかずかず与えられた。そしてまた、ローマ帝国の友邦でありいわばその娘であるが、しかしダエモンの殿堂も偶像もない都(二)を建設することをゆるされた。かれは長いあいだ統治し、ローマ世界全体をただ一人の皇帝として守護し、防衛した。そして、戦争を指導し、遂行して、もっともかがやかしい勝利を得、また僭主(三)を打倒しようとしていつも成功を収め、長生きをしたのち老病のためなくなったが、その息子たちがそのあとをついで帝位にのぼった。しかしまた、コンスタンティヌスの幸福にあやかるためにキリスト者となる皇帝がでないように——ひとはみな永遠の生のためにキリスト者とならねばならぬのに——神は異教徒のユリアヌスよりもはやくキリスト教徒のヨウィアヌスをこの世から奪いさり(四)、また同じくキリスト教徒のグラティアヌス(五)が僭主の剣にかかって殺されることをゆるされるのであるが、ローマ人の偽りの神々を崇拝していた大ポンペイウス(六)のばあいよりもはるかに温和な仕方によってであった。すなわち、ポンペイウスは、かれがいわば内戦の相続者として残したカトによって仇を報いてもらうことができなかったのに、グラティアヌスは、敬虔な心はそのような慰めを必要としないが、テオドシウス(七)によってその仇を報いてもらった。このテオドシウスに、グラティアヌス帝は、小さな弟があったけれども、あまりにも大きな権力よりも、信頼のもてる共同者を求めて支配権を分っていたのである。

(一) コンスタンティヌスは二八〇年頃から三三七年。ローマ皇帝(在位三〇六年—三三七年)。コンスタンティウス一世の長子で、父の死後皇帝となる。教会の建設につとめ、三一三年、ミラノ勅令を発し、キリスト教を公認、三二五年、ニケア会議を召集してキリスト教の教義を定めさせたが、自身はアリウス派に近づく。死のまえにエウセビオスより受洗。

(二) コンスタンティノープルのこと。

(三) この「僭主」とは、たとえば、みずから副帝と称して正帝セウェルスを倒し、のちにコンスタンティヌスと対立したマクシムスなどであろう。

(四) ユリアヌス帝の在位は三六一年から三六三年。ヨウィアヌス帝の在位は三六三年(六月)から翌三六四年(二月)まで。しかし、両者の生れた時期は接近しており、三三一年頃である。

(五) グラティアヌスは三五九年から三八三年。ローマ皇帝(在位三六七年—三八三年)。ミラノの司教アンブロシウスの影響をつよくうけ、元老院の勝利の女神像を除去、祭儀などを禁じた。のちの皇帝マクシムスの騎兵隊の司令官に殺害された。

(六) ポンペイウスは、カエサルと対立して敗れ、一四八年、エジプトへむかうが、船が着いて岸へ下り立とうとした瞬間、妻の眼前で敵に刺し殺された(プルタルコス『英雄伝——ポンペイウス』七八—九参照)。

(七) テオドシウスは三四六年頃から三九五年。通称大帝と呼ばれるテオドシウス一世(在位三七九年—三九五年)。グラティアヌス帝と共治、グラティアヌスが殺害された後、マクシムスを敗り、帝国を統一してキリスト教を国教となし、異端を抑える政策をとってカトリック教会発展に大きく寄与した。引退のさい、帝国を東と西に二分した。

第二十六章

テオドシウス・アウグストゥスの信仰と敬虔とについて

そのゆえに、テオドシウスもまた、ただ、グラティアヌスの生前、かれに対して守るべき誠実を維持しただけではなく、またその死後も、兄を殺したマクシムスによって追放されたグラティアヌス帝の小さな弟を孤児として、いかにもキリスト者らしく自分の支配していた帝国の都会のうちに迎えいれ、父のような愛情をもって保護したのであるが、しかしその弟はまったく孤立無援であったので、テオドシウスが、恩恵を施そうとする愛によってよりも領土を拡めようとする欲望に燃え立っていたなら、なんの苦もなくなきものにすることができたであろう。しかし、そうせずに、あのように愛をもってかれは遺弟を引き取って、その皇帝としての威厳を保たせ、あたかも情愛と恩恵とをもって慰めた。その後、かれのすばらしい成功がマクシムスをおそれさせたとき、かれは思いあがって瀆神的で不法な好奇心にかられることなく、エジプトの荒野に住んでいたヨハネ(一)のもとに使をやったが、かれは、この神の僕が預言の霊を与えられているところのことをそのまま語る名声によって知られていたのであり、そしてかれから勝利について確実な預言を受けたのである。その後まもなく、テオドシウスは僭主マクシムスを滅ぼして、まだ少年であったウァレンティニアヌスを深甚の同情と尊敬の念をもって、その追放されていた帝国の共同支配者の地位に復させた。そしてまもなく、ウァレンティニアヌス

が、奸計によってか、他の方法によってか、それとも偶然によってか殺されたとき、不法にもヴァレンティニアヌスにとってかわった、また別の僭主エウゲニウスを——こんどの預言者の返答を得て確信を抱きながら——打倒したが、[二]この僭主の強力きわまる軍隊に対して、かれは剣をもってよりも、祈りをもって戦った。それに参加した兵士たちの話によると、かれらが投げようとした飛び道具はみなその手からもぎとられたが、それは、テオドシウスがいた側から敵の方にはげしい風が吹いていて、ただ、敵に向って投げられたものをみなおそろしく飛ばしただけではなく、敵の投げた槍をかれら自身にはねかえしたほどであった。そのゆえに、詩人クラウディアヌス[三]もまた、キリストの御名には、縁もゆかりもなかったけれども、テオドシウスをほめていっている。

　おお、神によってこのうえなく愛せられたものよ、なんじのために、空気もたたかう。

　そして風は同盟してなんじのラッパにしたがう。[四]

　しかし、かれが信じ、預言していたように勝利を収めたのち、かれにはむかうためにどのような祭事によってかは知らぬが、ともかく祭られてアルプス山中におかれていたユピテルの偶像を倒して、その電光を、それは金製であったからいかにも愉快そうに惜気もなく、飛脚たちに与えたが（戦勝のよろこびでそうすることができたのであるが）、かれらは浮かれきって、そのような電光にうたれてみたいというのであった。かれの敵——かれの命令によってではなく、戦争の混乱のうちにたおれた——の息子たちは、まだキリスト者ではなかったけれども教会に避難してきたが、かれはこの機会を利用して、かれらをキリスト者にしようと思って、キリス

ト者の愛をもって愛し、かれらの財産を奪うどころかかえってその栄誉を増してやった。戦勝後なんびとにも、私的な敵意に左右されることをゆるさなかった。(五) キンナやマリウスやスュラなどのように、内戦が行われたとき、それが終らないことを望むようなことはなく、内戦が終ってからもなおだれかを害しようと思うよりもむしろ内戦がおこったことをかなしんだのである。これらすべてを通じて、その治世のはじめから、かれはもっとも正しく、あわれみぶかい律法によって、不敬なものに対して、苦しんでいる教会を助けることをやめなかったが、異端者ウァレンス(六)はアリウス派に味方して教会をひどく悩ましていたのである。じっさい、かれは地上の支配者であることよりもその教会に属するものであることを喜んでいた。そして到るところで異教徒の偶像を倒すことを命じたが、地上の賜物でさえも、ダエモンの力によるものではなく、真実の神の力によるものであることをよく心得ていた。しかし、かれの信仰の謙虚よりもおどろくべきものがあったであろうか。すなわち、テサロニケ人が重大な罪をおかしす(七)でに司教たちのとりなしによって容赦することを約束していたのに、側近の人びとにやかましくせきたてられて、かれらを処罰したのであるが、そのためにかれは教会の懲戒を受けてはげしくその罪を悔いたので、かれのために祈る民衆は、皇帝の高い地位にあるものがそのようにひれふしているのをみて、かつて、罪をおかしてそのいかりをおそれたものも、いっそう涙を催したのである。これらの、またそれに似た善行を、それを一々あげるのは長きに失するが、人間のどのような高さも尊さもそれに盛れない雲煙のかなたに(永遠の世界へ)たずさえていった。そして、それらの善行の報賞は永遠の生命であって、それは神はただ真に敬虔なものにのみ与

えられるのである。しかし、その他、この生を高めあるいは助けるものは、たとえば、この世界自体、光、空気、地、水、果実、人間自身の魂、身体、感覚、精神、生命は、神が善人にも悪人にも豊かに与えられるのである。そしてそのうちには、どれほど大きなものであろうと支配権も属するのであるが、それは、神がこの世を支配する摂理に従って定められたものである。

したがって、つぎにわたしは愚かなものが得ようと望むこの世の善には偽りの神々の群はなにも役立たないことを示すもっともあきらかな証拠によって論破され、説得されて、神々はこの世の生の利益のためではなく、死後の生のために崇拝しなければならぬと主張する人びとに答えねばならぬと思う。というのは、この世への愛着のゆえに虚妄を崇拝しようと欲して、それをゆるされないことを幼稚な心で嘆くものに対して、わたしは前五巻で十分に答えたと思うのである。そのうちはじめの三巻が公けにされて多くの人びとの手にわたりはじめたとき、わたしは、ある人びとがそれに対してなにかしら答弁の書を用意していると聞いた。またそのご、わたしは、かれらがそれをすでに書き終えたが、無事に公けにできる時期を待っていると耳にした。わたしは忠告するが、かれらは身のために望まない方がよい。じっさい、だれでも、だまってはおられなかったものは、答えてみせたという気になるものである。また、内容のないものほど、多弁なものである。空言は、しようと思えば真理よりも大声をあげることができるからといって、真理のすることができるわけではない。しかし、人びとは、わたしが述べたすべてのことをよく注意して考えてみるがよい。そして党派心を捨てて判断し、そのようなことは、まったく恥知らずの多弁と諷刺や道化じみた軽薄によってゆりうごかされるよりも、むし

かれらは、他愛もないことを語るのをやめ、無思慮な人びとによって矯正されることを選ぶがよい。すなわち、かれらが真実を語れる自由のためではなく、悪口をいえる放縦のために時期を待っているのなら、罪をおかせる放縦のために幸福だといわれたあるひとについて、トゥリウス(キケロ)によって、「おお、罪をおかしたものはなんと不幸だったろう(八)」といわれたようなことが、それらの人びとにけっしておこらないことをわたしは望むのである。それゆえ、だれであろうと、悪口をいえる放縦のために自分は幸福だと考えるものは、もしもそうすることがまったくできないなら、ずっと幸福であったろう。というのは、空しい誇りを捨て、このときにおいてもいわば協議をしようという熱心な努力によって、かれらは、反論しようと欲したすべてのことをなしうるであろうし、また、友好的な討論によって、誠実に、まじめに、率直に協議する者たちから、かれらがなしうるかぎりにおいて答えてくれるところのことを、かれらは聞くことができるであろう。

(一) エジプトのリュコポリスの有名な隠修士(ギボン『ローマ帝国衰亡史』三の二七参照)。
(二) 同上、参照。
(三) クラウディアヌスは三七〇年頃から四〇四年頃。ローマの詩人。スティリコ、ホノリウスなどの賛歌をつくった。
(四) クラウディアヌス『ホノリウス第三の執政官職の賛歌』九三―八。ホノリウスはテオドシウスの子である。

（五）　クラウディアヌス『ホノリウス第四の執政官職の賛歌』一一一九。

（六）　ヴァレンスは三二八年から三七八年。ローマ皇帝（在位三六四年―三七八年）。ヴァレンティニアヌス一世の弟で、兄とともに統治するが、ヴァレンスは東方を受けもった。みずからアリウス派であることをあきらかにし、カトリック教会を抑圧した。

（七）　三九〇年のテサロニケの騒乱。民衆に愛されていた一騎手を衛兵隊が逮捕したことから民衆が怒り、兵士を殺害。テオドシウスはこの事件を処理するにあたってきびしい罰を加えたが、ミラノの司教アンブロシウスがそれに抗議し、皇帝の教会立入りを禁止した。その禁止は、テオドシウスが悔悛の情を示すまで続いた。

（八）　キケロ『トゥスクルム論議』五の一九の五五。

解　説

一

一般に古典というものは、そこに立ちかえって安住すべき地のようなものではなく、むしろそこからたえず新しい生命を得べき源泉である。この点、西洋において、何度も新しい精神運動や哲学思想の出発点となったプラトンは典型的なものであろうが、しかしアウグスティヌスがキリスト教文学の古典であるというのは、ふつうプラトンがギリシア文学の古典であると考えられるのとは異なっている。すなわち、一方は完成したギリシア精神の表現であるのにたいして、他方は生成しつつあるキリスト教精神の表現であるからである。もちろん、同一の古典も異なった時代には異なった仕方で読まれ、感ぜられるが、しかしまた、異なった時代は異なった古典を要求する。すなわち、完成した時代は完成した美のうちに観想の満足を見いだし、変革の時代は生成しつつある魂のうちに活動の意志力を求める。アウグスティヌス自身のことばをかりるなら、「また戦争がすでに終ってからも、敵意はなおなくならずに、平和の時代にますます猛威を振った」(『神の国』三・二十八——以下とくにことわりのないかぎり同書からの引用)といわれるべき現代の日本において、『神の国』が顧みられねばならぬのもこの意味であろう。

アウグスティヌスは生れながらにその時代の使命を託されていた。かれは、時代の問題をま

ず自分の問題として生き、苦しみ、説いたのである。かれが解決にむかった哲学の問題も、ただの学問だけの問題ではなく、なによりもまずかれ自身の内心の問題であった。たとえば、かれが一生を通じてその解決に苦心した情緒の問題は、強烈な生活意欲に満ちたアフリカ人のまじめな自己反省であると同時に、また、古代哲学から解決をゆだねられた宿題でもあった。そして、自分の内心に戦う善悪二つの意志の説明を求めてマニ教に走ったのであるが、そこにとどまること九年、ようやくそれから脱することができた。この間、かれがマニ教に心を奪われていたが、またのちに、かれがそれをどれほど大きな誤ちと認めたかは、『告白』をはじめ、マニ教を相手にしない著作においても認められる。しかし、かれはマニ教の迷いから解放されたのちも、ただちにカトリックの信仰に到達したわけではない。新プラトン派が最後に到達したのは、あくまで学者の認識の宗教であって、真の生きた宗教ではない。イエスはただ教えを説いたのみではなく、みずから生きることによって世のひとにその生きるべき道を示した。ただの「教え」としては、新プラトン派の哲学からキリスト教の信仰にいたることは一歩の前進かもしれないが、「生」としてはまったくその「次元」を異にしていた。罪と知りながらそれにむかう魂、空の空であることを悟りながらそれに執着する弱い心、たくみに偽りながらみずからは偽ることのできない良心、このような分裂と闘争のうちにカトリックの信仰が生れ出たということは、恩寵の賜物であったといわねばならない。あるいはむしろ、このような魂にこそ信仰は賜物として下されたのであろう。

つぎに、キリスト教は、コンスタンティヌス帝の大胆な試みによってローマ帝国公認の宗教

となったけれども、その後、背教者ユリアヌス帝の異教復興にあらわれたような反動的勢力はなお強かった。とくに四世紀末、グラティアヌス帝とテオドシウス帝が異教を禁じて以来、異教徒の憤激にはまことにはげしいものがあった。じっさい、キリスト教はローマ社会の中枢をまだ完全に支配してはいなかった。このキリスト教の進出は、けっして皇帝自身の政策によるものではなく、一種の世界史的必然によるものであって、そこにある隠れた力の導きを感ぜざるをえない。偉大な帝国の統一とその輝かしい文化とを生み出した強健なローマ精神はすでに枯れはてて、それにかわるべき生産力の出現が待望されていた。この新しい勢力の出現が何であったか、また、どの民族がその担い手となったかは、その後の世界史的進展によってはじめて明らかになったのであるが、それがすくなくとも、古い勢力の代表者たちの眼には危険きわまるものと映じたことはたしかである。

すでに辺境の危機はなんども感ぜられ、西ゴート族は国境を侵していたが、五世紀のはじめその猛将アラリックはしばしばイタリア本土にも侵入し、ついに四〇九年、永遠の都ローマに迫り、翌四一〇年、ふたたびこの古都を攻略した。六百年前、カルタゴの勇将ハンニバルが来たときでさえも、その城門にははいらず、神聖なローマは汚されることがなかったのに、このような恥辱を蒙らねばならぬのはなにゆえであるか。異教徒のローマ人がそれをキリスト教のせいに帰したのは、かれらの立場からすれば当然であった。すなわち、異教徒は、この未曾有の国難国辱をもってローマを興し育てた神々を捨てて異国の神を迎えたことの懲罰と考え、自分たちの父祖の神々の復興をもって唯一の救国策となした。また、キリスト教会としても、そ

れから国教として公認され保護されていたローマの没落は、けっしてよそごとではなかった。さきに、蛮族の侵入にさいして、ヒエロニュムスは、「どこをみても悲痛、どこをみても愁嘆、いたるところに死の面影」と嘆いたといわれるが、このローマの不幸をみて、この光は消え、帝国の頸ははねられたといっている。

さて、アウグスティヌスの書物は、その書名『神の国について異教徒を駁する』にもみえるように、この世界史的危機にさいして書かれた護教論である。元来、ローマの高官マルケリヌスの勧めによってはじめられ、四一三年から四二六年まで、すなわち、アウグスティヌスの六十歳から七十三歳にいたる十四年間の労作である。このことは全巻にみなぎるはげしい論調によって察知されるのであるが、しかもこのなまなましい現実の時事にかかわる書物が、あらゆる時代と事件とをこえて西洋最初の歴史哲学として永遠の教示に富むところにこの書独特の意義があるといわねばならない。

それでは、アウグスティヌスの『神の国』は、どのような意図をもって書かれ、どのような内容をもっているか、わたしたちはまず、著者に問わなければならない。アウグスティヌスは四二七年、すなわち、その死に先立つこと三年、『再論』という書物において、一生の仕事を回顧して現在の立場から再検討を加えているが、そのうち第二巻第六十九章に、最近完成した大著『神の国』について大体つぎのようなことを述べている。

「とかくするうちに、ローマはアラリック王のひきいるゴート族の侵入と大きな災害の衝撃によって破壊されたが、このローマの破壊を、わたしたちがふつう異教徒とよぶ、多くの虚偽

の神々の崇拝者たちは、キリスト教のせいにしようとして、いつもよりもはげしくきつく真実の神をののしりはじめた。そのためにわたしたちは、「神の家」に対する熱意に燃えたって、異教徒たちの瀆神や誤謬を反駁するために『神の国について』の書を書こうと決心した。この仕事にわたしは数年かかったのであるが、他の多くの、のばすことのできない、まず、その解決にかからねばならぬ仕事が邪魔をしたからである。しかし、この『神の国』についての大著はついに全二十二巻をもって完結した。そのはじめの五巻は、繁栄を得るためには、異教徒が崇拝するのがつねであった多神の崇拝が必要であると考え、それが禁止されたために、このような禍悪がおこりみちあふれると主張するような仕方で、人間の幸福を考える人びとを反駁する。そして次の五巻は、これらの禍悪は人間にとって、過去にもなかったものでもなく、また将来にもないものでもけっしてなく、あるいは大きく、あるいは小さく、ときとところとひとによって、さまざまなかたちであらわれるということは認めながら、しかも、かれらのために犠牲をささげられる多神の崇拝は、死後の生のために有用であると主張する人びとを相手にする。したがって、これら十巻をもって、キリスト教の反対する上述の二つの虚妄の説は反駁されるわけである。

しかし、わたしたちはただ他人の説を反駁しただけで、自分の説を主張しなかったと非難するものがないように、十二巻からなる本書の第二部はそれをとりあげるのであるが、もっとも必要なばあいには、さきの十巻においてもわたしたちの説であるものを主張し、また、あとの十二巻においても反対の説を論駁することにしよう。それゆえ、あとの十二巻のうち、はじめ

らの国の信仰または発展を、第三の――最後の――四巻は、それらに定められた終局を含んでいる。このように二十二巻全体は、両方の国について語られたのであるが、しかし、その表題はよいほうからとって、『神の国について』とよばれることとなった」(『再論』二・六九)。

むかしのローマ帝国は、厳格な規律と道徳によって栄華をきわめていたが、それは市民的道徳が真の宗教なしにどれほど多くのことをなし得るかを示すものであったかもしれない。しかし、国家の繁栄は、真の宗教なしに永続することができたであろうか。事実、ローマは限りない悪徳の支配する第二のバビロンとして没落の道をたどったのではないか。現実のローマについてみるとき、国家は敵意のある権力、不義と我意の化身であった。教父たちを支配していたキケロの国家観によれば、ただの人間の集団が国家であるのではなく、法において協力し、利益において協同する民衆が国家であるが、この法というのは正義の法であり、したがって、国家の本質は正義の実現でなければならなかった。しかし、国家の定義に照らしてみるとき、異教を信じるローマは国家の名にあたいしたであろうか。唯一神を軽蔑して空なる神々に仕えるものに、どうして正義の実現を期待することができたであろうか。したがって、この現実に存在するローマ国家をも国家として認めるような定義を与えようとするなら、国家からその本質的要素である正義を取り除かなければならなかった。アウグスティヌスが国家を規定して、『神の国』第十九巻第二十四章にいうように、ただ「多くの理性的存在が、かれらの愛するものを協調し共通して関与することによって結合している集団」(Populus est coetus multitudinis

rationalis rerum quas diligit concordi communione sociatus) となしたのもそのゆえであったが、しかし、かれは、国家が正義を欠いてよいというのではない。むしろ、それと反対に、正義を欠く国家は、どれほど強大であろうと、真実はその名にあたいせず、ついに破滅を免れないということを予見し、力説したのである。アウグスティヌスはいっている。「正義がなくなるとき、王国は大きな盗賊団以外のなんであろうか。……この盗賊団という禍いは、不逞なやからの参加によっていちじるしく増大して、領土をつくり、住居を定め、諸国を占領し、諸民族を征服するようになるとき、ますます、おおっぴらに王国の名を僭称するのである。……ある海賊が捕えられて、かのアレキサンデル大王にのべた答えはまったく適切で真実をうがっている。すなわち、大王が海賊に、『海を荒らすのはどういうつもりか』と問うたとき、海賊はすこしも臆すところなく、『陛下が全世界を荒らすのと同じです。ただ、わたしは小さい舟でするので盗賊とよばれ、陛下は大艦隊でなさるので皇帝とよばれるだけです』と答えたのである」(四・四)。またアウグスティヌスは、つぎのようにもいっている。「それゆえ、人びとは、領土の拡大をよろこぶことが善良な人間にふさわしいことであるか、それを考えてみるがよい。正義の戦いをしたその相手の不義が領土の増大をたすけたのであって、もしも隣国が平穏で正しくあって、不法にも、それにむかって戦端をひらくというようなことをさせなかったら、それはまったく、小国であったであろう。そしてそうすれば、人間世界にとっていっそう幸福なことに、すべての国はむつまじい近隣のよしみを楽しみながら小国であるだろう。そして、一都市にじつに多くの家があるように、世界にもじつに多くの民族国家があるであろう」(四・十五)。

アウグスティヌスはつぎのようにいっている。「言葉の通じない人間といるよりは、むしろ犬といるほうがよい。ところがローマ帝国は、服属した諸民族に隷属を強いるだけではなく、平和のきずなとして自分の言語をも強制しようとした。それで通訳は不足どころかいやというほどいる。しかしこのような統一を得るために、どれほど多くの戦いがなされ、どれほど多くの人間の血が流されたことだろう。これは過去のことであるが、不幸はまだ終わらない。国外の敵意ある民族に、なお戦いを続けねばならぬうえに、国家の拡大のために、はるかに悪い種類の戦い、すなわち、階級闘争や内戦がおこり、それによって人類はさんざんに苦しめられ悩まされている。これらすべてのはなはだしい禍悪を、なんの悲哀も感動もなしに見て耐え忍ぶものは、哀れむべきことに人間としての感覚を失ったのに、みずから神としての幸福を得たと信ずるものである」(十九・七)。じっさい、四一〇年の大破局も、それに続く帝国の衰亡も、「地の国」ローマに予定されたものであった。

それゆえ、非難されるべきものは、ローマの政治的支配そのものであるよりはむしろ、それを得るために払われた多くの犠牲とそれにともなう数々の道徳的腐敗であった。すなわち、ローマは、地上における悪魔の国、第二のバビロンであるかぎり、破滅の運命に定められていたのである。さて、これに対して、地上を異国人として遍歴するといわれる天の国はどこにあったのであろうか。それはほかのどこにあったのでもなく、この死滅に瀕したローマ世界のうちに徐々に形成されていたのである。そして、とくに注意すべきことは、この新しい霊的社会は、もはや信者の集団というようなものではなく、また天の国の地上における繁栄という影のよう

な存在でもなく、すでに現実の社会的勢力として新しい秩序の建設という使命をおびるようになっていた。

アウグスティヌスはまた、つぎのようにもいっている。「天の国はこの地上を異国人として遍歴するとき、すべての種族から市民をそのもとに呼びよせ、種々の言語の異なる異国人の集団を形成する。天の国は、そのさい、地上の平和を樹立し維持する慣習、律法、制度などにかんする相違を問題にはしない。天の国は、それらについてはなにものも制限せず、なにものも破壊しない。それだけではなく、天の国は、民族の異なるとともに異なるとはいえ、なお地上の平和という唯一の目的を目ざすそれらの目的を、唯一最高、真の神を崇拝する宗教を妨げないかぎり、保護したり遵守したりすることさえもある。それゆえ、天の国も地上における遍歴のあいだは、地上の平和を利用し、人間の可死性に属する事物において、人間の意志の一致を得ようと努力することもある。しかし、天の国は、この地上の平和の目的として天上の平和を考える。この天上の平和こそ、ただそれだけが真の平和であり、理性的被造物にふさわしい意味で平和とよばれるような平和である」(十九・十七)。

アウグスティヌスによれば、人間の社会はみな、それの構成原理を、ある共通の意志に、とくに、平和への意志に有している。かれが国民を定義して、さきにいったとおり、「それが愛するものを協調し共通して関与することによって結合している理性的存在の集団」としたのもそのゆえであろう。したがって、ある国民がどういうものであるかを知るためには、それが愛するところのものを考えてみればよい。じっさい、習俗の善悪は、もっぱら愛の善悪によって

きまるのである。アウグスティヌスは、別の機会に、『ヨハネ第一書の注解』第五章第七節にこういっている。「神の国と悪魔の国とを区別するのはただ愛だけである。同じようにキリストの十字架のしるしをつけ、アーメンをとなえ、ハレルヤを歌い、洗礼をうけ、教会に詣で、バシリカを建てようとも、ただ愛によって神の子は悪魔の子と区別される」。

アウグスティヌスは、このような見地からして、『神の国』第十五巻から第十八巻において、世界史の簡単な概観を与えている。すなわち、地の国は、サタンの堕罪をもってはじまり、暴虐なカインによってこの地上に建設されたが、それの完全な表現は、アッシリアとローマという世界帝国のうちに認められる。これに対して神の国は、天使たちの創造をもってはじまり、敬虔なアベルによって地上の遍歴にうつり、イスラエルと第一のエルサレムという神聖な国の歴史をとおって、カトリック教会においてついに地上の実現を期待されている。しかし、「地の国」というのはなんであるのか。それはローマ帝国自体であるのか。また、「神の国」というのはなんであるのか。それは目に見えるカトリック教会なのか。それとも、ただ神のみが知る予定された聖徒の見えない社会であるのか。それについてアウグスティヌスの語るところは、かならずしも明らかでないが、世界の将来がキリスト教会にかかわり、そこにおいて、神の終局の意図が実現することを確信していたことは疑いない。

アウグスティヌスは、なおまた、つぎのようにいっている。「……すべての節度とすべての形態とすべての秩序とがそれから由来するところのもの、すべての質量と数と重量とがそれから由来するところのもの、すべての自然的に存在するものが、どのような種類のもので、また、

どのような価値のものであろうと、それから由来するところのもの……理性的な魂には、なおそのうえに、精神と認識と意志とを与えられたところのもの、ただ天と地とではなく、また、天使と人間とではなく、卑小で軽蔑すべき動物の内臓にも、鳥の羽毛にも、草の小さな花にも、樹木の葉にもその諸部分の調和と一種の和合を与えずにはおかなかったところのもの——このような神が人間の諸王国とその支配と隷属とをその摂理の律法のそとにおこうとされなかったとはけっして信じられないのである」(五・十二)。

十四年にわたる『神の国』執筆のあいだ、ローマの危機はただ増大するのみであったが、それが完成してから三年ののち、四二九年、ヴァンダル族はイスパニア南部からマウレタニアに上陸して、一挙にヌミディア地方を席捲しようとした。そしてアウグスティヌスが司教であったヒッポの町は、遠近から流れくる避難民に満ち、老若男女僧俗の区別なくかれの慈悲にすがった。アウグスティヌスは、神がヒッポの町を敵の攻撃から救い出すことを祈り、神の下僕に定められた苦難を耐え忍ぶ力を乞い求め、自分の命を犠牲に捧げようとさえしたが、敵の包囲にあること三か月、ついに熱病のために立たなかった。四三〇年八月二十八日、かれは地上における七十六年の奮闘的生活を終えたのである。もちろん、かれはローマの近い滅亡を預言することはできなかった。また、この殺戮、放火をほしいままにし、語るにしのびない暴虐をあえてする民族が、ただ世界史の舞台への乱入者ではなく、やがてその主役を独占するものであったことには思い到らなかった。しかし、教会が、この破壊と滅亡の真中において、どういう意義をもつかは確実に見てとり、キリスト教カトリック的国家に対する期待においては欺かれ

なかった。永遠の教師は、時と所をこえて、永遠の真理と法則を語る。この意味において、千五百余年以前に書かれたアウグスティヌスの『神の国』はなお今日(こんにち)の書である。

二

以下において、わたしたちは『神の国』の内容をそれぞれの巻の順序にしたがって概観していこうとおもう。『神の国』が、アウグスティヌスの著作のなかでも、もっとも偉大な作品であることをだれも否定することはできない。かれみずからもそのことを認めている(『再論』二・四三)。『神の国』が、かれのもっとも大規模な作品であるわけではないが(同じ時期に執筆した『詩篇講解』はさらに大規模なものである)、かれの天才が遺憾なく発揮され、キリスト教思想家としてのアウグスティヌスの偉大な記念碑ともいうべきものである。

四一三年に着手されたこの『神の国』と並行して執筆され、四一五年に完成した『創世記逐語解』第十一巻第一五章において、すでにアウグスティヌスは、『神の国』の社会的概念の本質をなしている対照的な二つの精神の態度について論じている。それは、相対照的な二つの社会的価値観、二つの民を形成する原理となるものである。

二つの愛がある。一つは聖なる愛であり、他は汚れた愛である。前者は天的な共同体を志向し、そのための共通の幸福と繁栄を配慮する。後者は傲慢な支配力を求めて社会的な事物を利己的な目的のもとにおこうとする。前者は神に従い、静穏で平和的、友好的である。後者は神に逆らい、不安で敵対的である。前者はみずからのために欲するものを隣人のために欲し、後

者は隣人をみずからのために征服することを欲する。二つの愛に基礎づけられた対照的な精神の態度は、天使のあいだに区別を生み、人間のあいだに二つの国と二つの民をつくるのである。第一の国は正しい者のそれであり、第二の国は邪悪な民のそれである。しかし、いまは二つの国と二つの民があらゆるところに混在しているのであって、それらは最後の裁きのときには明確に分けられ、第一の国の民は善き天使と共に永遠の生命を得、第二の国の民は悪しき天使と共に永遠の火のなかへ送られるであろう(『創世記逐語解』十一・一五・二〇)。

以上のところで知られるように、アウグスティヌスの『神の国』における「社会」の概念は、根本において、二つの対照的な愛にもとづくものであった。この書を読むとき、わたしたちは、被造物の二つのグループが区別せられたこの原理を忘れてはならないであろう。その原理は愛であり意志である。善き意志と悪しき意志の問題なのである。

さて、『創世記逐語解』の全体をつらぬいて想定されているアウグスティヌスの形而上学的世界は、実在を三つの階層に区分するものであって、それは、最高の位置に神の世界を、最下位に物体的自然の世界を、そしてそれら二つの世界の中間に知性的被造物の世界をおくものである。問題は、この中間に位置する知性的被造物であって、そこでは、神の至福の直観へとむかう転回(conversio)と、神の直観から背離(aversio)という二つの精神的態度が指摘されるのである。そのこと自体は認識論的な様相をおびてはいるが、しかし、基本的には、二つの意志にもとづく倫理学的な性質をもつものである。二つの態度は、知性的被造物の神との関係における愛の行為に還元されてくる。このことが理解されなければ、アウグスティヌスの「神の国」

が、単純に、現実の政治的国家の理想像としてうけとられかねないであろう。あるいは、神聖ローマ帝国や地上の見えるカトリック教会と同一視されることになりかねないであろう。

さて、『神の国』の内容については、さきに示したとおり、大きく三つの部に分けることができるであろう。アウグスティヌス自身がその『再論』において触れているところであるが、まず第一部は第一巻から第十巻までである。そこでは、キリスト教を非難攻撃する者に対する反駁が意図されており、とくにキリスト教と異教との道徳性が対照され、また異教神学の批判と論駁がこころみられる。第二部は第十一巻から第十八巻までである。そこでは二つの国と二つの民の起源が主要なテーマとして扱われる。天使の二種の社会、二つの民の歴史的展開が描かれる。第三部は第十九巻から第二十二巻までである。そこでは二つの国のそれぞれ異なった目的と終極について論ぜられる。とくにここでは「神の国」の特性が浮き彫りにされるのである。

冒頭において、アウグスティヌスは、友人でありアフリカの総督であったマルケリヌスに呼びかけて、この書のはじめの十巻がキリスト教を弁護する議論上の目的をもっていることを告げている。『神の国』はマルケリヌスの勧めによって着手されたのであった。かがやかしい神の国がこの書の主題であること、みずからの神々をすぐれたものとする敵対者に対して神の国を弁護すること、傲慢な支配欲をもつ者に対して、謙遜の徳をもつ者が、神の恩恵によって神の国のかがやかしさを教えようとするものであること、などが告げられる(一・序言)。

キリスト教の敵対者は、この世の国を構成する民であって、かれらはキリスト教の神とキリスト教徒を非難するが、かれら自身の神々は、四一〇年ローマ攻略のさい、人びとを守ること

はなかった。かえって、キリスト教の教会へ避難した者が助かったではないか。アウグスティヌスは、異教の時代には、戦いと侵略による犠牲者を救う慣例がなかったと鋭く指摘する(一・二―七、一・六―十四)。

キリスト教の道徳性と異教の道徳性とを対照して論ずるために、アウグスティヌスはとくに自殺の問題をとりあげる。異教徒のあいだでは自殺は道徳的に認められ、ときには賞賛されもしたが、これはキリスト教の道徳においては認められない。アウグスティヌスは、婦人たちが自己の貞潔を守る最後の手段として自殺の道をとることを許容しようとはしない。理由は単純であって、肉体になされたことはかならずしも罪過ではないと考えるからである。真に人間を純潔なものとするのは、神の恩恵によって導かれる魂そのものの純潔性であって、ここにキリスト教の道徳性と異教の道徳性との相異を見るであろう(一・十八)。もちろん、アウグスティヌスは、カトリック教会のなかで、殉教者として尊敬される人びとのうちにみずからの手によって生命を断った者のいることを知っていたが、それらの人びとについては性急に判定することを避けている。それは、神の命からであったか、純粋な無知からであったか、わたしたちは断定することはできないからである。そのような例が一般の人びとの範として考えられるのは望ましいことではない。人びとの魂の導き手としての司教アウグスティヌスは、自殺を考える以前に、わたしたちが神の権威によって導かれているということを確信すべきであると考えるのである(一・二十六)。

歴史的に見て、異教宗教が道徳的にすぐれていたとはけっしていえない。キリスト教徒皇帝

が異教神の礼拝を停止するより以前にも、数々の大きな災悪がローマをおそったのであった。戦争の失敗、疫病、火災、内乱など、神々はローマを守っていなかった。ローマでは、神々の祭礼が淫らな虚飾にみち、宗教的なモティーフを扱いながらも不潔な芝居が演ぜられていたのであった(二・八―十四)。むしろ、共和制以前の初期ローマの人びとのほうが単純で自然な徳を育くんでいたのであって、それについてはキケロ自身も共和制の時代の道徳的腐敗を指摘しているところである。神々は、ローマ人が重んじる物質的所有すら災禍から守ることができなかったのである。

ローマ帝国は、その領域の広大さ、政治力の強大さ、ローマの平和の効果、などにより偉大であった。しかし、その正義に問題があった。正義なくして王国は大きな盗賊の群れにすぎないのである(四・四)。アッシリア王国、アレキサンデル大王帝国、ローマ帝国、この三つの巨大な国家は、神々の助けによって形成されたのではなく、政治権力へのつよい欲望ゆえの征服行為によって形成されたのであって、それは盗賊行為ではないであろうか(四・六)。たしかに、アッシリアの神々は王国の守護者であった。しかし、王たちが力を失っていったとき、神々はなにをしたのであろうか。ローマ帝国の発展にかんして、神々はなにを託せられたのであろう。ユピテル神が助けたのであろうか。勝利の女神が助けたのであろうか。ローマ人の不道徳な芝居で演ぜられるユピテル神の淫らな行為が、いかにしてローマ帝国を守ることができるであろうか(四・二十六)。

もっとも、アウグスティヌスは、後期ローマ時代に、俗悪な要素を除去して異教信仰を道徳

的に矯正しようとした知的な宗教があったことを評価している。たとえばウァルロ(前一一六年―前二七年。ローマの著作家)である。かれは後期プラトン主義の教説を導入し、知的な異教神学を形成したのであった。このような新しい異教信仰が在来の宗教的習慣に比してすぐれたものであることは事実であるが、しかし、それは、真の神の知へ至るものではなかった。

異教の神々について論駁をすすめる途上で、アウグスティヌスは運命論に対してもキリスト教を弁証しなければならないのであった。というのは、異教徒たちは、ローマの神々をなだめる公けの祭式がキリスト教によって停止されるまでは、幸運がローマ人にむかって微笑んでいたと主張するからであった。アウグスティヌスは、運命も偶然も、ローマ帝国の発展にいかなる関係もなく、それは真の神の摂理によってゆるされていたことなのであると主張する。

運命論は、当時の占星術によって人びとのあいだに拡まった迷信であった。それによれば、個人の出生時や何らかのことを企てるとき、その出発点における天体の位置が、それぞれの成功・不成功を宿命的に決定するのであって、ローマの主要な哲学の一学派であったストア派もまた、この運命論的な考えかたを採っていたのである。すでに、『告白』第七巻第六章にも同様のことが述べられているが、アウグスティヌスは、同じ星座のもとに生れた双生児の例をあげて、かれらが同じような成功をけっして収めなかったとして、占星家の預言を虚偽として指摘する。もしも運命という言葉によって、神の意志のもとに作用する諸原因の連鎖を意味するのなら、それはキリスト教の教えと一致するであろう。けれども、それは人間の意志の自由をけっして破壊しないのである。神は、人間の自由な行為をすべて予知しているのであるが、その

予知が人間の行為の善であるか悪であるかの原因ではない。人間がみずから悪を意志するか善を意志するかを決定するのであって、神の予知と摂理とは人間の意志的行為にとって宿命的なのではない(五・九―十)。したがって、古代ローマ人がもっていた徳も、神によって予知され、許されていたのである。ローマ帝国に与えられた偉大な力も、ローマ人がみずから誇るべきものではなく、神によって予知され、許されていたのであった。ローマ皇帝の権威も神からきたものであって、人間は神の行為を完全に測り知ることはできないのである。偉大なキリスト教徒皇帝(コンスタンティヌス、テオドシウス)でさえ、この世において真の栄誉を見いだすことはないのであって、希望によって未来の幸福を待望するのである(五・二十四)。

アウグスティヌスは、以上のように、異教の神々が道徳的にも物質的にも現実に人びとを助けないことをローマ帝国の歴史的回顧をとおして示し、多神教と運命論の欺瞞性を明らかにするのである。続いて第六巻と第七巻においては、異教神学そのものの批判へとすすめられる。アウグスティヌスが異教神学を批判するにあたってその源泉と見なしているのはウァルロであった。おそらく、『神の国』を執筆しているあいだ、かれはウァルロの著作を多く読んだのであろう。ウァルロは、異教神学には三つのかたちがあるということを主張したとされる。すなわち、神話的神学、自然的神学、国家的神学である(六・六)。

神話的神学は古代詩人の神話からひき出されたものであって、劇場での神々のまつりを基礎づける。自然的神学は哲学者たちの書から引かれたものであって、ウァルロは一般民衆の鑑賞に適さないものと考えているが、アウグスティヌスは真剣に論議にあたいするものと考えた。

国家的神学は都市国家に生活する人びとの関心事に役立つことを目ざしたものであって、詩人たちの神話的宗教を改編したものである。そこでは、都市国家の目的をすすめるために多くの神々が選ばれており、それによって都市の祭司たちが民衆を教導すべく配慮するのである。ウァルロは二十の神々(十二の男神と八の女神)をとりあげているが、アウグスティヌスは、どうしてこの二十が選ばれたのか理解することができない。というのは、それらの神々の機能は相互に混乱していて、ウァルロの説明に矛盾があると考えられるからである(七・三―四)。

ウァルロの神学にかんする三つの分類を概観してのち、アウグスティヌスは第十巻までをつうじて、異教哲学者の自然的神学の検討と批判をおこなわなければならない。タレス(Thales, 前六二四/四〇年頃―前五四六年頃)からプラトンにいたるギリシアの哲学者たちの多くが唯物論者であって、かれらは万物の原因を物質的なものにおいたのであった。この唯物論は、のちのギリシアとローマの思想家たちに完全に克服されることなく遺されていった。しかし、ソクラテス、プラトン、そしてある程度アリストテレスにより、物質的・自然的世界をこえ出ようとする努力がなされ、のちに新プラトン派のプロティノス(Plotinos, 二〇四年―二七〇年頃)によって古代哲学の霊的な傾向が再現されることになった。自然哲学者たちの唯物論はストア派やエピクロス派に継承され、ローマの哲学者の大部分はこの二つの派のいずれかの流れに属したのである。アウグスティヌス以前の、哲学に基礎づけられた神学が自然的といわれるのも、このゆえである。それは、超自然的、非物質的原因を否定し、形而下的自然にむかったものであったため、アウグスティヌスは、「あたかも自然学を求め、神学を求めないかのようであっ

た」というのである(六・八)。

この自然的神学は、ウァルロにとっては、ひじょうに深遠で知的なものであった。かれにおいては、神は宇宙の魂であり生命であった。そして地は神の身体であった(七・五)。これは、神が理性であって世界の非人格的原理であり、また、法でもあって、自然的世界に浸透し充満していると説くストア哲学にも適合するものであった。それは、いわゆる多神教といわれるものに比して、一神教的色彩をもってはいるが、個々の魂は、小さな神であると見られる傾向をもつものであって、汎神論的な神学であった(七・六)。アウグスティヌスは、ウァルロの神学の第一のもの(神話的神学)と第三のもの(国家的神学)はまったく価値のないものであるが、この自然的神学については相応の評価をなすべきであると考えている。しかし、このような神学のもっとも大きな誤りは、神と自然とのあいだに、そして創造者と被造物とのあいだに、明確な区別をしようとしなかった点にある(七・三十)。

しかし、アウグスティヌスは別の神学(哲学的神学)の存在に注目している。それはプラトン派によって発展せられた宗教的な教説である。とくにプラトンは、古代哲学者のなかで最高の人物であって、キリスト教的神観にもっとも接近した思想家であった。アウグスティヌスがプラトン主義を高く評価する理由は、それが存在の三つの段階を区別しているということである。すなわち、物体、魂、神、の三つであって、神の本性のみが絶対的に不可変的なのである(八・六)。このような評価が正当であるかどうかはともかくとして、アウグスティヌスは、自然学、論理学、倫理学の三つの領域のいずれにおいても、プラトン主義が最高であると考えるの

である。プラトン主義がキリスト教との類似性をもっているということから、アウグスティヌスは、プラトンが旧約聖書の預言者と個人的に接触した可能性、およびギリシア語の旧約聖書を読んだ可能性などを想定してみるが、けっきょくそのような可能性を否定する(八・一一)。

プラトン主義を高く評価しつつも、アウグスティヌスは、それが哲学であって宗教でないことを認めざるをえないのである。そして、時代の経過とともに、プラトン主義から不純なものが派生してきたという事実を指摘する。とくに、のちのポルフュリオス(Porphyrios, 二三二年―三〇五年頃)は、新プラトン主義のプロティノスの形而上学を多神教に適応したのであった。ポルフュリオスはイデアを神々となしたのである。イデアである神々、またはダエモンによって、魂は一者である神へ近づくのであって、そこに魔神崇拝が形成されることになった。さまざまな祭りや儀式がダエモンをなだめるために考案され、魔術的なものが一般に流布されていくようになる(八・十九―二十四)。

アウグスティヌスは、異教神学にもとづいて形成される異教信仰の独自な形態について豊富な情報を提供しているが、かれは、それらのいずれもがプラトン哲学の堕落であると見なしている。その意味で、もっとも重大な負い目をもつ者はポルフュリオスなのであった。かれはキリスト教についても十分知っていたのであるが、キリスト教にいたる謙遜を欠いていたのである。唯一の神にたいしてのみ用いられるべき言葉――Latria(礼拝の意)――を、異教神学者たちは不遜にもダエモンに適用せしめたのであった(十・一)。このことは、キリスト教的にいって誤りである上に、プロティノスの思想とも合致しないものである。というのは、プロティノ

スは、神が人間の可知的光であって、知性的な存在は、神なくして幸福ではありえないと考えたからである(十・二)。

以上で『神の国』第一部は閉じられることになる。キリスト教の道徳と異教の道徳との対照からはじまって、ローマ帝国の歴史と神々との関係を鋭く批判するアウグスティヌスは、異教神学そのものの批判へとすすんだのであった。第十巻の終りで、「聖なる国の創設者よりも自分たちの神々を選ぶ」者たちにたいする論駁が完了した、と告げるのである。

三

異教徒への論駁を完了したアウグスティヌスは、いよいよ二つの国の起源と発展についての論述にはいっていかなければならない。まず、二つの国——「天上の国」(civitas caelestis)と「この世の国」(civitas terrenae)——のはじめが旧約聖書「創世記」に求められる。じっさい、『神の国』第十一巻のはじめの部分は、神の創造の業(わざ)の六日間についての解釈でもある。しかし、なによりも重要な問題は、天使の創造において出現した善き天使と悪しき天使の分岐である。悪しき天使は神の光から転回する。神からの背離がかれらの知性を暗黒化し、賢明で祝福された生命の完成を失うのである。天使たちのあいだに二つの分岐が生ずることによって、二つの天使の社会ができることになる。その一つは、本性においては善であり意志においては正しい天使たちの社会である。他は、本性においては善であるが、意志においては転倒した天使たちの社会である(十一・三十三)。『創世記』のはじめに、光が暗黒から区別されるという記事

があるのは、ある意味で、天使たちのこのような二つの社会の分岐を表現しているのであろうか。

ところで、本章のはじめにも述べたことであるが、アウグスティヌスの「国」(civitas)という概念には、古代の社会的、政治的国家の意味をこえ出た広い意味が含まれていることに注目しておかねばならない。「国」は人間だけの社会を意味するものではない。しかしまた、天使だけの社会を意味するものでもない。それは天使と人間とを包括する広大な概念である。「神の国」はすべての善き天使と善き人間とを含んでおり、「この世の国」はすべての悪しき天使と悪しき人間とを含んでいるのである。二つの国の区別は、その国を構成する者の意志にもとづくのである。神とともに生きることを選ぶ善き者たちは、神にかたく寄りすがり、悪しくあろうとする者たちは、高慢によって神から離反して生きることを選ぶのであって、この悪しき意志に先行するいかなる原因もない(十二・一)。したがって、神が善き意志をもつ者たちの国をつくったのでもなければ、悪しき意志をもつ者たちの国をつくったのでもないのである。あくまで知性的被造物の意志にもとづいて区分されてくることなのである。

つぎに、天使につづいて、人間の二つの区分の起源が論ぜられることとなる。アウグスティヌスは、まず、人類が何千年もの期間を経過しているという異教哲学者の見解を否定し、聖書から査定して、創造のときから六千年以上を経過していないと主張する(十二・十一)。また、人類は一人の人間――アダム――から出たのであって、それは、神が共通の祖をもつことによって人間社会の一体性を欲したからであろうと考える(十二・二十二)。しかし、人間のこのよう

な社会的一体性は、人祖の堕罪によって損なわれたのであった。魂が肉体から離れるなら、肉体は滅ぶように、魂が神から離れるなら、魂は死ぬのである。人間の堕罪の結果、肉体の死を負うことになった人間のあいだに二つの種類が生ずるのである。肉体の死後、魂が永遠の安息へ導かれる人間と、魂が永遠の死へ導かれる人間とである。前者は、この世の生をつうじてキリストの霊によって堕罪の結果を支えられ、後者は、キリストの助けなくして堕罪の結果を受けているのであって、その意味において、前者は、地上に生きていても、もはや「この世的人間」(homo terrenus)ではなく、「天上的人間」(homo caelestis)なのである(十三・二十三)。これら二つの種類の社会は、あらゆる国家的限界をこえ出たものといわねばならないであろう。

堕罪は人間に、肉的な欲望と情感が意志に反抗するという悲惨を結果したのであった。しかし、アウグスティヌスは、感覚的な欲求や感情の動きが本質的に悪徳であるとするストア派の立場を否定する(十四・八―九)。善きキリスト者は冷淡な生を目ざさないのであって、感情が意志によって秩序づけられ、徳のある者となる生を目ざすのである。なによりも意志が二つの国の民の区別を根拠づけるのである。アダムの罪は悪しき意志に源をもっている。その背後にあったのは高慢(superbia)であって、自己自身を高いものと見なして謙遜を棄てたのであった。二つの国の根源は、意志の対照的な行為と愛とにある。「この世の国」は自己の愛にあり、神を蔑むことにもとづくのであるが、「天上の国」は神の愛にもとづくのである。前者は自己を誇り、後者は神を誇るのである(十四・二十八)。

二つの国の起源を論じたのち、アウグスティヌスは、第十五巻から第十八巻までにおいて、

人間の歴史をとおしてこれらの国がどのように進展していったかという問題を論ずるのである。ここにはアウグスティヌスの歴史思想家としての鋭い洞察が展開されている。古代・中世の歴史家のほとんどが、年代記的に過去の歴史的事実をつらねることによって過去にかんする好奇心をみたそうという姿勢を保っていたといえるであろうが、アウグスティヌスはまったく異なった立場をとるのであって、かれは、過去の歴史的な出来事を、ひとつの人生の歩みとしてとらえ、独自の哲学的光をあてて解釈しようとするのである。

まず、アダムの最初の子孫からノアの洪水の時期までについてである。カインとアベルとのあいだの闘争は、善き人と悪しき人とのあいだにある多くの闘争の最初のものである。アベルは「神の国」の民に属し、弟であるアベルを殺害したカインは「この世の国」の民に属する(十五・一)。この殺害は、のちに小国を支配する強大な帝国の暴力的手段の原型となったのであった。ローマの歴史においては、ローマ建国時代に登場する双生児であるロムルスとレムスとのあいだの闘争であって、ロムルスによるレムス殺害となって現われたのであった(十五・五)。

もちろん、「この世の国」も平和を目ざしていないわけではない。ある種の平和を目ざしてはいる。しかし、その平和は戦争による勝利の結果である。それはそれなりに善ではあるが、その勝利は致命的な破壊によってなしとげられるか、さもなくば、きわめてわずかの人びとが生きのびるかである。それは、征服者が被征服者を永続的に支配しようとする原則を確立しようとするものである。もちろん、アウグスティヌスは、地上の合法的な政治制度を悪であると考えているわけなのではない。けれども、ひとつの国家が地上の平和だけを志し、「神の国」

の平和をまったく無視しているのなら、その運命は悲惨であると考えるのである。このことは、アウグスティヌス以後の世界帝国の歴史が証明するところとなった(十二・五)。

さて、アベルとカイン以後、世代から世代へと二つの国の民は地上の歴史のうちに混在していったのであった。アベルが殺害されてのちに生れたセツ、およびセツの子エノスなどは「神の国」の成員であった。ノアの洪水のとき、「この世の国」の民は一時消失したのであるが、ノアの子孫たちのあいだにふたたび出現することとなる(十五・二十)。歴史はノアからアブラハムへ、アブラハムからダビデとユダヤの王たちへとつづく。アブラハムをはじめとする族長時代において、ユダヤ人たちは概して善き人びとであり、「神の国」の民であった。しかし、この時期には三つの巨大な王国——エジプト、アッシリア、シキヨン(ギリシア南部)——があったが、そのなかでもアッシリアがもっとも強大で、インドを除く全アジアを征服したのであった。これら三つの国家は、「この世に生れた人びと」の社会に属しており、堕ちた天使の支配下にあって、人間の規範にのみしたがって生きたのであった(十七・十八)。

歴史は、ユダヤの王の時代から預言者の時代、そしてキリストの時代へと進行する。イスラエルは霊的な国と肉的な国とに分たれて倒壊するのであるが、それは、「神の国」と「この世の国」との分離を暗示するものであった(十七・七)。キリストの前の時代に、多くの王国が興っては滅亡していった。アッシリア、エジプト、シキヨン、ギリシア、ローマ——それらはすべて栄え、すべて滅亡する。もっとも、それらの国の人びとはおどろくべきものをもっていた。たとえば、エジプトの天文学、ギリシアの七賢人などである。アウグスティヌスは、エジプト

の天文学を虚偽であると見なそうとしているが、ギリシアの賢人たちは実際的な知恵を獲得したと考えている。しかし、それらの知恵も、聖書の知恵にくらべて後代にのこすべきものをもたなかった。また、これら世界的国家にはいくらかの預言者たちがいたが、かれらの預言はユダヤの預言者たちの預言に比して重要ではない。これらの国の賢者たちは、たしかに人間の幸福の秘密を見いだそうと努めたことは事実であった。けれども、かれらのあいだで、なにが幸福であるかということについての見解はさまざまであって、それぞれの賢者たちが、あたかも新しい教説を競って発明創案したかのごときありさまを呈しているのである(十八・二十四—四十二)。アウグスティヌスによれば、もしも神の権威が幸福への道を示さないなら、人間の惨めさは幸福を得るためになにごともなしえないのである。それは、『告白』において回想されたかれ自身の生が示した現実であった。

この第二部のおわりでは、キリスト誕生後の二つの国の寿命について語られる(十八・四十六—五十四)。古代の預言が成就されるのはこの時期である。キリストによって教会が建てられたのであるが、この教会は地上における「神の国」の中心となる。しかし、教会に属するすべての人びとが「神の国」の民であるわけではない。そこにも悪しき人びとが善き人びとと混じって存在するのである(十八・四十九)。カトリック教会に属すると称するがじっさいには異教の徒であるところの人びとが存在するのであって、かれらは「神の国」の民なのではないのである。時の終りまで、二つの国は混じり合って地上に存続するであろう。教会はキリスト出現後三百六十五年以上は存続しないであろうという異教徒たちの流布した言説は、すでに誤りであ

ることが証明されたのである。アウグスティヌスの執筆している時期がすでに西暦四二〇年以後であるからである。二つの国の寿命は人間の人生のごときものである。それぞれがその人生の善きものを求めて生きていくことであろう。しかし、すべては最後の裁きによって明確に分離されることとであろう(十八・五十四)。

四

『神の国』の最後の、そしてもっとも重要なテーマは、二つの国の相異なった目的と終極についてである。それは第十九巻から第二十二巻においてとりあつかわれる。ここでは、「神の国」とその民の性格がはっきりと示されており、神の愛に根ざした静穏な秩序と平和の共同体の理念が描かれるのである。また、この第三部は、アウグスティヌスが、いまではもう残ってはいないウァルロの多くの著作を参照しつつ叙述しているという意味で、文献学的に見ても、初期ローマの哲学思想にかんする豊富な資料を提供してくれる貴重な源泉でもある。

二つの国の異なった目的と終極を論ずるに先立って、アウグスティヌスは、人生を幸福ならしめるために哲学者が見いだそうとこころみた善の究極の目的と悪の究極の目的について吟味する。善の究極の目的は、それ自身のために欲せられるべきものであり、また、悪の究極の目的は、それ自身のゆえに避けられるべきものであるが、それらはいったい何であったか。古代の哲学者たちは、この究極の目的にかんする問いにひじょうな関心をもったのであった。アウグスティヌスは、ウァルロの著『哲学について』(De Philosophia)のうちに、この問題について

の二百八十八の数におよぶ哲学的見解の分類を見たのである。これらの見解が、現実に哲学者たちによって説かれたわけではなく、諸派の説を区分し、組み合わせたならそれだけの数になるという可能性として挙げられたものであった。それらのうち、あるものは小ソクラテス派の説を代表し、あるものはプラトンのアカデミア派に属する各説を代表している。また、あるものはアリストテレスの説を、あるものはストア派の説などを代表している。その他の多くの見解は、これらの哲学や善にたいしてどのような態度をとるかということ、そして、その態度をどのように倫理的に結び付けるかということによって得られてくるのである。いずれにしても、このことは、人生の究極の目的——それは善の究極の目的なのであるが——にかんして、二百八十八におよぶ異なった見解が考えられることになるであろう。そして、アウグスティヌスがヴァルロのことを、「この世の国」の知的な指導者たちを代表する存在であると認めているのであるから、このおびただしい数は、神の権威の助けなくして賢明であろうとするこの世の哲学者たちが、人生の究極の目的について、いかに意見が一致しないかということを如実に示すものとしてうけとるのである(十九・一—三)。

アウグスティヌスの説明するところによれば、ヴァルロ自身は、プラトンおよび初期アカデミア派の倫理学的立場をとったのであった。かれは二百八十八の分類をこころみたのであるが、人生の目的については基本的な相違を示してはいないと考えるのである。しかし、すくなくとも、人生には三つの種類が考えられるのである。すなわち、哲学的観想の生、人間的なことがらに関係して活動する生、そして、哲学的観想と人間的な活動とが賢明に結合されている生である。

ウァルロは、人間の究極の目的を合理的な仕方で論ずるためには、なによりもまず、人間とはなにかということを決定しなければならないと考える。哲学者が知らねばならないのは、植物や動物や神々の目的ではなく、人間にとっての究極の善の目的なのだからである。かれは、プラトンの立場にしたがって、人間は身体と魂という二つのものからつくられている一つの本性であると決定する。かれは、魂が身体よりも善いものであるということを知っていたが、人間が端的に魂であって、魂が身体に関係するのは、騎手が馬にたいして関係するかのように理解することには疑問をもつのである(十九・三)。ウァルロは、人間が全体として魂と身体の共なるものであって、人生の究極の目的は、霊的善と身体的善の両方を含むものでなければならないと考える。もちろん、徳は最大の善であるが、魂と身体の幸福のために必要な他の善きものが伴っているのでなければならないのである。他の善きもののなかでも、社会的生活——家族、市民、そして神々——が重要なものである。したがって、ウァルロによれば、哲学的観想と人間的活動とが混合されている生がよりすぐれたものであることになる。

いま述べたことは、異教の哲学者が、人間がこの世での幸福な生を得るためになにが最高の善であるかということを規定したものなのであった。それにたいして「神の国」の民はどのようなものとして規定すべきなのであろうか。端的にいって、「神の国」の民は、地上の生に真実の幸福を見いだすことを期待しないということである。「神の国」の民は、永遠の生命を最高の善とし、永遠の死を最大の悪とする(十九・四)。しかし、「この世の国」の民は地上の幸福以外のものを求めないのである。

個々の善――健康、肉体の強さ、知識など――は完全な幸福をもたらせるものではない。たしかに、自然的徳――節制、勇気、正しさなど――は価値あるものであって、魂の卓越性の条件である。しかし、それらは自然的次元に限られている。希望、敬虔、堅忍など、超自然的徳が真の幸福へ至る扉となる(十九・四)。もちろん、社会的生活は必要である。しかし、この世の人間の社会における生は、不和や悲しみなくしてありえない。たとえば、国家という社会的生には、罪の有無の決定に試罪法が不可避的に適用されるのである。拷問の苦痛が、判決前に善き人・悪しき人に用いられているのではないか(十九・六)。民族と民族とのあいだに存在する言語の相違ですら相互の理解に障壁をつくっているのが現実ではないであろうか。それが除去されたとしても国家間の戦闘は残るであろう(十九・七)。かりに、人びとと友好的に生きることができたとして、それによって死をまぬがれることができるわけではないのである。わたしたちの生は、不可避的な困難や軋轢、死などによって影響されるのである。さらに、異教の哲学者がいうような神々との共生が、わたしたちに真の幸福をもたらすであろうか。その神々とは天使のことなのであるが、すべての天使が善き天使であるのではない。むしろ、「この世の国」の哲学者は、悪しき霊との結び付きによって害を蒙っているのではないであろうか(十九・九)。

さて、以上のことを考慮して、「神の国」の目的は何であろうか。アウグスティヌスは、天的な平和であるという。天的な平和が「神の国」における永遠の生の極点なのである(十九・十一――十二)。そしてその平和を一言で表現するなら「秩序の静けさ」(tranquilitas ordinis)である

(十九・十三)。あらゆる平和は秩序の静けさを本質としている。身体の平和は、肢体や諸部分が秩序づけられた有機的な結合に見いだされる。非理性的魂の平和は、感覚的欲求が秩序づけられて静けさを保っているところに見いだされる。理性的魂の平和は、思想と活動とがよく秩序づけられているところに見いだされる。死すべき人間と神との平和は、人間が永遠の法にしたがって信仰によって神に従順に生きるところに見いだされる。家庭の平和は、家族の秩序ある一致であり、国家の平和は、人びとの秩序ある一致である。そして「神の国」の平和は、神をよろこび、神において他者をいつくしむ人びとの完全に秩序づけられた結び付きに見いだされる(十九・十三)。まさに秩序は善き社会の第一の要件なのである。しかし秩序は、その社会に属するすべての者がまったく等しい状況や条件のもとにあることを意味するものではない。等しいもの、等しからざるもの、そのそれぞれに固有の場が与えられているのである。一つの社会のなかで、ある者は統治し、ある者は服従する。しかし、その統治は、その位置にあることとの高慢や力への欲望にもとづくものではなく、慈悲深く、礼節あるものでなければならないのである(十九・十四)。

「この世の国」が目的とするこの世の平和は、「神の国」が目的とする永遠の平和とは異なるものであるが、二つの社会の民は、地上では共に生きるのである以上、いずれも政治的な平和と秩序の保持にかかわるであろう。したがって、天の市民も地上を旅するあいだは国家の法にしたがうべきであり、未来の報酬を信じ望んで生きるべきなのである(十九・十七)。合法的に制度化された国家は、ある種の正義を保有しているのである。もちろん、厳格な意味で「人民」

(populus)が規定されるなら、「神の国」の民こそ、真の「人民」といわなければならないであろう。しかし、一般的な意味で、すでに述べられたように、「多くの理性的存在が、かれらの愛するものを協調し共通して関与することによって結合している集団」と定義づけるなら、ローマ共和国も、ギリシア国家も、エジプトやアッシリアの王国も正当な「人民」であろう。そして、民の究極の目的が高いものであればあるだけ、その社会の段階は高いのである(十九・二十四)。

アウグスティヌスは、すべての自然的なものが悪であるといおうとするのではない。また、地上の国家が、なにも善きものをもっていないなどといおうとするのでもない。しかし、個々の人間が道徳的には中性であって、道徳的に善であるものと善でないものを選択することができるように、ひとつの国家が低次な目的を選択し、その目的にとどまっているかぎり、完全な幸福に至ることを望むことはできないと考えるのである(十九・二十六)。人間も社会も自然本性的に悪であるわけではない。目的を決定するのは個人の意志であり、民の意志なのである。神から離反して生きようとする「この世の国」の民は、けっきょく真の平和を享受することはできない。最後の裁きののち、悲惨以外の何ものも望むことはできないであろう。

しかし、この裁きはいつくるのであろうか。アウグスティヌスは、第二十巻において、最後の裁きについて、そのときがいったいいつくるのか明確な結論を出さないで残している。最後の裁きまでにどれだけの時間が経過するのか――千年、あるいは数千年とも考えられる(二十・五―七)。アウグスティヌスは、この数字を字義どおりに受けとるよりは、むしろ神秘的な意味に受けとろうとするのである。裁きはすでに歴史のはじめから続いている。しかし、最後の

裁きは二つの国にとって決定的なものとなる。なぜなら、それは、二つの国が明確に分離されるときだからである。キリストは、決定的な仕方で、それぞれの国を、至福または悲惨へ引き渡すことにより善と悪とを分けるであろう(二十・二十七―二十八)。『神の国』の最後の部分(二十一、二十二)は、裁きを受けたのち、これら二つの国の状態がいかなるものであるかについて述べられる。

「この世の国」の民に課せられる報いは永遠の火である。永遠の罰にかんして展開されるアウグスティヌスの長い議論の根底にあるものは、悪しき意志をもつ者が結果的に引き受けなければならない苦しみの現実性である。第二十一巻において基本的に意図されているのはそのことである。

さて、当然のことであるが、罰せられる者の体が永遠の苦しみを受けねばならないということよりも、祝福された者が永遠の幸福を得るということのほうがいっそう容易に信ぜられるであろう。アウグスティヌス自身がそのことを認めている(二十一・一)。じっさい、人間の体が、永遠の火のなかで限りなく苦しみに耐えなければならないということは想像しがたいことである。いったい、体が火の中で消滅してしまわないということがいかにしてありうるであろうか。このような疑問や反論にたいして、アウグスティヌスは、さまざまな例を用いながら説得しようと努力する。たとえば、熱湯の鉱泉のなかに生きている虫があること(二十一・二)、あるいは、自然誌で知られるように火とかげが火のなかで生きていたり、シチリア島の火山が形態を変えることなく燃えつづけていること、さらに、アウグスティヌス自身の経験から、焼かれた

孔雀の肉の断片が腐敗せずに残ったこと、などである(二十一・四)。この種の議論についてアウグスティヌスは、直接的に経験されないことがらをすべて拒否するという立場には共感を示さないでいる。じっさい、火を含めて、自然界にはいろいろ不思議なことがあって、たんなる直接的経験だけでは片づけられない面があるからである(二十一・四―六)。もちろん、不思議な現象をすべて信じるわけではないが、しかし、永遠の火を否定しようとする人たちが、この世界には人間の推理力をこえた何ごとかがあることを信じるなら、永遠の火の存在の可能性をも容認すべきなのである――これがアウグスティヌスの反論である。いずれにしても、かれ自身は、罰せられるべき意志の持主は、霊的にも肉体的にも苦痛を被るのであり、罰は永久に続くと確信しているのである(二十一・九―十一)。

他方、天における聖徒たちの体は、魂とともに天上的至福を分有する。体が至福にあずかるということは全能である神の力をけっしてこえるものではないのであって、そのことは、キリストの受肉という歴史的事実、およびキリストの体が復活したという信仰的事実によって確信せられる。すなわち、天において体が至福にあずかるということは、純粋な霊がこの世の肉体と合一したという事実以上に信ぜられないことではないこと、そして、キリストの体が死後復活したということは、学ある者によっても無学な者によっても信ぜられていることである。多くの目撃者、多くの殉教者、そして多くの奇跡が、キリストの体の復活と昇天を教える信仰の真実性と確実性とを証明している(二十二・三―九)。しかし、体の復活ということについてはさまざまな憶測が出されるであろう。たとえば、出生の前後に死んだ子供の体はどうであるか、

あるいは老いて死んだ者の体はどうであるかなどである。アウグスティヌスは、これらの問題に答えることの困難を十分承知している。しかし、かれなりの結論を示そうとこころみる。それは、キリストがもっとも生命力に溢れて活動した時期——三十歳ごろ——を理想像とするところから得たものであって、人間は、地上における死の時点とはかかわりなく、その人生の盛りにおいて受けとったであろう身体的状態をもって至福にあずかるというのである(二十二・十五—十七)。

しかしそれだけではないのである。キリストの体との関連においていうなら、アウグスティヌスのいう「体」(corpus)はいっそう広く深い意味を含んでいる。それは、パウロのつぎのような言葉によって暗示されているものである。——「……聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストの体をたてさせ、わたしたちすべての者が神の子を信じる信仰の一致と、かれを知る知識の一致とに到達し、まったき人となり、ついに、キリストの満ちみちた背丈にまでいたる完全な人間をつくるためである」(「エペソ人への手紙」四・一三—四)。ここでいわれる体とは、救われる者の個々の体を意味するのみでなく、「神の国」の民の共同体そのものをも意味している。ちょうど身体を構成する手や足、あるいは目や耳など、それぞれの部分が固有の機能をはたらき、たがいに排除しあうことなく全体が有機性を保ち、調和ある一性を実現しているように、「神の国」の民は、それぞれがキリストの体の完全性にあずかるよろこばしい運命を得ながら、その全体がキリストの全体的な一性を形成する。アウグスティヌスにおいて、それはまさに広義における「教会」を意味するものであった(二十二・十八)。もちろん、さきに

も述べたとおり、地上の教会は、地上における「神の国」の中心となるものである。しかし、目に見える教会に属する者がすべて永遠の至福を保証された者であるわけではない。問題は意志なのであって、悪しき意志をもつ者は、どのように信仰告白をしようとも、かれは「この世の国」の民なのである。永遠の罰を受けないという保証はないのである(二十一・二十一)。

永遠の生をうけた「神の国」の民の活動を端的にいうなら、至福における直観(visio)であろう。「顔と顔を合わせて神を見る」といわれる至福直観は、異教の哲学者によっては知られないことであった。この直観こそは天における聖徒の生の本質的な姿なのである。天における直観は、精神の眼、魂のもっとも高次の部分のはたらきを伴うものであろう。しかしまた、聖徒の体の眼も強められて天にあるものを見るということがあるかもしれない(二十二・二十九)。もちろん。すべての聖徒がまったく等しい程度で直観にあずかるわけではないであろう。身体の部分が、それぞれ不等でありながらも全体の充足を受けているように、天にあっても、それぞれの聖徒が等しくないままに、みな、神の賛美において幸福であろう。そこでは、不等性はもはや嫉みの原因ではなく、より大いなる至福の原因であろう。また、自由意志や知性的な記憶の力なども直観に参与することであろう。それらは神の賛美の歌のうちに一つとされることであろう。アウグスティヌスの『神の国』は、善き意志をもつ者たちの真の安息を描いて閉じられるのである。

アウグスティヌス 神の国(一)〔全五冊〕

1982年3月16日 第1刷発行 ©

定価 600 円

訳 者 服部英次郎

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・製本 法令印刷